女學世界

第九巻第十二號



附 滑稽智恵競べ

明治三十四年十二月二十六日第三種郵便物認可 明治四十二年九月十五日發行（毎月一回一日發行）

博文館發行



大學目藥
「小兒の眼病には
小兒用大學目藥を用ひられよ
登録
商標
●定價金十錢(郵税二錢) 中瓶三十錢(郵税四錢) 大瓶五十錢(郵税八錢) ▲各地藥店に在
大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑也世に有觸し賣藥の類に非ず
日本大阪北濱(ヘブリン丸元祖本家)
參天堂藥房
効能の概略
▲はやり目
▲トラホーム
▲星目
▲のぼせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目
其外眼病一切に驚くべき奇効あり
◎又この藥は目力を強くするの確効あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防するを得べし

第三回新學期開始

● 入會の最好機は來れり 九月卅日迄は入會金免除の特典あり ●

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義錄は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

實用女學講義錄

▲本會は中學講義錄を發行して成功せる深き經驗を基礎として新式の教授法により丁寧懇切に教授す、小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

▲會長 尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也
▲講師 斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る
▲組織 高女課程以外家政技藝等を加へ實用的なり
▲講義 言文一致書入り假名付きにて誰にも判る
▲質問 不明の處は何回にても自由に質問を許す
▲雜誌 會員には講義錄の外機關雜誌を毎月進呈

▲會員の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す
▲會費 全學期の會費は都合半月の學費にて足る
▲入會 何時入會するも講義錄は第一號より送る
▲章票 會員には會員章、修業證、卒業證を送る
▲特典 此際至急入會者には入會金を免除すべし

● 見本つき規則書 申込次第無料進呈 ● 講義錄第一號は拾月一日發行

東京神田區駿河臺
大日本國民中學會女學部
振替東京四二〇〇番 電話本局(三三〇〇四番 三七〇〇七番)

女學世界定期增刊

滑稽智慧競べ目次

開業廣告

帳簿文房具類の製造發賣

晩近各種教育の發展に伴ひ學校用品の需要逐年激増せる折柄總てに於て未だ改善の見る可きもの なきは教育界の恨事とする所に候因て**博文館**及**博進社**は共同の附帶事業として新たに**文運堂**を創設し最近輸入の最新式機械を利用して前記學校用品幷に**帳簿文房具**及名刺用紙の優良品を製造し兼ねて信用ある外國製品をも**直輸入**して**最廉價**に發賣可致候間何卒博文館及博進社同樣の御愛顧賜り度冀上候

登錄商標

東京市神田錦町一丁目十番地

(博) **文運堂**

電話本局二四一〇番
振替口座東京一九七〇〇番

前記文運堂製品ハ總テ弊館ニ於テ販賣致シ候間御便宜御注文被成下度奉希上候

東京市日本橋區本町三丁目
振替口座東京二百四十番

博文館

應　饗



田中製版所製

失題



一條成美筆





衛生改良酢發賣

貳合入罎詰　一本　金二十錢
送料　十二錢

本品二合は普通品の二升六合に當る

在來の食酢は腐敗し易く貯藏法に至難なるも本品は防腐性を有する醋酸を資料とせし者なるを以て有害なる黴菌を生ずる憂なく永久不變なり而かも之れを菜肉に使用して風味云ふべからず是れ本品の特點にして殊に**衛生酢**と命名せる所以なり家庭に於て御試用の上御高評を希上候

東京日本橋區本町三丁目

藥種貿易商　合資會社　博愛堂

電話本局長二八六番
振替口座東京八八一三番

女(甲の二)

女（甲の三）

タカヂアスターゼ

●消化不良に就て熊本醫學專門學校長**谷口博士**は曰く、澱粉不消化の徴候たる胃の膨大疼痛、溜飲、腸内瓦斯蓄積、便秘、前頭部疼痛及下痢を生じ營養不充分なるが爲め筋肉及體力を喪失する者はタカヂアスターゼを用ひ快速に治するを得べしと、又**長與博士**(本邦消化機病學の泰斗)は曰く、予の實驗に依ればタカヂアスターゼは獨り胃の澱粉不消化を治するに有要なるのみならず慢性下痢に於ける腸不消化をも治するに適當なるを信ずと、

信ずべき統計に徴すれば消化不良の七割五分は實に澱粉不消化に起因すればタカヂアスターゼは胃腸障害に對する最も有力なる藥物なり。

タカヂアスターゼ發賣元三共合資會社は東京市日本橋區南茅場町より同區室町三丁目へ移轉せり從て當分本劑の包裝には新舊町名番地のもの混同して販賣せらる孰れも眞正品なり

●世に幾多の摸造品及類似品あり**高峰博士發見の**ヂアスターゼを求めんには必ずタカヂアスターゼと御指定あるべし各地の信用ある藥舖にて取次販賣す



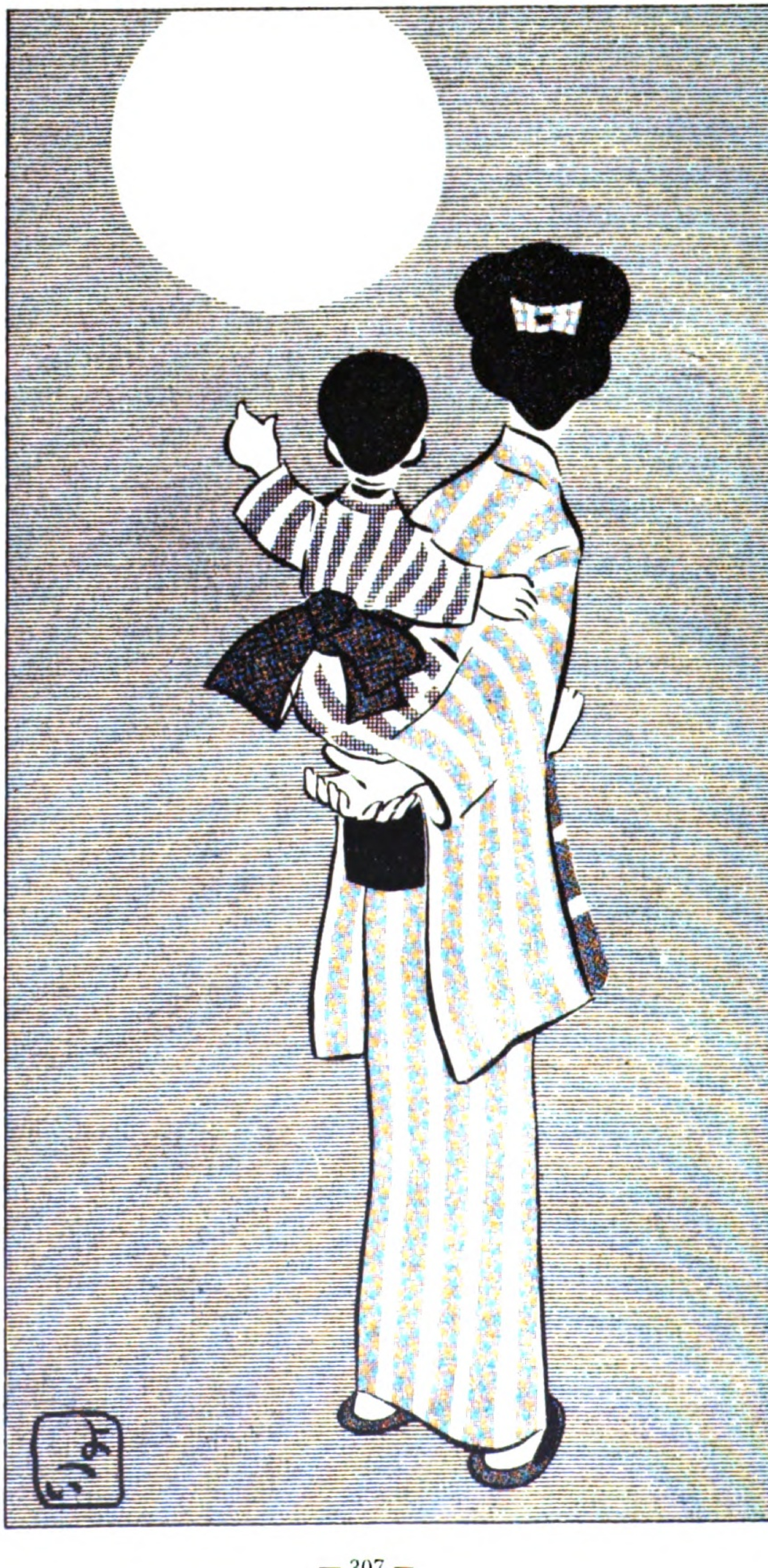
●**消化力强**大なるは總てのヂアスターゼ劑中タカヂアスターゼを第一位と爲す近く官報を以て發表せられたる**本田博士**の學位論文に徴するに坊間に販かる、多くのヂアスターゼはタカヂアスターゼに比し**數倍**乃至**十數倍**を用ゆるにあらざれば之と同效を收め難きなり、此くの如きは高峰博士の製法が他の總てに超絶して完全なるに由るものにして、これ以て一は**眞正品**は他は**摸造類似品**たることを區別し得るなり、

タカヂアスターゼの說明書は發賣元たる東京市日本橋區室町三丁目拾番地三共合資會社へ御申越に從ひ無代郵送す

●**營養增進**の目的を以て虛弱者貧血者重病者等にタカヂアスターゼを用ゆれば能く消化を佳良にし營養自ら增進し體力速に恢復するを見る、殊に**肺結核**患者に之を應用すれば其效力著明なりされば、大阪高等醫學校長**佐多博士**は曰く、タカヂアスターゼは予が數年來肺結核患者の消化補給劑として用ひ有效を認めたる所とすと、又在京の**栗本博士**は曰く今や予は實驗基きタカヂアスターゼが結核患者の消化障害に對する著效を確認すと、**柴山博士**も亦此目的にタカヂアスターゼを使用したる結果多大の良成績を擧げたることを公示せられたり

●**藥效均等**論は輓近醫學者間に唱道せらる、所なり、内務省横濱衛生試驗所長**西崎藥學士**の研究論文中に曰く、タカヂアスターゼは各購求の時日と場所とを異にするものなれども其糖化の效力は固よりグリカーゼの效力も亦常に一定せりとタカヂアスターゼの效力毎常一定なるは其特長なりこれパークデビス社の如き規模の宏大なる者に於て始めて見るべきのみ。タカヂアスターゼの用量は一回〇・一—〇・三錠劑(〇・一三)なれば一錠—二錠毎食後直に投與すべし而して此用量はタカヂアスターゼにのみ限ることを特に言明す

十三七ツ



宮崎與平筆

初秋



松井千里筆


REX
SOAP FLOATS
英國製實用浮
レックス石鹼
佛國製
ケーバ石鹼
香水
CHIKUMA
REX
REX
REX

名家小說文庫

明治の世新文學ありてより、僅に未だ三十餘星霜を閲すに過ぎずと雖も、其間思想の起伏、文運の變遷一にして足らず、大家相踵きて出で、雄編傑作また少しとせず。或は艶麗に、或は崇高に、或は平談に、或は怪奇に、皆な競うて其特色を發揮し、春花の爛熳、秋草の温雅、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を蠹し粹を極む。まことに聖代の偉觀と稱すべき也。されど珠は聯珠の美しきに如かず、雄編傑作また時ありて散逸す。本館此處に思ふところあり、**名家小說文庫**を發刊し、毎巻千頁の大册子となし、諸大家の集中荀も錄すべきものは悉くこれを輯め、裝釘を美にし、價を廉にし、逐次刊行して、以て讀書社會の渴を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉は明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

第一編 露伴叢書 前編

既成發行

今回第一集として、露伴叢書前集成る、露伴先生は當代の大家、崇高なるその思想と、奇峭なる文章とは、既に久しく文壇の誇りとする所、其內容に就いては編者のまた何をか言はん。今左に其目次を錄す。

第一編目次

全一册洋裝菊判
總クロース特製頗美本
紙數九百七十二頁
正價金貳圓
小包料拾二錢
同臺樺淸韓三十五錢

◀後編……近刊▶

東京日本橋本町三丁目 **博文館** 振替口座東京二四〇番

女(乙の三)



◎最良の白髪赤毛染として賛詞を得たるは**千代ぬれ羽**あるのみ

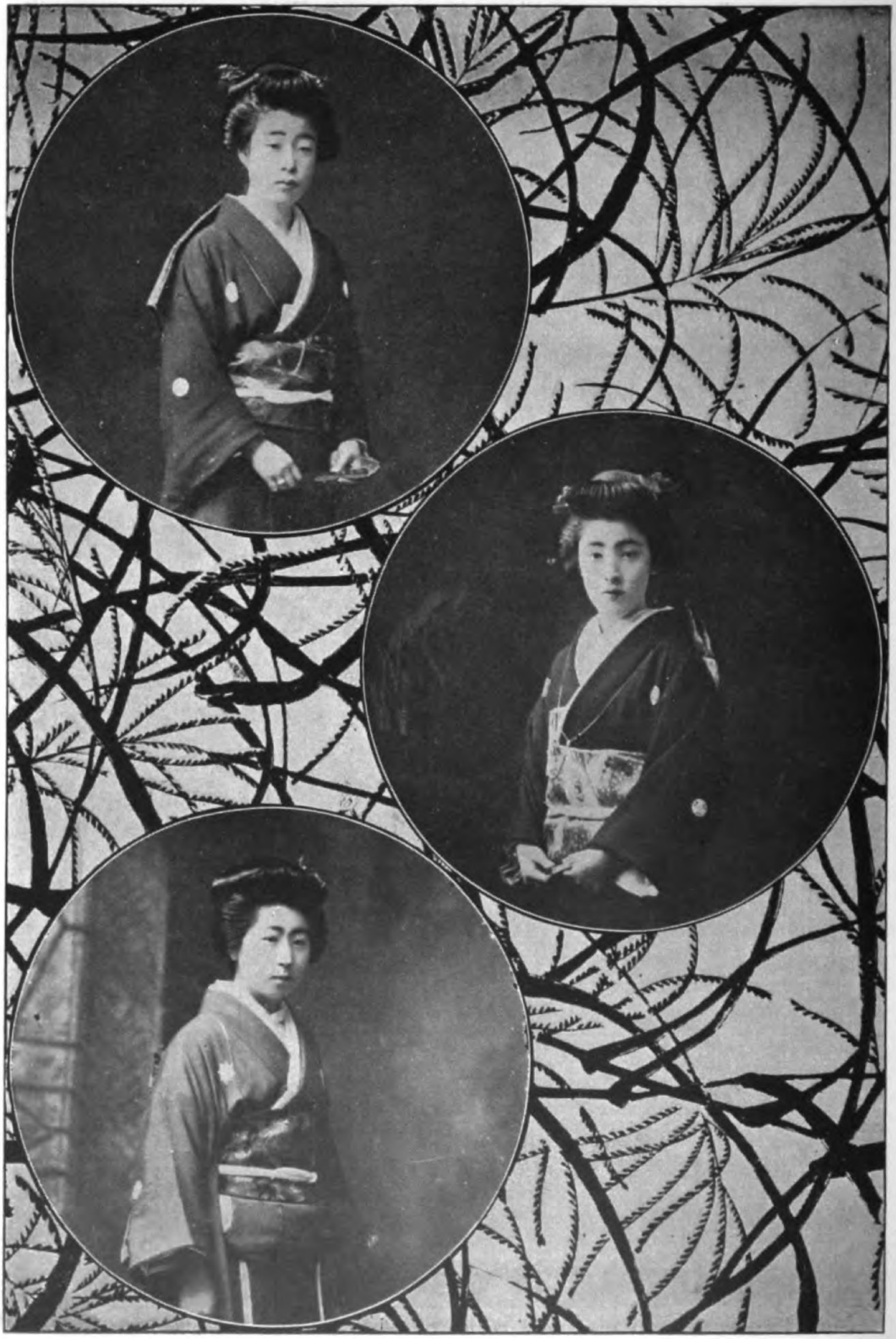
◎本品は染方輕便なるが故に旅行中の使用等に最も適せり

服部松榮堂

東京日本橋區通鹽町

電話浪花二一七五番
振替口座一一八六五番

花すゝき



伯爵勝精氏夫人伊代子

酒井子爵令孃錦子

榎本子爵令妹幸子

白菊



西川忠亮氏令孃ちか子

元田肇氏令孃花子

花の遊び



北米カリフォールニヤ州ポイントローマにある
世界同胞會學校女生徒の花遊び

をみなへし



子爵阿部正功氏令嬢要子

子爵松平康民氏令嬢照子

法學博士穂積陳重氏令嬢晴子


宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
最上醤油之元祖
開業貳百六拾五年
上
千葉縣銚子町
醸造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番

(丙の一)

英語世界 第十一巻第三號 秋期増刊

英作文と和文英譯

九月十五日發行
全一册洋裝菊判
舶來紙六十八頁
定價拾錢郵稅一錢

▼英作文は如何にして熟達し得べきか▼英作文の基礎は如何にして築くべきや▼英作文の練習は如何なる方法を得策とすべきか▼自由作文と和文英譯との得失は如何▼和文英譯の用意と結構は如何にすべきか▲作文と會話、文法、譯讀等との關係は如何▼復文の方法は如何にすべきか▼英語にて思考すとは果して爲し得べきことか、爲し得べしとせば如何にして其の習慣を養ふべきか▼習文としての英文日記、時文、葉書は如何に認むべきか▼本書は是等の事項に就き普く諸家の有益なる講話と實歷工夫談とに依りて詳密なる攻究を試み加ふるに外人の模範的英譯作例十數篇を選びて精細なる評釋を付す。

大懸賞英米名家署名判讀

寄稿家及講話者（ABC順）

淺田榮次　堀英四郎　飯塚陽平　前田忠義　南日恒太郎　宮井安吉　佐川春水　武田錦子　和田垣謙三

馬場恒吾　五味赫　上條辰藏　元田作之進　長井氏晸　岡田實麿　鹽谷榮　武信由太郎　横地良吉

頭本元貞　今井信之　片山義行　最上梅雄　根岸由太郎　太田善雄　高橋一知　豐島定　其他數名

評釋和文英譯作家

アストン　デニング　ロイド　ロツク　サトウ　デイビス　ハリス　其他數名

チエンブレン　イーストレーキ　デクソン　ブリンクリー　イーバイ　ヂツキンス　ホフマン

東京日本橋本町三丁目　**博文館**　振替口座東京二四〇番

女〔丙の二〕

にきび とり化粧水

本品は有名なる獨逸専門大家の調配にして多年の經驗と最新の學理により精製せる化粧水なり常に本品を愛用すればいかなる吹出ものと雖ども二三瓶にて必治は實驗者の證明なり幸に御試用あらん事を乞御一報次第速に郵送す定價郵送料共一瓶三十錢（但郵便切手は一割增）

化粧水パヒロン 發賣元 東京市本所區綠町三の二九 **小林榮進堂**

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本●東京市下谷區上根岸町 衛生書院



女生徒補缺募集

詳細は照會あれ

東洋音樂學校 東京神田表神保町

引風一切 速治新藥 **太陽散**

人常に此の、風邪早治しの最新良藥なる（太陽散）を家庭に備へ置き、殊に旅行の折は必ず携へ機に臨み服用し以て後難を遁れ給へよ

藥價 桐箱四十包入金五十錢。十五包入廿錢。七包入十錢 送料各二錢、各地有名藥店に有り若最寄藥店に無き時は直接注文を乞ふ即送す

東京日本橋町三丁目 藥種問屋 **博愛堂**

耳鼻咽喉病

美形隆鼻術

本術は注射法に依り低き鼻を隆くし鼻の恰好を整備し美形ならしむるを目的とする者にして身體に害を及ぼさゞる安全の文明的手術なることを保證す

手術 午前 夜間

九段下御嶽敎會裏通 神田今川小路二丁目十一番地

和田耳鼻咽喉醫院 和田昌訓

女（丙の三）

(女 丙の四)

在米中の瓜生海軍中將夫人



パッサル大學學位授與式の當日園遊會に於ける瓜生氏夫妻



同地停車場に於ける歡迎の光景、尙銀製菓子鉢は畏きあたりより瓜生夫人に下賜されしを更に同大學へ寄贈されたるもの

名月



金風

挿花



一絃琴





「釣瓶とられて貰ひ水」この圖は神田區猿樂町東洋女藝學校の活人畫なり

赤坂女藝學校夏季講習會員



最上醬油

キハク印

醸造元
茂木七郎右衛門
千葉縣野田町
電信略號ハタ又キハク

東京支店
中野長兵衛
日本橋小網町三丁目
電話浪花百七十七番

産科婦人科專門 醫學士 北島孝夫先生閲

最近
婦人病心得
子宮の病 自宅療法

無代進呈(但送料貳錢を要す)

目次(婦人病の總論◎血の道(ヒステリー)の原因病理及び自宅療法◎神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◎しらちながちの病理及其根治法◎月經時の手當月經諸病の療法◎姙娠の原理、受胎すべき場合姙婦の攝生、つわりの養生法)

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である⊙著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。(婦人病者の心得)と題し上記の各項に分て丁寧親切に詳説せり⊙病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ

●當分の內無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

發行所(電話新橋三六〇一番)東京築地新榮町四ノ一 笹岡省三

女(丁の一)

幼年畫報増刊

第四巻第十二號

菊判美麗畫本

石版極彩色刷十六頁

活版二色刷十六頁

光澤寫眞版四頁

正價一冊金拾錢

郵税一冊五厘宛

うさ〳〵兎

さゝなみ作

永年畫

九月十五日發行

うさ〳〵兎！うさ〳〵兎！　お前わ何を見て走る、私わ月を見て走る、丸いわ〳〵十五夜の、お月様みて走ります、月の世界に居る兎、今夜わ私のお友達、いつもせわしく餅ついて、遊ぶ暇さえないのだが、今夜は一ばん遊びます、坊ちゃんいらしやい、お嬢ちゃんいらつしやい、兎の踊をいたしましよ、お團子も上げましよ、年の内に只一度、今夜ばかりわ皆様の、お對手にもなりましよう。幼年畫報のうさ〳〵兎！、どんなにきれいな兎でしよ、どんなにきれいな御本でしよ、兎のついたお餅より、屹度きれいな御本でしよ、さあ〳〵お買なさい。





女(丁の二)

故川上眉山君著

巖谷小波君 石橋思案君 校訂

武内桂舟畫伯裝釘

▼第二卷既刊 ▽以下…近刊

博文館發行

眉山全集

全四册洋裝菊判

總クロース上製頗美本 每卷紙數約八百五十頁

價各壹圓八拾錢

小包料各拾貳錢

全部價六圓廿錢

外に送料を要す

幽艶にして清適なる眉山氏の筆は、眞に明治の華文なり。況んや其想、おのづから當代の重きをなして、而も遒爾として迫らざる所、我文壇の重鎭たり。今や斯人亡くして、其著作單り金聲玉振の響を傳ふ。本書に收めたる諸篇は、孰れも當時文壇をして、眉山氏が絶倫の盛名を擅にせしめたるもの。實に之れ我讀書界に於る珍璧にして、而してまた明治文壇の異彩ある大作家が面影なり。

『眉山全集』は春陽堂と本館とに於て分割して刊行せる者にして其所載の項目も從て異なり本館發行の分のみにても眉山の大作を網羅せるも全集の名に對しては兩者を合せて完璧となす而して其釘裝も同一なれば之を局架に陳れて少しも外観を損ふことなし

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　振替東京二百四十番　博文館

女（丁の三）

第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

壽美禮おしろい

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體質を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生せざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に御臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴワイオレツト水製

ねり製 大壜二十錢 小壜十二錢
水製 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢
玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子壜入

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨得の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生せず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は温湯に溶し又ぬかに混せ御入浴の際用ふるをよしとす

綠、藍、紅彩蝶番ひ罐詰 八錢
別製罐詰 五拾錢
大袋 二錢
小袋 一錢

登錄商標
西洋白色くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHLNG IOWDFR
壽美禮あらひ粉



販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

製造本舖 東京東兩國元町(兩國橋際) 壽美禮堂謹製 (電話浪花二七六五番)

女(丁の四)



滑稽趣味競べ

巧みに社會の缺陥を諷刺して驕れる人に反省の餘地を與へ、巧みに人生の不完全を説明して迷へる人に安心の餘地を與ふるが滑稽は天職なり、この如くして彼は沈衰せる社會の興奮劑となり、この如くして彼れは倦怠せる人間の刺戟劑となり、又虛榮を呪ふ聲ともなる、若くは煩悶苦痛の世界を超脱して快樂無上の天地に逍遙せん哉、

煩悶解脫の妙藥

骨鷄女史

其一　Lより

暑さに耐えかねて赤裸體になること朝から都合三度に御座候、それでもさすがに襖のかげにかくれての所行にて、猫の足音にもあはてゝ着物をかきよすること幾度とも知れ申さず、成程泥棒は辛い職業よとつくづく悟り申候。

さて、相變らず御呼吸遊ばされ居り候や、M樣ももう御全快遊ばしたる筈、胸が痛むとの御知らせうけしは、庭の櫻草が初めて二輪咲きし朝に候へばもうよほどに相成り申候、他人に愛想をつかされぬ中御切り上げの程然るべくと存じ候、御藥は怠らせ給はぬことゝ推しあげ候へども格別の苦いもの嫌ひの君なればと案じられ申候、看護婦に盃さしつけられ給はゞ越前と名古屋にて二人の友が衷心同情し居るを思ひて、グッと一呼吸にわるびれた眞似を遊ばさぬやう念じ上げまゐらせ候、凡そ觀念の眼を閉づることの必要なる場合は多々これあり候へば。

K樣、筒袖着てオイチニの先生は奈何のものに候か願くは號令を間違へぬやう、足を首に上げ——上げつなどゝのたまはぬやう祈り上候、在校中B先生よりさう體操がきらひではと小言を食べたまひしこともおはす御身樣の、文學史の餘暇にオイチニの先生とは恐らく天下の一奇觀に候ふべし、次回の同級回文には大々的廣告を要することに御座候。

ところで、かく申すLは蟬の聲にかこまれて彼の陰氣くさき書齋に、半悟りの眼して天の一方を睨み居り候、疊の上にて游泳術を練習致さうとも、はたまた八兵衞さんをきめこまうとも、敢て苦情を申す者とては御座なく候へども、裏の御寺の役僧が鐘撞きに出て數どしに私の姿を覗き候ものと見え、川瀬のお孃さんは偉い學者ださうなが惜しいことに行儀が惡いと語り候よし下男より耳に入れ申候、私はいつそこんな事が

同様となつて新屋の久さんとの縁談が破れゝばよいにと願ひ居り候、KさんもMさんも御承知下され候如く幼き折よりの約束のよしなれば、よしや當の私が嫌とて今更何とも云はれぬ義理ながら、さりとてこんな山奥の醫學得業士の妻になつて、小つばけな玄關の掃除してくらすほどならば、木の實を食べて生くるてふ南洋へでも渡つた方がよほど氣がきいてると存じ候、（それはかねてより果實狂の御身なればなど繰返し給ふべからず）さ候へば今日も御寺の役僧が鐘撞く頃を見計ひ寝そべり返つて居る體定に御座候。

此處の夜は淋しさ一方ならず、到底御身様方の御想像の及ぶところには御座なく候、ゆふべは月にあこがれいさゝ小川にそひて辿り候て、知らず〳〵十町程も進み候ほどに、鎮守の森の方より大の男が鼻唄にてやつて參り候、南無三と引き返せば彼方も足を早むる様子に、とう〳〵懸命にかけ出し虎口を逃れ申候、物騒とも何とも申やうなくかつてKさまと東明館の歸りに小川町の通りにて支那人に尾けられし時よりはよほど脈搏の急なるを覺え申候、とかく殿方の言行には解せぬふし多しとは思召さず候や。

東京にて思ひ出し候、昨日姉より小包參り父母へはお馴染の榮太樓の甘いの、さて私には何なりしとおぼし給ふ、包みの樣子にて多分はバナヽならむと豫期しつゝ開き候に、豈計らんや、川越の名物が三つ、しかも註して曰く、

こひ〳〵しいゝもとしやれたがうさはらし

と、此處のは到て不味いのを御承知あつての親切なれども、この妹にしてこの姉ありと憮然たりしこと半時を越え申候、今宵はあつ物となりてやあらはれ候はむ序ながら御身様方お二人にも蔭膳供へ申すべく、午後六時何處よりともなく薩摩芋の香が襲ふことゝ確信致し候、さるにても雨の日を待ちつけての合羽姿に芝まで遠征致し候昔なつかし、歸りの電車にて湯氣の立つのに當惑せしハンカチーフは猶Kさんの御手許に候はむ。

今日松三を町まで買物に遣はすとてふと思ひつき候

まゝ名物の浮身豆數百粒お送り申上ぐべく候、番の上は御二人とも雨の夜に鼠の音など聞きながら御かじり下され度候。

狀袋を切らし候まゝ父の役場用のを一枚胡魔化し候

二伸

先日私よりKさんに參らせし手紙三錢にて無事に候ひしや、多分はよろしからむと存じ候ひしが萬一不足税とられ給ひしならば、參考のため御申越し下され度候

其二　Kより

南向きの日當りよき彼の敎室にて睡い目をこすりつつ筆記致し候文學史も、其の當時には催眠術などゝ惡評致し候ひしが、今にして大にその難有味を感じ申候あの筆記帳があればこそかゝる女にも受け賣らるゝなれど、東に向ひて心中ひそかに手を合せながら敎員室に歸り候に、驚く勿れ鼠色の百枚六錢三厘てふ封筒に包まれたるを發見し申候、ハテ何やらむ、裁判所に呼び出さるゝ覺えもなきにと裏返せば、勿體なやL樣の御直筆に候ひける。

浮身豆とやら確に頂戴致し候、かつてかぢりし鹽豆のたぐひには御座なく、味に於ても姿に於ても殊に其の名の勝れたる、幸ひ一週間前三本入齒致し候まゝ、折角の賜物大に試食の料と仕らむ。

　食べるこの身も浮身であれば
　　いられるお前がいたはしい

兎も角もよいことを思ひついて下され候ことゝ感謝致し候。

當方より參り候ものは丁稚羊羹と稱す。

さてM樣、すでに御快癒のよし、御病中は御見舞とてはがき一本奉り候のみにて今更相すまぬことゝ存じ居り候、次回御不快の砌りには毎日でも御尋ね申上げむ心組に候まゝ何卒御ゆるし下され度候。

L樣御煩悶の段御察し申上候、さりながら醫學得業士の妻結構には候はずや、ことにその美髯の都にも珍しくおはすよし承りしやう覺え居候、新屋の久さ

んなど仰せばこそ價値なきやうなれど、三里以內には見ることかなはぬお手車にて紹の御紋付などに風を切り給ふ御様子推し量るだに御身様の夫として申分御座なく候を、目のあたり拜しもせば早速讓り渡しも請求しかねまじとあやぶまれ申候、さるを破談など庶幾ひたまはゞ冥加のほ



ども恐しう候ふぞ、田舍なればとて山奥なればとて何をお厭はせ給ふ、徒らに都を離ふるエ様にてはなかりしに。

たしか沙翁と記憶致し候諸共に讀めりし一句の Sell when you can; you are not for all markets.（賣れる時に賣れ、汝は總ての市場に適するものならず）そも御あお

はひ下され度候。

　これを要するに寢そべり返りたる御姿をお寺の小僧さんに見られ給ふべからずとこそ。

　前後至し候へども、十八日の午後六時夕やけの空を眺めむと開き候窓より、得も知れぬなつかしきものゝ私をつゝみに參りしやう覺え候ひしが、これぞL樣が心づくしの香に候ひしなるべし、げに志は千里の山川をも遠しとは致さず候。

　四五日前一高にある從弟歸省の途すがら立ち寄り一泊致し候て私共卒業當時の噂さ出で候に、彼の申すやう、あの上野のステーションへ送つて行つたのが信州のMさんといふのでせう、僕あの人一番忘れないで覺えてゐるねと、Mさん、何をおごるお積りに候や、

　私事、この頃は文學史、體操の外修身をも一時間持たされ居候、就中嫌なのは體操にて、オイチニの先生は斷然倦き申候、殊に成るべく野外にて課するやうにとのことなれば、毎時顏色の黑うなるが何より情なう覺え申候、クリームも化粧水も中々追つ付き申さず候へば、あまり黑うならぬ中に落ち付く先きもがなと存じ候、官吏軍人何れを問はず、實業家ならば格別に御座候、御心あたりもあらば御洩し下され度、當方鼻が低うて困るとならば御相談の上隆鼻術でも何でも施し申すべく候、宮さんも貫一さんも終りがつき候、出花の過ぎた私も大抵終りがつきさうなものと存じ候。

　一昨日八百屋の二階より引き移り申候、今度は釣臺一具、けたぼ（ぬけ毛）シャボン、紙、楊子、糸、針、鍛冶屋、煙草、マッチ其他まだある屋の二階六疊二間の主人公に御座候。

　お二人樣、一度何處かで落ち合ひたきものと痛切に感じ申候、實際少しは口の土用干しもせでは、かゝる雨續きに舌の先きが黴び初むる恐れも御座候、如何。

二伸

　Lさんよりの先便は恙なく三錢にて參り候、さりながら強て不足にしたいと思召さば、六錢お貰ひ申してもよろしく、いづれ天下の六錢に御座候。

其三　Mより

病みぬれば春の日長し……などゝ嘯り候て、お二人御心いたませ候てより、早くも三月を經過致し候處漸く一週間ほど前床拂ひ仰せ出し候、病み候御蔭には腰の周圍の以前の半分ほどに相成り候て、どうやら人らしき姿を得し心地致し候、今にスラリとしたるところを寫して御目を汚すべく候。

御兩人樣、ます〳〵御達者にて、こよなう存じ上候御心入れの浮身豆も丁稚羊羹も正に頂戴しつゝ罷在候、Kさんに負けぬやうと一ッウンと考へ候て、

何にうく〳〵浮身の豆は
ぬしがよだれの川に浮く

もう一つ

丁稚といはれて此處まで來たが
君のなさけによるの梅

丁稚羊羹とは蓋し夜の梅に對するKさんの謙遜語に御座候ひき。

此方からは杏子糖が參り候筈、御落手下され候や。信州の夏は涼しう候、緑は緑を抜いてます〳〵緑に相成り候のみ、まだ力なき足に麻裏草履はきて裏の森へとさまよひ入り候へば、私自らも緑に化するかとおもはれかつは、谷間の淸水の囁きに恍として醉ひ申候。

あゝ自然!!! 動かぬものは永劫に動かず、動くものは絶えず同じ樣式を辿りて對偶を交へざるところ、人情美には見らるべくもあらぬ淸さと存じ申候、私はどうかして一生自然の秀れたる姿を探りありきたく、そして最も秀でたる景に接したる時其手に抱かれて死なば、奈何に本懷ならむかと存じ候、さ候へば都合によりては華嚴の瀧を使用致すことも候ふべく、念のため今より天下に向ひて御斷り申上げおくべく候。

兄事休暇にて先月末より宅に野良つき居り候、夕涼みに散歩の折柄などふと私の心をあかし候へば、一も二もなく眞向より、どうしてお前がそんなことで滿足が出來るものかと打ち破し申候、又或時はこんなこと

も申候、自然は僞のないだけ單純なのだ。吾々の燃える血潮は物足りなくつて仕方がないとて輝く星を見詰め候。

　兩親は一日も早く良縁をとて親戚知己はもとより出入の者共にも申きけ居り、卒業の紀念にとて丸木にて撮し候寫眞は二十枚增燒き致させ候が殘れるは僅かに御座候、隨て申込みも一日平均一口は間違ひなく中にはこんな巾着頭のどこがよくてと、ひそかに鏡を熟視致し候ほど熱心なのも御座候、この樣子にては自然を戀人になど主張したりとて到底許さるべくもあらずと斷念致し、さてあれかこれかと集まれる殿方の御風姿拜しあげ候ものゝ、まづ缺點が目に止り眦の下れるもの鼻の直線をはづれたるものなどは手にとらむ心も出です、たつた一枚これならばと存じて其君の書きたまへる手紙を見せて貰ひ候ところ、にくや卷紙の終りが小刀の跡見えて破られたるに、とんと嫌に相成申候。

　K樣、御のぞみとあらば此儘そつくり御讓り申上ぐべく、職業などは撰り取り御隨意に御座候。

一高のA樣御立ち寄り遊ばせし由、御溫情身にしみて忝く存じ上候、御たよりの御序にMも決して忘れまゐらせずと御申上げ下され度、Aさんは御頭の恰好がいゝから大好きですと御書き添へ願上候。

　L樣、御同情に耐えず候、去ぬる年の春酣に、慈善會よりの歸さ、馬上凜々しう打ち笑み給ひしオーランドの君の御姿は御胸にあざやかに候はむぞ、義理なればこそ村醫の奧樣とは御不滿足もさら〳〵御無理とは存じ申さず候、さりながら美といふ點より見る時は幸運兒よりも落魄の人を私は選び申すべく、思ふて成らず思はぬに嫁ぐ御身樣は全く詩の女主人公におはし候そしてその思はぬ君によく事へ給はゞ一層絕好の詩と相成り申すべく、どうぞ〳〵客觀の中に御生き下されたく候。

　東京が戀しうはおはさずや、靴の足並そろへて濶步致せし學生時代の華やかさ、ことに私は美しいもの好みの、三越白牡丹にあこがれ居り候、このむさくるしき形骸を美化するものは衣裳のみと存じ候。

こんなことと申して次便には如何ばかりKさまの御叱りうくることに候やらむ、この頃は終身の先生をも兼ねさせらるゝよし、其卒業生の嫁に貰ひたく存じ申候さりながら御安心遊ばせ、徒らに虚榮に捕はれむとには候はず、六十路を越えたまへる某の大臣にあたら青春の身を捧ぐるやうの願望は夢さら／＼抱き申さず候へば、よしや綴れ錦の丸帯にダイヤの帯止かゞやき候とも、旦那様の御頭上に蠅の舞踏致し候ては、美も何も代なしに御座候。阿々、

評に曰く

第一Lさんの文
薩摩芋の陰膳中々振つてゐる
浮身豆數百粒鼠の音を聞ながらは破天荒だ。

第二Kさんの文
陰に於ても姿に於てもは一寸おつです
口の土用干、舌の先の黴は獨特の警句だ

第三Mさんの文
縁談口の讓渡しは洒落々々蠅の舞踏は輕妙々々
兎に角お三人共揃ひも揃つておしやらく者全く以て現代を超越してゐますよ、まア女で以てこの位色氣を離れて居れば、世の中に恐れるものはあるまひ、權威も道德も君さま達の前には文久三文の價値もなからう況んやバニチー、ユニチイに於てをやだ、ペストも虎烈刺も向うから逃げ出して仕舞ふだらう。

も一ツの評に曰く

Lといふ女は途方もない奴でござる、白晝公然まつ裸になつてお寺の小僧にあられもない姿を見られるなど、呆れ返つて臍つ玉が潰れてござる。

Kといふ女もスカナイ奴ぢや、教育家でありながら、落ちつく先を急ぐとは甚だ以て賴母しからぬ心底ではござらぬか。

Mといふ女も不都合千萬な奴ぢや、病人の癖に阿呆口をたゝいて、天下の名勝華厳の瀧を何と心得たものか、手水鉢や天水桶でも使ふやうな言草、全く以て物騒千萬な代物でござる。

土用ぼし

若葉の内侍

十二疊のおざしき、八疊の次の間、書齋、玄關、奥座敷、縦横に綱引きひいてお衣裳一ぱい。まだ干しきれないからお二階へもつて上る。おみ帯や、お襦袢や、殘つたのを婆やさんがもつてきて

「えらいまあ重い帯だすなあ。なんぼよい帯やかて今の様にお腹に胎兒はんのいやはる時、こんなの結びやはつたら毒だすやろ」

と老人らしい心配する。京の機元から百八十圓で去年の春おとりよせになつたのだつて話すと

「へエー金持てちごたもんだすな。妾のお給金は月が二圓だすやろ、一年三百六十五日休みなしに働いたかて年が二十四圓、六年や七年では帯一本になりまへんがな。阿彌陀様のお迎の方が早うますわ。勿體ない帯や」

と大阪もの丶婆さんなんでもかでも勘定を初める。

すつかり障子をはづして、簾を卷き上げると、空には一朶の雲もない好天氣。青々と茂つた庭の木立を吹いてくる朝風そよ〱と、友禪縮緬の長襦袢を動かして、金糸銀糸のはいつた帯も重くゆれる。人のものでもかう美くしいものをならべてぢつと見て居るのはいい氣もちだ。

「みんな干せてしまうたの」

と奥様が上つていらつした。

「やつと干せましてございます、大變なお衣裳でございますね。御立派なものばかり。拜見します丈でも妾どもは命がのびますやうで。」

「か丶丶そないなこれといふものもないのやが、かうやつて擴げるとかなりあるわえねえ。」

半ば京都なまりのお言葉なめらかに、得意滿面、近來稀な御機嫌の體。

三人の子供もつて、四人目をお腹へ入れて、三十の坂こした方が、いつまで親や良人に大金遣はせてこし

らへた着物ならべて、見て悦んで居るでもあるまいと、よそ目からは馬鹿らしくも思はれるが、着倒れの本場京の金持の娘と生れて、ソモ／＼百ヶ日の宮詣りに、玩具の人形のやうな小さい體へ、重い／＼縮緬の重ねきせられて、花紅葉染め出した友禪縮緬の美を人に見誇へられた以來、七ッ詣り、十三詣りの少女心に、人にまさる美服の誇をおぼえ、嫁入り仕度の奢侈華麗を女一代の名譽として、簞笥幾棹、長持幾荷、金持の花嫁御となられた奥様、衣裳は女の寶で、誇で、生命である位に思つて居られるのだもの。雀百まで踊を忘れぬとやら、三十はおろか、四十五十六十一の還暦祝ふて頭に白髪の霜をおき、お孫様のお手とつても、やつぱりお着物大事お衣裳自慢でいらつしやるだらう。

國民の指導者たる教育者先生や、衆議院議員の紳士殿、勿體なくも人の風上に立ち給ふ方々が、カイゼル式に捻り給ふた八の字髯みすぼらしう、編笠きて法廷にたゝるゝといふトンチンカンな一劇を演じだしたも、半ば夫人がたのお衣裳の爲めぢやといふ。ソロモンの榮華なほ野の百合の美にしかざりきと、人工の美のめづるに足らざるをといつた方さへ、そんな無理算段をして綺羅を飾り給ふ世の中、無理しないで着物の出來る奥様が、お子様が幾人あらうと、お年がいくつにならうと、着物を悦ばれるのに無理はないと、頼まれもせぬ辯護して見る。なか／＼忠義ものだ。

お晝の御用をしまつてからおざしきの縁側へ出て、からになつた抽斗しや支那鞄のあきや掃除して居るとお庭の木戸から高子様がはいつていらつした。

高子様は旦那様のお姪御で、女子大學の學生である。此の頃は夏休みの御歸省中で毎日のやうに遊びにいらつしやる。

派手な藍地のゆかたに、白地羽二重のおふだん帶小さくしめて、頭は思ひきつて大廂、目口鼻のお道具揃へたら、無理にも美人の仲間入りは出來ないが、ハイカラにスツキリとしたスタイルは、やつぱりどこか垢ぬけがして居る。

東京崇拜の妾は、無論京都式美人の奥様より、高子

樣の方がすきだ。

「オヤ高子樣いらつしやいまし。今日はこちらは一ぱいでございます。どうぞあちらからお上り遊ばして。

「イヽのよ。こちらからの方が世話がないわ。

お緣側へ座ぶとんだしたがそこへはかけないで、ずんずん上へ上つていらつして、大變な土用干ねえつてそこいら見ていらつしやる。

「こんなお振袖や、うちかけや、おば樣が御婚禮の時にめしたのだわ。綺麗ね、私きて見やう。」

紫紺地の縮珍に緋緞子の大ぶきもえたつ樣なのをゆかたの上からぱつときられる。

「ホヽヽ芝居の樣ねえ。」ちよいと首をまげて長くひいた裾のあたりを見ていらつしやる。

「それでお島田だと芝居のお姫樣の樣でございますけれど……」

「やうですけれどどうしたの」

「ホヽヽヽ」

「どうしたのよー。」

「廂ちやあポンチ繪の樣でございますわ。」

「わかは隨分口がわるいのね、お前きて御覽。妾がいい形容してあげるから」

「妾などきましたら烏が孔雀の羽拾ふたやうでございませう。

無駄口叩いてる後からスルリとぬいてかけて銀杏返しぢや俄芝居よろしくだわ。ホヽヽ」

「オイ〳〵嫁入りの稽古が初まつたのかい」

といつの間にか旦那樣が立ていらつした。

「高子姉さま私もお袖の長いいゝ着物きせて頂だいよ。」

「あたちもいゝべゝきるのよー」

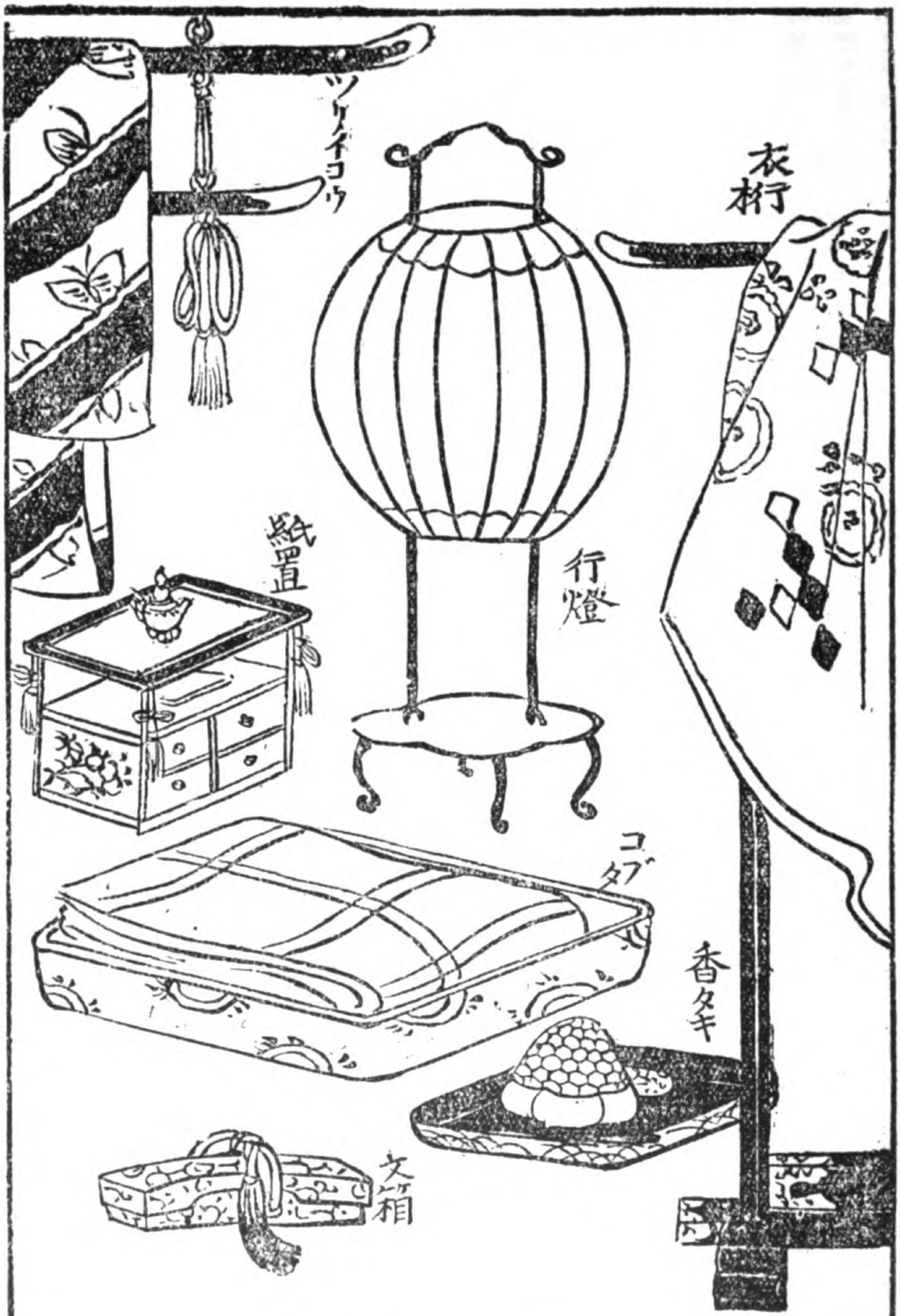
お廊下の隅で遊んでいらつしたお孃樣二人こちらが賑かなのでバタ〳〵とかけていらつしやる。

「道ちやんお袖の着ものきてどこへ行くの」

「お嫁に行くのね、父樣」

「汽車ブーのつてね、あたちもよ」

「ハヽヽヽヽ」


ツリノイコウ
衣桁
行燈
紙置
コブタ
香タキ
文箱

「ホヽヽヽ」
　お嫁にいつて何するの。
「汽車プーのつてお船見に行くんだわ。」
「私車にのつて活動寫眞見に行くわ。」
　お嫁が汽車になつて汽車がお船になつて活動寫眞になつた。こんどは風船のパノラマにでもなると思ふて居たら、
「そんなに集まつてなに騷いでますのや。着物に汚點つけると困りますよ」と鶴の一聲。奥樣の御出御。あはてゝ皆樣のお側を少し片づける。
「高子とわかが嫁入りの稽古してるのさ。」
「うそですよをば樣。お稽古なんかしませんわ。」
「ホヽヽ高子さん十九でしたな、丁度よいお年頃や。稽古しとくとぢき役にたちますわ。此の間の緣談どうなりましたの。あんたハイカラやから外交官ならよささうやが」
「いやなをば樣、私ハイカラぢやないわ。そんなことしらないの。」
「ホヽヽお嫁入りの談したがでそんなに恥かしがらんでもよろしがな。着物たんとこしらへてもろてお支度するの威勢のいゝものですわ。妾今にお手傳に行きますよ。あの新町のお京さんね、もうすつかりお仕度が出來ましたの。」
「マアさう。」
「三枚重ねも帶も振いつきたいやうなよい柄でね、儂着物見るのすきやで、みんな見せてもらうてきましたの。よいお仕度ですわ。」
「そしてお京さんどこへいらつしやるの。」
「そこですのや」
「そこてどこ?」
「そこがな。長し短かし丁度の處がなうてまだ考中ですて。」
「ホヽヽきまらないでお仕度なすつたの。」
「仕度さへしといたらいつでもゆけますわ。むこのお祖母さんがな。來年は十九で厄年やからことし十八のうちにどうでもどこかへやりたいといふて願んでゞじ

たけど貴女どこかよい處ありまへんやろか。」
「着物丈なら俺がもらてもいゝよ。」
「戯言やありませんわ。お祖母さん一生懸命ですものどこぞよい處へ世話して上げたいと思ふて。」
「だつてねお京さんは九月から私と東京へ出るつて昨日相談にいらつしたわ。お京さんもまだお嫁に行く氣なんかなさゝうよ。」
「嫁く氣がなくつてもお仕度さへ出來てたらいつでもゆけますわ。高子さんももう學校止めて着物こしらへておかんといつ良い御縁があるかしれんのに。」
　奥様御嫁入りの資格も準備もたゞ着物一つで出來るやうな事いふていらつしやる。
「私なんかまだ學校へいつてるんですもの。お嫁になんかゆかないの。着物なんかいりませんわ。」
「女學校が濟んだらそんなにもう學問せんかてよろしがな。立派にお仕度してもろて早うよい處へ嫁く方が女の徳ですえ。儂のやうに子供が順ぐり出來たら本よむ間なんかあらへんよつて、學問やらいらしまへんわ。」
「だつて本よむ丈が學問ぢやないんですもの。私なんか女學校卒業したつてなんにも出來ないからもつと勉強しておかなきや子供が出來たつて育てられませんわ。」
　子供が出來るから學問のいらない奥様と勉強しておかなきや子供が育てられない高子様とのコントラストを、自分はだまつて面白がつてゐと『オイ〳〵お手まはしだね、高子の子供はいつ出來るのだい。』つてお庭へ下りて植木いぢりながらこちらの話きいていらつした旦那様がまぜかへされる。
　子女の教育者たるべき女子に教育の必要なる事を大いに主張せんとした高子様は冒頭を折られて御機嫌がわるい。
「をぢ様人馬鹿にしていらつしやる。私もう歸るわ。」
「マアそんなに憤らんとこれから仕舞ふの手傳ふて頂だい。あとで御馳走しますわ。今日は文雄もくるはづやで」

文雄樣は奥樣の從弟で高子樣のすきな方だ、御機嫌はすぐなほる。

下ではお菊どんと婆やさんが疊んで居るから自分はお二階の分を仕舞いに上ると一人ぢや面倒だらうつて高子樣がいらつしつて一枚一枚衿の方をとつてくださる。

「そは樣のやうに着物々々つて大さはぎして流行後れのものまで後生大事にしまつておいたつて死んだ寶だわ。わたしなんか着物は時々の流行ものを二枚づゝ外へ出るに差し支へぬ丈あればいゝから、ピヤノのいゝのを部屋に据ゑて、好きな本を一ぱい書架へ積まうと思つてよ」などゝ自分以外たれも側に居ないからなかなか御氣焔があがる。

出して擴げる時はなんでもなかつたが疊んで仕舞ふのはなか〳〵大變だせつせと疊んでゆくけれどなかなかおしまいにならない。高子樣の口眞似ぢやないが奥樣なんだつて昔流行のくだらないものまで後生大事にしまつて土用干の手數を增されるのだらう。去年の土用干に出してことし出すまで一度も召さないのが幾枚あるかしれない。これぢや着物の爲めに土用干するのでなくて土用干する爲めに着物こしらへるやうなものだ。これで御自身の所有と名のつくものはお浴衣の古一枚でもたゞ人にやられるのはおきらいだから恐れ入る。守金奴といふ言葉はあるが守衣奴といふ言葉はまだ聞いた事がないなどゝ高子樣もあきれてしまつて下へおりて行、文雄樣がいらつしたのでお孃樣がたとみんなでキヤツキヤと騷いで居られる聲がするのに獨り働かなきやあならないから人のわるい考へをする。

俄かに表通りがさはがしくなつて、カン〳〵〳〵と半鐘の音がする。火事!! 火事!!

いそいで下へおりて見ると「これ燒いてしまうたらもう妾の一生これ丈の着物もてない」つて奥樣今朝からの元氣はどこへやら。既に燒けてしまうた樣な事仰つて、蒼くなつて、この頃新調の絽お召の單衣一枚お側近くおいて茫然していらつしやる。

太吉どんを呼んで疊めた分からずん〳〵お土藏へ運

んでもらつて總勢大たちまはり。やつと片づいた處へ半鐘はやんで鎮火の報があつた。

目のさめるやうに今朝かけ連ねたお衣裳はすつかりお藏へをさまつて彼處此處の隅に細引きばかりゴロゴロと殺風景にころがつたおざしきの眞んなかへみんながペツタリすわつてホツト一息、まづ奥樣の給はく、「着物は油斷がならんよつて燒ける事思ふと着物こしらへとくより學問させてもらつとく方が得ですわなあ高子さん……」

近所の火事で奥樣の利害觀が一寸わかつた。うんと學問して夭死する人があつたら學問しても死ねばなんにもならないが着物は死んでも殘るよつて着物こしらへとく方が矢つ張り得やと仰るかしらん。

衣類の虫干

◎毛織と絹、　縮緬、羽二重等の長襦袢や銘仙類の羽織裏などにモスリンを附け其儘何の氣もつかず箪笥の中に仕舞ひ置く者あるが、毛織物には殊に蟲付き易きものなれば仕舞ひ込む時に裏と表を引放し置くか折々風に晒さゞれば裏地に付きたる蟲の爲めに表地までも冒さるゝ事ありよく〳〵注意すべし。

◎變色の損　濡れ物の胴拔きに板締の縮緬又は羽二重、絹抔を付け是れを一襲として同一の抽斗に仕舞ひ置く事は危險なり元來板締は酸を使用して染むるもの故其儘仕舞へ置く時は酸化作用の爲め他の部分までも腐蝕せしめ地質を弱らし褪色若しくは變色せしむるの虞あり之を拒ぐには一枚々々に眞綿又は糊なき白金巾、白紙抔を敷き置くをよしとす

◎絽類と袴　絽の單衣、又は絽の羽織抔は夏過ぐれば箪笥の底に仕舞ひ込む人あれど絽は糊氣ある物なれば物の下にする時は重量に壓されて折切れる憂ひあり又袴も襞の工合ひ宜しとて下積にする人あり之も誤りにて袴は多く地厚の物なれば襞の部分より折切るゝ虞あり

◎絹物の黴　甲斐絹又は繻珍の帶地抔は織物の中でも糊氣多き物なれば最も黴の生じ易く黴の見えざる色物も斜にして透し見れば誰にも見ゆるものなれば土用干の際其部分を本天の裂又は柔きブラシにて輕く擦り黴を落し置くを可しとす

◎簡易なる染拔き　衣類の染浸拔きは商賣人に託する方安全なれども一寸した染浸なればほんの少し露を其部分に吹きかけ双の掌にて是れを表裏より確と押へ手火熨を掛けるをよしとす

空閨の人

無名女

不相變お天氣は宜いがなか〳〵寒い、其筈よもう十日あまりですぐお正月だもの、さう思ふと何だか非常に心ぜはしい、けれどもたゞがや〳〵と氣をあせる許りで仕事は何にも手に附かぬ、矢張りかうして火鉢の番が一番宜い、そして中の灰を火箸で根氣よくたゝきならして居ると小さなだん〳〵畑が出來る、それをまたいくつも〳〵こしらへながら、いろんな事を考へるのがなか〳〵おもしろい、併しこんな事して居る間にすぐお正月が來る、そして年を取る春になつて夏になつて冬になつてまたお正月がきて年をとる、ぐる〳〵とこんな事を幾度も〳〵繰り返してそしてお仕舞には土の中へ入れられてしまう、何の事だらうつまらない。

一體人間て何のために活て居なけりやならないのだらう、ばかばかしい、何だつてまあ人生の深い〳〵意義がどうしてわれ〳〵凡人に分るものか、そりやあ、私はつまらないけれど中にはまたつまつて〳〵人間ほどおもしろい者はない、と神樣にお禮申して居る人もあるかも知れない、私も一度は有たものだ、ほんにあの時分はよかつたも一度あんなになつて見たい、でも世間ではみんなが大層私を羨んでゐるさうな、それは鳥渡見たゞけでは隨分うらやましくもあらうよ、世間の人はたゞお金が有て、お姑がなければ仕合なお嫁さんだと思つてゐるんだから、



あゝ……つまらぬ此節少し神經でも起て居るのかどうしてもくさくさしていけぬ、少し通りの方でも見て來よう、何だかそこらあたりで子供ががや〳〵とさばがしいと思つたら、樂隊だ、何だらう大きな旗を立てゝ、オヤ石鹼の廣告が向の四つ辻でしきりと効能を述べ立てゝゐる、若しほんとに其通りだつたら日本の女はみんな色白はな高の美人ばかりになつてしまう、よくあんなに嘘がしやべられる事だ、達者な口だ、もう大概云ふだけの事は云つてしまつたか向うへ行く、プーカ〳〵ドン〳〵〳〵なか〳〵にぎやかだ、子供が大勢ついて行く、子守の大きなのも附いて行つた、今度は荷車だ、まあ重からう、あんなに澤山杭木を積んで、血氣らしい男が汗をたらしてウン〳〵云ひながら曳てる、あら美しい後押が居るよ、大方先の男の女房だらう、まあ感心だ事、

それから見ると私なぞは勿體ない、毎日こんなにぶら〳〵して居て全くすまない、併し今の亭主もウン〳〵云ひながらちよいちよい後をきづかはしさうに振り返る處なぞなか〳〵親切者らしい

あら今度は年寄だわ、若い別嬪さんでも通れば好いに、また夫婦づれらしい、オヤツ某家の老御夫婦だ、また例のお夕飯後の御散歩だと見えるあのお内はお夕飯がよつぽどお早いから、お二人で何やらおもしろさうに話しながら行ておしまいなすつた、ほんにほんにお睦しさう、年寄のあんなのは猶さら可愛らしい、私も

年でも取つたらあんなになるだらうか、

オヤ望み通り別嬪が來た様だ、少し薄暗くなつたけれど見てやらう、藝者、而かも二十五六の好い年増だ、白い物を澤山塗つてる、それにふだん着だと見えて着物に黒い衿が掛つてるから猶々顔が白く見える、髪はたぼを心持つめて輪の大きい銀杏返に結つてる、着物も羽織もお召か何かだらう、それをすーと拔衣紋にして羽織がもう少しでぬげさうなのをすまあして、しやなら〳〵とあるいてる、なるほど意氣だ、が併しあんな蟲も殺さない様な風で、どれだけの奥さん達をなかせて居るだらう、ほんに〳〵罪作りな、あんな物何故ゐるのだらう、どうかして一人も居なくなつて仕まへば宜い、でも宴會なぞにはやつぱり必要かも知れないそれならそれで、おとなしく三味線を引て、お酌をしてさへ居れば宜いに、あゝ……いやだ、やつぱり不必要〳〵、あんな者の有る爲に平和な家庭に波瀾が起るのだわ、

あゝ……つまらぬ〳〵、いくら學校で、良妻がどうの、賢母がどうのと女にばかり敎へたつて男子の趣味品性をもう少し高尙にして下さらなきや、とても〳〵スヰートホームは、だめ、

今の高位高官の方だつて其品行をしらべたら恐らく汚點の無い人はあるまい、それでも、何爵で御座いの、何夫人で御座いのと大層らしく威ばつて、しかも世間でそれを許すから仕方がない。

夫の方ではこんなに仰しやるでせう、いくら遊んだつて自分の



甲斐性でする事だ、それが爲何も女房を逐ひ出すぢやなし、どうせ死ぬまでは食はせてやるのだそれに時たま遊んだつて何もぐづぐづ云ふ事はないと、さう一口に云つてしまへばそれまでの事併しながらそれでよく滿足して入らつしやる奥さんが幾人あるだらう。

あゝ一人でぷり〳〵怒てる間にもうさつきの藝者はどつかへ行てしまつて外はまつくらになつた、そこらでがや〳〵と遊んで居た近所の子供もみんな歸つてしまつたと見えてしづかになつた、臺所にも奥にもさつきから火が點て居る様だ、下女が御飯をお上りなさいと云つて來た、オヽいやだまた御飯かしら、でもまあ仕方がない頂きませう、夫がお留守だから御馳走する精がないので何にもない、また例のお茶漬さら〳〵だ、たつた一人で食べる御飯は實においしくない、まるで砂をかむ様だ、漸く輕く二つだけ無理矢理に押込んで是で役目がすんだ様に安心する、人間もどうかして四五日分食量が出來ると世話がなくて宜い。



倫敦の奢侈生活

◎婦人の贅澤　今倫敦の有名なる一裁縫師の語る處に依れば、一婦人が年々交際の一時期に於て、衣裳の爲に費すところは大凡二萬圓程にて、其の種類は普通の禮服常用を外にするも、特種の乘馬用、自動車用、滑艇用等約十種四十着にも及び、其外附屬品三十種位ありて、何れも一種一着のみといふはなく、必らず二三着の用意あり、中には手袋を五十對帽子を十二個も有するものさへありといふ、一體に女子が社交に出立つ初陣の裝ひは格別にて、其親たる者は行く〳〵は斯界の花形にも仕立てんとの心より、其の心遣も亦一入なり、斯くて此等衣裳の費に萬金を投ずる外に、尚不時の費用に八千圓を要すといへば、此の一時期に於て一婦人の爲に家長の手より出る金額はザッと三萬圓にも見積らるべし。

◎不用の衣裳　衣裳に憂身を窶すは婦人のみにあらで男子も同じやうなり、されば衣服の誂も時折の流行を見計らひて、一時に十二三種の多きに及ぶといふ、然れども流行の變遷は恰かも走馬燈の如くにして小止なく、朝の冠も夕の弊履と捨てらるゝといふ程の有樣なれば、實際身に着くるものとては其内にて僅か二三種に過ぎず、其餘は皆衣裳匣の底深くに藏はれて流行後れの黴臭きものとなるなり、此程さる貴族の死後に許多の衣裳匣より新らしき絹の香のまだ失せやらぬ百餘種の衣類を見出せしが、此れぞ所謂流行の犧牲物となりしものにて、服屋より受取りし儘を一度も手を通さず藏ひ置きたるものなりしといへり。

◎夜會の費用　若き婦人の盛裝せる花の如き姿を街路至る所常に見かくることなるが、更に之を一堂に集めて百花狂蝶の美を演ずるは夜會と園遊會となり、斯くて彼等は衣裳に千金を投じ更に萬金を夜會に散ぜんとするなり、夜會に於ける舞踏室精巧なる意匠と壯大なる裝飾とは坐ろに人をして天上の樂土も斯くやと想はしむるものありて一夜の舞踏會に十萬圓以上を費やすことありといふ。

◎社交の費用　されば彼等が贅を競ふ社交の巷は寶石の光り綺羅の美一指の末にも千金の光ぞ見えて麗はしき、然れば富豪と云はれ貴族と呼ばれて社交界に出づるからは、一年の收入少くも四十萬圓位なくては並一通の交際は出來ず、彼等が邸宅の構へは云はずもあれ狩獵又は宴遊に要する別莊費のみにても五萬圓を要すといふ、其他に快舟といひオペラといひ扨は競馬、旅行何れか彼等が黄白の光にあかせたる遊興の具たらざるべき。

下町趣味

屋那義

(一)出帆後

今朝は風があつて大層涼しい、もう菖蒲も終に成つてお池の蓮がちらほら咲きはじめた、濁りにしまぬ白蓮のけ高さ。淺みどりの大きな葉の上には、水晶の様な露の白玉が風に搖々と、おゝ良い薫りだ、お廊下を拭く手元が思はず止まる。お山の木立からお池を渡つて來る涼風が、私の鬢のおくれ毛をなぶる、楓洞のあたりから黒い大きな蝶が一羽來て、欄干にかけて有るは御新造様の意氣なお浴衣にとまつた。

定期船の出帆後でお店は靜だ・此度は番頭さんが往航て、歸港る迄閑だから、其間に義太夫會を催さうと昨日田口さんとお話に成つてた。久々で皆様も御上手に御成りなされたらう樂みな事、朝の御用を仕舞つて御仕事に坐る、此間から縫かけたお孃様の絽友禪のお召も今日で仕立上る之をお召しなさつたらお可愛いからう、海水浴へお伴するのもぢきだなんて考へ乍ら友禪を掛けてゐると、田口さんからお使が來て會はいよいよ日曜日と定まつた。あゝまたお勝手が忙がしいわつて御飯焚のお久さんがこぼして居る。

今年お四つになる勝子様ゴムホーヅキをお落しに成つたつて泣ながら歸つて被入つた、どこへお落しに成りましたと訊ふと、泣じやくり遊しながら「こゝ」つてお腹の處をばお指しに成る。おみ帶を解いて上たけれど出無い。お裸體にしてお召を振つても出ない。「御座いませんわ門へお落しに成つたので御座いませう」と申すと「うゝん」とお頭を掉つて「こゝへ落したの」とお口をお開きに成るまあ厭な御孃様お飲み込みに成つたので御座い升ねえ、ぢやあ出ない筈で御座い升と大笑ひ姉様のを一つ頂いて御機嫌が直りまた遊びに被入る。

(二)お浚ひ

御飯のお箸お置きに成ると直ぐ御浚へが始る。食卓は見臺と早變り、「ちよいと頼むよ」と三郎樣女中部屋へお連れに成つて、御新造樣は三味線お出しに成る。旦那樣オースでおうがい成つてエヘンと縮緬咳嗽一つ扇を斜に構へ本をお擴げに成る、御新造樣は細いお手に大きな象牙の撥をお持ちに成つて、デン〳〵〳〵。

御飯最中の女中部屋、三郎樣はヨチ〳〵と危ない御足元でそこに有つた二尺指を振り廻して遊んで被在たがいつかお香鉢のお澤庵をお摑み成る。

「あらそんなもの上ると御新造樣に叱られ升よ」

とお久さんが云つても、お守のお兼さん濟したもので

「だつて夫を取ればお泣に成るんですもの構は無くつてよ」

と甘し相に御飯を搔つ込む。暫らくしやぶつて被在つたが夫も厭きて「おんぶ〳〵」とお兼さんの背中へ摑まつて、御泣きに成る「まあも少しお待ち遊ばせお坊樣はお利口で御座い升ねえ」で頰張り乍らいくらおすかし申ても、御聞に成らない「ぢやあ私代つてお守りしますわ」と背負して外へ出る。

お奥では御所櫻のサワリ「松と松との深みどり」と旦那樣一生懸命黄色い聲を振り立てゝ語つて被在る。嘸大汗にお成りだらう。

三郎樣お眠いので、おむづかつてお泣止みに成ら無い、其處へお兼さんが來て、お眠いのですもの御新造樣に願はなければ駄目よ」つてお連れ申さうとするけれど、又御浚ひの中へお連れ申すと、旦那樣はあの恐いお顏で御睨めなさるし、御新造樣は疳高いお聲で、「も少し連れて來てはいけないのよと仰るに定つてゐるから乳母車にお乘せ申て大川端を一廻りして來る。川岸は水泳で賑やかだ、玉の汗を流して常盤の前まで來たら、三郎樣も諦らめてお仕舞被成可愛らしい鼾がする。

今日は八の日、午後からお久さんは磨きもの私はお月棚の掃除をしてゐると、御新造樣が「之を淸吉に銀行へ持たして」とお包を御出しに成る、淸どんは本町へ行て未だ歸らない。御預り申て御店の簿記臺の上へ

置く、暫らくして歸つて來た「簿記臺の上のお包銀行へ持つて行て池田さんにお渡し申せと仰いましたよ」ちとそゝつかしやだが元氣の良い小僧さんだ「へエ畏まりましたと飛で行く。

お戸棚も濟んで跡を掃いてゐるとプリ〳〵怒つて清どんが歸つて來た。

「御苦勞樣暑かつたでせうあら何を怒つてゐるの」

「馬鹿々々しいお前さんのお陰で銀行で大恥かいた」

と包を投り出す。

「什麼したのあら風呂敷が違つてるのねえ」と云ひ乍ら解いて見たら中から細い新薩摩芋が二本叮嚀に紙に包むだのとカチ〳〵山と猿蟹のお伽話の本が出た。

「あらまあ之を銀行へ持つて行たのあらまあ」

お久さんと吹き出して仕舞つた、さう〳〵先刻お店で三郎樣がお兼さんに包め〳〵つて何か包まして被在たが夫が此お包みだ、夫にしてもあのお包は何處へ行たらうとお腹を抱へ乍ら搜したら、お店の戸棚から出た、乾度御新造樣が大切な御手紙で私が出し放して置たのでお仕舞に成つたのだらう」

「暑いのに眞實に濟まなかつたわねえ」

と渡す、清どんも笑ひ乍ら此度は中を改める、羹にこりて膾を吹くと云ふのだらう、餘り笑つてあゝ苦しいつて、お久さんは涙を拭て居る。

給仕が眞面目に取次だ銀行の重役室であの嚴格な池田さんが擴げて御覽に成つた時のお顔付はまあ什麼で有つたらう。

(三) お使ひ

お孃樣を小學校へお送り申して女中部屋で肌拔に成つて風を入れて居たら御新造樣が被入つた愕然して肌を入れる。

「御苦勞だが朝涼の内に榛原と榮太樓へ行て來ておくれ」と仰る畏まつて着物を改めお居間で御用を訊ふ。門へ出た處でお隣のお駒さんと出會つた。

「おや何方へ」

「釘店の山形屋まで」

「さう私も日本橋までお使に參り升の」

「ぢやあ御一緒に」

と話し乍ら久松橋を渡つて葭町へ出る。藝者屋の格子戸を拭いて居る内箱らしい女の横顔が、お向うのお花さんに似てゐると思つたら、お駒さんもほんとにねえつて云ふ、御神燈の下から水色地に大形友禪の袖の長い單衣を着て、赤地の鹽瀬に牡丹の白上りの帶をキッと締めて手拭に舞扇を卷いたのを持つた、雛妓が出て來た、白木のポックリに緋のもえる樣な鼻緒のすがつたのを素足に覆いて、容姿をつくりながら藤間の方へ行つた。

お駒さんどうやら理想の人らしい、見えなく成る迄何度も〳〵振り返つて、眞實に良いわねえを五六遍繰りかへした。

お駒さんは一緒に裁縫の稽古に行く時分から、粹好きで有つたがけふもしやれた風をして居る根の下つた下髮の意氣なといふより下卑た銀杏返しに結つて紺絞りの衣服をグッと拔衣紋に着て、派手な絽縮緬と黒縮子の晝夜帶、下駄はため塗りの跡歯に白ビロードの鼻緒なんて却々振つたなりだが、私は厭な風だと思ふ矢張りお小間使ひは小間使らしく優美な風が良い、之では何だか酩酒屋の女か善く見た處で料理店の女中が關の山。

却々能く喋舌事、話は新しい御主人の噂で持ち切りお隣の奥樣と云へば此間區の婦人會へ御新造樣のお伴した時お目に懸つた、薄い髮の毛をハイカラな束髮にして、金鎖や指輪やブローチだのでそこら金々輝やいて着物も當世バリ〳〵、鴨川上布に綾浪織の帶、絽匹田の長襦袢もちら〳〵見えた、どこか田舍くさいと思つたが推し出しは惡い方では無い、お馴染が無いからでも有うが何も仰らず、お家の御新造樣がお話に成つても只ハイハイと斗り柔順しい方だと思つた。

お駒さんの云ふ事がいゝ。

「柔順しいのではなくつて、何も知ら無いから人中で口がきけないのよ、何しろ五年前まで大網には御夫婦

とも縄帯で出かけたとやら、だからどこか品が悪いわ此間水天宮様へ御伴したら坊ちやんを出しに遣つて露店のお菓子でも果物でも片端から買つてはオペラパックへ入れて時々竊と口を動かして被在るのですもの、だから、小町色のハイカラなパックも汚點だらけ、パックぢやあ無くつてうちのはパクックだつて笑ふ。お家の時も漁夫時代の癖が失せないで、何時も細帯で肌抜八百屋が來ると直ぐ出かけて籠から桃でも梨でも摘んでムシャ〳〵衛生のなんのと小難しい世の中に、家では御孃様に上る哺乳器も消毒なんて思ひも寄らず、お守さんが牛乳のコビリ付た瓶を水でコシ〳〵と洗つて、直ぐお乳を入れる、夫でも御孃様下痢もお起しなさらず、至極御丈夫天道様も氣がきいて被在るわあはゝゝ。



此間雜誌が見度と仰るから女學世界を御目に懸けたら、口繪だけ御覽に成つて幾日も〳〵お座敷の違ひ棚に置た儘、お晝飯が濟むと寢そべつて、小指ならまだいゝが五本の指でゴシ〳〵と遠慮なくお頭を掻いて、新聞の三面を振り假名拾ひながら可笑な節を付てお讀み成る、あれが五百萬圓の漁業會社の社長の奥樣かと思ふと情無いつてつく〴〵云ふ。

お客樣が有るとお國風だつてお菓子椀とやら、大きな椎茸と高野豆腐を鰯のだしの中へつけて夫とうで玉子を糸切りにもせず其儘入れたお平が乾度つく、味淋やお砂糖でお加減したものは甘くて食べられ無いつて何もかも生醤油で煮しめるから鹹くて口が曲りさうよ

まあ〳〵うか〳〵喋舌つてゐる間に江戸橋の郵便局のとこまで來た。廻つて三越の人形見て行きませうつて云ふけれど、遲く成るから此處で別れて榛原と榮太樓の御用を濟ませ日本橋から電車で歸る。

御奉公をして御主人の惡口を云ふ人はほんとにお氣が知れ無い、夫は誰樣でも拾ひ出せば缺點は有るが御主人を譏つたとて譽る人は無し第一聞よいものでないから御主人の蔭口等決して云ふもので無いと私は思ふ夫はお駒さんだつて誰にでも云ふのでは有まい、心安立に私にだけ話したのだらう。

歸つたら義太夫のお稽古日でお師匠さんが來てゐる橘町の呉服問屋の吉野さんも御出に成つて千本櫻の壽司屋を語つた、うま味の有る善い聲だから鳥渡聞惚れるが、まだお稽古が足りないらしいので言葉が下手、權太ぢやあ無い吉野さんだ。

（四）素人義太夫

けふは義太夫會の當日、空は瑠璃色に晴れ、ところどころ白い雲が漾よつてゐる、お庭の松の木に蟬がジージー鳴てゐる、午後の暑さが思ひやられる、お座敷の御掃除平常より叮嚀にしてお道具藏からお茶器やお膳椀を運んで清拭きをしてゐると裏で何だか一人言を云つてる人が有る。變だと思つて覗いたら、厭だ事〳〵上州屋の息子が炭を擔いで來て其上へ腰掛けて一生懸命

可笑な身振りしながら日吉丸を語つてゐる、今朝御用聞に來た時序開きを語らして頂くのだつて大喜びに喜んでゐたがあの様子では今日のお得意廻りは難しさうだ。

午後からは風呂がたつ、髪結さんが來る理髪やが來る御仕度こり〱、旦那様のお居間は樂屋に成るので裝飾何やかや忙がしい。

聞人は一人でも多い方が良いと云ふので、お粂さんは朝から御近所のお知合ひ片端から知らして歩るく〱、お久さんが一層廣目屋にいはせれば澤山來て猶いゝのにつて云ふ。

御新造様南のお縁先で水の滴る様な結立のお髪髻をくづさじと麻の羽絞りのお浴衣拔衣紋にして旦那様の御着付の白襟掛替へて被在る、針箱の上へ御所櫻の本をのせて扇で叩き乍らサワリを語つて被在る旦那様、

「オイこゝを二三枚引てくれないか」

つて仰る、もうお風呂も出來たのに今からお浚ひが始ると長く成つて困るおやめに成れば良いこと内々新る。御新造様お手をお留めに成つて

「でも之をかけると勝手の方も一度見廻つて遣らねばならず其内師匠も參り升わ」

と仰つて又お動かしに成る、此時そと透さず「あのお風呂がわきましたが」

と申上ると「呍左様か」と旦那様はお立ちに成つて、直ぐお湯殿へけふはクラブ洗粉が澤山いるだらう。

お勝手は魚常がお夜食のお調理で爼の音急がしく、お魚が無ければ御飯召上らない旦那様今晩お語りに成るのに鮮ものではよいお聲が出ないとやらお夕飯はお煮しめとお菜のおひたしで上る。

伊豫簾越しの西日がまだお座敷一ぱい映してゐる頃から、見臺の箱と着付の行李が方々から届く、奥座敷は廿疊と十疊の二間取り外しお出入りの頭が若い者指圖してこしらへ最中、後は金屏風を引廻し緋珍の緣を取つた御簾が下つてゐる。渡邊さんが見臺を組立てゐる、蠟塗と金の定紋入り白房はお品がいゝ誰様のだらうさう〱あれは松本さんの御紋だ義太夫より見臺の

方が餘程上だ、お家の旦那樣のは木地に御定紋の透彫り金と白の房付はちと意氣過て淸元の見臺の樣だおやあれが田口さんのだらう櫻に火焔太鼓の高蒔繪緋の房とは振つてゐる、お隣のお駒さんが見たら喜び相だ。

お師匠さんがお見えに成つた旦那樣のお居間（けふは樂屋へ御案內して三味線箱をはこぶ、お師匠さんは藝人らしく無い品のいゝ老人だ。お子樣方は御飯もお風呂もお濟みに成つてお召替へ、

「兼が付て一きり外でお遊び」

と鶴の一聲でお兼さんお風呂頂いてうで蛸の樣な眞赤な顏で三郎樣背負して、

「さあ皆樣大川端で涼んで參りませう。お兼さんも大抵では有まい。だが川岸へ行つたら八百近の緣臺へ三郎樣下ろして氷水飲み乍ら線香花火でもして遊ぶのだらう。

御新造樣はお風呂からお上りに成つて大姿見の前でお化粧最中、どれこの間に御飯頂きませう。樂屋ではもう三味線の音がする。

夕映の空は晝の暑さの名殘を留めて朱を流した樣だが軒の風鈴音も涼しくお山の樅の梢に蟬の聲がまばらに聞える、打水をしたお庭先土の香に咽る樣。芝生や燈籠の苔の色が靑々と一日日光にてらされた下草が活き返つた樣にヒンとした涼しい風が湯上りの肌に心地よい、お手洗ひの手拭ひを替へ金行燈へお光を入る、お車が止つた牛込の梅田樣の若奧樣とお孃樣の樣だ、

「まあお暑いのに能くお早く被入てねえ」

と御新造樣の派手なお聲がする、續て隱居所から御隱居樣が被入た、今晩の眞は此方樣、却々若い方も及ばない良いお聲は自身も素人の攝津大掾と自任遊ばすだけ、艶物がお得意今晩は何をお語に成るだらう。電氣の點く頃から聽衆がそろ〳〵お見えに成るお近くの御親類では本町樣、佐賀町樣皆お子樣方をお連れに成る親類だけに何とやらは仕舞迄お聞に成るのかしら、新座敷へお茶とお菓子を差上る、御新造樣繪羽縫のお浴衣に白地の靑梁織にお納戸で渦卷模樣のお召帶お締め被爲れ、絹團扇で風を送り乍らお客樣のお接待には御

如才無い、御近所からは、お子様方が多い、此暑さに下手な義太夫で蒸し殺されては大變とお控へに成つたのだらう。お手傳のお時さんがお盆へお煎餅の紙包を乘せて來てお子達に上る、何だか昔の長唄のお浚に行た時を思ひ出す。

口上が聞える、お孃樣行う／＼と仰るので、お座敷の端の方へ坐る此處は風通しが良くつておもひのほか涼しい。

(五) 天狗連



百目蠟燭まばゆき床の上、上州屋が序開きの日吉丸を語つてゐる、・マア派手な肩衣だ獨樂廻しか手品遣ひの樣だ、あれで二年半稽古したとは餘程不器用だと見える三味線と丸で別々に語つてゐる、お師匠さんも嘸引き惡くからう。

お勝手から牛乳屋の老翁さんが來た。あの人もいゝ年をして自分の下手なのが眞實に氣が付かないのかしら、息子も利口だといふのに止めないつて親孝行も程が有る、親父が人中で恥を掻てゐるのを知

ら無いのかしら、朝太夫の揃ひ浴衣を嬉し相に着て扇子と鼻紙を懐に入れ、書き本の包を持つて廊下で出會つた中村屋の内儀さんと話してゐる。後に私のゐるのを知らないらしい。

「左様申ては恐う御座い升が御當家の御隱居様より古いのですから眞は私が語る筈ですが御承知の朝早い家業で據無く先へ語り升が聞く人がお聞に成れば、先へ語つたとて眞價は分り升と、ハゲ頭を振り乍ら却々得意だ、内儀さんうまく調子を合せて、

「眞實に貴老のがこの御連中での聞物で外の方のは聞なくともあなたのだけ聞かして頂けば結構で御座い升よ、今晩は何をお語りに成升」

「へえ菅原の寺子屋を語らうと思ひ升、師匠は源藏戻りまでゞ良いと申升が折角皆様に來て頂いて餘り少しでは氣の毒に存じ升から奥まで語らうと思ひ升」

まあ大變あの人に寺子屋一段語られたらお隣の宿替へで、明日は鈴木さん(醫師)が大繁昌だらう、何しろ一段吹き出さずに聞ば懸賞だつていふ評判物だから。

日吉丸は、早いろ〳〵汽車と自働車の競爭の様に僅か十分間で拍手喝采の内に終に成つた。

お嬢様お寐みに成たから、二階へお連れ申す、お婆さん三郎様のお傍で大の字なりにまあ能く寐てゐる事

「ちよいと此次は牛乳屋の番だから聞に行きませうよ」

と、揺ぶつてもビクとも仕ない大事にしてゐた桃割がピチヤンコに成つてモールの根掛もメチヤ〳〵だ、メガ無理も無い一日お守して草臥て居ながら、下へ來て臺所を手傳ふ。

おや若松屋の若旦那の樂屋入りだもみ上げを短かくすり込で髪の毛をチックで綺麗に梳いて、竺仙の派手な浴衣に黒絽五ッ紋の羽織グット反身になつて片手の扇子をパチ〳〵。と恰好はどうしても新派俳優だけれど御本人夫がお得意だから仕方がない、會社に被在る時と別人の様だ、お這入りに成ると最早輕口で皆様を笑はして被在る。

牛乳屋の寺子屋が始まつたらしい。彼方の角でも此

方の端でもクス／＼笑ひ聲がする、而して縁側へ立つ人や便所へ這入る人も居る、坐つてゐるのは子供衆と居眠りしてゐる人位だらう、石井の娘さんは堪らな相な顔を袂で抑へて外へ出て仕舞つた、何しろ天狗だから師匠の云ふ事抔耳に入れず、此處は斯う改良しましたのと、自分勝手に節を伸したり縮めたり夢中に成ると言葉等戸浪も源藏もゴチャ／＼、もう只の牛乳屋の老爺さんの一人喧嘩の様だ、サイヅチ頭を振り立て節一形から滑稽だ、源藏戻りで跡に若松屋様がお替りに成つた、御本人嘸殘り惜しからうが聞人は大幸。

瀧澤さんわざと黒人風に御簾が上ると低頭をして本を高く差上で被在る、聞かして遣るのにお低頭なんか仕無いでもよさ相なもの、何か口の内で云つていらつしやるあれは、黒人が咒文を唱へるのださうな、黒人振るだけ構へもよけれは矢つ張り上手だわ、争はれぬもの聽衆も寂として聞く、左様云ふ私もお盆を拭きかけて中腰で聞惚れて仕舞つた、おやお吸物をかけた儘であつた。

もうお肴も付ては吸物のお加減も出來お膳出す計りに成つた「之から一きり訊はうぢや有りませんかとお手傳に來た婆やさんやお時さんに云ふと、

「あなたは好ねえ私達は義太夫より居眠の方が良いわ」

つてお久さんと團扇で蚊を追乍らもう、コックリコクリ始めてゐる。今度はお家の旦那様の番だ御新造様オースや玉子を樂屋へお持に成る、此間お誂へに成つた肩衣に、粗い縞の太夫袴召して近眼鏡拭き／＼被入床へお上りに成とのぼせて曇るだらうに。坂本さん口上御苦勞だが自分は名譽此上無しと心得て、今夜は夜業休んで宵から詰て居なさる、粋狂な人も有つたもの。

御簾が上つた、御人品はよし、お着付も見臺も別誂へ義太夫より推し出しの方が餘程いゝ、一層此儘活人畫でも成つた方が大當だらう。だがお上手に成つた筈先の航海からお歸りに成つて以來毎日々々御所櫻の語りづめ、私も覺えて仕舞つた、ちと氣違ひじみてゐる様だが、輸出の多い時は毎航海お出かけに成つて、海

上千五百哩怒濤と戰ひ炎熱燬くが如き南洋のお店で、徹夜商賣の掛引に奮鬪成る方にも斯ういふお道樂が有ればこそ息も御吐きに成るのだと思ふ。

お二階でどなたかお泣きに成つた御新造樣は今晩お急がしいから、お子樣方は、私とお兼さんでお引受け申たが、お兼さんは相變らず高鼾。お暑いので、おむづかるのだから、煽ぎ乍らお背を摩つて自分もいつかうと〳〵して仕舞つた。ふと目が醒めて愕然。夢中で驅け下りて臺所へ行つたらお久さん焜爐を煽ぎ乍ら、

「お早う」てにやりと笑つた暫時と思つたのに田口さんも濟んで御隱居樣の千代萩の奥のサワリの處で、矢つ張り、上手で被在る。之から忙がしく成るからお兼さんも起して新座敷へお膳部を並べる。

お夜食が濟んで暫らくは今晩の御評で花が咲き、皆樣お歸りに成つたのは電車が赤燈を點る頃、夫から跡片付、お夜食頂いて床に這入たら時計が二つ打つた、賑はしい夏の大川端も今は人通りも稀に、夜蕎麥賣りの鈴の音が川水に響き靜に夜は更けて行く。

△下女の頓才

某家にお峯といへる田舍育ちの下女ありけるが、年の始めに如何なるはづみにや土瓶を板の間に落して、みぢんになしたり主人大に怒り、元日早々に器物を毀つは不祥なりと言葉荒らけなく罵しれば下女は靜かに

元日や土瓶と貧とが底ぬけて
跡にのころは金のつるのみ

と詠みたりければ主人機嫌直りて目出度新年を祝ひける

△少童の機智

むかし、晉の王戎七歳の時他の多くの童子と遊びけるに一人の童子路傍の李の木に多く實の着きたるを見つけ、枝に攀りて取らんとせしかば多くの童子も皆李の許へ走り寄るに、王戎一人は見向もせず或人其 故を問ひければ、王戎のいふ樣路 傍にある李の木なれば誰しも取るべき筈なり、斯も實の多きは定めて苦がき故ならんと云ひて行かざるなりと、曰ふ、 後ち檢するに果して苦き實なりしとぞ

デパートメントストア

女店員

松田さんは如何なすつたか未だ見えない、何時も私の方が負けるのに今日に限つて如何なすつたのか、おや最う八時、表の戸が開いた、一番先の客は男か女か、おや／＼女の二人連れ、今日は又少し忙しいかも知れない、さうだ今日は土曜だもの午後から屹度混むだらう、そろ／＼歸省する女學生連も來るだらう、女學生の客が一番いやだ、やれ配合の事の嗜味がどうしたのと八釜敷い事ばかり云てリボン一切メリンスの風呂敷一ツ買ふのに大騒ぎだ、本當に日曜や土曜、祭日等我我には大禁物、人が呑氣に遊ぶ時ほど忙しいのだもの。

つぶやきながらいつもの通り半衿、帶揚げ、腰帶と自分の受持の部の飾り付けが出來た、松田さんは未だ見えない、休みなのか知ら？　さう／＼此處のケースの半衿の飾り變を忘れた、薄緑に金糸入りのうづ卷きと小豆地に麻の葉絞りと、山繭縮緬美好鼠に、夜會草の模様のとに變へた、矢張り薄色の方が派出で飾り榮えがする今日の配合は自分ながら好く出來たと感心してると

「あら此の衿が好いわねえ」

とすき通る様で落着のない聲は△△さんの奥様だ

「入らつしいまし大層お早う御座いますこと」

「エヽ、少し急にほしい物が出來たので暑くならない内にと御飯も食べずに來たのよ、、先に食堂へ行て來るわ歸りに亦寄てよ、」

「どうぞ、お待ち申て居ります、お衿の好いのが種々參りましたから、」

香水の強い香りを後に殘して二階の方へと姿が隱れた、何時も御出の度に變る召し物今日は絽御召し紺地の兩褄に、白地羽二重に墨繪の竹の丸帶といふ思切た粋なお好み、唯さへお美しいのが一層引立て見える筈だ、其處に長井さんが來た、相變らず派出な綿明石

單衣、いくら若く見せ様とて顔のしわが承知しやせぬ。

「松田さんは缺勤ださうで私が今日は此方ですつて何卒宜敷」

「おや其れは御苦勞様ですこと」

「今のは△△様の奥様でせう？おきれいね！」

「え〻それでもあ〻して姿丈見てゐれば顔つき度様でも口きくのを見ては興がさめてよそしてまあ御身分ある奥様でありながら大の役者買ひの親玉と聞いてはかう美しいのが一層あさましい様にさへ思はれますわ」

と話してる處へ袋物やの古川さんが

「今日は長井さんが此處？旋風機の下で本當にい〻のね」

「其變りステーントグラスから直射する光りで堪らないのよ」

なんていつてるとまたお向の櫛屋の谷川さんが

「朝からいやに蒸し暑いのね、松田さんは休み？」

と相變らずゆでだこの様な顔をして來た。

「え〻お席様で有馬さん（此處の部の主任）の御機嫌が惡いので閉口よ」

「此頃彼の人いやにしやれるのね絽の帯なんか〆めこんでそしてあのお白粉の濃さ加減！」

「ホ、をかしいのよ毛利さん（女店監督）が來ると下ばつかり向てるのですもの」一同は口を揃へて

「なぜ？」

「だつてあんまりお白粉が濃いもんだから？」

「ホ、、、」

「ホ、、、そんなに氣兼してまでおつくりがしたいのでせうかねホ、、、」

いつの間にか小山さんが來て「ちよつと／＼サアーチライト！！（事務取締が巡視に廻らむこと）」サアチーライトと聞いて一同の視線は八方にくばられた、

「うそよ／＼」

人の惡い小山さんは皆の顔見て笑ひながら

「大層面白さうね」

と云ひながら、割込んで來た、私は丁度帯揚げの處にお客が四五人立つてたから、どうせひやかしとは思つ

たが、つと其の方に行かうとしたとたんおそかつた、右手の階段からピカッと光つたサーチライト、眞に此方を照していたので思はず冷汗が出たので急いで客の方に行つた、氣の毒にまゐ他の人々は誰も氣が付かぬらしい、帶揚げの方は案の定ひやかしだつたけど其代り隣の人がぼんやりしてゐたから大巾兵兒帶を二つ箱に入てと云ふ客をつかまへた、洋服姿の高襟紳士之は占た、奥樣へお土産に牛衿



の二三本も賣り付け樣と思たら、今日は急くから之れ丈と云ふのでいざ勘定と受取を示し。

「難有う存じます廿八圓に桐箱の代が三十……」

と云ひかける

「否洋服部の方で一緒にするから彼方へ廻して呉れ、皆まとめて屆させる事にしたから」

おやがつかり！何時の間にか客も殖ゑ、油賣りの人達も引揚げた、後には長井さん一人で眼を廻してる、其

から私も四五人いゝ客をつかまへた、今日も二百圓は大丈夫、少し忙しいと時間が早く過るので嬉しい、最う十二時半だ、時計を見ると急にお腹が北山に成る、長井さんも未だ食堂へは行かない樣だ。

「あなたお食事に行つていらつしやいな」

と云ふとさも待てゐたと云ふ風に飛で行つた、どうせ、私は後から行くつもりでも、かう一言の辭退もせずに行かれては、あんまりよい氣持がせぬものだ

其れから其れへと大繁昌で、不平を云つてる暇がない、程なく長井さんが歸つたので自分が變つて行つた、今日は何かと獻立表を見ると、うな丼とさしみ、此の間のさしみでこりたからうなぎを取つた、見るとどぜうのやうなのが二片、それも其筈だ大まい十錢のお辨當だもの、食卓の上はまるで大河のやうだ、隅の方からぽた〳〵水が垂れる、椅子の上には御飯がこぼれてる、いや〳〵亂脈こんな處で大勢ががや〳〵しながら食べる狀は丁度夕方の蚊の群れの通りだどんな珍味だとておいしからう筈はない、食事の時にでも少し骨やすめしないでは休む間が無いのだ、けれど此の樣な掃溜めみたいな處にとても落着いてはゐられない、

店に出れば最早人の山、何處の賣場も一ぱいだ、なれないうちこそまごつくけれど、かうづう〳〵しくなつてはどんなに客が山とおし寄せやうが落つきはらつたもの、又其れでなくてはとても毎日が續かない。

二時三時四時の間は夢中だ、今日も友人が二人程見えたが、ろくに挨拶もしなかつた、初めは知た人、殊に學校の友達等に會ふのが何よりもつらく、幾度もテーブルの下に隱れたり、便所に逃げて行つたものだが、此頃では變つて此方から出かけて、いろ〳〵賣りつける位になつた。

四時過ぎると人の波も餘程退いたので、そろ〳〵賣上げの勘定にかゝらうと、すると、大變がや〳〵して來た、と見ると一隊五六十人の田印の爺婆連、かうして東京見物に出て來る位の人だもの、皆相應の物持ちだらうに、田舍の人は飾らない、手織木綿のごつ〳〵

したのを皆一同に、尻端折り、胸のあたりに、揃ひの徽章つけ、あんぺら帽子を阿彌陀にかぶり、縞の襯衣の、大肌脱ぎ、女は大抵手拭をかむつてる、白い手拭の中から眞黒い顔が一層目立つて光つてる、旅館の團扇を或は帶に或は手にして、

甲「皆揃つて來るだよう!」

乙「婆樣よはぐれねえやうつながつて來るだよう」

と先に立つは名主樣か?

丙「何て結構な代物ばかりだんべえ」

甲「ほれ異人さんも來てるだよ」

乙「見なよ此の下駄が二十五兩だとよ」

と口々に高聲のいやはや賑かの何のとお話しでない、其中の四五人が、自分逹の前へ來た、半衿を下から上から有る丈引くりかへして、やう〳〵中から赤いぼたんの染模樣のを取り出し、

甲「女中さん! 此れはハア何ぼでがす」

女中さんとは恐れ入つた、

「ハイ一圓六十錢で」

甲「エッ一兩を六貫、ホー高きあ〳〵幾らか負けるだよ、」

「あのお値段は最早一錢もお懸値なしでございます、」

甲「今一つ買ふだから一兩五貫にするだよ」

「イエ眞實にお値段の處は少しもお引き申しませんので、ハイ皆さんに此通り正札で願ひますから、其變りお品はたしかでございます」

と云ふと側に見てゐた一人が

乙「そんな高きアもの買ふでねえよ」

と引つぱつて行つてしまつた、何だ馬鹿〳〵しい田印は乾度負けろ〳〵がおきまりだ

つぶやきながら勘定に取りかゝつた、忙しかつた筈今日は二百六十圓と五錢の賣上げだ。

長井さんもがつかりしたと云ふ風に、柱にもたれて、一寸帶をなほして居る。

「おつかれでせう? お蔭樣で有がたうございました、もう六時過ぎてね」

「未だお客があるのよ八番で誂物ですつて」

「染物なんか夕方電氣の光なんかで見たつて分りアーしないわね」

其處へ古川さんと林さんが來た。

「眞にくらしい程悠々した人ね」

「其染物なんか乾度初めてするのよ、色一つ見るにだつて容易ではなし、これから模樣を定めるのですもの夜があけてしまうわ」

「眞あれでも御當人樣お得意なのでせうよ」

だつて彼の人のお蔭で何百人と云ふ人が歸られないのですもの氣がきかないにも程があるわ」

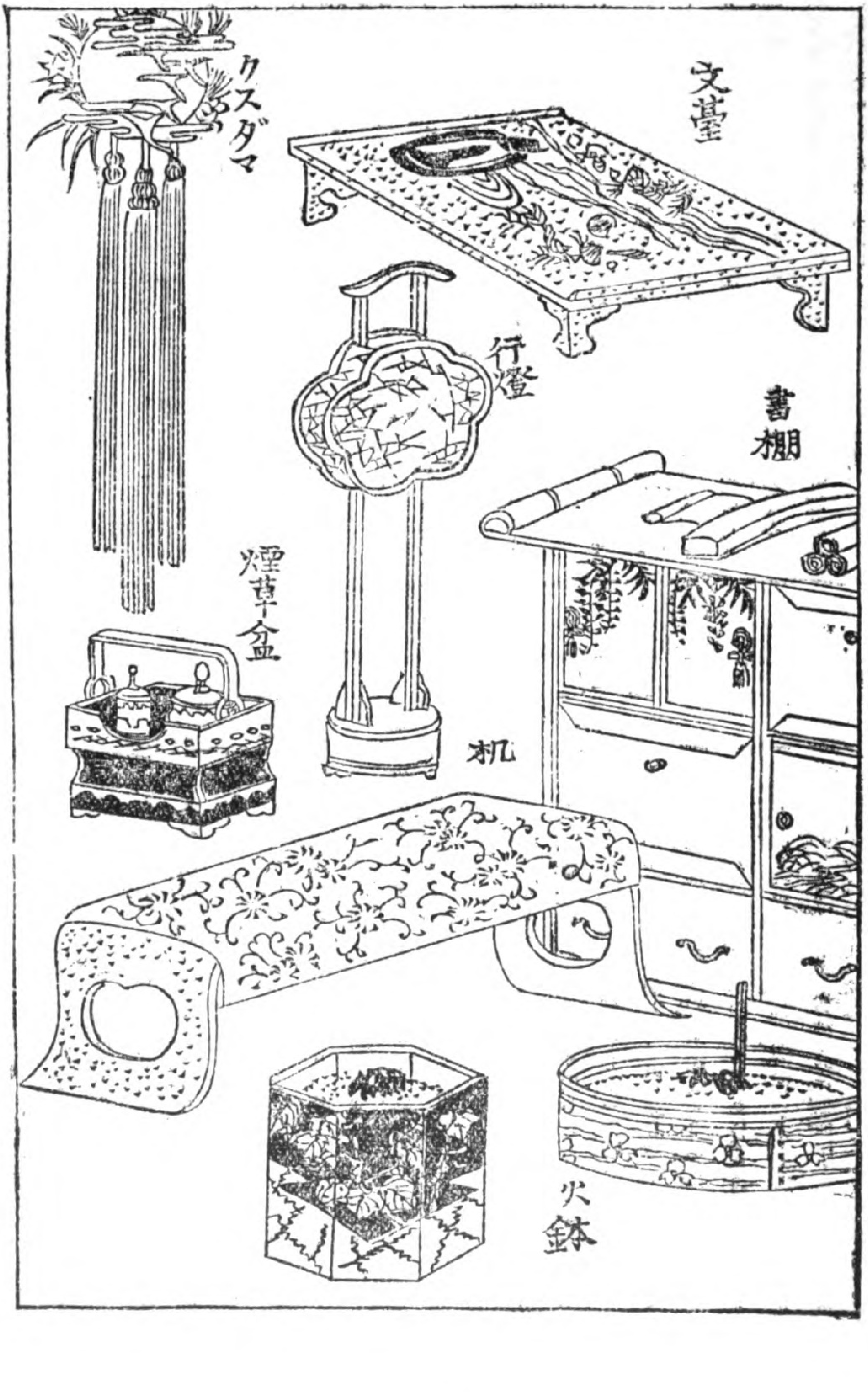
と古川さん大層御立腹の處へ小僧が來て、女の方丈毛利さん（女店員監督）が呼でお出になりますと云つて去つた、毛利さんに呼ばれてろくな事のあつた試なしと口々につぶやきながらも、さすがに其人の前では、るも否なし顔に差ひかへた、お話しは定まつてる、今事務に呼ばれましてと云ふのが前置きで、兎角一度に參つて困るとか、店員どうしのさゝやきや笑ひ聲は客に惡感を與へるとか、今少し熱心に働いてくれとか、こんな話しなら百も御承知耳にたこが出來る、だけれど二時間や三時間の勤めではなし、毎日十時間餘も居るのだもの、時には話しもしたくなる、可笑ければ笑ひたくも成る、と一同不平滿面で御前を辭した、客も今しがたやう〳〵歸つたので七時十分過ぎに第一のベル（女店員の歸るべきベル）が鳴た。

外に出ると日は最早殆ど暮れてゐる、雨さへ降つて遠雷の音がかすかに響く、今朝母さんが傘を以て行けと云はれたのに、生返事して持たずに來た罰はてきめん、古川さんに電車まで入れさしていたゞいた。

二人並んで腰を下すと向側の人がしきりと、私の胸の邊りを見ては顔と見較べてゐる、自分は何にも氣が付かず、澄して居るを古河さんが見兼て。

「あなた胸についてゝよ」

と少し顔を赤くしてさゝやいたので、ハツと思てあはたゞしく徽章をはづしたが、顔は火の様にほてつた、邊りの人が何だ女店員かとあざけるやうで堪らなかつた、廣小路へ來るのを待ち兼ねて古川さんに挨拶もそこそこ電車を下りた、傍らの柳の下に雨傘を片手にしよんぼりと立つた母樣の姿を見て、今更ならねど親の情けを身にしみ〴〵と感せられた。


クスダマ
文臺
行燈
書棚
煙草盆
机
火鉢

昔の友達

英子

今朝神戸を立つ考へでしたが汽車不通の爲見合せました。そのかはり、鹽屋に海水浴に行き、歸りに一の谷に寄りあつ〳〵もりそばを食べ、須磨寺へまゐりますのよ、今叔父や姉とそば食べてゐるところ、明朝七時に立ちます。
と不二さんから消息
起きると直ぐ顏も洗はずに郵便箱を調べれば氣がすまぬ性分でもうおそい疾うに着いてる筈、も少し早く知つたなら出迎するのにと思ひながら、もう嬉しくて、不二さんが來ると相手なしに云ふので、朝飯を濟ましてゐた妹が私の顏を見てクス〳〵笑つてゐる。

けれど、もう半年立てば不二さんは英文女學士となる人、それに三年ぶりの面會、花の都で博士や學士を先生にして、むづかしい洋書を朝から晩まで讀みつめてゐるのだから、ひよつとすると自然私にはわからぬ言を云やすまいか、私は學校時代から殊の外、外國語は嫌ひであつたのに不二さんだけは好きで、上手であつたから、もう英語の先生の樣に、ハイカラ女教師と澄ます積りかしらむ。



あゝ、三年前迄は、不二さんと行燈袴を春風にふかせてダンスもした。不二さんは明星派の和歌がすきだつた。今日まで靜明寮とやらで詩人の名をくりかへして美しい夢の國へ遊んでゐた間に、私は算盤片手にパチ〳〵とやつて、何拾何圓何十錢と帳面あしらひ、今月はいくらの損失だ、之では危いなんかいふ、まるつきりの世話女房だものほんとに厭になつてしまふ。いかに虚榮心は持たぬ積りで居ても、臺所で大根を切つたり味噌を擂つたりするより、美しい室で琴を彈いたり、本を讀んだりする方が矢張り嬉しい。「英や、斯うし樣か、あゝし樣か」と一から十まで相談なさる氣の小さい母樣と、やりつ放しで、しかもやかましい父樣との中に立つて叱られてばかり居るのだもの。

少し景氣のわるい月末は彼方此方の番頭さんにお辭儀して、「今日は都合が惡いからどうか明日にして」とか今留守で私にはわかりませぬ御氣の毒で」とか一生懸命に頭をしぼらねばならぬ、ほんとにむつかしい、銀行會社が破產して支拂停止をする場合大勢の人の迷惑は大變なもの、銀行がもし一個人であるなら、自殺して罪を謝してもまだ足らぬ位思つてゐるのだから、店々への拂ひが滯れば罪惡でも犯した樣な氣がして怖ろしい仕方はないと云つて無いものは如何にもない學校で教へて貰つた經濟學の應用の秋は今ぞと力んで見ても駄目だ百圓の

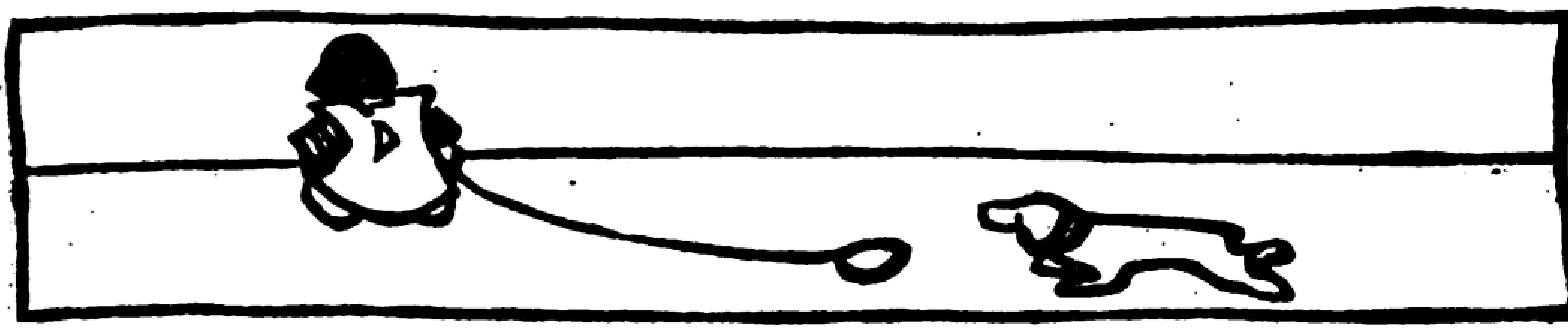
俸給から、家賃がいくら、太郎花子の教育費がいくら、諸費、老母の手當、被服費と引きさつて、立派に表につくつて、甲上と先生のおしるしがつけば家政は滿點、それで世の中は通れるものと思つて來て見れば事實とは雲泥の差………

だけれど、今度と云ふ今度は鬱はらしに毎日〳〵不二さんを引張り込んで、思ふ存分話して遊んで臺所へも出れば、掛取には勿論顔は見せぬとひとりで決めてしまつたが、高尚深遠な頭と金だ飯だと云ふ頭とつき合つて「プーン」と笑はれたらこれも仕方がない、でも、かまはぬ逢ば其間だけでも日々の務をわすれて、詩の國へもつれて行かれるし歌の國へも遊ばせて吳れるだらう、續く旱りに嬉しい夕立……砂漠の中のオアシスの様な難有みが屹度ある。と考へれば考へるだけの一分でも早く逢い度い。

「御免」と人の聲。不二さんだ？うろたへて出るとまあいやだ似もつかぬ八字髭の背の高い眼だけはキヨロ〳〵光つてゐる二十七八の貧相な男だ、取次ぐ者は外にあるけれど出たが因果

「どなたで」と尋ねると

「御主人は御在宅ですか、先日義兄が伺つて置きましたが」と名刺をさし出す。見れば〇生命保險會社募集員〇〇〇〇としてある、どうし様かと考へ、一寸御待ち下さいと云ひ置いて、急いで倶樂部へ行つて父様に名刺を示すと



「エ、やかましい！今玉突いて遊んでいそがしいと云へ！」とひどい御言葉、こんなことはまゝ有勝故少しも驚かぬが、居合せた人がさもをかし相に苦笑して見えた

まさか其通り有體にも云へないし、「今折あしく玉突をはじめてゐますから……」と勝手な返辭をして後は何と云つてよいやら口の中でにごらすと「逢つて吳れませんか」とさも不平らしく聞える。

氣の毒は氣の毒だけれど。仕方はないし、「後で左様申して置きますから」と暗に歸つて吳れと、眞綿に針を包むとしぶ〳〵

「どうかよろしく、明日今頃伺ひます」と云ひなりスーと表へ出てしまつた。不二さん、不二さんと騒ぐものだから斯様な目に逢ふ。後見送つて、ホツと一息、いらぬ想像をはじめた。どうしても中學校位は卒業してゐるだらう、月給二十五圓と見て子供の一人や二人はあるだらう、毎日〳〵テク〳〵と見も知らぬ家へ這入つては變な挨拶をされて門前拂男の價値も何もない。心配になるのは一體會社員の妻君はいやに氣取つて、夫がこんな苦痛を忍んで働いて居るのも知らないでハイカラぶる。私が今し方馬鹿にした言葉を傳へた時分、あの人の妻君はどんな事をしてゐたらう？今日一日の務を終へて歸つた時どうか笑顔で迎へて吳れゝばいゝがと、をかしな事まで考へる。あゝ忘れても孫子の末迄あんな職業につかせ度くない。あの髭も

洋服も、靴も皆痛の種だらう、中途半端の教育を受けさせるよりか、大工左官の道を教へてやつた方が親の慈悲かもしれぬ。

それはさうと、不二さんはどうしたらう堪りかねて端書を出す、

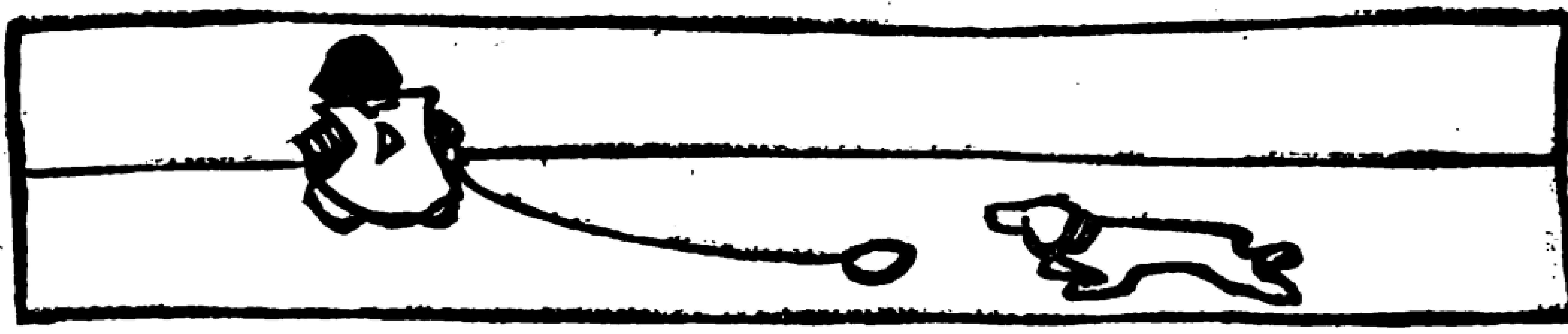
須磨からの御たより夢の様にたゞ嬉しく存じます、もう御着の筈、車が通れば出て見、人の足音がすれば立ち少しも心が靜まりません、こちらから御伺ひしやうかと思つてゐますけれど、未だ御取込中故遠慮など母から注意されて辛抱して居ります、片時も早く顔を見せて下さい

と筆も文も整はないけれどかまはず返して市内と書く間もなく、

「英や電話ですよー」と耳にひゞく。今度こそそれだと、韋駄天の勢で二階を下りて電話口へ立つ。

「御久しう御座います」との聲は、あゝ亦違つた、君子さんから「た。暑いのに御變りもなく御無沙汰ばかりですみませぬ」なんか挨拶を受けてゐる

ガチャンと車が止つた、はてなーと思はずふりむくと、正しく不二さんーあゝどうし様電話室の對話はまだすまぬ。飛び出すわけにもゆかず四苦八苦、魂はとうに玄關に飛んで行つてゐるので、君子さんが何云つてるか、もううわの空。たゞヘイ〳〵と返辭するばかりで、早く左樣ならが出ればよいとそればかし



念じてゐるために、例の長口上魂こゝに在らざれば味なめくもす道もなくて泣き度い位、聞きもせぬ事までくり出されるのでヘイ〳〵も出ず默つてしまつた。君子さんも多少變にさとつためだらうお母様によろしくでチリン〳〵

もう大丈夫と、無意識に飛んで出ていきなり不二さんの手を握つて

「お不二さんー嬉しかつたー」これが三年ぶりの初挨拶だしもの自分ながらをかしい。

「今日は御伺する積りではなかつたの、けれど幾代橋を通つたら、妙に引きつけられて遂々」と不二さんは美しう笑む。

「まあ一寸上つてもいゝでせう」と無理に手を取つて居間へ連れ込む。思つたほどハイカラではない。しぶい銘仙絣に友禪羽二重の帯輕い扮たち先づ嬉しう思ふ。

「少し用があつて神戸の叔父の家へ參りましたら、急に遊び度くなつて墓參りをだしに、輕井澤の夏期學寮もよして、兩親も居らぬこゝへ下りましたわ、だから思ひ殘しのない様に遊んで充分しやべつて歸りますわ」とは願つても容易に出來まいと思つてゐた私の希望だもの、腹の中で雀躍した。

丁度、婢がラムネと氷とを持つて來た。一緒に飲んで顔見合せては笑つてばかし

「ねえ英さん！姉が斯う申しましたよ、英さんと云ふとすぐお

饅頭がすきだと聯想するつて、ほら、また上京しない時分、よく此邊でお饅頭を食べながら遊んだでせう」

「まあ、飛んだ災難。でも事實だからあきらめますが、まだそれより好きなものがありますのに。あつもりそばの御土産が欲しかつたお不二さん！年越しに母がやつと一杯をしまつた頃私はもう三杯目でした、其早さと來たら家内中で一番、湘烟日記にもそばの事が書いてありました。そばに饅頭！何だか茶人らしくて風流で、牛肉がすきとか、ミルクが飲み度いと云ふより、餘つ程上品ではありませんか」と我田引水……不二さんは唯莞爾。

「時にお不二さん、少し瘦せましたね！」ときくと、

「左樣なに見えて？あなたの自畫自讚の茶人で思ひ出したわ、茶の湯のお稽古に通つてた時分、新らしいふくさに押しをするつて、一番重さうだと先生の御見立で私が押しの代りになつた事がありましたつけ」

「ほんとにさう、でもぬるい濃茶をあの肺病さんの後で戴いた時の氣味の惡るかつた事」なんて七八年も昔の話までする、

「頭が俗になつてしまつて、二一天作の五仕事なんです、あなた感心に相變らず讀書で居ますネーそれは何？進化論講話に、浪漫人草、漱石集、鳴雪俳話、あら！實洞敎會の修辭叢まで屆さんにでもなる積り？」



「さうぢやないのですけれど、あなたの學校の平塚明子さんで始めて知つた禪麗錄どんな本かと本屋をさがしたけれどなし、手に入らないものとあきらめて居りましたら、向ふの、うなぎ屋に禪宗の坊さんがよく來ると云ふ事をかぎ出したので、知つてる仲居にたのんで修證義と一緒に借て貰ひましたが、むづかしくて一枚も讀めはせず禪麗錄は本箱へ納めてしまいました。一寸アノ平塚さんてどんな人？」

「そらあ眞面目な考へ深いよく出來た人だつたさうですけれど何か思ひ違ひをしたんでせう此頃、女學世界に秋雨と云ふ人が書いてるでせう、うちの學校出ですの」

「どんな人？」

「二十二三でせう、色は少し黑い樣だけれど、すらりとふるいつき度い位美いスタイルの方、工學士夫人ですよ、それに筆はあんなに立つし……江戸つ子ですもの、まだ外に、うちの學校出で女學世界の記者がありますのよ」うちの學校が聞き馴れぬ爲一すをかしい。

「今年大學を卒業た、私達の同窓生の三保子さんは、若松港へ嫁らつしやいましたよ、校友會誌に出てゐます」

「さうですか、うちの學校の方が澤山若松には居りますよ」

「落花情有り流水意なからむやで有名かつた田川家さんも若松で新夫人です。此間逢つた時、女子大學出で高工第

商出身の技師の奥さんがゐますけれど、會社は月給順で行くから臉張れないと聞きました」と云つたら、不二さんが辛い顔を見せた。

「學校ではさぞせわしいでせう？どう云ふ風に勉强して」

「英文科は殊に時間か入りますのよ、豫習で苦しめられますの」

「そんなら、針なんか握つてる暇はないでせう」

「エヽ、大方仕立屋にさせますわ、女學校で習つたきりと」呑氣さうに、いさゝか心細い、でも、私と不二さんとは境遇が違ふのだから、井戸の中の蛙が知つた事ではないと、我と我が心をいましめた。いろんな事を云つて、遙々と下つて來て吳れた不二さんを腹立せるにも及ばぬ。

「お不二さん、佐吉さんは今どうしてゐらつしやいますか、尋常科の時よく泣された、ほんとに餓鬼大將でしたれ」と不意に問ふと

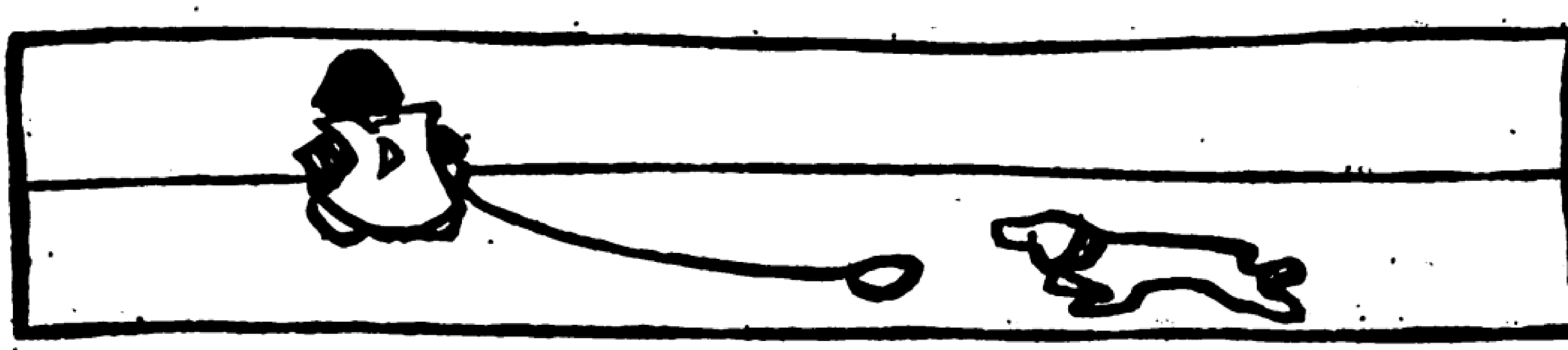
「駄目！駄目！あんな従兄持つて――酒を飲んで藝妓買ひ、時に此間神戸で佐吉さんに面白い事聞きましたよ」笑さんは偉い本山に懸想文を送つたと、私しきりと辯解したんですけれど、本當だ〳〵ときゝませんでしたわ」

「まあわきれました、飛でんもない事、歸つたら直ぐ私が立腹したつて云つて下さい、

でも多少不二さんにも罪はある、女學校に入學した當時、どう六七年前の話、始めて習つた英語がむづかしいので、正則英語學校へ中時間づゝ通つてゐた。男女混合で其さわがしい事は話にならなかつた位、其中一人おとなしく着物の袖附の三寸許りほころびてるのも氣にせず勉强して居たのが本山さん、丁度其時分に讀本で理想と云ふ言を習つた。よい事を形容して理想と云ふのだと思つて居たので、感心な理想の人と云つた、それを傍の不二さんが盛んに笑つた。それも其筈わざ〳〵大學に迄行つて文學なんか研究して居る不二さんだものその人の前で、私は大變な言をしやべつたのである、をかしいもんだからきつとそれを佐吉さんに告げたのだらう、本山さんがほころびを氣にせぬのも道理、學校の掃除番で少しおそくなつた時、きたない法衣をつけて門を出た人を見ると本山さんだつた。何の不思議もない。それを、たつた一口意味を知らないで云つたのか「理想」といふ言葉一生のあやまり、馬鹿げた想像を重ねられて情けない。用もない佐吉さんをたづれた爲入らぬ事まで聞かされて、なつかしい不二さんまでうらむ。藪をつゝいて蛇を出すとは斯樣な事だらう。

「お不二さん、新體詩の朗吟！」と罰の積りで云ふと。不二さんは

乙女ぞ經ぬる大方の我は夢道を經てけりと藤村詩集で見たやうに覺えてゐるのを聲清らかに歌ひ出す。



暮るゝにおそき夏の日の表はまだ明るいのに、パッと電燈がつく。不二さんは「思はず長く遊びましたわ、」と立たうとする

「今夜泊つていゝでせう、家の者へ氣兼は無用、いゝでせう」と止めたけれど、叔母樣へ都合が惡いさうな。明日朝から來て泊ると約束が出來た。それを樂しみにそんならばと私も立つ、

△梅干の歌

澤庵和尙は東海寺の住職にして高名の聖なり、或時梅干を詠める狂歌に

昔見し花の姿は消え失せて
皺うちよれる梅法師かな

△吉野の花

池田正式は大和郡山の藩士なり、其身は輕き勤め人なりしかば勤仕の身は閑暇に花を見る事叶はずと嗟嘆して

そばに居て見ぬや芳野の鼻の先

と狂句を吐きければ、忽ち大守のお聞に達し、芳野の花見て來れと暇賜はりける、よつて心の儘に山巡りして花の枝を折りて歸り捧げしかば

あし垣の芳野間近く家居して
問ふべき花に問はるべしとは

不二さんが手にした洋傘は空色でふるつたもの、「東京？」ときくと「エゝ仙女香ー」と云ひながら待たせた車に乗つて「明朝ね」と車はかけ出す。勢よく消えて行く車上の不二さんを私は見送りながら、明日何の馳走をし様かと考へた。

と大守口ずさみけるとなり

△家の黒燒

むかし加賀國に服部元好といふ醫師あり、奇人にして狂歌を善くす、或時其家出火して燒けたりけるに、何人の惡戯にや夜其門に

お醫者さん家の黒燒何になる

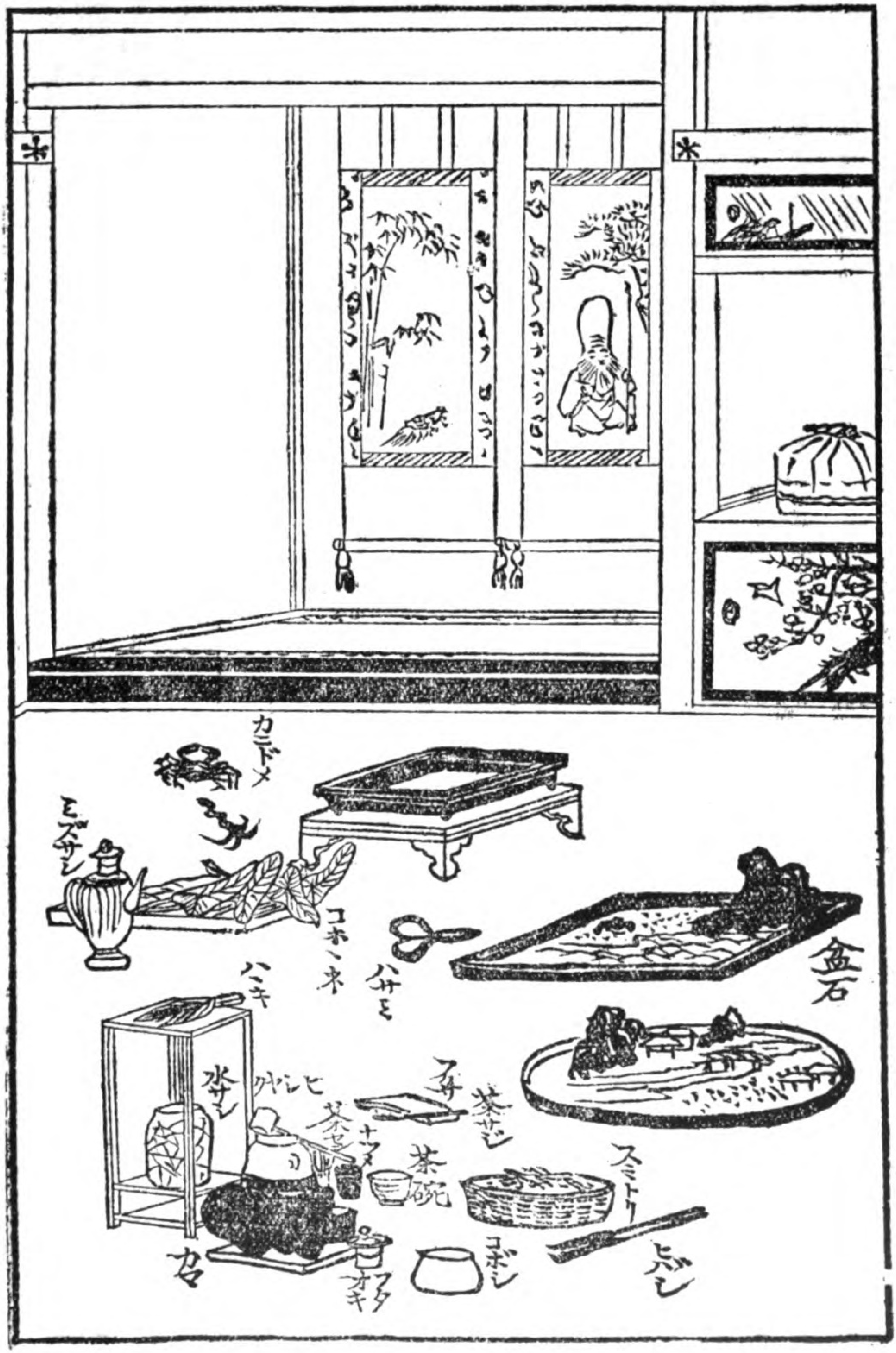
と樂書しければ元好翌朝これを見て馬鹿者の仕業かなと直ぐ筆執りて其傍に

日傭大工の腹ぐすりなり

と書きければ人皆其頓智に感じける

△江戸ッ子の恥

むかし江戸ッ子が田舍へ行きて人に誇りて「ベラボーメ日本橋の眞中で生れた兄さんだ」といへば田舍者は取りあへず「ハヽアさうか、私等お江戸へ行つて見たが橋の眞中には家がないから多分お前は乞食の子であらうといはれて流石の江戸ッ子も口を閉ぢたり


カニドメ
ミズサシ
コホヽネ
ハサミ
盆石
ハヽキ
水サシ
ヒシヤク
茶サジ
茶セン
ナツメ
茶碗
スミトリ
カマ
フタオキ
コボシ
ヒバシ

當世ヒステリー物語

野菊女

さみだれに物思ひ居れば郭公……なんていふと、どうやら風情もあるが、かう毎日の物思ひは、ほんとに厭になつてしまう、どこもかしこも、じめ〳〵して氣持のわるい此頃を、私はまた特別念入りの、頭はがんがんして重きこと千鈞、右の耳はぐつと詰つて何も聞えない。否、少しも聞えないのなら、いつそさつぱりしていゝけれど、生憎左の方から、俗言卑語が傳はるので、とても仙人にはなれさうもない、もうくさ〳〵して腹が立つやら、悲しいやら。お醫者様は、風邪からヨースタキ氏管とかの、腫脹したのに、聊、ヒステリーの氣味といふ。

ヒステリーとか、メランコリーとか、そんなのなら、世間一般の通有病、却て私などは、不關焉だけれど、此耳だけは一時も早く、すつと透らなくては、眞にやりきれない、あゝ頭が重い、まるで鐵鍋の五六枚も被つたやうだ。

鐵鍋といへば、信濃の筑摩では、今も、釜鍋を戴きて神に奉る、といふ祭禮があるかしら、こんなお祭りが今もあつて、婦人たるものは、皆、己れに相應せる數だけ、鍋を奉るの義務あるものとしたなら、どんなに面白い現象を呈するだらう、意外なる邊に、意外なる秘密はあるもの、とんでもない慈善演劇の紀念物など、篋底ふかく秘めたる貴婦人方なども、一大恐慌を起すだらう。そして、一歩を進めて、クリストの「――を見て情を起すものは、すでに姦淫したるなり」の論鋒でやつたら、昨は早稻田のポエトにラブし、今は赤門の秀才に、秋波を送る的の孃達、どんなお顏を遊すだらう。面白い〳〵、私が一つ其祭典執行の、主唱者にならうかしら……。さりながら……。みぞれする或夜ひそかに、寄宿舍の窓の下、廂を集めて何の軍議ぞ、と見れば、美事攻め落したる盃の上、風流男忠度卿が一族郎黨、こゝにあはれをとゞめたる、屍は手早

く古反古に押つゝみて、窓外遠く葬りての、あとはすまあした顏、紅一點、愛らしいお口元に、につと笑つた處は、さつきの武者振とはとんと別口……。(此邊御絶景ですが案內がなくちや分りません)こんなうちは、罪もないけれど、さる程に、ける程に、星にあくがれ、すみれをなつかしみ、所謂、自然主義を渇仰するやうになつては、そんな白痴おどしの鍋なんか……、おほゝゝ私もよつぽど、どうかしてるわ。閑說都のほとり、閑雅幽邃な地の、何とやらいふ產婆さんの、其御近所の氷やさんは、暑い寒いに關はらず、氷がどんどんうれるとやら、あのね、氷で終始冷やしてゐると乳房が黒くならないつてね、ほんとかしらん、ほんとなら、お茶の代りに、氷水ばかり飲んでゐたら、腹の黒い人は、なくなるでせうに……。

「猫がとびだしましたよ、何か盗られはしませんかつ」あ、びつくりした、「あら！、どうもありがたう……」お隣のおかみさんが、だしぬけの大聲に、聾の耳が早鐘のやうだ。水口をあけつぱなしのまゝ、夢中になつてくだらないことを、かきつけて居たもんだから、拭きこんだ板の間は、落花狼藉、ヱ、梅の花形とでも、洒落ておかう、

梅の花形はいゝが、漬けてあつた鰯三枚、影も形もなくなつた。まあ、こんな時は、姑が居ないで幸。もうもう、別居論ぞお唱へなさる方を、ゆめさら、御無理とは申しませぬ。雨の中をA醫師の許にゆくと、もう患者が十人も待つて居る、御懇意の間だから、奥へ伺ふと、つい二ケ月前嫁らしつた、若い花のやうな夫人が、まあ野菊さま、よい處へ！、今ね困つたことができましたの、と仰しやる、どう遊したの、御秘藏の金糸雀でも、死ちましたのと、早合點すると、いゝえ、そんな事ではありません、實はこれ〳〵……。きのふから、御老母の綿入羽織、縫直しにかゝられて、けさは、いよ〳〵綿を入れるだんになり、「あのお母ア樣、たし綿をいたゞきたう厶いますが」と申上ると、老夫人例の締つたお顏つきの、ニコリともなさらず、「たし綿はつめのさきにありませう」と仰しやつたき

り……。」

『つめのさきといふ所へ、とりにやれと仰しやるのでせうか……』、との御相談。無邪氣といはうか、何といはうか、一寸、御返事に困る。あし手模樣とやらは、いつか〇〇さんのお嫁樣が召したのを、拜見した事はあるが、つめのさきといふ所は、この邊にはありやしない。しかし、それもまあ、御無理ではない、まさか、學校では、古綿は爪の尖にて、よく引伸し利用せよ、なんて敎へはしないから……。



番がきたからと、書生さんが呼びにきたから、診察室にゆく。例の通り、鼻から歐氏管カテーテルを挿入しておいて、ぐつと護謨球を壓搾すると、耳の中がぐつ〳〵と鳴つて、空氣が通る、もう慣れたから、淚も溢れない、術後は、頭が輕くなつて、耳がぬけたやうになる。辭して歸らうとしたら、蓄音器の新譜が

きたから、是非きいていつて下さい、と先生が仰しやる、奥さんも强ておとめなさるから、離室の方へ行く。この室は、御老母のお居間で！、床にはどなたのお筆か、墨痕うるはしう「今日一日の事」といふ、訓言をかいた軸をかけられ、みやびた籠花活には、なでし子を面白う投入れに……、糸のやうに立のぼる、香の煙りもしめやかに、たゞ夢のやう……。机の上に据ゑられた蓄音器が、所がらいかにも不調和だ。御老母を正面に、私と奥さんとならんで、先生は譜箱を扣へ、弟御の正さんが、演奏者、折から患者も途絶えたと見えて、氣取屋の代診さんもくる。此處仙臺萩飯炊場とあつて、綾瀨太夫の美しい聲で、あの、千年萬年まあつたとて……の處、御老母はソッと瞼を拭はれる！。次ぎは米山甚句、浪花節、お琴の須磨の曲、長唄は杵屋何某の勸進帳など、とり〴〵面白い。

「どうも非常にいゝですな、居ながらにして名手妙曲が、聞けるのも、今更ながら文明の賜物ですな」

と代診さんが疎髯を捻ると、正さんが。

「いろ〳〵いゝ處ばかり少しづゝだから、厭きなくていゝね」

と仰しやる、御老母は。

「私のやうな昔者には、矢張拙い處があつても、すつと續いてきいた方が、情がうつゝて面白いね、まあ、たとへて見ると、ちやうど正夫などの行つてる、中學だの、女學校だのいふ所も、蓄音器のやうなものでせうね、いろ〳〵好い所を、少しづゝ……ね野菊さん」と仰しやる。これは〳〵痛み入つた御挨拶、恐縮して、‖これでも野菊は學校の先生の御臺所ですよ‖矢張その蓄音器仕込の、若夫人を見ると、もう顏を眞赤にしていらつしやる。

「でもね母アさん、喰物なんかどうです、不味いものを、うんとだされるのと、少しづゝ幾種も、美味いものがでたのとでは……」と正夫さんが早口に言つたので、皆が失笑してしまう。

　A先生のお妹子は、目白の學校に、いつていらつしやるが、蓄音器仕込のお嫁さんに、慊らぬ御老母は、や

がて此秘藏娘の、身をも案じすぎて、此夏休みに歸つたら、もう上京させぬと、主張していらつしやる。羹にこりて膾をふくの類か、それとも酸敗を懼るゝの親心か……。

＊　＊　＊

けふめづらしき〳〵雲の晴間を、ながめて居ると薄汚ない婆さんだの、子供の四五人も、抱いたり、脊負つたり、引張つたりした嬶連だの、何かがや〳〵喋りながら、澤山通るから、

『けふは何かあるのですか』

とお向のおかみさんにきくと、

『けふは〇〇樣（當地の富豪）の御老人の、お葬式で、一人前



五錢宛とかの、施金があるんですつて、△△寺で！」と、成程、それでかう大暴進軍するかね。

近所の、さして貧しいといふでもない、家の内儀が、向の家へきて、きいちやんを、かしてくれといつてる、どこへ行くのと、向の御神さんがきくと、△△寺へ行くのだが、子のない私などは、一人前しかもらへなくて、つまらないから、きいちやんを借りて、脊負して行くのだ、といふてる。なるほどね、木賃宿などで、子供の貸借が行はれるのも、不思議はない。

けふは、都合で、午後になつてから、Aさんへ行き、代診さんに耳の治療をしていたゞく、歸途、好奇心にかられて、△△寺の方へ廻つて見ると、まあ大變な人、境内から往來から、大小の人の頭、みんな跣足で、脛までありさうな泥濘を捏ねまはして、人より一歩でも、先にでよう／＼と爭つてる、雨はちやうどやんであるから、寺の門前には、飴やさん、おでんやさん、豆や團子やなんて、店をだして、まるでお祭のやうだ。そら來たぞきたぞつ、と、誰かゞ叫ぶと、ワーッと人波が狂ふ中を、○○の印半纏をきた男が七八人、錢を入れた籠を抱つてくる。「すばらしいもんだ」と、兩側の見物人が、嘆美する。羨望する。貰ふものは裏門へ廻れと印半纏連が、大聲で觸れると、跣足連が鬨の聲をあげて、こゝを先途と、裏の方へ突貫する。やがて葬式の行列がきた。成程立派なもの、槍作りの輿で、施主側の男子は皆あみ笠、紋附、造花、生花、放鳥など十餘組、東京式の花々しくて、藝人かなどの葬送のやうだ、赤土の泥道は、深田のやうで、高足駄はいた、白無垢の婦人達は、裾高々と端折つた樣、見る目も氣の毒なやう！。車に乘つた坊さんばかり、氣樂相に群衆を見まはして居る。

行列が寺の門をはいつてしまうと、右手の小門から錢をもらつた人が、ぞく／＼と吐きだされる、押されながら皆にこ／＼してる。さあ、門前の大道店が大繁昌、千客萬來大入叶、それ大福、それお團子、あれ飴をくつゝけたやれ、煎餅を落して、あんころもちにしてしまつた、親の叱る聲、子の泣く聲、犬が吠える、

寺内では鐘がなる。あゝ騷々しい!、私はたまらなくなつて逃げだした。

世の中は面白いものだ、施すものがあれば、待ちかまへて居て、吸ひとるものもある。

「大身だもの此位の施しはあたりまへだ!、毎日こんな葬式の二つ三つもあると、遊んでゐても喰られるねえ」

と反歯の婦が、おでんの味噌をなめながらいふてゐたが、施したものゝ方では、どんな感じがしてるのだらう聞いて見たい。

人の噂には、けふ〇〇家の施金、約五百圓といふ、大した御供養だ、さぞや佛は極樂にゆけるだらう。けれども、此頃のやうな雨つゞきでは、極樂道も泥田のやうであらうに、先その道普請でもしなくては……、えゝ又、そんな人の事を頭痛にする。だからヒステリーだなんて、いはれるのだ。

良人がお歸りになつて、

「どうもひどい道だ、いつになつたら晴れるのかね」

と仰しやつたのを、

「え隨分華美でしたよ、金持てものは、お錢の遣ひ方は知らないものですわね」といつたら、

「何を言つてるの、聾の早耳!」とお笑ひなさる。〇

大の政治科に居る、從兄弟の精さんから、「近々妹を拉げて行く、今からノートと首引をして、澤山の御馳走をして呉れ給へ、但し、いつかのやうに、舌根震動して、崩落するかを憂ふるやうな、ライスカレーなどは、眞平まつぴら!」なんて、失敬な手紙がきた。

「あゝもう夏休みだね、そろ〳〵方々の避暑地で、ハートや紫の廻燈籠が始まるな」つて、いひながら良人はせつせと、兒童夏休中の心得、「ねびえをするな!」なんて、原稿をかいていらつしやる。高等の學校はもう休みだといふに、小學校の先生などは全くあはれなものだ、八月一日から、一ヶ月間休暇だといつても、其間にはやれ何の講習だ、かんの講習だと、命令的に引張りだされて、まだ覺えきらないやうなものだの、饐えかゝつたやうなものだの、うんとつめこまれる、

何でこれで消化ができやう、さらでも頭が古い〳〵つて、わる口いはれてゐるのに、此暑中の一室で、頭脳も何も、めちやくちやにもまれるんだからたまりやしない、それよりか澤山避暑料でも支給して、もと文明の紳士淑女の銷夏ぶりでも、觀察させた方が、効果がありやしないかしら！、おほゝゝゝ、ついでに妻君携帶料も下さりや、私なんかも、こんなヒステリーなどに、なりやすまいに……、

＊　＊　＊

けさ始めて朝顔が咲いた、花のまだ萎まぬうちに、精さんと淑子さんとがきた、

『オヤ好一對、知らない人は、一寸尾行でもして見たくなりさうね』といふと、淑ちやんがホホヽヽつて笑ひだすと、精さんまで、アハアハつて雷同する。さもをかしさうに、ふたりでお腹をかゝへて、可笑しがるので、あまりの事にあつけにとられた私は、馬鹿ならば呆るゝ事半時ばかり……、淑ちやんは、やつと笑ひを押へて、

『あゝ苦しい……あのね姉さま、それについて面白いことがあるのよ、けさね大奮發の大早起で、上野へかけつけたらね、今奥州線が出る處、中仙道は三十分ばかり、待つのだつてんでせう。詮方がないから、あの殺風景な、汚い待合室で、社會研究をしてたのよ。そのうち、ふと、一等待合をのぞいて見ると、あの姉さま御存じでせう！、私の學校の〇先生、ほら、縮毛の色の青い……、オールドミス……、ね、あの方がゐるんでせう……。どこへの旅行だか、大きな革鞄持つて、いやに意氣がつたお召の單で、白絽へ墨繪の竹かなんか、派手なおつくりで金縁眼鏡、ちつとも似合はしないのよ！、そしてね、若い男だの、女學生風の人だのくると、缺點でも探すやうに、ヂロ〳〵見るの、若い睦まじさうな夫婦でもこようものなら、嫉ましいてつたやうな風に眼鏡が光るのよ、私ね、ふと面白い事を考へついたから、急いで兄さんが、雜誌を見てる傍へいつてね、兄さんね、〇先生が居て面白いから、貴兄私のラバーのやうな風をして、御覧なさいなつていつ

たの！』つて又笑ひだす。

『まあ罪な人、そして先生が見つけて何とか仰しやつたの』ときくと、精さん、

『僕も面白いから、淑ちやんの顏へ、頬がふれる位にして、雜誌の口繪を見せて！、いかにもスウヰートな態度をして居たら！、來た』

『來たのよ姉さん、そして恐い目の、無理に笑顏をしてね、『杉本さんどちらへ！）つて！、私、



始めて氣がついたやうに、びつくりして（あら先生！）つて、どきまぎして頭を下げたの、（おひとり？、このお方がおつれ！）つていふから、（えゝ、同伴に田舍へ參りますの）、といつたら、（どちらの方つていふから『僕がねえ、突然立ちあがつて、ヤ、これは先生ですが、僕は淑の兄です、毎度妹が御厄介になりますつて、いつたら、先生大まごつき。

「（オヤ〳〵まあお兄樣ですか）」って、其樣子ったらほんとに、私失笑したかつたわ。そこへ、車夫が、今水戸行ができますと、其次ぎで御座いますからつて、きたら、（おや水戸は出ますか、どうも失禮！いづれ其内！）つて逃げていつたのよ、もう〳〵、ほんとにけふは面白かつたわ」

私も釣こまれて、笑はずにはゐられなかつた、隨分罪なことをする兄妹だ。

久しぶりだから、いろ〳〵の話が絶えない。

「精さんどう、近頃魔風戀風は！」ときいたら、未來の大政治家、眞赤になつて憤慨する、「けれども、精さんのやうな武骨な人でも、矢張美人は好だといふ、星の美しい晩などには、若い美しい人と、青春の血汐は燃ゆる、手と手と握り合つて、新綠の森でも逍遙しつつ、蜜の樣な甘い囁きがして見たいといふ。このパンカラさんにして、此野心ありだから、女たるもの、少しの油斷もなりやしない、そんな不屆きな男が多いから、女子教育家の心配は絶えやしない、つまり單獨にして旅行すべからずだの、無斷で青年男子と文通すべからず、なんて御規則が發表されたり、けさのやうな騷もうけるのですよ。」

「だからこの夏はね、女學生の參禪が大流行だつて！、今に禪學令孃が澤山出來るよ、姉さんも少しやるといいよ」

「おや〳〵大へん、私などは、此上お尻が重くなつても困るから、まあ柳は綠、花は紅、井戸端の茶碗危ない危ない位の處にしておきませうよ、淑ちやんなどこそ、それこそ精神修養を、第一義として、いかなる遊冶郎も、一指を染むる能はざる、觀音樣のやうな人に、おなりなさいよ」といふと精さん

「それこそ大變！、そしたら十六間四面の大御堂に安置して、僕等の如きも又、文久錢の一つもなげざなるまい」とひやかす。

某子爵家に、家庭教師をしてるS子さんから、來狀の一節に、「當家令夫人令妹共に頗る、プリユーストッキングにて、近面は玉突に熱中せられ云々とある、

「精さん、プリユーストツキングつて何のこと」ときくと、すまあして

「あゝあはれなるかな、當年のハイカラ、田舍住の世話女房となつて、退歩することの甚しきや……エヘン、まあづ、プリユーとは即ち青……」

「えゝそんなこときくのおやないわ、ホワイトは白で、レッドは赤、クローは烏、スターとエンドさうして、すみれと、スウキートホーム、ハツピー位、知つてゝよ」ぽん／＼言つてやる、

「や、これはえらい、宛然これ雜誌の見おぼえ、きゝかぢり……」アハ、、、、オホ、、、、ホ、、、、

「大層賑やかだねえ、垣の外に人だちがしてるよ」と、いつの間にか、良人の洋服姿

あゝけふは、さつぱりした、もう私、ヒステリーなんかありやしない、忘れたやうに頭が輕くなつて、不思議に耳もつまらないから、こんな詰らないことを、かくのはやめて、旦那様とお客樣方とに、辛くないライスカレーでも、こしらへてあげませう。

◎九　日　雨

病室冷雨蕭々京都歸去の客あるを以て破曉より騷々しき氣味なれど、病室は却つて靜寂、枕上人なく吾は眠り覺めて眠るごとく、ある中、靜かにふすま開く音して歸去の客は近く坐し、吾が右手を握する、一再きこゑぬほどの震ひを帶びし聲にて、また來ます、又來ますとふた言せり、吾は眼を閉ぢしまゝうなづきぬ、やがてばた／＼と足音するに、彼は他に逃けたり、身體を拭ふ時再び來りて以前よりは少し元氣よくさよならといふ、吾もさよならと答ふ、侍女等去りて歸らんとするを押しとゞめ、それに及ばぬそれよりも病人を何分病人をたのみますと輕くいひ放ちて去るも、あとにのこる無量の情いかばかりつらからんとは知る人のみぞしる、窓には堪へず、雨の音して來るは冬のごとく少し埃臭き羽織何人の肩にも登りて火桶ほしきといふ顔付なり、吾は夢中なれば左程にも惑はざりけり。（病牀日記）

不思議な家庭

すゞしろ

「年十八、昨年某女學校卒業、交際廣きよき家庭に雇はれ度し。」

此漠然たる意味の廣告を〇〇新報の萬案内欄に出した本人は私であつた、出した動機は頗る單純なものでまづ私の境遇をざつと話して見やう。

私は幼い時母に別れたので父は自分の妹（私の一人の叔母なる未亡人）に私の養育を托した、父は相當の地位に居て、一年の殆ど三分一は旅行、出張で暮して居た、偶に歸つても家に居る事は稀であつた。

叔母は父に似て淡白な氣性の至つて無口な人で私の學校卒業後半年餘りして突然腦病で死ぬ迄私には勿論召使達にも口喧ましく叱つた事等聞いた事がない程であつた、私は斯云ふ家庭の中で此年になる迄世間の様子等は學校の窓から見た許り、實に單純な思想を以て生立つた。

それが叔母の死後少し單純でなくなつた、何と云ふ譯も無く自分の生活が無意味單調なものに思はれて時にはもう一時もこんな變化の無い生活に堪へられないどうかして自分の家庭の外に出て見たい、其處には私の曾て知らぬ様々な面白い事の轉がつてる廣い世間が私を待つてるに違ひないと云ふ様な取り止めも無い妄想が押へても／＼湧いて來て無性にイラ／＼して堪らなくなる事が有た。さう云ふ時にはフイと家を出て當も無く歩き廻つたり、行先も定めず電車に飛乘て得る處も無く歸つて來る様な事をした。

處が或日所在なさに平生よくも見ない新聞を片つ端から讀んでると萬案内といふのに女の職業を探す爲の廣告が澤山列んでるのが目に入た、私は父の思わく、事の成行等いふ考へは一切無しに其場で書いて出したのが此廣告だ、父は此時關西地方へ出張の留守中で家には叔母の死後代りに來てもらう様な親戚もチヨツト無いので年來使てる老婆と少女と下男の三人の召使に私が女主人の格と云ふ極めて小家族であつた。

其二

廣告が出た日と翌日とに申込の書狀が八通も來た、中に之はと思ふのが三通あつた、即ち左の通りだ。

一つは三田の某會社長の私宅で家庭敎師に聘し度いから早朝に面會に來るやうにと云ふの二は日本橋邊の某大家令孃附として相當衣類の用意ある方ならば、一應下名の所まで御來車を乞ふと之れは其大家といふのゝ番頭の名で來て居る、三は本鄕小澤生といふ差出名で貴孃に尤も適當と信ずる任務を紹介するから明後日晝過日比谷公園内是々の場所にて草色の表紙の洋書を讀んで居る斯々の風體の廿四歳位の男子あらば即ち貴孃を待つ小生と知つて聲を掛けて頂き度いと鄭重な文句で書いたもの此三ッであつた、他は餘り場所の邊鄙なのや書體の横柄なので氣に入らなかつた。

其三

三日目の早朝私は老婆には友人の家を訪問すると云て家を出た、先づ三田の方を尋ねたら直知れた、取次に出たのは廿歳位の品の好い淋しい顔の女の人で來意を通じるとチョット私の顔を見て、

「では何卒こちらへ」と直ぐ案内した、客間らしい室へ通ると間もなく肥つた洋服を着た髭だらけの五十年配の男が出て來た。

「ヤ、よくこそ」と云ひ乍ら私の顔を穴の明く程眺めて居たが急ににや〳〵と笑つた、私はブッキラ棒に、

「家庭敎師つて何方に何を敎へればいゝですか」つて聞くと、

「エ、夫れは其……實はまア俺の倅ぢや……十七で中學へ行とる、結局それの復習といふやうなまア……その……」

私はじれつ度いのと皆聞く必要もないと思たので、

「私にや中學へ行てる方の復習なんぞ出來やしませんから御斷り申ます」つて立ちかけると、

「あ、ま、チョット待つて……エライ氣の早い人ぢや皆まで聞かんで立つちう事が……ま、まだ他に頼む事もあるけ」つて可笑しい位周章てゝ、斯る大家の主人にあるまじき態度で、

「俺も何ぢや、重に上流社會の人と交際しとるで終局……さういふ人達との應對や又追ては交際等も貴女に頼まにやならん、まア倅の勉强なぞ出來にやせんでも好い、何せ俺の云ふ通りにして出來る丈盡力して遣はつたら貴女も交際社會へ出られるちうもんぢやし、俺も又そい丈の面倒は見て上げるぢやよ、如何ぢや貴女は好い着物や指輪や時計を欲しいた思はんかなッ」と又にや／＼と笑ふ、私はイヤ／＼しい氣がしたから

「そんなものは欲しかありません、欲しきや父樣に買つて貰ひます」つて素氣なく云つて遣ると流石に主人びつくりした顏付で「ヤ、エライ權幕ぢや、とはうもない女ぢやアハヽ、併し其内が花かも知れんて、まア何せ俺の方では貴女が氣に入たけい明日からでも來てもらうとしよか、な、よろしか、他から申込が有ても皆貴女を欺さうとするのぢや、斷然斷りなさい、家へ來たら貴女の出世の緒ぢや、な、俺は貴女の身の爲を思つて云ふたげるのですぞ」つて大きな時計を出して、「ヤ、もう出勤時刻ぢやで失敬する、貴女はゆつくり遊んどつて下さい」つて又にや／＼して出て行たと思へば車の音がガラ／＼と聞えた。

私も續いて立たうとすると誰だか入つて來た、倅だつて云つたのは此人の事だらう、丸顏の活潑らしい書生つぽだ。

「まだいゝでせう、も少し遊んでつて下さいな、僕は實際寂しくて仕樣が無いんです、エ學校？ 昨日から暑中休暇でさ、君何日から來るの？ 分らないつて？ 何故？ 僕と一しよに茅ケ崎の別莊へ行かうぢやないですか？ 僕一人ぢや詰ンないから君が來ると丁度いいや、君幾歲？ 十八だつて、ぢや僕と一つ違ひだ、ね、僕十七ですよ、だから君は姉さんだ、さうでせう、オイ誰か僕の部屋掃除したかい？ ア、左樣か、ぢや僕の部屋へゐらつせい、此間オルガン買つたんです、僕彈いて見ませうか、何か唱ひ給へね」

まあ、この人は馬鹿かも知れんと自分はおもつたが跡から付いて行くと四疊半の日當りのいゝ處にオルガンが据ゑてある此處は此人の居間らしい。

息子は弓を操り乍ら「マルセイユを彈かうまだ旨かないや」

成程旨かない處か滅茶苦茶つて云つていゝ位だ、自分もこゝで度胸を据ゑて、

「隨分下手ね、唱へやしないわ、止した方がよくつてよ」

と云ふと柔順に、

「おや止しませう、もつと稽古してからね」

つて止す、

「坊ちやま大變お元氣です事ね」

つて先刻の女の人が入つて來た、お茶やお菓子を私に勸めて、

「あの貴女は愈々こちらへお出で下さいますのですか」つて聞くから、

「エ、他にいゝ所がなけりや來ます」つて云ふと、

「ホヽヽそして貴女は今迄お宅に許りゐらつしやいましたの？」

「エ、家なんぞ働々じちやいましたの、だから……」

「まあ本當に貴女はまだ何も御存じない……イエ、あのそれで隨分方々から申込がおあんなさいましたでせう」

「エ、之から行く積りです」

「あゝ左樣でございますか、併しね、貴女、世間の人は隨分口でいゝ事を云て欺さう〱としてるんですから……」

つて云さして迂散臭い目付をして默つ了つた、私はこの家の人は同じ樣な事を云てると思つた、そして此人は何でもハッきりした口の利けない人なんだと氣の毒な氣がした。

「ま、色々伺つて失禮でございました」つて出て行た後私は、

「坊ちやん、あれは誰？」つて聞くと

「女中」つて云ふ、

「貴郎のおつ母樣はゐらつしやらないの？」

「家にや居ないけれど何處かにゐるんでせう、だから貴女に來てもらうんぢやないですか」つて笑つてる私

は不得要領な氣がしたが、
「ヘエ、さうなの、だつて私は何も出來はしなくつてよ、貴郎と遊んだり何かする許りよ」
「それでいゝぢやありませんか」
私は何だかこの馬鹿坊ちやんが好で仕樣がなくなつ了つて少しの間にスッカリ仲好になつた、そして氣味の悪いにや〳〵の顔等忘れ了つて、他の申込がこゝよりズットいゝ口でさへなければこゝの家へ來る事に定めやうと坊ちやんにもさう云つて別れた、先刻の女中は私の家の番地など委しく聞いた上未だ何か云度さうな顔をして居た。

其四

三田から直ぐ日本橋の方へ廻つた、番頭つて人の家を訪ねるとお内儀さんらしい女が出て來て、
「はあ貴女だつか、着替持つて來なはつたか」
「イヽエ」つて云ふと、
「左樣か、まあどないかしやはるやろ」
つて云ふ間も私の頭から足の先迄ジロ〳〵見てる、
「お前な本家さんへこの方連れてつたげ、新聞の人や云ふてな」
傍に居た十二三の女の子に命令する。
本家さんてのは此家から半町足らず行た處の大きな門構の家である、女の子は私を中の口へ待たせて勝手の方へ廻つて行た、暫くすると女中らしいのが出て來て、
「お前さん此方へ」つて案内する、薄暗い廊下を通つて庭に面した座敷の次の間へ坐る、女中は座敷の方へ座蒲團だの煙草盆だの置き乍ら、
「お前さんお嬢樣附だつてね學校は高等科迄行つてたの」
なんぞつて五月蠅く聞く、面倒だからいゝ加減の生返事して障子のガラス越に庭を見てるとやがて私の傍にベッタリ坐つて、
「あのね今日はね、旦那樣がお加減が悪くてね御隱居樣がお遇ひになるんだつて、今お髪上げ最中だから少し待つといゝわ、お前樣御奉公は初めてなんだろ、ね

私なんぞにや直ぐ知れらアね、中々奉公てものはね、他から見た程いゝ者ぢやないのよ、お前様なんぞ物好らしいね、でもお前様はいゝやね、お孃樣のお氣にさへ入りやア隨分嫁入仕度位譯は無からうつてもんさ、以前にゐたお島さんてのなざ……」

此人の話は若松樣のやうだ、何處まで擴がるか分りやしないと思つて、

「一體何してる家なの？　こゝは」

つて話の腰を折つて遣ると中々委む處ぢやない、

「相場師でさアね、成金の小澤つて云や名高いもんだね、だから大ざつぱな暮しはしてるけれど皆品格てものがありやしない、豐子樣つてのなざお前さんよりや……」

つて少し小さい聲で、

「全く逆さま位のもんだよ、お前樣はお世辭ぢやないが中々奉公人た見られやしない、エ？　家族は何人だつて？　ホヽヽ　お巡査樣見た樣だねえ、お上はね旦那に御隱居、之はなくなつた御新造樣のおつ母樣で上方もんさ、それに若旦那つてのがよく出來た方でね、大抵お店の方にゐらつしやる、次が一夫樣て仕樣のない野良息子でね、本郷の御親類から學校へ、それも行てるんだか何だか分りやアしない、それから喜一樣て中學へ通てるの、一番仕舞が例の豐子樣さ、之が十四にもなるんだけれど何しろ一人娘つてので無暗と甘やかしちやつたんだろ、分らない事に懸けちやア五つ六つの赤ちやんだあね、其癖意地の惡いのとお化粧丈けは驚く位、おまけに學校を休んでも芝居は代り目を缺さないでやれ菊五郎がどうの……あらお前さん人が云てるのに何處見てるの？　あゝあの寫眞？　あれが一夫樣て色男さ、男自慢丈けに何處か梅幸に……」

私は學校時代の算術の先生を思出した、あの先生に此の女中丈けの辯舌を上げたらあんなに講義の度にダラダラ汗を流して説明に苦しむ事もなかつたらうに殘念に思つた。

縁側の障子が開いて十六七の女が、

「お由どん又油賣つてるね、お福さんに言付けてよ」


なかい食事

つて怒鳴る、
「生意氣云てら、今此人に奉公の心得を聞せてるんだわね、お玉つて小意地の惡いお小間がこゝにや居ますから御注意をつて……」
「馬鹿、ぶつよ」
「何だい、お前みた樣な……アヲゐらした〳〵」つて大きい方はコツ〳〵出て行く、
丸髷に結た、いやに顔の光つたお婆さんが、
「エライ賑やかやなア」つて云乍ら出て來た、座に就いて煙草を吸乍ら私を見て居る、小間使が後から團扇で煽ぐ。
「あんた十八やてほんまか」
　ほんまかつて言葉は始めて聞いたが、多分疑ひの言葉だと思ふ、人をさんざ待たせて斷りもしずいきなり失敬な事をいふ人だと思つて、
「明治二十五年十月二十一日生れ」つて大きな聲で云つて遣るとお婆さん變におもつたか目をパチクリさせて、
「ハア左樣か、家族は？」
「父と私と召使三人です」人の方の事計り聞いて自分の方を說明しないつて法はないと思つたから
「令孃附つて何をするんですか、私に出來る事か出來ない事か聞いた上でなくつちやお返事出來ません」
　お婆さんはいろ〳〵以て妙ちきりんな顔をしたが、それでも相應に受答をした、
「大きに左樣や、實はな、私の孫やがな、お母樣が無いのや。そいで乳母を置て今迄世話をさせてあつたのやけどな、何でやしらん急に此頃あんな舊弊もんはいやだと云ひ出して聞かんさかい、仕樣事なし暇を出して代りを探してたのやがな、今度はちつと學問のある若い人にしやうと思てた處へ貴女の廣告を見てな早速來てもろたんや。それに豊子はんは出歩きが多いよつて供に行く人もまあお召や風通の一枚位有る人やないとどむならん。貴女はそれも承知で來てやつたんやよつて其心配はないやろ。まあ、二日位目見えして、成丈豊子はんの氣に入るやうに勤めて貰ひまよかいな」

氣に入るやうにするつてのはおべつかの事に違ひ無い。

「私はおべつか云た事は無いんですから到底勤まりやしないでせう。それに泊る積りで來やしなかつたんです」

「貴女は中々さつぱりしたお人や、却て其方が豐子はんの氣に入るかも分らへん」

ちつとも氣に入て欲しかない。斷つて歸らうと思てると緣側からパタ〳〵驅け込んで來た女の子、唐人髷に結て半玉みた樣な風姿してる、之れが豐子樣てのだらう。

「お孃ちやん私可笑しくて仕樣がないのよ、あのね又靜やが泣いちやつてお暇を貰ふつて。馬鹿ねえ」

「又何ぞ惡戲したんやろ、好い加減にしなはれな」

「だつてね私口惜しかつたんだもの先刻ね三越がね靜やのだつて絽縮緬の羽織を持つて來たんですもの。だつて靜やは妾でせう、妾は召使でせう私は主人ね主人が持つてもしないもの妾が買ふつて生意氣だわねだから三越に持つてお歸りつて云つたらね靜やがね夫れは父樣がお云付なすつたんだから返す譯にや行きませんつて云ふのよ、そしたらね三越迄がねお孃樣は子供だからこんな物着たら可笑しうござんすなんぞつて笑ふんだもの、私口惜しくて〳〵いきなり羽織をねお庭へ投り出して、

「妾なんぞ何だい〳〵つて云つた丈けだのに泣いちやつたの、ね靜やが惡いんでせう、だからお暇を遣つちやうといゝわよ」

私は妾つてものはいけない者だつて聞いてゐたのにこゝぢや何だか妾の方が却て氣の毒で娘が惡い樣に思はれる、世間つて隨分分らないもんだ、それにしてもこの娘は餘程如何かしてるんだらう。馬鹿かも知れない。ア、きつと左樣だ。

女中が「豐子樣、藤間のお師匠樣がゐらつしやいました」つて云て來る。

「いやだい〳〵踊なんぞ暑いからお休みだい師匠なんぞ歸しとくれよう」

「そんな事云ふと師匠が怒つてやないか、今日丈けしときなはれな」

「やだい、師匠なんぞ怒るもんかい、お錢が澤山違つてゐるんだもの、誰だつて先生だつて役者だつて何だつて怒つたらお錢が貰へなくて損よ、アラ彼處に居るのだアれ？　ハイカラね、小間使に來たの？　エお孃ちやん、そちやないつて？　ぢやア何？　あゝ分つたさうねお孃ちやん、爺やの代りね」私は耳から顔へ火が燃えるやうな氣がした、こんな事云はれたのは始めてだ。

「私しやお前みた樣な成金なんぞの娘ぢやないんだよ歴とした武士の娘でしかも江戸つ子だよ、お前のやうな半玉の出來損ひみた樣なお茶つ挽ぢやなくつてよ」

　自分乍ら不思議な程スラ〳〵と云つたと思つた。その儘わき目も振らず玄關まで出て下駄をはくと、おしやべりの女中が出て來て、

「まあお前さんよくあれ丈の啖呵が切れたねえ、私や久し振で胸の痞が下つたやうだよ、後で二人の顔がお前さんに見せたかつたわ、お茶つ挽の半玉の出來損ひだつてネ、、よかつたねえ」

　半分は後に聞いて私は汚らはしい門を飛ぶやうに出た。

　時計を出して見るともう二時だ。おゝさうだつけ、小澤つて人が公園で待てる時刻だつた。何だかもう何處へも行き度くなくなつたけれど待つて居ては氣の毒だ、又どんないゝ考のある人か知れやしない。通りへ出て電車に乘る。公園へ來て見ると隨分ベンチに掛けてる人が有る、草色の表紙〳〵と思ひ乍ら豫定の場所へ近づく。おゝあれだ〳〵草色の本だからあの人に違ひ無い、おや此方を向ひた、あら何處かで見た樣だ、何て色の白い……ア眼鏡を外した、何だ見た筈さ、今小澤つて家で寫眞で見て來た人なんだもの、あらあれも小澤、この人もだわ、なら彼家の息子なんだわ、何でも下女がそんな事云てたつけ、何の事だ、おや私を見てる、草色の本を振廻した、あの娘の兄さんなら物も云たかないけれど待たせた上知らない顔し了ふのは

卑怯だ、遁はう。

私はズカ〳〵傍へ行つて、向うが何も云出さない内に「貴郎が日本橋の小澤つて相場師の息子なんでせう、貴郎の妹さんは私大嫌ひです、馬鹿だらうと思て默てりや人を妾なんぞつて云ひました、貴郎も口で旨い事云つて私を欺す積りなんでせう、私はもう何でも知つてるんですから之から欺されやしませんよ」私は三田で聞た事をこゝで云了つた。向うが呆氣に取られた顏で口をもぐ〳〵させてるのを構はず「左樣ならつて大急ぎで公園を出た。

其五

家へ歸つたら机の上に私宛の端書や手紙が澤山來て居た、二通の他は皆新らしい申込だ。私はよくも見ずすた〳〵に破いちやつた。

二通の一つは父の出張先から急用が出來て四五日内に歸京する事に成たといふの一つは無名の女の手のでこんな事が書いて在た。

貴女の單純な無邪氣な心で此偽り計りの世間へ出る事は尤も危險です。現に貴女の信用して居る三田の○○家さへ非常に恐ろしい秘密を包んで甘い言葉で貴女を欺かうとして居る、欺かれたが限り再び貴女は元の純潔に立返る道はありますまい、他より數有る申込も皆斷つた方が安全です、貴女は私の言葉を容れて再び單調でもあらうが併し平和な溫かい家庭を離れんとはし玉ふな、欺かれたる弱き女より

右のやうな文意の手紙で有つた。

間も無く父は旅行先で煩つたと云つて大分衰弱して家に歸つた。私は有つた儘の話を聞かせると父は、「世間は皆そんな物なんだ、併しまあそれでよかつた父樣も之から田舍へ引込む事に成たよ」つて面白さうに笑つた。私は今田舍行の仕度に忙しい。(完)

夏艸のなかにちぎれる姫瓜は
いかなる人の落しただねかも

芝居見物

くれなゐ

卒業した時新井先生が『百合さんこれから面白いね何が面白いといつて人がいろ〳〵の芝居をするのを見て居るほど愉快なものはないよ、まあこれから十年の間友達の舞臺顔を觀察してごらん舞臺が廣いだけに想像以外の興味があるよ』と仰つた。其時はなにを仰るのかと氣にも留めないでゐたが三年五年とたつ内には成程意外の活劇が見られる。佳人薄命才子は多病、最得意の人が落魄したり、あんな人と侮つて居た人が立身したり……ほんに十年もたつたらどんにひつくりかへるか知れないわ。考へて見ると女は實に世の中の大なる勢力である、其姿をはじめて世に顯はした刹那から、もう一個のオーソリチーであつたのだ。新聞の三面記事は大抵女の事ばかりだ、犯罪であれ滑稽であれみんな女の造た種だ、アダム、イヴ以來何處へ行ても女は罪なものと見える。併し何といつても一生の苦樂他人によると銘うたれた女だもの、いろ〳〵かはる一生の其からくりの原はといふと即ち男子——そこで都合よくよいのをつかまへた者は幸福だがかすをつかむとそれこそもう金槌の川はまり未來永々頭の上る時がない或はよいも惡るいも取らないで關せず焉とすまして居ると、オールドミスとはやされて折角堅めた信念もいろ〳〵の誘惑迫害にうちこはされて遂に思ひもよらぬ結果となる女といふ者は實につまらないものだもとより見地はせまいが私の見た處では羨ましい樣なのは一人もない。なんていゝ氣になつて喋つてゐると私も誰かのオペラグラスに寫されて——おゝいやだはげちよろけの紫袴で思案なげ首花道を出るところなんか見られたら——だけれど私はお見かけの樣に悲觀してやしないから舞臺のかゝりで浮世ぢやなあーと歎息もしない今に千秋樂の曉には大に振つた處をお目にかける積り——調子はづれの結婚して虚榮に心をなやましたり嫉妬に胸をこがしたりつまらぬ苦勞をするより

は浮世はなれた奥山住居自ら汗して働いてさ牛は牛づれ趣味の合ふ夫を持て理想のホームを作りますわ――といつたら、あなたも隨分變つたものね、タイムもタイムだが田舍つてはそんなに人をかへるものかと笑はれるだらう、併し悟て見ればそんなものです。自分の事は人が云て下さるからまあ棚へ上げて置いて一つ二つ憎まれ口をきいて見やう。

◎欲で一生をだいなしにしたからくり女

昔因幡の國に何の入道とかやいふ者の娘容貌よしと聞きて人あまた云ひ渡りけれども此娘たゞ栗をのみ食ひて更に米を食はざりければ、かゝる異樣のもの人に見ゆべきにあらずとて親許さゞりけりと兼好法師はものせしが、今の世には栗どころでない男を食ひ身代を食ひ田畑を飲む女さへある。また眉目よきを幸ひに娘に他人の身代吸ひとらせて己れ左團扇で暮さうといふ親心さても物騒の世の中ではないか。

松子さんのお親父さんは極卑賤しい身分から、だんだんの成上りで今ではお役所でも何主任とやらいふ立派なお役人、辛抱を資本に食べるものを食べないで、貯たお金でアイスクリームとやらのお內職、これで苦勞をせられた丈けに金の臭氣が五體にしみ込み、お金でなければ夜が明けず、出來るものなら改宗もしたい程のありがたや。此上は何でも娘を餌に一まうけと、松子さんの卒業を待ちうけて新町に名も高い丸持の酒屋へ嫁らせた。五十あまりの姑を後見に三十足らずの一人息子、それも片足不自由な上に、すこし甘いとの評判者。頭からお話にならぬ筈のを、例の金に目のないお親父さん、聟さまよりも身代に打込んで、大切の愛娘をおやりなさつた。瓜のつるには茄子はならぬ松子さんも、お器量といひ學問といひ、何不足のないお身なのに、うちもあらうにあんな家へ――矢張りお金へ嫁入りねと、友達中での噂であつた、

先きはなか〳〵手堅い家、下女や下男も多く使て、商業も盛にやつて居つた。姑もはじめの內こそ一にも松子二にも松子と下へも置かぬもてなしであつたが二月三月とたつ中に、だん〳〵本性あらはして、店に臺

所に頑張つて少しの自由もさせぬばかりか、二人の下女にも暇を出し、すゝぎ洗濯はり仕事と三人前の仕事をあてがひ嫁御寮やら下婢やらわけのわからぬこき使ひに、元來弱手の松子さん、どうしてそれに堪へられ樣大金持のタインとなつてと……あてのはづれた其上に、甘い筈の夫は己れより學問のある氣のきいた奥樣もつて喜ぶ筈が、却て氣がもめ生得の悋氣の火の手強く、松子さんが世間なみに身嗜みするを見ては誰れに見せよとて味をやるとか店に出ると何用あつて外へ出た客と話をした目付がをかしかつたのと朝から夕迄傍につききりで商賣を外にしての悋氣沙汰、嘗にしくつもりの夫が此の樣なので阿呆らしいやら情ないやら親子二人に責めたてられて、此れでは迚も身が續かぬとお里へ逃げて歸られる、折角寶の山へ入りながら手を空うして歸ては……虎穴に入らずんば虎兒を得ずだとお親父さんは勝手な理窟で逐ひ返へされる、行くも歸るも苦しみばかり、自業自得と云ひながら可愛さうに松子さんは、とう〳〵ヒステリーになつてしまつたので、虹蜂とらず蚊ものになつて歸て來た。いくら高等女學校の才媛でもかうなつては三文の價値もない近所隣のよい笑ひ草となつてゐるとやら。金といふものなかなかの智者をもくらます魔力を持て居る皆樣御用心御用心。

○よせばよいのに一時の欲に身をあやまりし雀教師

宮子さんは師範を卒業して早や十年色香はうせて姥櫻浮世の風にちり初めるお年だが海山千年ではないが兒に角ながい經驗を積んだのとどこやらまねの出來ない腕があつてお仲間中の大達物それ委員やれ幹事とあちらこちらで引張り凧お獨身とて勞を惜しまぬ働きぶり天晴模範と朋輩中での賞めものであつた。噂を聞いて方々から縁談も數あつたが帶に短したすきに長しあれでもないこれでもないとなか〳〵談がきまらない。如何に理想にかなはぬとて大抵ほどのあつたものどこ迄高くとまるのか小野の小町の終りを見よと陰口をさへきく人もあつた。ところが此頃俄かに風向き變りさ

る田紳で弟の樣な子のある所へどうやら談がきまつた樣子あまりの藪棒式なのに皆目をみはつたがさては強い樣でも流石は女、地位も名望もあれほどあつて、お金も隨分出來てる樣、何不足ない境遇でも、老ひ行く先きを思はれての思案か、御最もだとうなづいた。其後僅か二三ヶ月で岩田帶の聲聞こえて、人々意外と驚く間に、はや不縁となつて赤兒抱いて歸られた。聞けば○○學屬とやらのお種でそれがための嫁入りであつたのがあまりお土產が目になつて、すつかり狂言が破れたのださうな、流石に恥ぢて其子は里にやり、己れはまた二度の勤めに出ては居られるが、金箔はげた今日此頃始めの勢どこへやら、孔雀に化けた阿呆鳥もかくやとばかり――近々他縣へ轉任とか思案の外とは云ひながらさても／＼お笑止な。

◎美貌で家をとりつぶした伊達奧樣

流石世界の一等國と迄進歩した日本に生れた身は女なりとて今は昔のまゝでない、見合の寫眞見せられて顔を赤めて逃げ出したは昔のこと今は寫眞どころか本人同志の直談判親さへ知らぬ間に約束でき眉目が果報の基とて、おのれ望ましと見れば他人のものでも横どりして手柄顔する世の中優勝劣敗の自然かは知らず實に呆れ果てる次第である

才色双美の才媛とほまれ高かつた秀子さん、何でもお父さんは郡長さんお家はいゝし愛子ではあり何でも彼でも云はるゝ儘にせられるので、お持ものから髪飾り衣裳萬端目にたつて始終群をぬいて居た。まだ學生の時分からかういふ風であつたので習ひは性となり自然虚榮心をあふり立てお鼻の高いこと／＼おそばへもなか／＼よりつけなかつた。卒業の後は何でもみんなに魁して最後の勝利を――とひそかのお望であつたとやら。丁度其時新たに歸朝した○○ドクトルがあつた歴とした許婚のあるのを承知で運動してとう／＼其れを横取したのを罪造りのはじめとしてお人好の舅姑をお隠居とよい名のもとに逐ひ出してしまひ新婚旅行もの見遊山日々の食物衣裳の好みと夫の甘いをよい事にしてお氣がねなしの贅澤三昧家のためより我のためと

堕落の淵に沈むと知らずます〳〵つのる華奢風流にいくら働きのあるドクトルでも限りある收入で限りない虚榮を滿たす事は出來ない迄には例の紳士氣質無理算段をして迄も妻の歡心を買ふ樣になつた。夫の苦心を知てか知らずか秀子さんは得意滿面たゞ〳〵己が幸福を友人間に誇示して居られた。月にむら雲花に風榮華の夢も僅に三年此度起つた會社の破綻に胃した罪のあらはれてあたら赤



門の秀才も浮世の制裁免れる道なく見る目哀れな縲絏の憂目——家宅搜索の其時に奧樣の贅澤に目を驚かした其かはり金庫の在金勿驚十七錢五厘とは——驕る平氏は久しからず原の起りは我身からと、悔ねばならぬ秀子さん、それと見るなり無理暇とつて、今は都に返へり咲き、花を飾つて交際場裡に腕をふるはるゝとやら。男の甘さ加減の思はれてお氣の毒やら淺ましいやら。兎角名高い

女や美しい女を妻にすると時として斯ういふ破目に陷るもの。

○不器量で身をはたく智とり娘

關々たる雎鳩は君子の德を助くとか、昔から夫を助け我子を輔佐してよく其德をなした人も少なくない今の世には內にこれを助けるばかりでなく選擧運動に迄手出しして隨分器量をふるはれる奧樣もある男はかゝる女を見てハイカラと笑て遠け偶まよい知惠出しても女の淺知惠と頭からけなしてかゝるそして「兎角女は調子がはづれ易い名高い女を妻にすると危險だそれよりもむしろ無邪氣なのがよい」などゝ云ふ其くせ世には女のおかげで出世する人も少なくない。

靜子さんはクラスの中でも指折りの才媛でまことに柔和なお生れつきしかも剛毅なところがあつてほんとに理想の婦人であつたがたゞお容色の上がらぬばかりが玉にきず。

おうちは昔の與力とやらでお祖父も在世の頃は飛ぶ鳥落とす御全盛であつたとか其餘德とて財產も相應にある樣子四五年前お父樣卒中でなくなられた後はお母樣とのお二人暮らし、早く養子をして安心したいと母樣無性にお急ぎなさる靜子さんは二十世紀に養子などとは以ての外すこし考へでもある人ならなんで養子などに來るものかつまらん夫を持つて一生苦勞をするのなら母子二人の水入らずにといふて居られたが母樣や親類が心配してのすゝめもあり近所姑のやかましいおせつかいに無き名をさへ歌はれる口惜しさにとり〳〵我身を捨てものにして親類中から小學校の敎員をむかへられた。

身を捨てたとはいふものゝ元來勝氣の靜子さんどうして其れで甘んぜられ樣自分が敎員となつて學資をつくり夫をすゝめて法律學校へ入學させた隨分いろ〳〵反對もあり母樣なども後の百より今の五十を望まれたがそれもとう〳〵打破りて先を樂しみにと五年の長い年月をたゆみなく働かれた甲斐あつて今ではチヤキチヤキの辨護士どの直に靜さんに學校やめさせて理想の奧樣大明神とたてまつり朝な夕なに拜まんばかり……

滿つれば缺くる世のならひ僅か一年たつやたゝぬにはや相様の妻を忘れてそろ〳〵浮氣がはじまつたとやら變り易いは人心どうぞ風波なしに治まればよいが。

◎我子より金が命の　紫式部

おなじ學びの庭に培はれた撫子でも花さま〴〵の色のあるもの。菊枝さんのあの思ひきつた世にそむいたなされかたいくら自分の主義かは知らずあんまりで常識がない樣に見える寄宿に居らつした時分から姿や形は一向無頓着で一風變た方ではあつたが此頃のあの御樣子……めくら縞の樣な手織木綿にひだも分らぬお袴召して後のへつた下駄ひきずつて猫背を屈めて——此地なればこそ目ひき袖ひき位ですんだもの東京や大阪ならきつとパックの好材料。あれで市中の目拔の學校の先生だとは……けれど御當人一向平氣お歸途には肴屋へよつて雜魚一合に鰯五匹を大きな顔してお買なさる甚だしいのは葱を其儘ぐつと握て揚々と引揚げられる生徒の手前もあつたもの傍で見て居ても汗が出る亂暴さはお宅へ入ると又一膀五つと三つの二人のお子持ことに母樣毎日のお留守とて其きたないこと〳〵襖、障子とは名ばかりたゞ骨ばかり殘されてまるで暴風の後の樣床の間に軸物一つあるでなしたま〳〵お花があるのを見ると枯かゝつた葉牡丹が掛花生に三ケ月の御滯留これでは家庭の美はしさが少しもないお賀さまよくあれでお辛抱の出來たものといへばそれどころか奥樣お洗濯の此方には旦那樣がまどの下くすべられる事度々だとか……其れも其筈似た者夫婦のお二人共に大のしまりやで金さへ出來れば義理もへちまもお構ひなしよるとさはると算盤珠の上げ下ろしに餘念がないなんの家の裝飾や家庭の團欒など眼中にあるものかまして人のそしりをやだ、其かはりこゝ數年の間に隨分澤山お金が出來たとやら。馬鹿らしいお金の番人ぢやあるまいしもはや半生も過ぎてからそんなにして迄お金を拵へてどうするつもり。え。子供のため。子供にお金を殘すのは却て毒ですわ。又いくらお金がうなる程あつても肝心の子供がコンマ以下だつたら仕方がない。だからそれよりも頭腦のよい子供にして置く方が

いくらよいか知れない。しかもお金といつても學校教師の喰ひだめ位が何になる毎日三度食べずに居ても高がしれたもの人には笑はれ不自由をして入らぬ苦勞にやせるよりはじつと家に居て母親のつとめを全ふせられるが子供のためまた家のためだ。今の世は頭腦さへよければ捨てゝ置いてもものになる唯幼時の教育一つだと思ふ。

第一自分の子を捨て育にして置て他人の子の教育でもあるまいしかし菊枝さんばかりでないこんな先生が世の中に少なくはあるまいだから女教師論などゝいろいろの攻擊をうける樣になるのだ。おや〳〵〳〵いつの間にやら議論になつてしまつたあまり暑いのでどうかして居る休みませう。

かうして人の芝居を見ながら其原因結果を研究して見ると半ばは家庭の善惡に起因する樣に思ふ。幼時に植ゑられた種はどこやらに根ざし堅うてひいても〳〵絕えないものだ。いくら高等の教育を施しても矢張り三つ子の魂百迄で唯幾分か矯正し得る丈けで迚も根本的に陶冶し得るものではない。して見ると家庭の主權者たる女の責任は尤も重いものである。

今の世果して爰に注意して我が子のために一身を捧げつゝある賢母が幾人あらう。名ばかり立派な如何はしい家庭教師などに愛兒を托して置いて毎日〳〵名譽や虛榮に使役さるゝ奧樣も多いとか。嗚呼社會の指導者たるべき中流社會がこんな有樣では次の時代が思ひやられる。世界にかゞやく日の本も遂に女のために破壞される樣になりはすまいかと實に寒心に堪へぬのである。





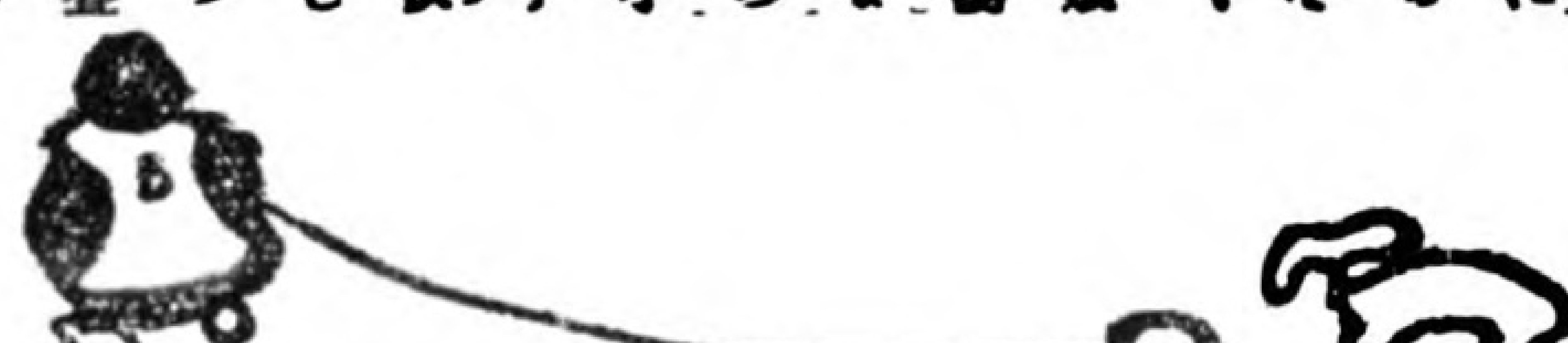
◉女房の頓智

亭主の不在中女房一人留守してありしがある夜強盗押し入り例の文句で迫るにぞ女房は平氣な顔にて、吾家には虎烈刺病患者ありて昨日死去したれば家財諸道具衣類まで明日はどうせ燒き捨つるものなり、お入用の品は何なりと御遠慮なく御持歸りなさい、其の箪笥の引出しには風呂敷もあります、お空腹ければ御膳もさし上ませうかと澄し切つた挨拶に、流石の強盗も膽を潰し匆々逃げ去りしとぞ。

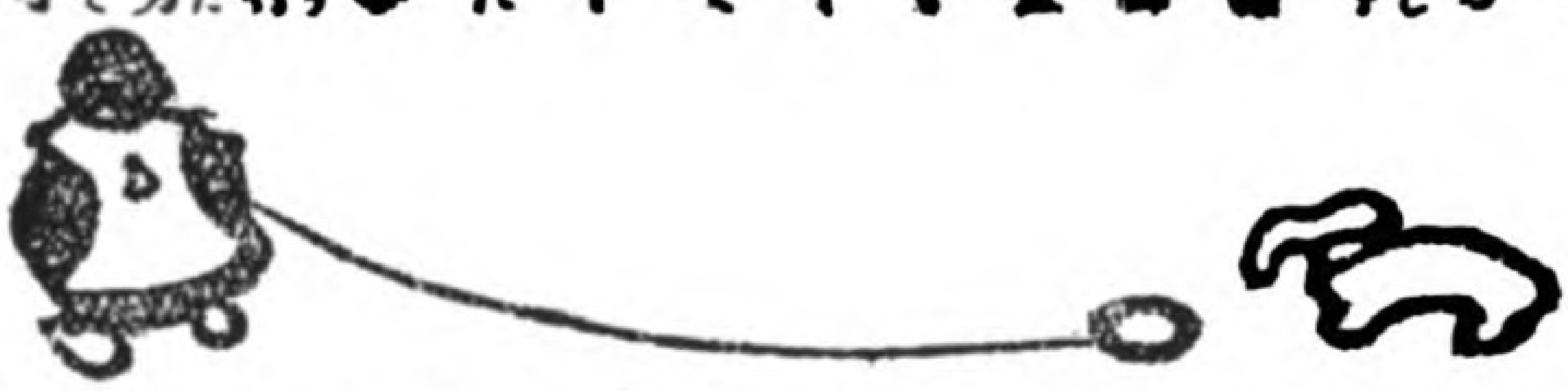
下婢日記

藤花

今日も後には暑くなりさうだ、往來歩いてゐる人は朝露に包まれて、はつきりと見えない、門の周圍り打水して中學と女學校にお通ひになるお三方の靴を磨く、皆樣お目覺めにならない中成る丈用をすませようと思ふと中々忙しい、お化粧室でお孃樣お髮を解してゐらつしやる、お鏡臺の前へお癖直しのお湯を置いて、別座敷の掃除はじめると「松、松や—」と例の癇高のお聲でお孃樣がお呼びになる、急いで廊下づたへに往くと「お癖直しのお湯が熱いから水を持つてきて」と仰有る奥樣はお手水を汲で置くようにと、若樣はお茶の間で早く飯だ〳〵、とおせき立になる朝の忙しさ體が二つも三つも欲しくなる、旦那樣の御存命時分には小間使とか中働だのと其外にも奉公人が多かつたので自然人ばかりあてにしていらしたのだから、今急に私一人になつたからとて矢張以前と同じやうなお積りで被居るのだから。自然轉手古舞をしてゐる、奥樣は別座敷で新聞を見て被居る皆樣お休みになつたお部屋に往くと、蚊帳は釣たまま夜具はまるまつて枕丈は疊の上に投り出されてある、手早く片附けて奥樣とお孃樣の御飯のお給仕をする、若樣は學校の時間がお早いのでいつも先にお出ましになる、つゞいてお孃樣のお召替學校へいらつしやるのにあれだせこれだせと、お召替してお姿見の前で後見たり前見たり、側で見て居るのが可笑しくなる、恰ど「マガレツト」と「マルタボ」の走馬燈が幾回となく出來る奥樣がお呼びになるのでお茶の間で御用伺つてゐる間に、お氣に召さなかつたのか又箪笥の中かきまはしてお召替して被居た、切角折目正しく重ねてある外の着物まで擴げ出して周圍りは手のつけようもなく散亂かつてゐる、學校にお通ひになるにお召が大切か勉强が大切かわかりやしない。いつもお支度に暇取るのであわてゝ靴穿いていらつしやる。今日も理科の本がない歴史の本がないといつもお定まりのようだ、お机の上だと仰有るけれど小說と雜誌で學校の本など見えやしない、書棚の上からやつとさがし出して持つて往くと「何、愚圖〳〵してゐるのだ」とお目玉、下駄踏みちらかしてお出ましになつた、つゞいて奥樣のお召替、お孃樣と同じくあれだせこれだせと帶など幾本も出して着物と合せて見たり眺めていらつしやるので中々召さない、多分配合を見ていらつしやるのだらう、決斷力が乏しい樣に見える、けれど澤山の御衣裳のある方々は皆此樣なのだらう數の知れる着物とは譯が違ふから今日は○○會の幹事を遊すので十時頃車でお出ましになつた、やれ〳〵と一息ついて臺所の板の間に坐つてお膳を出したけれど起きてから時間が立過ぎたのでもう食べたくない朝からお客樣お入來の時など朝飯と午飯とよく一所になる皆樣御出ましの後は



急にひつそり嵐の後の樣、縱横に散亂かつてゐるお召を片附けて洗濯に取かゝる、お孃樣のお歸りどつさとお机の上にお荷物置いてお袴とお召はいつも別室にぬいである後は構はないと云ふように風通しのよい二階でお二人のお孃樣が「昨日の8樣と妙子樣ほら……」と後は聞えなかつたがきやつ〳〵笑つていらしやる格子が開いたので濡手拭き〳〵お取次に出ると白の二本筋の帽子手に持つて山田ですと仰つたきりもぢ〳〵して被居る、又お孃樣に御面會かと思つたけれど順序だから若樣は只今御不在で御座いますがと申上て居ると、俄にトン〳〵〳〵と階段の三段位上から飛び下りて大きな音させてお孃樣が出でゐらした御挨拶もそこ〳〵「マア」お兄樣よく〳〵　丁度よい處でと大そう馴れ〳〵しいお口調、西洋人の樣に手など握り合つて二階へ案內していらした、狐につまゝれたように私はぼんやり後を見送つてお下駄揃へて置く、此頃ではお兄樣〳〵が急に澤山お出來になつたから、御親類の方かと思つてお孃樣に伺つたら「お前の知つた事ぢやない」よといつもお叱りになる、なるほどこれが近頃流行のお兄樣かと云ふ事がやう〳〵わかつた、萬事奥樣はお子樣方におやさし過ぎるからもう小言は言はれないものと覺悟して勝手な眞似をしていらしやる、昔から父親の亡い娘は嫁にもらはないといふ位、母親ばかりだと我儘になり易いから、本とうにお子樣方が可愛いと思召せばもう外になんか御出懸にならないで御監



督遊ばせばいゝのに、奥樣は大抵お外出勝、今日は何の會、明日は何と流行物ばかり召してはれの場所に出てお召の品評ばかりしていらしやる、山田樣は麥酒召し上つてからお歸りになつた、今朝、奥樣が出がけに晩食は一品丈炒鳥を拵へるやうにと仰有つた、鳥政が持つて來るのを待兼れて拵へはじめる、松やもう出來たかいとお孃樣が仰有る、が、早いか摘でお口までもつていらつしやる、と、あつ〳〵と板の間にころがしてやつとお袖でうけて召し上つた、お躾樣してくださるならお小皿で遊ばせばいゝけれど、此樣な處人にでも見られたらと、却つて自分のはうが氣まりわるく脇の下から冷汗が出る、臺所でよく其樣な藝當なさるから、此間も萩の餅お口に入れた處へ突然に裏口から苦學生だと云ふのが來て、石鹸はよろしいか、洗粉を買つてくださいと出たのでお孃樣逃げ場を失つてお猿さんのやうに頬をふくらましてお聲も出す立つていらしたその時の恰好てありやしない、可笑しくて……活動寫眞にでも取つたら大抵の人は吹き出さずには居られまい、小川樣の奥樣久しぶりでお出になつたお年も內の奥樣よりお若いのにいつもお召は質素に遊ばしていらつしやるから奥床しく見える小川の奥樣が、松はいつもよく働いて居りますのねえと仰有ると、內の奥樣が彼女は愚圖で仕樣がないのですよ、最早娘等が銘々で用を致しますし料理等も手傳つて居りますから女中も一人で間に合ふのですよと仰有つた、眞實にさうならどんにいゝだらう、口ほど重寶なものはない料理のお手傳ひは、摘食遊ばすのが關の山、

ラブスープ

清子

氣の合つたお友達でも學校を出てからもう二年、お互に御無沙汰の競爭になつて居たのが、何ういふ機勢か熱田の神苑で落合つたは同勢四人尾頭町の岡部さんの處へ流込みました。

其日は丁度地久節で、忘れられない可笑しみを私の頭に深く印象しましたから、今此處に其大體を綴つて見ました。

話が始めつから滑稽になりましたのは、尾頭町を尾頭町といひなすつた方がありまして、ぢやア何か尾頭の付いた物で一緒にお晝食をといふ事になりますと、其處へお出入りと見えまして魚屋が威勢よく、

「今日はア。」

「待つてました。」と言ひ乍ら立つて行ツた岡部さんが、盤臺を覗いて、

「ラブよ。」

「エツ、」「何?」と口々に聞き訂すと、

「ラブよ。」とすまし込んで居なさる。

「尾と頭とありますか。」

魚屋が怪訝な顔をして、



「此通り生きてまさあ。」と言ひ乍らポンと板の間へ投げ出すと、ラブなる魚はバタンと一つ刎れて軈て靜まる。

「置いておき、」と岡部の令孃一言の許に魚屋を歸して終ふ。

「お宅の分は、」と私が其際眞面目になつて注意しますと、のたまはく、

「留守。」

「魚屋の手前を遠慮して居た方たちも皆其處へ飛んで出て、

「鯉れ、」

「だから戀よ。」

「成程。」と仰しやつたのは此地での貴婦人、或る高等官の奥樣で名は高島その子。

「何にしませう。」「さあ、」といつた樣な次第で、刺身、てり燒、煮付鯉こく、と御料理の仕方は幾つも出ましたが、さあ何誰がおやりになるだらうとお顔を拜見した處が、お白粉に、紅に、香水に粧つた柳眉、明眸、朱脣こそ具へたれ、誰れとて其任を全うしさうな仁もない。

「氣のきかない魚屋ね。」

「屹度てれたんですよ。」などゝ言つて見たものゝ果しがないから、

「私が庖刀を持ちますよ。」と名乘り出でたる勇婦は斯く申すわたし

「感心々々。」称賛を博したもの〻遽に周章て出して、
「お米は何處にあつたつけ。お味噌は、」
といつた仕末。
私は鯉を提げて皆と一緒にお臺所へ出る。
「ラプスープ、ラプスープ、」と高島さんは一人で妙な手つきをして踊り廻る。
「何れ兄さんのお仕込よ。」とすまして居なすつたのが、擂鉢擂古木を差付けられて、ヘタと當惑。皆して、
「貴婦人のお味噌擂り。」と手を打つて笑ふ。
妹御の春ちやんが水を汲む役に當つて、中村さんがお米磨ぎ、岡部さんが柄杓に三杯と私の言ふ通り、お釜へ水を入れて釜前を勤める。
「擂古木に蒔繪奢つた望み。」とは近松の名句、今日のは丁度夫れで、お白粉の手、ゴールド、ダイヤに飾られた擂古木が廻るは廻るは。
「擂鉢が棒の先へ附着いて廻ります。」と揶揄ふと、
「厭れ、」と言つたが猶廻る。どろ〱の汁がだぶんとお召に刎れる。
「妙々、そら刎上つた、おつと轉んだ、」
と爼を庖刀で叩いて拍子をとると、井戸側から覗きに來て、
「姉さん私が、」と感心に代つたのが矢張り感心に廻ります。



釜前も堪へ切れずに笑ひ出したが爼の鯉に目を着けて、
「串談ぢやありません。鯉が腐るよ。」
「大丈夫此の通り。」と腹へ庖刀を當てるとペチヤツと刎れた迄はよかつたが、押へた力が足らなかつたか、廣い流中を刎れ廻る。惡くすると庭へ飛び出しさう。
東西々々生捕ります。済子さんが鯉を生捕るよ。井戸側の――」と貴婦人が手を打つて復讐をする。
中村さんが濡手で米淅桶を提げて戻つて見えた頃には、鯉に刎れ廻られた様な顔もせず、爼の上に横にさした腕前、天晴自慢。
「何うだ恐入つたか。」と男の様に言つて、直ぐに今度は力一杯に押へて腹を割く。
釜前が先刻から默つて居なさるので、何故かと見ると、白烟濛々たる中を泣きはらした様な目をしてプー〱〱。
中村さんがお釜の蓋をとつて、
「まあ。」と仰山な聲をなさる。
「一寸も燃えないんだもの。」と泣き出しさう。
「學者のおさんどんはだから困るわ。」
「まあ何處で火を焚くの。」
「午砲は過ぎてよ。」と釜前に集まる。
「私お腹が減いて、」

「何を言ふのです。」と姉なる貴婦人が、口で怒つて窘めて目で笑ふ。

「西洋竈といふ者はね、」と中村さんが言ひ掛けると、釜前が本當に泣き出した。

「まあ岡部さん。」と皆轉がる樣に笑つたが、プイと奥へ行つて鎖はれたので、皆ぽかんとして、

「まあ大變。」

「今謝られちや大變よ」

「早く片付けて謝罪りませう。」

釜前は中村さんが代る、で御飯も黑くならずに出來る、ラアスープの鍋こくもまづは無難。貴婦人御姉妹でお膳立てをなさる。流しにあつたお香の物を切つてさあ好。

御主人公は多分お書齋にといふので、其處へ運ぶと果して在室。

もう御機嫌はすつかりお直りで、

「皆樣お骨折でした。御馳走になります。」と一番先きにお箸をお取り一緒になつて食ふは〳〵〳〵腹中に一杯つまつたので、皆が帶や紐が固くなつた樣子、解いたり緩めたりして居る 所へ、ドヤ〳〵と家人が歸つて見える樣子。

「さあどうしやう、こゝを見られちや大變此儘にして逃げませう。三十六計逃ぐるに若くなし」と主人公が御發議なすつて、



一同贊成。

「逃走、逃走。」と口々に笑ひを忍んでいふ、直ぐ結ぶ(解いた帶を占める。(ゆるめた紐) を可成淑やかに、靜かに、而かも其實大騷ぎ大まごつきをして、恰も敵の夜襲を喰つた如く誰れにも氣付かれず裏から皆逃出してしまつた、其時の姿イヤ、滑稽、とも何とも形容に辭なし。

「高座の森の前から大津の方へ出る「電車で逃げよう。」と貴婦人が仰しやる。

「すましてれ」と中村さんが云ふ

「笑つた方には體罰を加へます。」と貴婦人が附加へた。

「體罰つて、」

「後で皆して擽るの。」

「面白い、」「宜しい、」と言ふので 皆 笑つて居る處へ電車が來た。

まあ笑つてはいけないといふので却つて可笑しく私は俯向いて、凝と唇に痕のつく程辛抱して居た。

皆樣は感心に、ツンとすました者で、何うして那麼なに眞面目になれた者かと思ふと、又可笑しさが喉元までこみあげる先刻擂鉢を廻した方、焚付入れる火を燃した方、ラアスープつて踊つた方がと思ふと、一層可笑しさが込上げて來る

其處へ車掌が來ました。

「車行く先きは、」と貴婦人が私を見てすました顔。「萬松寺、」と言ふ心組であつたのが萬松の〆と言ふ機勢に、今迄堪へに堪へて居ました可笑しさが、一度にどつと來てつい吹き出してしまつた

貴婦人は憎い程すました物で、「萬松寺。五人と。」車掌に切符を渡す。中村さんも岡部さんも外を向ひて終ふ。私の笑うたのは意味のないと他人からは見られた様で、頬が赤くなつた

下車ると東陽館まで。愈々お轉婆の本領發揮。

△賢こい遺言

むかし一農夫あり、今まさに死なんとする時、三人の子を病床に招いて曰ふ「我汝等に遺す物數畝の田と一區の葡萄園とあるのみ、汝等これを耕し且つこれを培養し他人の有となさしむることなかれ、吾今これを我老父に聞きし事あり、我田と園との中孰れかに祖先の寶物を秘藏せる事ありと、吾これを掘り求むる事數回なりしも遂に得ざりき、汝等吾がこゝろを繼ぎ、春秋の餘暇にはこれを求むる事を怠るなかれと、」遂に死しけるが、三人の子この事を聞いて暇のある時には採掘に從事しけるに、一の財寶をも見得ざりければ大に失望したりけれども其耕耘の功によりて收穫年々に增加せしとぞ、賢こき遺言といふべし

△飯粒の利用

某侯の使者或家へ使ひに行けるが、折柄晝飯を出されけるに、使者誤つて頬に飯粒をつけて食しければ給仕の者退いてこれを人々に語り、障子のすきまより覗き見て笑をしのび居れば、此使者ふとこゝろ付きたれど、今更捨るも聞が惡るければ、其儘食ひ了つて給仕に料紙を乞ひ受け、何かさら／＼と書き認め、頬の飯粒をとりてこれをつけ、從僕に渡したれば、窺ひ見し者皆な心の中に、あゝ負惜みの強い人ぢやと感心しける

不思議な日本語

贊六

▲大阪の女學生

「チョット中村さん、貴女今日の赤新聞見たか？」

「まだ見えへんね、何ぞ出てるの？」

「何ぞて貴女、例の三年の伊東さんの事ちや、一昨日の晩御靈さんの夜店でな醫學校の生徒とな手を引いて歩いてる處へ向うから伊東さんのお花の森川先生な、あの先生がやつて來たんやと、そしたら伊東さんがあはてゝな、ホレ平野町の花安の隣りのうどんやへな逃込んだやと、アハ……」

「誰がそんな事投書しよつたんやろ、しやうもない」

「此間もな築港で夕方高商の學生の卷煙草吸ひ乍ら歩いてるの富田さんが見たんやと」

「私昨日濱寺へ行たらな向井先生がな奥樣と散歩してはつたせ、」

「向井先生いふたら又此度新入の何やらいふ江戸つ子の御機嫌ばつかり取つてるやないか、」

「ソレ、あの東京の英和學校たらへ行つてたいふハイカラかいな、なつてへんな丸で、」

「エライ攻撃、何ぞ恨みがあるの？　アハ……」

「あ噂してたら來た〳〵、一つ冷かしてやろか、」

「贊成々々、チョット〳〵望月さん」

「ハ、何ですの？」

「貴女東京にゐなさつたんですとな、何ぞ話して聞かせて頂戴な、私等皆田舍者ですよつて、」

「オホ……私こそですわ、」

「貴女何で大阪みたいな所へ來てゝしたの？」

「父がこちらへ轉任に成ましたのですよ」

「矢つ張り東京の方がよろしいでつしやろ、」

「さうやねどうしても生れ故郷ですものね、」

「東京の女學生は皆エライおしやれやさうですな、」

「アハ……」と皆一齊に笑ふ、

江戸つ子の望月さんは中々勝氣らしく却て落着いて

「左樣ですね、おしやれと云へばおしやれ、でも見馴

れた目には矢張ね。學習院の方なんぞ皆樣にお目に掛け度うござんすこと。」

全く東京を見た目には大阪の女學生は善く云へば質素、悪く云へば何だかぢゝむさくも見えるのだ、東京の女學生が三吋四吋の幅廣の萌え立つ樣な色のリボンを蝶と結んで華手なマガレットだの丸髷束髪に大方は薄化粧を施してるのに引替へて大阪のはリボンも學校に依ては禁せられ左なくとも目だゝぬ位のに髷もつましく、彼は多く着物も紫矢絣銘仙などの袖も長うカシミヤや琥珀の袴の裾さばきさや〳〵と美しく贅澤なのに比べて之は細かい紡績絣位に袴も大方は毛繻のやうな黒ッぽい海老茶か古代紫に限つた樣だ、白粉など塗つて來やうものなら目の敵のやうに陰口されるといふ程だ。

口も随分悪いが江戸ッ子辯を聞いた耳には間の抜けたやうに響く、

「あゝまめだ先生が來た〳〵、先生〳〵、チヨツトテニスしましよか、厭でつか、今日は負けたゝまつせ、先生よ卑怯やわ。」

「まあ先生のネクタイのハイカラや事、それ此間の高島屋の賣出しの時買ふてゝしたんやろ、私見てましたせ。」

「先生の髭カイゼル式でつか？」

「ナマヅ式と違ひますか？」

威嚴の餘り無ささうな先生は常にかう云ふ生徒の惡戯けの的と成つてゐるが多い。

多分私の觀察は藪睨みであらう、廣い大阪の女學生の中にはもつと〳〵優美高尚なのが澤山あらうと信じてゐる、併し確かに或一部はこの通りなんだから仕様がない。

△大阪の町の娘

町の娘はんなるものは大阪の特色を發揮してゐる優美な併し少々あまつたれた種族である。

是等は女學生からは非常に排斥されてゐるらしい、琴の師匠とお針の師匠の許に通ふのは彼等の重な日課であらう。

「お越しやす、昨晩はお樂み、」

「お、厭やの、光さん嘘だつせ、」

「ウダ〳〵お云ひやすないな、成駒屋はんから電話がかゝつてまつせ、」

「ア辨天座だつか、此度のはほんまにヱ、さうにおまへんな、」

「うちのお母アちやんも一遍行きたい〳〵云ふてはりまんねけどな、店が忙がしゆてなア、」

「そこらお千代さん、あんさんうまいもんやわ、」

「何でゝんね、貴女等私所の商賣が商賣やよつてさう思てゝんねやろ、そらうちの藝者はお客さんに連られてよう行きまつさかいな、私等はさう行けしめへん、」

「そない行きたけら藝妓はんにお成りやすお光さん、」

「まあ、無茶いふてやわ、そらさうとお千代さん所の若奴たら云ふお妓の花見衣裳の十合に出てましたなア、」

「さう〳〵ヱ、帶なア、」

「お國さんこんど貴女の番でつせ、幹枝はんのお次だつしやろ、」

「あんさん、もう大阪市おあがりやしたの？」

「イ、ヱ、まだでんね、お國さん千鳥弾いてゝだすな、」

「あ、今二階から降りて來てやつた妓な、京屋の娘はんだつせ、」

「京屋で芝雀はんだしたな、えゝお娘やこと、粋な衣服着せて、」

「さう〳〵私云ふの忘れてた、瑯の小松屋の貞子はんな、心齋橋の何たら云ふ紙問屋へ嫁きやはりましたで、」

「ヱ、あの方が、そない別嬪やないのにな、」

「オホ……その代りヱライ仕度でな、七荷たら九荷たら云ふ事だした、」

「また四季の曲が濟んでやおまへなんだが、」

「堀江の三河屋から參じました、嬢様もうお稽古濟みやはりましたかいな？」

「あ、與吉が迎ひに來た、左様なら皆さんお先い、」

東京なら銀杏返し大阪の新蝶々といふのを油コッテリと結ひ上げて赤い鹿の子の切れを掛けた頭を大事さうに低い格子戸をくゞり乍ら板締のちりめんに黒繻子の晝夜帯を高々と結んだ腰のあたり撫で廻して口喧ましい大阪の嬢樣は丁稚を後ろに出て行く、跡には又其評判が一頻盛に持上つて、二階ではお師匠樣の濁聲が睡さうに聞える。



溫泉場の滑稽

玉露女

夕凉みにと瀧之下の橋へ行くと丁度みどりさん夫婦が「新派の劇」を相手にお話して居る。

「新派の劇」とはみどりさんがつけた名で女學生上りの細君つれた當世風の所謂紳士の新婚旅行の事で、

「丁度藤澤と木下が來たやうだわ至極お甘い處ね」

みどりさんの註釋宿舍ではみどりさん御夫婦と此一組がとなり合で。私が其向ふだからたまつたもんぢやない可愛想に……。

男同士玉突の話をして居るひまに其細君とみどりさんと何か云つて居る處へ。私が行く。すると

「蝶ちやんいゝ處へ來たのね一寸あなた證明して頂戴今ね奥さんが私達はね新婚旅行だのに何故そんなに括潑に出來るのだらうと感心して下るのよ、だから私ねこれでも大變恥かしくつてたまらないんですと云つたらそれでも……つて笑つてらしやるのよね。蝶さん私だつて秋月(みどりの良人)に遠慮して居ますわネェ」。

そこで私は「さうですとも其證明はあのお湯に一緒に入り得ないんで知れてますわ。やわ肌を脊の君に見せられる奥さんよりみどりさんの方が弱蟲ですねエ」。といつもお湯でお二方は一緒の處を拜見する御返報として少々皮肉つて申上ると細君眞赤な顔して打むいてしまふ。が。當世の奥様はなか〳〵えらい。

「私も別に恥かしがつて居りはしませんのに秋月様の奥様が矢たらにあなた達のやうにして居らつしやるうちはどんなに樂しからうつておつしやるのですもの……」

「蝶さん山へ行きませんか秋川さん達もいらつしやいな、と新派の劇君本名松山さんがおつしやるとその細君さんは、

「ハイ」

と小さい聲でお返事して如何で御座いますと私共へ

おつしやる。みどりさんは眼で聞くと勤さんがうなづくので。私も立つ。凉風は五人の袖にあまつて心地よいそろ〳〵日暮しも鳴き出した。
「テニス遊ばせな。あなたお上手でせう―
山の上にはテニスコートが出来てる。
とみどりさんはまた細君にからかう。
「私もう今ではとても出来ませんの」
と後ろへ下つて露臺の上にしとやかにかける。成程新派にある形だ。松山さんも並んで。
「ま少し休みませう」
と仰るのを。
「あら。あなたは奥さまのお真似遊ばさなくてもいゝでせう奥様の代りに蝶さん入いつて四人でしませうよねエ？」
とまた勤様の方へ眼で聞く。みどりさんの眼はどうしてこんなに美しいんだらう二重まぶたと黒い瞳がどんな表情も自由にする。
「お轉婆だねエ。奥様と云ふものはそんな袴はいてた時分のやうなことと許り云つてるもんぢやないよ」
と勤様はすまして向ふの景色を見て居ると
「ぢや蝶さんとシングルしても面白かないし。まあ仰に随つておとなしくしませう。」
と腰掛けるかと思へば
「ア蝶さん蝶々が來てよさ。つかまへませうよ、アらさう蝶々はあなたゝわネエ、一寸松山さん。向ふの山の下を草刈娘が歸つて行くのがお見えになつてまるで油畫の樣ね。」
とみどりさんは歌み聞なしに口をきいてゐる。
「何所ですか向ふ？。ずつと向ふ？。見えませんな君見えますか？秋月君」と松山さんがいふ
「イヽエ秋月は近眼ですから駄目よあの人は私の顔だつて道で逢へば分らないんですものかうしてついて歩くので自分の女房だと思つて居るのよく奥様を間違へませんねエ」
「何云ふのだ奥様に失禮だよ」と勤さんがいふ
「またしかられた蝶さんには見えるわネエ奥さんも見

えるでせう？ホラ〳〵もうあの先きの細い流れの傍までいつてよ御らん遊ばせ。」
と指ざすので細君も一生懸命に見る。松山さんもしきりとさがしてる。其ひまに私の方むいて例の眼で笑ふ勤さんもクス〳〵笑つてる。
「詩人の空想もかうなると罪が深いわ馬鹿々々しい何にもありはしませんよ」
と私が敎へて上げると二人は苦い顏してもどつていらつしやる。
「花を取つて來ますわ」
とみどりさんに誘はれて行くと男同士はまたお話で夢中、其ひまに細君は後ろの杉の大木のかげで何か打むいてして居る。
すると。みどりさんが私の横の草かげで呼ぶのでそこへ行くと其細君のして居る事がよく見える。此方の體が草にかくれて居るので何にもしらぬ細君は浴後のお化粧のみだれを氣にして御園なでしこと鏡と首引き
「骨の折れるものねエ」
と私が云ふと
「あれで子供の二人も出來れば髮もろく〳〵とかさないでくすぶつてしまふのよ此間も洗濯をした襦袢の袖がてすりにかけてあつたけれどまるでメリンスの洗ひ方も知らないのよ其むら雲だけのきたない事つたら…女學生上りの細君は駄目ねエ顏ばかりお白くしたつてちつとも甲斐性がないんですもの。」
女郎花や萩をよい程に折つて露臺の方へもどる、
「あなたのお部屋へもおさし遊ばせ」つてみどりさんは細君に分けてあげると
「恐れ入りましたと何しらぬお互の顏を私もすまして見て居る」
「蚊が出るといけないからそろ〳〵歸りませうよ」と氣を利かすとみどりさんもうなづいて、勤樣をすゝめて三人して先きに下りる。
夕暗はのかなる山上に靜かに殘る二人の劇は詩的であらう……。
部屋へ歸ると五番の鈴木（京吉）さんが歸つて來て居

る。御主人は真裸體でお女中にあふがして居るその奥様は豚のゝやうな體を帯をといたまゝで横になつてる一人の女中が其帯をたゝんでる。番頭はもみ手をしながら。

「ヘヱ左様でヘヱ嘸御勞れ様でヘヱ」

と笑つて御あいさつして居ると宿の女中はビールの栓が拔けなくて困つてる。二間通して二十疊の一等座敷も一ぱいに散らかしてある。

「お歸り」

と一寸頭さげると、

「ヤ今歸りました風呂へ入いつた處で」

と一寸自分の姿の言ひわけしたが、

「どうも熱うごしたよどうも」

この人は夏中熱い／＼が口ぐせになつてるのを聞流して部屋へ入いつて花を瓶にさす。ビールを呑み。御飯もすむ頃には、さしも散ばつたものも四人の番頭女中が片付てしまつたので蓄音器がはじまる。

丁度山から下りて來た新派の劇夫婦を亦誘つて、みどりさん達も一緒に招かれて聞きに行く、外の部屋の人も少しばかり來たのでなか／＼にぎやかです。

見ると鈴木さん（豪商）はまだ。衣服着ないで肌ぬぎなので、私はみどりさんの顔見て、みどりさんの膽は傍若無人ねヱと語つて居る、成金と見えて品性も何も極ひくいがお金の力は衆をおさへて。かげでは皆惡口を云ふけれど前では鈴木さん／＼と御馳走になつてる宿でもそれは大事にして其鈴木さんの御懷中に敬意を表して居る。

たゞどうもされないのが私とみどりさん夫婦で、松山さん達もあまり交際はして居ないらしい。これは新婚の樂しさが他のつきあひの必要を見ないからであらうがみどりさんは其絶世の美人であるのとたれにでもかまはず無邪氣をふるまふとで我儘を通して居る。一番嫌はれて居るのは私で鈴木（豪商）さんは四人だのに私がたつた一人で一番風通しのいゝ十疊を占領して宿の者も鈴木されに劣らぬ敬意を表するのが鈴木さんの癪にさわつて居るのであらう。

「あなたなんか瘠せて御出だから涼しいでせうどうも肥つて居ると熱くてね、十度位違ひますな。あとからあとからと汗が流れる。あなたは一向熱さうでない。瘠せてるといゝですな」。とは鈴木さんの言草瘠せてると云ふのが貧乏染みて聞えるので私にばかりかう云ふのかしら。中には病氣療養に來て骨と皮ばかりになつてる人もあるのにと少々腹が立つたので。

「然し熱いのは一つは御氣の持やうでございます。靜かにゆるやかに致して居ればそんなに汗も流れません殿方がお汗をおかき遊ばすのもあまり見よい物でも御座いませんから……。」

すはや鈴木さんの顔が變つたが流石に何とも云はねのを。

「痛快だわ蝶さん、鈴木さんも氷の一言で汗が引いたでせうか、、、、。」

とみどりさんは艶やかに笑つた。

翌る日

朝から蒸熱い、昨日鈴木さんに云つた言葉もあり。どうかどんなに熱くつても汗が流れませんやうに……一體私はどう云ふものか一向汗が外へ發しない、それを利用してあんな事を云つた。

十一番の室へは別館から坊ちやんつれた方が引越して入らしつた、子供ずきのみどりさんや、退屈して居る私が精出してお守りをするので、前々から顏は合せて居るし、忽ちお母さんとも親しくなつた。

「何故割合に涼い別館からこちらへいらしつたの？」

と聞いたら聲をひそめて。

「實はねこれが先日中少々不快でね、夜分泣きますのですよ、するとあなた部屋ではお隣へおやかましいので、あのそれ三十番へまゐる廊下ね。あれへその抱いて參りましたの、三十番ではどうも女と男の聲がすると思ひましたが、こちらは子供をだまして眠かさうの一心でございませう？それを氣にとめて居る處ぢやございません、さうするとまたあくる日も泣きますのでついまたあちらへ出てあちこち歩きましたら、丁度ね

エあなた三十番の野田さん……（お二人連れで三十一番と肩に部屋を取つて御出の大學生）今年卒業する方ですわ……あの方が夜分は眼鏡がきかないからかおすみさん（女中）に手を引かれて便所へまゐるぢやありませんか、一本道の逃げ場はなし私どう致さうかと思ひましてね。まあ其翌晩からはそちらへまゐつて坊の泣聲でもしてはわるし部屋で泣いては皆様に御迷惑だし、どんなに困りましたでせう、此頃辛くなほりましたが、何だか三十番へ氣まりが惡くて、別館には居られませんの、卒業論文とか書くためにわざ〱此地へいらつしやつたさうですに飛んだ女にねエ、あれで學士になれば立派な處のお孃様をおもらひなさつて口をふいてお出になるでせう。お家は大したお金持ちだと申しますにたかゞ温泉宿の女中なんぞほんのお慰みものになるのでせう。男はきたないものでございます事ね……。其はさうと奥様の御評判は大變で四十二番の早稻田の學生なんか御噂で持切つて居りますの野田さん達も先日しきりと御美しい方だの何だの申してお出でしたが噂されても汚らはしいやうなチエあなた。」

みどりさんはたゞ微笑して勳様を見た。

あとでその方が居なくなつたら勳さんは

「ねエみーさん今の若いものは下らないねエ新橋の夏の風凉しく醉顔を撫づる時、電燈おほひの紅おぼろに忍び駒の音絶えてコントラスト織の伊達卷姿……と來なくちや男子の本領は面白くないやねエ」

「まつたくだわスウヰートホームより粹とホームにしたいのねエ」

「突然坊ちやんが泣き出した急いでいつて見ると頭かかえて。

「母様坊のあたま。われやしない？」

落ちて頭がわれてしまいますよそんな所へ乘ると落ちますよとつひ今しがたしから〔れ〕た段の上へ乘つて落たのであつたよほど痛かつたと見える。

下の座敷では日本橋の商店のお婆さん三人連れで今日もおひるからお酒盛りで大變なさわぎ丁度上つた來

た女中に「さわぎねヱ」と聞いたら。

「今裸で夕ぐれをそどつたんですよ、さうしたら丸屋さんの御隱居の背中へ熊ん蜂が止まつてあのさわぎなんでございますよ」と云ふ。

丸屋の御隱居は中でも元氣のいゝ人だ先日お湯でみどりさんに色々の事を聞いてしきりとおきれいだ〳〵つて賞めてたつけ

「お若い御夫婦でこんなさつぱりした方は珍らしい」つてひどくみどりさん二人が氣に入つた樣子なので私が此二人は兄妹が夫婦になつたんですから……と云つたら

「成ーる程お許婚ですね」あなたは一體どうして旦那樣と御一緒でないのです」

と云ふから私お嫁に行くのと芋蟲をつかむのとが一番きらい……と云つて笑つたら、

「そりやあいけない、そりやお嫁にいつて御らんなさらないから分らないんですよ」、

つてそれから是非お嫁入りしなければ行末が困るとなか〳〵深切に云つてくれたがまるで趣味が違ふので油に水をさしたやうにも感じなかつた。が蜂にさゝれては嘸痛みを感じたらう

如何に溫泉場へ保養に來たとて病を治しに來て居る人もあるにまして向ふの〇屋の洋館に居る西洋人にでもあの姿を見られたら國辱だから、痛いのは氣の毒だが蜂には感謝してよからう以後は裸はよしたがよからう。

坊ちやんが泣き止んだから

「さあおばさんと山へ遊びに行きませうお向ふのね、いゝおばさんも呼んでいらつしやいなおぢさんも……」

と云つたらさうつとのぞきに行つて歸つて來て

「おばさんはゐません、おぢさんはお鼻の下のまいげへおしやぼんつけて何かしてます」

そりや大變だみどりさんが「新學士カイゼルばかり立派なり」、なんてさつき惡口を云つたので取つてしまひなさると見える、と急いで立つて行く出合ひがしらにみどりさんがお湯から出て來て二人でぶつかつたが

急いで勘様の所へ行くと。あはれ、美しき髭のあとはたゞ青く一文字にしまつた口は幼ながほを思ひ出すばかり!!!。みどりさんは袖を顔にあてゝ突伏した。坊ちやんはおどろいて。

「おばさま泣くのぢやないのよあのおばさんもつひよつかつたのだからね。あたまわれやしないのよ、お山へつれてつてあげるつてよびに來た處なのよ」

三人はとう〳〵笑つてしまつた。

（終）

△公卿の頓智

藤原の宗輔は王朝世盛りの頃の殿上人なりき。或る日鳥羽殿に在りし時蜂の巣にはかに下廊の欄に落つ群蜂飛んで御床に近し、宗輔徐かに盤中の枇杷を採り、琴爪を以て其皮を剝ぎ手にこれを捧ぐ、蜂其の香を慕ふてみなこれに染り敢て飛散せず衆人歎服、法皇又大に感じ給へり。

△歌人の洒落

猿丸太夫は深草の里に住む人なり、自然と和歌に妙を得し故宮へ召されけり、其前未だ土器商人なりし時、内裡の近邊を過ぎけるを官女達の聞知りて召入れ歌詠めとありければ足の裏のあかぎれの皺をさすりながら

あかゞりも春は越路に歸れかし冬來てあしの浦に住むとも

斯くおどけたる歌を詠みけるが、後太夫の官に上りしとなん。

△黒い花

木にせよ草にせよ四季折々の花はあれど、或は赤く或は白く、或は紫、或は黄、されど世に黒い花はなきものなりと老人達が物語り居るところへ一個の小僧立出で、曰ふヽシ黒い花は幾許もあります、嘘だとおぼしめさば鍛冶屋へ行つて御覧なさいと一座絶倒。

花嫁の化粧

胡蝶

眞黑に成つてお晝の仕度して居ますと汗だく〳〵從妹がかけ込んで一寸急いで來て下さいと云ふ、「何なの」

「あの姉さんのお化粧が出來ないので時間は來るし困つて居るんですよ、それで春子さんを呼んで來いといはれて呼びに來ましたの」

　私の從妹が田舍に嫁ぐ日なので母と妹と二人で參つて居ます其留守に勝手が分らないで御飯の仕度にマゴマゴして居ますと此使なので弟には、

「お冷で食べて頂だい歸つたら御馳走して上げるから」とジユク〳〵鳴いて居る御飯の火を引いて帶だけ締め直し髮とく間も無く素足に草履を突つかけて飛び出したのです、これから一里もある田舍なのですもの大變です二時の出立ですのにもう十一時過ぎて居ます向ふの家でゴタツイで居る樣子が目に見える樣です呼びに來た千代ちやんは早影も見えません、つゝじ、咲た小山の麓をまがつて大岩と云ふ淀んだ淵の上を通る時の氣味惡さ淋しい道で百姓一人通りません私は家の事が氣になつて火を粗末にしましたので火事でも出れば大變と心の安まる時は有ません臺所の板場の下がブスプス煙つて居る樣な氣がして樂しい嫁入りの仕度のお手傳も胸に浮びませぬ、白い煙でも立ち登つて居はしないかと幾度後ろを振り返つたか知れませんでした、茄の草取る赤いお腰卷の娘さんが美しい聲で木遣節を唄つて居ましたが、私の通るのを見て目きゝ袂引き妙な顏して眺めて居ます、空色の蝙蝠を傾けて走る樣に通つて終いました、日は赫々と初夏の樣に照りつけます、あの小さい天神樣の森をまはると目的の家の白壁が見えますので勇んで走る樣に行きます、甘い菜種の香りは絕えず私の鼻を打つて、「春ですよ」、と何所からか叫ぶ樣な氣が致します、桑畑の手前まで來ますと又、千代さやんが走つて來て、

「姉さん早く、今ね山田の叔母さんが白粉つけたのよ姉さんは顔が痛い〳〵つてるのホヽヽ」

袖付が切れる程引かれて丸く刈り込んだ杉垣の間をくゞりました、中はゴタ〳〵取り込んで上り口に脱いだ下駄の數、紅木綿の鼻緒の黑く成つたのや〇にやの字の燒印押したのや、足の恰好そのまゝに大きな油の跡が黑くついたのや草履も有る俎の樣な高下駄惜い程大きな雪駄もある庖丁の音がカン〳〵響いて煮物のコゲ付く匂ひは一等胸がムカ〳〵致します、

「今日は」と庭の方にうろ〳〵して居る雇人に挨拶して横手の山吹の亂れた中から縁にまはりました、見ますと化粧道具の使ひつぱなしががら〳〵する程置いて足を入れる所も無いんです、

「まあ隨分置いて有りますねえ」

これを挨拶に張りかへられた障子に手を掛けました、[illegible]か[illegible]かの香水がスーツと來て中に立つて居る美しいその嫁ぐ人を私は見上ました、私は一種云ふ事の出來ぬ妙な氣が致しまして「田舍者」と叫びたい樣な氣でした、何故だか私にも分りません、

「あら來てお呉れだつたかへ、間に逢はないので今山田の叔母さんに一寸造つて貰つて挨拶に出る所だアよ」叔母さんの聲でした、

「家はどうして有の」母の聲でした、

「季ちやん一人留守番ですの火が心配で成りませんわ、御飯が出來かけた處でしたのでねえ水がグツ〳〵して居るのに火を引ひて來たんですよ」

「さう氣の毒な」

室内は所せきまで着物や帶や譯の分らぬ布がゴタゴタ並んで女ばかりが顔見合はして居るばかりでした障子を開くとパツと海棠が照る

「まあ丸髷なの？　なぜ島田になさらないの」

「田舍者が文金でも有るまいからと、矢張嫁さんは丸髷が好いよ」

「それもさうですねえ」

横にある粉白の皿を取つてかいで見ますと(たつた)、、、なので「駄目だわ」と思ひ乍ら袂に入れて來た化粧箱

の小さいのを出してツッと鏡臺の上に並べて置きました、これだから顔が痛いと云つたんだな、なぞと考へながら

「さ、三枝さん挨拶してお出なさいよ遲くなるがな」

今までポーツとして枯木立の樣に身動もせず私の手ばかり見て居た從妹の三枝さんは十八にしては大き過ぎる樣な身體を動かして、

「誰もあつち向いて居てをくんさい」

「急ごしらへの大阪言葉を出すと千代ちゃんがプッと吹き出します、シナリ〳〵と歩いて座敷の外に立つた姿を見ますと私は堪らなくて吹き出したのですキメの荒い顔に鉛の多い（たつた白粉）をつけたものですからムラに成ツて鼻の先はギラ〳〵と油が浮いて小鼻の白粉は落ちて了つて居ます、生際もなし首筋も無し紅は唇一面に廣がつて人を食べた鬼の樣です、串柿の難船と申ませうか冬瓜の夕立に逢つたと申ませうか燒山の猫が適當の言葉でせう品よく結つた髮は毛の見えぬ程飾つて花が咲いた樣でゝ短かい首に拔衣紋帶の結び目で着物の紋は隱れて了つて居ますの、それに赤入りの肌着の襟が胸一パイに見せて袂口は手の甲までかゝつて居るんですもの私は走つて行つて

「三枝さん苦しい事？」

「えゝ、えらいのやわ、春子さん帶の結び樣直してや」

變化もなく箱の樣に結んだ帶が氣になると見えます

「えゝ、早く挨拶して來らつしやいよおそくなるわ」

腰繪の襖の蔭に消える、

私は座に歸つて晴れ着の裾を合はして居ますと隣り座敷では近所の娘さん達が御招待に預かつて今お取り込みの最中です、赤い髮を見樣見眞似に束髮に結んで牡丹色のリボンは毛タボの飛び出た前髮の上から覗いて居る首筋の黑い手織の木綿のゴツ〳〵に赤色の襟を重ねて居る樣な人ばかり、大きな黑椀に山盛りにした御飯を嬉しさうに眺めて、無理に結んだ口に松の木の樣な手をあてゝ笑ふ度にヒザが崩れて赤い御腰卷の間から太い足がチラ〳〵顏出すと云ふ體裁ですもの私は下向いて笑を忍んで居ますが、ひつくりかへつた樣な

島田の上に油が溶けずそのまゝ上つて居るのを考へると可笑しくつて襖の間から覗いては美しい厚板の帯に幾度可笑涙を落したか知れませんでした。

「もう挨拶したの」誰より先に私が尋ねました

「え、一寸ですもの」

胸が押されて苦しいのか帯ばかり氣にしで居ますので

「三枝さん、さ一度風呂に入つて髪を潰さぬ樣首筋を洗つて來らつしやいよ直して上げませうそして簪もこんなに澤山挿すものぢやあないわ」帯揚げ取ると

「アー苦かつた事患が出來んのやは」

額からは汗がにじんで居るんです



「さあ早くお湯に入つて來なさいよ時間が無いんだもの迎ひ結納が來て居るんぢやあなくつて？」

湯殿に案内しますと白い美しい湯氣はモヤ〳〵と二人を包む私は上から袖を卷いて白粉落で首筋を洗いますと後から赤く成つて三枝さんは痛い痛いと云ひます

「餘り洗ふからよ白粉さへ落れば好いわ」

上がつて湯衣のまゝ化粧室に入りますと

「早上つたの風引てよ」
と叔母さん。大きな姿見の前に坐つて化粧箱からクリーム出して一面に塗りますとズル／＼して氣味が惡いと申します塗つて終つて羽二重の白絹で拭つて大學白粉を溶手を見て
「白い手や事」って三枝さんは自分の黒い大きな手を引つ込ませます、ペタリと一刷毛首にグイと引きますと面白い程自由に引けます南の窓から若々しい櫻の花が散り込んで「嫁ぐ人」と何やらの雜誌の口繪で見ました寫眞の事を思ひ出して揃つた襟足をポーッと見つめました「もう好ゝの」冷やりとあたる春風に氣付いて三枝さんは聲かけます、「まだよ」顏には成るべく薄く溶いて上品に、小鼻にさした紅が見とれる程可愛らしく見せるのです、
「目に紅さすと好いんですが跡が黒く成るから止めませう」隣の間では人足がお酒呑んで調子はづれの聲で御祝儀を唄つて居ます、顏が終つて襟白粉を濃く捺り込んで
「さ、出來たのよ眉は後で拭いて髪といて上げませう」
木曾から來たと云ふお六櫛の荒齒をあてますとスーと毛が並びます
「上手に結つて有る事ねけれど鬢裏が出てないとなほ好いのに……」前髪は潰してグイと前に出す桐の箱が五つも並んで硝子の中から三寸のビラ／＼が光る
「こんなに澤山さすんですか後ざしは、どれ」
取り上げて見ますと派手な黒の色のゴムで五三の桐が出來て居ます野崎村のお染のさす樣なビラの小さいのを前髪の兩脇にさしますと見ちがへる程美しく見えます、村で一等の財産家のお嫁さんが來られました時のだと云つて金の前ざしビラ／＼に付いた紋は鬼蔦の重い兩ざし、それを使つて呉れと持つて來られたとやらでそれも飾る角かくしの張に一尺ざし程もある笄グイと、
「まあ重い事ないの」
私は覗く樣にして聞いて見ますと
「重いんです此の金のだけ止めてほしいのやけど」無

口な大人しい三枝さんにはこれが最上の苦しい事です如何に辛いだらうと私は可愛さうな樣に思ひました

「一生一度の晴れ姿や三時間や五時間ども辛へて居るものだよ」聞えたのです、湯衣を着て頭ばかり飾つた三枝さんの姿を見ますと、私は嫌な氣がして今日行く家のお聟さんは馬鹿の樣な人だつて私は何故その樣な所に行くのかと不思議な樣にも思ひました

「三枝さん、あなたどんな氣がするの？」

たつた二人限りで緋縮緬に金砂子の裾除して立つて居る三枝さんに尋ねました、白羽二重に赤糸で可愛石竹のぬいとりの半襟掛けた中肌着を紐で締めて居ました三枝さんは長い袖に一パイ風をふくませて

「嫌なんやわけど仕方なしに行くのやし私ほんまに情ないし」

「何故なの」

「向ふの男かつて便りない人やしそして老母が燒き餅やよつて困るわ」

まだ子供の三枝さんの頭にも人世の難事が早分つて居るのです向ふのお聟さんて人も足らない樣な人だつて事を聞いて居ます毎日〳〵肥料の桶ばかり肩にして手ばかり太く音樂と云へば谷川の音とお盆に吹く横笛の音しか聞いた事もなく本と云つたら講談岩見重太郎位が命がけ、田舍人としてはそれで好いかも知れませんが、其の人を夫と呼んで滿足せねばならぬかと思ひますと、たとへ二月でも三月でも大阪の空氣を吸つた三枝さんには行きたく無いにちがひ有ません向ふの麥畑の中で里の子が上手に散歩唱歌を歌つて居ます、草笛がピーピー鳴つて親子連の門付が尺八で巣籠を調べかけて「行つとくれ」と怒鳴れて居ます目出度曲を調べるつもりだのに思想の無い田舍者は困るわねえ滿足する樣に私は挨拶がしたい程氣の毒に思ひました、

「行つて見ればそんなものでも無いよ」横から母が氣の毒さうに云ひます。

濃納戸地に疋田で根松を染めて大きな折鶴を太い金糸と白絹糸で縫つた上着でしたが田舍者としては申分の無い好みでした、大丸の京都支店ださうです、中に

は白を重ねると好いと申しましたが皆の好みが赤と云ふので緋縮緬に白の亂菊を出して香には結び金、葉は色の淺い白緑でした好い模樣で私はこれが上に着せたいと思ひました下には白縮緬にむら竹の墨繪、これだけは二週間程前から掛つて一生懸命に揮毫た私の拙筆なのです節にポーッと緑青をさして側く裾の所に好い枝が出る樣にと紙で裁ち方をして見たり頭の痛む程考へて書いたのでした、三枝さんは首が短かいので心持ち拔襟にして盛れる程上げたからげの上からガツ〳〵と鳴る厚板の帯は誰の好みか生々と見るも恐ろしい雲龍の模樣でしたが私は下品なと思ひました、何故ならば文藝倶樂部や演藝畫報の口繪に見ます赤坂の〇〇とやら云ふ藝妓の帯と同じだからでした、お氣に入る樣に二度も三度も締め直して見ますが十九の女の手には合ひません腋の下がシミ〳〵痛くなります餘り締め樣としますと襟が崩れますブル〳〵汗に成つて、「敏雄さん見て居ないで來て頂戴」これは三枝さんの兄さんで〇閑女學校の國語の先生樣ですの

「何だい」

「一寸この帯ギユーと締めて下さいな」

敏雄さんは此の頃生やし掛けた黒々した短かい髭の下から朱の樣な唇に笑を見せて

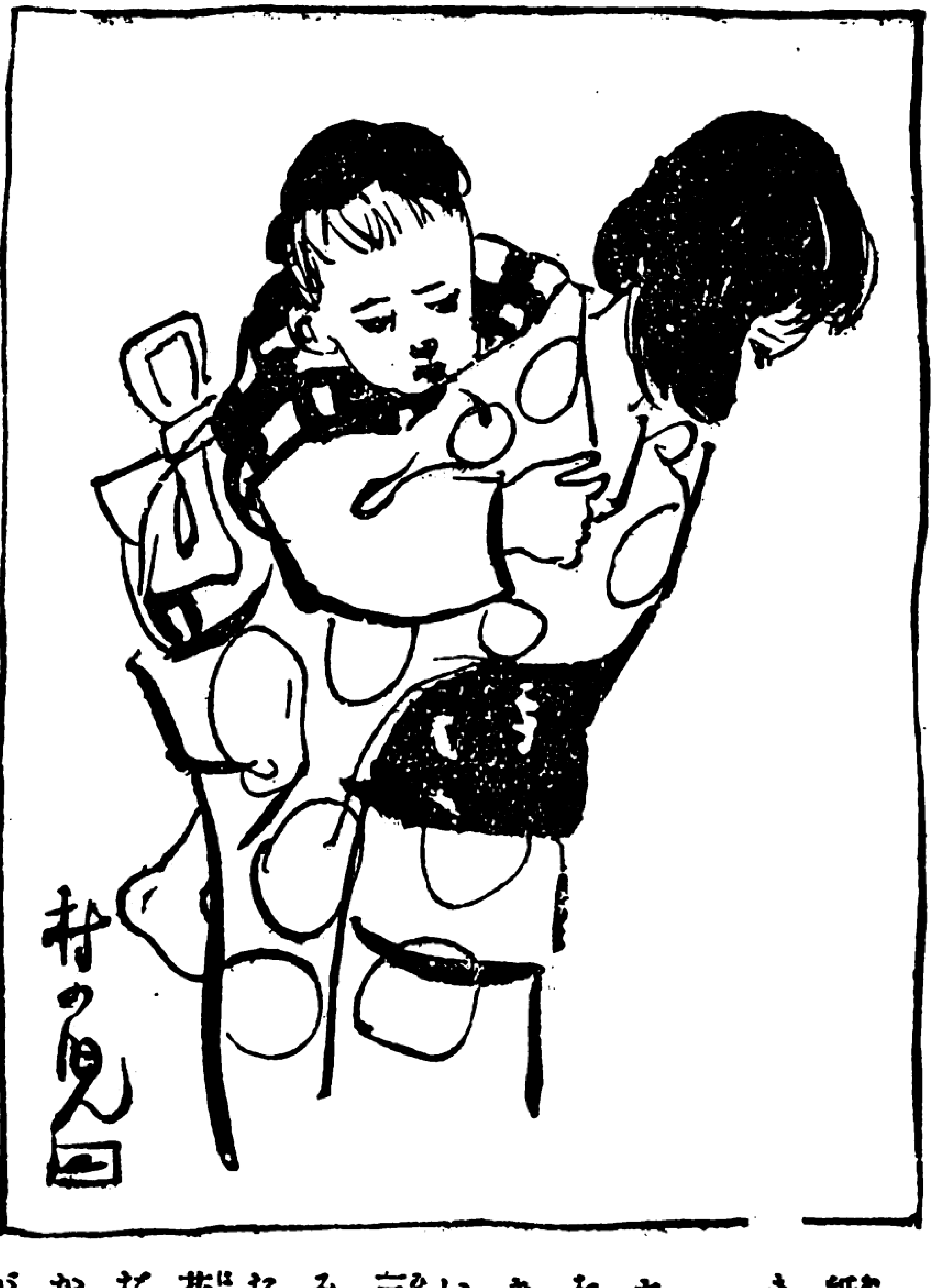
「困つたお姫樣だねえ、さ、のいて御覽」兩手に帯の端を繩の樣に鷲づかみ、爪立してギユーと締める「まあ好い帯の使い樣も知らない人、くちや〳〵に持つちやあ駄目よ……三枝さんのお腹切れるわ」

「少し位切れたつて好いや細く成つて見好いよ」無口な三枝さんの兄樣によくこれだけ口のまはる方が出來たと思ひますこれでお年は二十八ですの、腕の見せ所と洗厓さんのお繪で拜見して覺えて居ますお大皷の結び樣、大き過ぎる樣な帯揚の心をトキ色鹽瀬にヌーボー式の六歌仙を染めた帯揚

「京都は何でも好いはねえ」三枝さんは一口も口を開きません、沈んだ三枝さんに一つでも氣持よく思はして出したいと、骨折つて居るのですが矢張口を開きません、黄な蝶が二つ窓から迷つて入りました、室内

は何と無く明るい樣で此のまゝ繪にして見たいとつくづく考へました、緋緞子の丸ぐけをキッと締めました、これは私が是非にと云ひましたのを商店に無いので、正宗の太刀袋をといてくけましたのです

『ほんとに好いわねえ、これだけの衣裳なんですもの島田だつたら……』と殘念で／＼でたまりません、結んだお太鼓もやの字に成るのにと思ひますと今更ながら叔母さんが憎らしい樣に思ひました、自分の事の樣に小言も出るのです



『さ揃いて坐つて御覽』

『胸が低いから紙入れで張らせませう』

『白鼠瀬のハコセコをわざと簪を取つて入れてキチンと手を置いて坐つた姿、三枝さんの魂のみが美化して出た樣です、櫻の花を繪絹に包んだ樣な角かくしかけますと私等が手を掛けますのが惜しい樣な氣が致します規定の二時は二時間程前

に打つて終つて四時に五分前です隣座敷の娘さんはお嫁さんのおこしらへが出來たと云ふので次々に黒い顔を襖の間から出して

「ありや、時さん見なはれあの帶の結び樣」

帶の手が下から、まはして脊の所に出して派手に結んで有るので不思議に思つて居るらしいんです

「ほんにいなあ、白粉も襟うつけて有るしなあ」

「うしいのが流行るんだすとや」

男子と同じ樣に野良仕事ばかりする娘連の前ではいさゝか得意でありました直さなくとも好いのにピン拔いて鬢尻の毛をスイ〳〵と、これも自慢の一つで有つたのです「さ、お車は來て居ますよ」敏雄さんが可笑しい聲で云ひなさるので皆大笑ひ花嫁さんは苦い顔して立つて居ます

「下向く樣にしてねえ落付て居るものよ」

私は氣をつけて玄關から千代田草履に絹足袋の爪先揃えるまでハラ〳〵して見て居ました叔母さんは黒羽二重の五つ紋、裾には小さい松葉を落して白綸子との二枚重ね帶は茶がかゝつた繻珍に浮織りの龜甲模樣、前髮には水色の小さい角かくしのせて、もえ立つ樣な十八の花嫁さんとのコントラストの如何にも奥床しく門に立つて居る見物はお菓子を貰ふのを忘れて見とれて居ます、腰元のお初は薄色異國の紋付着て島田にはねた長いクツヒキ白う重さうに持つた包は花嫁さんの裲、繻珍織振袖紅羽二重の裏、

「百八拾圓だつて」

千代ちやんが小さい聲で云つて與ました

「まあ嫁さんの衣裳の工合、誰が着せなはつたんだららあ」

目の下に赤いホクロのあるおかみさんの聲でした

「私ですよ」と申したい樣な思ひが致しました、

「敏雄さん三枝さんのお頭を氣をつけて上げて下さいよ、重いから車でゆれると拔るかも知れないの」

「ハイハイ」と憎らしい返事して笑つて居ます何所まで氣樂な人なんでせう、心の中では泣きたい樣に思つて居る人もありますのに……これならば都に出しても

はづかしく無い程澤山な荷物を先に黒山程集まつた見手の間を七つの車が、ガラ〳〵と引き出されます、
「さあ今度は敏雄さんと春子さんとの御祝儀だなあ」
山田の叔父さんです、私は胸がどく〳〵と鳴つて、
「お目出度うございます」
と、ねたむ様な若い男の聲を五月蠅程耳にして、無事に治まる様にと、あはてゝ門火を焚いたので有りました。

△曾呂利の頓智

豊太閤大阪在城のせつ、日頃寵愛し給ふ庭前の松枯れたりければ太閤快からぬ氣色見え給ふ、曾呂利新左衛門これを祝して

御秘藏のお庭の松は枯にけり
　千代の齢を君に讓りて

と詠じければ太閤氣色なほり、即座に帶し給へる腰差を下されけり

△籠の鳥

むかしある所に薄雲と呼ぶ遊女あり、ある時豪商某なるもの大金を出して異國の名鳥を買ひ、美麗なる籠に入れ持ち來り、曰くこれは實に名鳥にして大名といへども未だこれを飼ふものなしと自慢しつゝ薄雲に與ふ、薄雲これを受取り再三禮を述べ終り、籠の戸を開けてこれを大空に放つ、客大いに驚き面色を變じて其故を問ふ、薄雲曰く我等も彼の鳥と同じ籠の鳥なり、故に彼れが苦痛は妾のよく知るところなりと客これを聞いて啞然たり

破れ扇

（季節模樣）



滑稽家庭日記

紅薔薇

二階の梯子段を拭いて居ると御奥で聲がする、
『貴郎、今日は御出張でせう、もう六時ですよ』
後は靜な物である、唯これ見よがしに障子を掃ふ音が一しきり、
『ネー貴郎、……』亦初まつた、夜具を引づる音に續いてホヽヽと笑聲が起る、
『そんなにしないでも起きる！　馬鹿！』
『でも時間が遅れますよ、オヤ、亦すつ込んで終つて！そいちやコー……』
『起きる、起きる、起きるつたら！　馬鹿、寢て居やせんぞ。』奥樣の笑聲が倘續いて居る結局旦那樣の敗北で、皺だらけの浴衣に禿げた鼠縮緬の細帶をブラリと結び乍ら、眩ゆ相なお顔と申せば叢眠の蛙が天の岩戸の日出を拜んだ樣、それでも流石御主人丈に笑ふ者もなし縁側に突立つて二三度欠をし乍ら
『オイ、水だ、水だ』
與餘の金盥に滿々と持つて行く水で『ウン』と計り會釋がある。亂雜に生えた顎髯をゴシ〱洗はれる度毎に、山椒魚の樣な口が開いたり閉いだりするのが可笑しいので熟と拜見して居ると『手拭！！』
七時頃漸く御出勤、これから暫く樂なのでお澤どんと一緒に御飯を食べる、奥樣が一向お構ひなさらないので御子樣二人は全く妾の世話、下の坊樣が茄子の淺漬を食べて口元一面に汁をつけて痒い〱と云はれるのを濡手拭で拭いたり、上の孃樣の鼻緒をすげたりするのが中々に忙しい、奥樣は御子樣なんかだくつでもと云ふ塩梅に朝一時間位を鏡臺の前で御化粧に餘念もないのが例、迂濶『奥樣、八百屋が參りました』とでも言つて行かうものならそれこそ大した御不興で。鏡を前にしたり後にしたり、漸く結ひた束髪をクシャクシャに毀して見たり、かと思ふと『お榮さん、お榮さん』と遽しくお呼びなさるから、お首筋へ守宮でも喰

い附いたのかと飛んで行くと
「お榮さん、これで似合つてゝ？」
こんな時に「ハイ、よく似合ひました」と云はうもの
なら却て御機嫌が悪いので「ハア、右の御髮が少し…
……ハイそれで宜敷う御座んす」と云ふ調子を忘れて
はならぬ。

それが濟むと「お榮さん、此處片付けて下さいな」
とは聊か迷惑、でも他人の迷惑は御自分の程には御感
じなさらないと見え一向平氣で奥へ入來る。

コー八疊の間の眞中へ新聞を三枚も四枚も押擴げて
肱を突き乍ら見てらつしやるのは續き物であらう。處
が其お背が恰度馬の樣に成つて居るので五ツの坊樣は
「お馬、お馬」と悦び乍ら乘つたり降りたり、でも一
寸も動かぬ馬なので坊樣は焦つたがつてお母樣の横腹
へ拍車をおあてなさる、ホ、、、けれども肝心お馬の
方は今一休和尚が山寺で一ツ目小僧が食はれかゝつて
居る處で中々それどころぢやない、
とう／＼坊樣の方が根敗をしてそろ／＼唱歌を初め
られる、かと思ふと急に思ひ付いた樣に母樣の背筋を
撫でながら、母樣の背中はお肴見たいに、骨があらあ」
奥樣は平氣な物、忘れる時分に「ハイ。」
今度は坊樣、お頭の櫛をぬき乍ら
「お饅頭屋さんをするのに此櫛頂戴な、母樣」オヤ／＼
と思つて居ると、「ハイ。」坊樣は頻に櫛を捻くりつゝ
「今日サーベル買つて下さいな」
「ハイ」
「それから鐵砲も……」
「ハイ、ハイ」
「それからね……」と續けて云はうとなさると、
「まア五月蠅いこと、此子は。人が新聞を讀んで居る
のに……」と白い眼で睨んで、背を一ゆすりなさる
と坊樣は意氣地なく落馬なさる。

奥樣の新聞好も久しい物、偶懸賞考物でもある
と一番に出されるのは奥樣で「一番何と云ふ洗粉が良
しいか？」と云ふクラブ洗粉の懸賞考物は直お考
へなさつた位なれば一升の米が幾粒あるかと云ふ眞劍

の懸賞のあつた時には十二時迄かゝつて玄米をお數へなさつた位の御執心『丸帶が當れば良いけど蝙蝠傘では充らないわ、此間買つた處だし、』と云ふ懺悔に答が出來た者は御自分丈で、必ず賞品が來る樣に思つてられるけど未だ當て手拭一筋當つた例がない、それを旦那樣がお笑なさると『そんなに當つたら新聞社だつて身上が無くなりますわ』と分つた樣な分らぬ事を眞面目に云つていらつしやる。



お晝の御惣菜は奥樣のお好な唐茄子、去年旦那樣の弟御が休暇でお出なすつた時、此處の唐茄子は格別お美味いと賞められたら、平生旦那樣お嫌の爲それを煑るを遠慮してらした奥樣は恰度百萬の味方をでも得た樣に朝も唐茄子、晝も唐茄子と、唐茄子攻を遊したので流石の弟御も堪り兼ね、寢言に態と奥樣に聞える樣に『もうもう唐茄子は飽いた飽たい』と仰つた事もあつたつけ……

まあ今日の暑い事、靜にして居ても肌に着物が附着いて、太つて居るお澤どんなぞは額に機關車の油の樣な汗を溜めて

居る位。

午後は毎日お暇なので奥樣は奥で坊樣の晝寢の添乳をし乍ら（五ッの坊樣に添乳も變だが……）新聞をお讀みなさるし、妾は裏の銀杏でジン／＼鳴く油蟬の聲を聽きつゝ、雜巾を縫ふお澤どんの向に坐つて、檢定試驗を受くる爲源氏湖月抄を見る。

ふと顏を上げると今迄蚤でも捻る樣にしながらも動いて居たお澤どんの手つきが漸く亂調子になりかけて同時にフラ／＼と大きな頭が動き出す、それも初の内はフラとしては急に二針三針動きフラとしては二針三針動いて居たが終にはグッタリ投出した雜巾の上に倒れかゝつて嫌に鼻を鳴らせながら寢て終つた。

何が可笑しいと云つても他人の居眠るの程可笑しい物はない、吹き出したい笑をじつと嚙みしめて奥を覗くと先刻迄仰向けに成つて讀んでいらした新聞が何時かお手を離れてお顏を掩ふて居る、坊樣は母樣の方を背にむけ胸も露に、庭の植込から風がスーと來て新聞が微に動く毎に一匹の蠅は奥樣の腕に止り坊樣の足に止りして居る。

妾は一心に書物を讀んで行くとふと肩に手をかける者がある、吃驚して後向くと坊樣、マー素裸で眼を擦りながら。

これだものと切角興の湧きかけた書物に枝折を挿入れ、坊樣には衣物を着せてふと見ると奥樣は矢張り新聞を被つた儘……ホヽあの蠅が未だ止つて居るわ。

旦那樣の御歸りなさつたは日足の傾く時分、汗がバナ、マ浸潤んで居る。

「まあ外はお暑う御座んしたらう、家に居ても暑かつたですもの……」とは奥樣の御言葉であつた、行水の湯をお取り申したり夕飯の仕度やらで家中は大混雜、其上に誰か人が來たので取次に出て見ると例の砂川樣嫌な人だ、此人は妙に御飯時を目がけて出て來る、正可さうでもあるまいが此人の來る時は大抵御飯時である。亦少々調子が狂つた、僅の事で御飯を亦炊かねばならず肴屋へも走らなければならぬ、要するにこんな人は一番嫌はれる人で時々下駄の裏にお灸をすゑられ

る人である。

仕方がない、奥様の命令で旦那様と同様のお膳を出すと「オヤ、コレハ……私はもう濟ませましたので……」と來る、さうなれば何故早く仰らぬのだらう、其くせ何時迄でも盃を離さうとはなさらぬがお定り。

可笑しい事があつた。奥様が料理案内を御覽になつてお拵へなさつた西洋料理の胡椒の分量が間違つて居たと見え、一口食べて旦那様は辛い、辛いと涙を溢される、奥様は吃驚して料理案内をお調べなすつたが矢張其通なので「ホラ、貴郎、本が悪いのですわ」と得意になつて入來した。

旦那様は砂川様を相手に御酒を召す、二三杯で早お顔はお猿の樣、氣分が陽氣になると見えて誰にでも洒落や笑談を仰る、而し其洒落の方は餘り結構でない、總計二十計りのを代り〳〵に連發なさるので若し聞手が笑つたらそれは同じ洒落を幾度も聞くのが可笑しかつたのか、乃至洒落を云つては大口開いて笑はれる旦那様の顔が次の間の襖に映つて壬生狂言の面の樣に見えるのを笑ふのであつたらう、而し氣の良い主人はそんな事は一向御頓着が無い。

「時に砂川君、君は鼻が塞るかい」と旦那様の聲、同時に御自分の鼻をつまんだ影が大きく映る。

「へ、、、イーエ」

「僕は塞つて大にいかん、今日醫者に見てもらつたが、」と影の鼻を頻に擦りながらクスン〳〵云つて入つしやる。

「ハーア、そりやお困りで」と砂川様は案外冷なもの煑肴の骨をせゝるのに餘念もない。

「君一遍見て呉れんか、どんなになつて居るか……」

「私なんか分るものですか」と砂川様は断つたが對手が眞面目なので名殘惜しげに箸を置きながら、

「ハー何處に」と洋燈をとつて、角兵衛獅子の様にしてられる旦那様の鼻の穴を右から透し、左から透し、而しとう〳〵旦那様の方が苦しくなつたと見え、「未だ分らぬかね」と仰向いた儘仰る、と同時に咽喉がヒヨコリと動く。

「ドーモ中が眞暗で……」と如何にも濟まぬ樣に砂川樣が洋燈を點かれる。其振が可笑しのいでドッと皆笑つた。

九時前に砂川樣は用談が濟んだと見え歸られる、今晩は箒を逆に立てたりもせず濟んで幸ひ

それでやれ〳〵と思ふ間もなく近所の緣日へ買物に行くお伴を云ひつかつた、難有い事とお召をそろへて置くと奧樣は今臺所のランプの下で頻に巾着のお金を調べて居られる處、かと思ふと

「チー貴郎、二十錢細いのがあり升なら貸して下さいな」と、旦那樣の所へ行かれる、旦那樣は

「銅貨は無い」と至極冷淡なもの、

「そいぢや妾が調べて上げませう」と笑ひ乍ら衣桁の洋服の衣囊に手を入れられると

「オーコラ、コラ」と立つて來て出させまいとなさる。ホヽヽ、自分の財布に幾らあらうと御承知ない癖にあれだから可笑しい、それを奧樣は何時も調べて置いて少々殖ゑて居る時はコツソリ一枚位隱して置なさるけど一寸も御存知ないので、此間もビーヤホールへ蟇口をお忘れなさつた時幾ら在中で御座います？と聞かれ、旦那樣は當惑顏なるを奧樣が横からお答へなすつた事もあつたつけ。

緣日で燐寸と箸箱と屑籠を買つた、屑籠の持ち役は妾、大變な人込の中を鼻の上に汗を浸潤ませつゝ漸く歸つて來たのは餘り體裁の良い事でもなかつた。（終）

△當意即妙

或る時曾呂利新左衛門旅行せんとて馬を走らせ來りしが、ふと一休和尚に出合ひたり、一休問ふて「いづ處に行くや」といふ。新左衛門答えんと欲すれども急ぎの事とて其の意を得されば即ち扇を開いて示しながら馬の蹄を響かせて走り去れり。一休見送りて曰く「ハヽー鳥羽へ行くのか」と蓋し扇の字は戸羽の二字を合すゆゑなり。

來客を驚かせた御馳走

これは今より凡三十年ほどのむかしである波蘭に或る公爵家があつた。この人は巴里の或る町に極めて莊麗な邸宅を構えて住んで居る。處がこの殿元來評判が惡るい、それは結局慾張と云ふのである。何故慾張かと詮索して見ると何も外に慾張るのでも無いが未だ一度も知己朋友を招いて御馳走をした事が無い、これが抑々この惡評を買つた原因である。然るに數年前驚くべき事が起つた、外でも無い、この慾深公爵の友人が五十人ほど思も掛けず晩餐の招待を受けたと云ふ事である。一同は驚いた。何しろ不思議な事と噂とり〲定刻になると、待ち兼ねてさて出掛けて見ると何樣大仕掛らしい。邸内第一の大廣間には已に素張らしい御馳走の用意が出來て居る。室内は數十の電燈に照り輝いて馴れた目にも流石にまばゆい、處が特に一同の注意をひいたのは座敷の一方に雪をもあざむく白絹の帷幕が垂れて居る事である。何の理由かわからない、兎も角も椅子に就いて見るとやがて給仕が皿を運び出した見るとこれが又珍らしい趣向で氷を細かく碎いてその上に牡蠣が浮かしてある見るからに涼しい、すると俄に室が眞暗になつた、同時に白のとばりが動き出した。ふと見るとそこになよやかな女が二人氷海の中へ這入つてぶる〲震えてながら岩角から牡蠣を採つて居るのである。一同呆氣に取られて居ると忽ち室は元の明るみと返る、女の姿も同時に消えてしまふ、白絹は依然として垂れて居る、實に奇態な趣向である。その次に運ばれたのは魚の料理である。一同ホークをつけ始めると又もや電燈は消える眞の暗となる、そこに一艘の小舟が布の中から動き出した。中に數人の人が乘つて居る。見る〲浪が高まつて來る、逆卷く激浪の中に舟は左右に搖られる、今にも覆りさうである。紳士の一人は思はず飛び上つて「お〻危ない、溺れて仕舞う」と叫んだ、その聲のまだ了らぬうちに舟も浪もかき消す如くなくなつて仕舞つた。こんな風に食卓の献立の變る度に白絹の光景も變つてゆくので流石の客もこの巧妙な趣向にはほと〲感服した。つまりこれは公爵が多年の意趣返しにやつたのである。白絹の仕掛は言までもなく活動寫眞の類であらうが、其時分はまだ一般に知れなかつた時代で客は大に驚いた。そしてこの晩の費用はと聞いて見ると大枚四萬圓といふ事であつた。

娘の爲めに馬鹿になる母親

白梅

櫻木夫人といへば大の交際家で、又到つてのお世話ずき、一年に一ダースの媒妁を遊ばされば氣が濟まぬと云ふお方、其方が今日此頃しきりとおみ足を近くお運びになるのは知れてゐます！

一昨日の音樂會に、多勢の居る前で私の衣服から顏をぢつとみつめて何と仰しやるかと思つたら立派なお嫁さんにおなりだ子

オヽ嫌、嫁さんだなんて。顏から火が出ましたわ。

何故あの方は人さへ見れば嫁に世話がしたいだらう、それはネエ、お嫁に行くのが女の義務なら私だつて行きます、けれども、町人が儲け口をさがすやうな心持でいらしやるお方がお世話なら折角ですがお斷りします。

元來兩親からして解らない。いつぞやも櫻木夫人に私の居る前で、

娘の賣れ口を何卒金のありさうな氣樂な家へ、人を馬鹿にしていらつしやる、商店の賣品ぢやあるまいし賣れ口なんぞ探して頂たかなくつても宜いですわ。



元來私には解らない、嫁に行くのが女の役目にしろお三どんの奉公口を探しはしまいし、あゝも血眼になつて方々かけ廻つて頼まなければならないものかしら、女の方から手を下げて恐れ入つて嫁に貰つて下さいとお叩頭の百萬遍して願ふものかしら。もしさうなら私は御免蒙ります。何も其樣に權式まで下げて、女の役目を果さなくつても宜いのだ。

永らくピアノを彈かなかつたためか、すつかり忘れてしまつてちつとも彈けないので疳癪が起つて鍵盤を無茶苦茶に叩きはして居る時、母上は例のやうにお靜に

又無茶苦茶を彈いてますネ

おや母樣！ときまりがわるかつたが澄した顏をして何處へいらしつたの？

一寸買物があつたからついでに櫻木にも廻つて來ました

また櫻木と妾はつい嫌な顏をした

すると母上はほゝ笑み給ひつ櫻木さんの許に素人の音樂會があります、お前にもピアノを彈いて貰ひたいと之れは西洋から此頃お歸りになつたお客樣があるさうでだが縁もゆかりもない人の前に出て演奏するのは私は大嫌ひだが櫻木さんが音樂會を催して妾を呼ばうとする下心は何と云ふ考へが電光のやうに妾の頭に閃めいた。母上は意味ありげににつことほゝ笑み給ひ何んでも暫らく西洋にいらしつたので大層西洋風の

方だうだからきつとお前さんとは口が合ひませう、事によるとピアノのお望みが出るかも知れないがお前さん巧く弾けるか子

嫌だ誰が弾くものかと妾は眞赤になつた。

そんなお客様がお出になるのなら妾は行くのを止めますわ

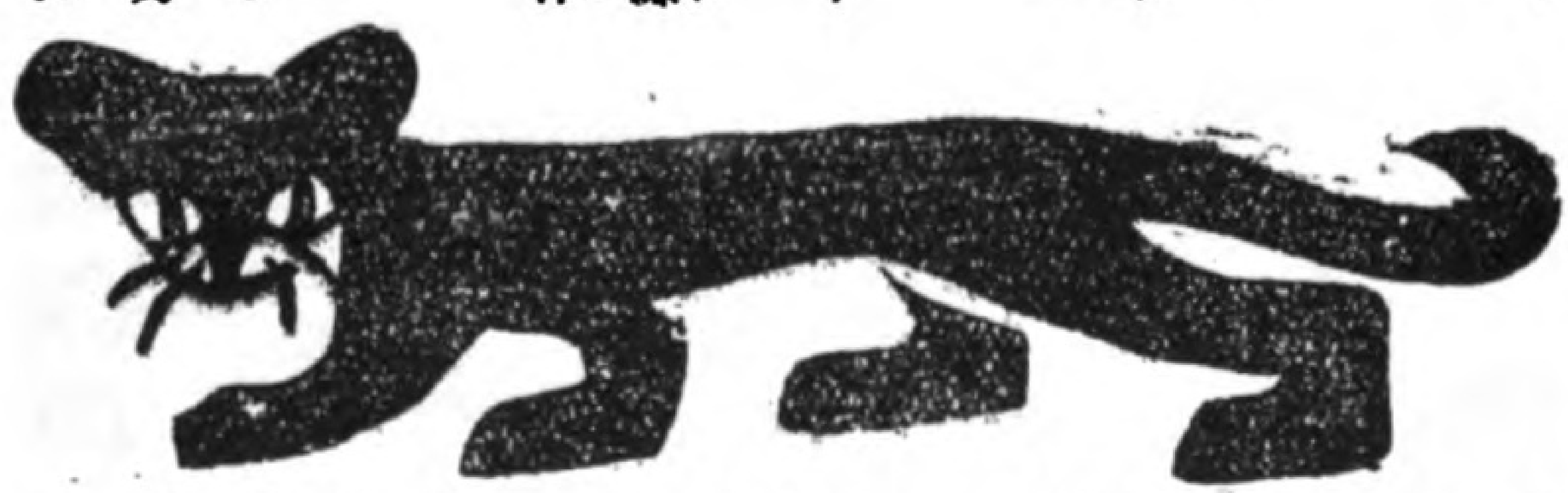
又其樣の我まゝをと母上は俄にうろたへてせきこみ給ひつ

折角伯母樣が招いて下さるのに嫌だつて事がありますか、お前さんのやうな駄々を言つちや……

ですけれども出來もしないピアノを弾くのは恥つかきですもの

それはお前さんの平日の勉強が足りないからだ弾くのが嫌なら弾かなくつても宜いサ、とに角行かなくちやならないと仰しやつた。

午後は家のさわぎと云つたら大變である、常は到つて物靜かな母上が先へ立つておさわぎ遊ばす、お風呂を焚いて居る下男の水の汲みやうが遲いと云つて叱られる、水道の龍口を捻つたばかりでは間に合はぬ。釣瓶繩の切れるまでドシ／＼井戸の水を汲込むのである。其上に火の焚きやうがまぬるいと云つて叱られる、燃えつきが惡くて火力が弱いと云つて石炭までお叱言を頂戴した、漸つとこさと—實は平生よりは餘程早く湯は沸いた。イヤまだほんとうに沸き切らない内にサアお湯だと急ぎ立てられて衣服の脱ぎやうがぐづ／＼して居ると叱られながら突きとばされるやうに母上と御一緒にお湯に入つた。



図

母上と御一緒にお湯を浴ぶは是迄度々であつたが、今日はまた如何したものぞ、二十歳を越した私を子供のやうに世話を燒いてソレ、えり筋が汚れてる、生際をよく洗つてと、煩さい程仰しやつて

おや此小鼻のきずは如何うしたのだいとさも大きな彈きずか刃傷でも發見したやうに仰山らしく之はお友達の許の猫に引つかゝれたの

まあ猫にと母上はとび上るやうに肝を潰された、妾も肝を潰した母上のお驚きなさりやうが虎か獅子かに喰殺されたよりも尚だ仰山だつたからで「お前さんまあこんなきずを—」と母上は唯の卯の毛で突いたやうな、きずをつく／＼と見給ひて如何うしたつてんだらう、こんな疵を拵らへてしまつて……飛んでもない事をして呉れたとさも一大事件でも起つたやうに、はつと太息を吐き給ひぬ。

オホヽツと妾は笑はずにゐられなかつた是れんばかしの疵を是れんばかしの疵だと云つてお前出世前の大切なからだをと、母上は八の字をよせ給ひつゝ

女は顔が一番大切です、それだのにこんな疵を拵らへて了う

のはほんとにまあ困つて了う、

だつてお母樣痛くも何んともない直ぐ癒つて了ひます、

痛い痛くないの話ぢやないよ直ぐ癒つたつて痕が殘ります、

ドレお見せ

と母上は玉屋が玉疵を吟味するやうにとみかうみ、やがて又横から縱からながめられた。まあ嫌なお母樣わたしは急いで兩手で顏をかくしたアレ亦其んなまねをするかくして了つては解らない最う澤山よーとわたしは疵の見えないやうに故とツンとした其途端、續けさまにくしやみを三つ四つした。お前が餘んまり世話を燒かせるからさーさあ風邪でも引くと大へんだからと仰しやつてわたしの手を取らんばかりに急き込み給ひて、御一緒に風呂にはいつた、わたしの小鼻の大きな傷痕にお白粉でかくせるだらうと漸と御安心なさつて事ずみになつた、けれども顏だけではすますず手の尖、足の爪の尖まで三ツか四ツの子供のやうに世話を燒いて平日の三倍の時間をかゝつてやつとお湯からでるおゆるしを得た。こんな事は之れまでに無かつた、櫻木の伯母樣の音樂會に行くのにこれ程の御山な準備がいるのであらうか。あゝ、面倒臭さい、わたしはほんとうに嫌になつた、けれどもこれが矢張りお母樣への孝行の一つなのかしら、



四

お風呂がすんでからの叱られ役は仲働のお梅。化粧部屋のお道具が揃つてゐないと、先づ第一番に叱られた。白粉のつけやうが拙たゞと云つてわたしも叱られた。元來此頃の女はお白粉が無用だの何だのと理窟ばかりが上手で、お化粧の仕方が下手だと若い女全體までが叱られた。そしてわたしの平常の身だしなみがわるいから白粉の乘りがわるいと仰しやつた。けれどもお母樣の御丹精で、お化粧が出來上つて姿見を見た時は自分でら見違へる程容貌か立勝つた。ちやうどそこへ髮結が來たので髮を結つて貰ふ、わたしは日本髷か嫌らいだけれども母上がお好きだから島田に結つてもらう

次の間にはつい十日前出來上つて來た青野入紋お召とわたしが宜くつて宜くつて堪らない柴舟模樣の友禪の長襦袢少つと華美過きてると皆さんが仰しやたがわたしは一番よいと思ふそれに金茶の丸帶と母上の高等なお召とならんで揃へてあつた

髮を結つてしまうとお梅が來て母上と共にわたしの支度のお手傳ひをした、わたしはもう赤ん坊のやうに自由になつてゐなければならなかつた。それも宜かつたが大きな姿見を前に母上は一々わたしの姿をためつしかめつせられて、お梅と母上とで精一杯の力を搾つて漸とわたしの丸帶を締め終つた時はざつと小半時の餘もかゝつた。

それから指環やら帶留やらわたしの身體は頭から足の爪さきまでチカ〱して斯う云ふとをかしいが姿見に向つた時は自分ながら見違へるやうになつてしまつた

母上はつく〴〵とわたしを御覽遊ばした、正直な話わたし美人ぢやないわ、けれども決して醜いとは思はない、斯うしてめかしたてゝ見ると、まお美人でなくてもそんなに恥かしい容貌ぢやないわ。

三輛の車は玄關に待つて居る、母上もわたしも支度が出來たが父上はまだお召換へなさらないで書齋で調べものを遊ばして居られた、母上はお父樣呑氣だと頻りにお焦れ遊ばして、肝腎の貴夫がいらつしやらないと云ふ法はありません、そんな解らない事を仰しやつては、第一逢ふて御覽なさらなければ御安心が出來ますまいが…いゝや俺は見ないでも宜いよ父上例の無頓着な調子で

お前と靜とが見て氣に入つたら其れで結構だ、否さうは參りませぬ私は私、靜は靜、貴夫は又貴夫で、銘々の見込が一致しませんでは…

そんなむづかしい理窟をひねらずとも宜い俺には見込も何もないお前達にさへ氣に入つたらそれで宜い。そんな、そんな…と母上は焦れ込み給ひて



そんな不條理を仰しやる事はない先方だつて貴夫にお目に懸らなければ、きつと不滿足です、何も御用があるではなしどうせ家にいらつしやるなら車の支度も出來て居りますから、御迷惑でも是非…と母上は口をすくして到頭父上を說き伏せられた。

三日月の句

芭蕉の翁、風流の行脚をなして北國のある田舍にいたる、時に恰も八月十五夜の事なりしかば、土地の人々打寄りて月見の宴をぞ催ふしたり、折からこゝを通り掛りし翁の姿見ゆるや、斯る名人と知るよしなければ、乞食坊主かなど罵りつゝ無理に引入れて一杯ふるまふ、かくて一句所望とあれば、翁は吾れ左樣な風雅の事共一向存ぜずとひたすら固辭すれどもなかなか聞き入るべき樣なければ、詮方なく心を決して、「三日月の」と始の五文字を讀みけるに、彼等は大口開いて、今宵八十五の滿月なるに三日月とは如何樣と、皆々腹をかゝへて笑ふ、翁下の句をつゞけて

「頃より待ちし今宵かな」と詠じければ、先に笑ひし者共グウの音も出でず、酒の醉醒めて段々素性を聞けばこれぞ今日本一の俳人芭蕉翁と分りて皆々頭も上げ得ざりしとぞ。

富に憧がるゝ女

陽炎

夜來の雨はとう／＼雪となつた。灰色の空からは絶えず鵞毛を飛して、見る／＼滿地を蔽ふて行く。地境の松も今朝は殊更風情めいて、いくら不風流な私でも此の美に觸れては雪の日やと一句捻つて見る氣にもなる。

夫は風邪の氣だといつて未だ寢床を放れないので、子供を對手に淋しい朝餉を濟まして了う。午前中には是非共出かけなければと思つて、縫にける綿入の衿を絎けながら昨夜の胸の口上を思ひ出した。

「餘り長びきませうなら貰つて歸れと奥樣から申つかつて參りましたが」

と笑顏ともせずに極めつけて行つたが彼の嫂さんの事だもの、いつもの調子でがみ／＼怒つてゐるだらう。オヽ嫌だ。ちつとは私の身にもなつて御覽じろだ、此日短かに子供を抱へての仕事だもの、どうせてきぱき埒のあかぬにきまつて居る。それにこの頃といつたら一寸でも氣を詰めて何かをすると直ぐグラ／＼ッと眩暈がして來て倒れさうになる。少し横にでもなつて休んで居ると嘘をいふたやうにケロリとする。這麼ではほんとうに困つて了う。何をするにも總てがそのおつくうで、根つから物がはかどらない。只氣ばかりせかせかして、無闇と腹が立つて堪らなかつたり、さうかと思やあ亦妙に滅入こんで、人の居ない座敷の隅ッこへでも隱れておもいで泣て見たくもなる。自分ながら呆れて了う。

夫に訊たら

「極く輕症のヒステリーだから順境にさへ立てば直ぐ全快る。」

との事だが、この勝れない身體で以て、いくら取れるといふぢやなし明暮ハラ／＼して少し間違つても彼の通りだ。

モウ／＼賃仕事もお止めだ。此度から斷つて了うか

知ら。……だけど切つてはめたやうな今の收入では、お正月を目の前に扣へて、かたばかりでも春の仕度も入る事だし、それに憫想にたつたひとりの兒にもオリンスのチヤン〳〵一枚新調てやれないでは餘り親甲斐もない。

と思ふともうスツカリ我が折れて了つて、亦彼の傲慢な嫂さんの膝下に跪ても見る氣になる。

理想通りに行けば私だつて今頃は醫士の奥様で濟まして居られるのだ。廂髪はもと〳〵嫌であつたから恰好の好い丸髷にでも結ふて、着物はケバ〳〵しい糸織や風通は、鰶の化物然として氣障だから矢張りお召に限る。黒繻子に博多の翁格子かなんかを打合した帯を締めて、變り小紋の羽織でもゾロリとさせたい。

品なんて事はとても私の柄に無いから、グツト粋なつくりがして見たい。純日本風の書齋には一閑張の机を据ゑて、机邊には源氏物語や枕の双紙はなくとも、是非紅葉と、鏡花の作物を堆く積まねば氣が濟まぬ。床には南宗の山水ものを懸けて、鶴首の一輪ざしには山茶花が優しい色を見せてゐる。柴舟の香が床しくたゞやう中に、友禪の座蒲團にツンとして心の日記でも書て居る筈だ。それがマアどうだらう、空中樓閣はメチヤ〳〵になつて、今は前垂の下に味噌漉し忍ばせて走り使もせねばならぬ身となつた。餘り心細いのでつい愚痴でもいふと

「蛟龍は池中のものにあらずだもう少し辛抱せい。」

とお株で夫が氣休めをいふ。その風雲にはいつ乘ずる事か。春風秋雨も三度此裏屋に繰返して見ても單調は矢張り單調だ。今年もゝう逝くといふに、女の二十五はもう萎れ花だもの、此先何年代診の女房で暮すのやらと思へば何ともいはれぬ寂寞を感ずる。

いくら瘠所帯の世話女房でも、この憔悴やうはあんまりひどい。

處女時代は可笑いほどお洒落であつたもんだから、たれでも髪の事なんかでは一ツぱし憂き身を窶したもんで、髪結さんなんかはどんなに困らせられたらう其かはり出來上りの美事だつた事。お洒落連中を羨ませ

てやつたが……と暫し恍惚と孤鹿の子かけた結綿時代を夢みる。

境遇の壓迫にはスツカリ參つて了つて、もう昔の俤を止めないぢやないか。それも其筈、馬の喰るやうな卯の花や、煮豆で以てお茶づけを流しこんで居る私にどうして薔薇の色艶が出よう。

世話女房の癖におしやらくだといふかも知れないがそれは無理だ。容貌は女の生命ではないか。

桂月さんは『諦めよさらば汝は幸福なるべし。』といつてあるが私は深く其幸福者となり得るであらうか。

午後から義兄さんの所へ出來上つた着物を屆けに行く平素無沙汰勝なのでおつくうだが仕方がない、いつもの通り勝手口から小さくなつて這入つたら私の大嫌な駒がいて、大根の面をとりながらジロリと見る。無心にでも來やあしまいし何んだらう……と思ふとモウ持前の疳癪がこみ上て來る。茶の間を覗たら、嫂さんがひとりつきりだ。

今日は珍らしく銀杏返しにしたせいか變な貌に見える矢張りいつもの丸髷の方がよくうつる。先づ度膽をぬかれたのはお化のやうな厚化粧に、思ひ切つて派手な糸織の書生羽織を着て居る。八ツを頭に四人の子のお母さんとしては隨分なつくりではないか。よつぽどどうかしていると思ふ。そして無名指には亦新に寶石入のが殖たやうだ。

今吳服屋が歸つたばかりの處だといふので座敷の内は、吉野立田の花紅葉目も眩むやうな友禪や、震いつきたいほど意氣な柄の御召なんかゞ算を亂して居る。這麼品には緣の無い私も流石煩惱心が萌さぬでもない。側から見たら大方私の目が細くなつたらう。

マア好い柄ですことつて褒めたらニヤリとして『女は着物でも買なきあ外に樂がないから自分の欲しいと思ふ物はドシ〳〵新調るの、さうでもなきあ女と生れた甲斐がありあしない。』

何だか私が當つけられたやうで不快で堪らぬ。そして

『あなたも一反おとりないくらするぢやなし。』だと。たかゞ瘠所帯の世話女房風情が此節から紡績物だつて容易には出來あしないに、こんな着物を一枚新調るお金があれば親子三人裕に一ケ月の生活を支へるではないか。

私たちの生活程度はどんなものかといふことは百も承知の癖に這麼皮肉を云つて見るのだ。私は怫然したのでつい黙り込んで居ると、そんな事にはお構なしで手近のお盆を引よせて湯氣のたつお薩をパク〳〵やる。側に私の居るに一ッお喰りともおつしやらない。とても私には出來ない藝當だ。後の壁に凭れかゝつて來月が臨月といふお腹を抱へてオヽ苦しい苦しいといひながらパクツキは止めさうもない。なんてことだらう令夫人があられもない。もしか私が義兄さんであつたらば慥に三年の戀も醒めてしま



う。
歸らうかと思つて居たら診察室に通ふ三尺の扉がさうと開て、金縁を燦かした義兄さんが這入つて來た。相變らず水々して美しい。
「今日は千歲で醫會が開かれるから私も出席せなきあならないから遲くなるよ。」とおつしやると嫂さんの貌には見る／＼不安の色がひらめいて、
「亦○○さんなんかと二次會でせう。」
と恨めしさうな顏つき。
「だつて交際なら仕方がないぢやないか。」
と濟ましたものだ。
「交際／＼つて好い口實ですね、醫會なんて何だかあてになつたもんぢやあない、人が知ないかと思つて。」
「莫迦なつ何云つてるんだ。」
と傍に人もないやうな爭論の火の手が大きくなりかかる。長居を恐れてサッサと歸つた。
外はもう暮かゝつている急ぎ足で來る後から風を切つて來る俥の主は義兄さんだ。新調の玉羅紗の外套に身を包んで、車上ゆたかに得意の樣を見れば、同じ兄弟でもかうも違ふものかとつい悲しくなる。
夫は年中照降なしの洋服一着でテク／＼して居るに義兄さんなんか夜每待合の門を潜つても、まだ一度だつて弟の侘住居に、其安否を訪ふた試はあるまい。まして遊興費の一牛を割て苦學の弟に補助してやつた處がソンジョソコラの化粧の者に背中をどやされるがものもないだらう。義兄さんに限つてそんな莫迦な事はせぬのだ。
只待合の四疊半裡蘭蝶の影ほの暗い處に潰し島田の仇者を侍らして淺酌低吟の戯に耽つて居たなら本能足るであらう。
ア、富と貧との懸隔はついには骨肉の間も路傍の人として了ふ。こんな事を考へて歩いたら、いつの間にかお菓子屋の前まで來てゐる。お土産にと思つてもなかを買ふ。
薄色コートに緋ざりの蹴出し艶かしく、遊蛇の目に雪を厭ふて行く仇者もある、鳥毛のボアーに猪首をか

へして紋羽二重の被布を誇り貌に着ながら、紫紺の袴をひるがへして濶歩する星とスミレの化身も行く。
この夕暮の雪の巷を往來する女の中、流行おくれのショールにくるまつて、鼻緒のゆるんだ山桐の足駄でチク〳〵歩くものは、恐らく私位のものだらう。
家に還入れば三分心のランプが薄朦朧と六疊の間を照して居る側には、夫が病理を讀んで居る。子供は私の歸をまちくたびれて、お炬燵に入れられてスヤ〳〵と熟睡て居る。枕頭には縫ぐるみの狆ころが罪ない夢を守つて居た。

○珍らしい贈物

英國のリバープールに汽船を澤山持つてゐる可なりの資産家が居る。七八年も前に、若い支那人が離船してこの港へ上つて、金も無く、倚る人もなくて非常に難儀をしてゐたので、此の金満家が氣の毒に思つて、自分の家へ連れて行つて種々と親切に世話をして、遂に本國迄送り返してやつた。

扨て程經てから、或日見なれない外國製の箱が此の大臣の許へ届いた。差出人はよくは分らぬが、表に上海の消印がついて居る。誰れが寄贈したのだらうと思つて中を開けて見ると、成程合點がいつた。先に助けてやつた支那人からお禮詞を呉れたのであつた。

其の中には鐵の鑵と小鳥の巣で作つたスープやら、鑵詰やら、又異樣な瓶が一つあつて其の中に茶色の糊の樣な不思議なものがつまつて居るやら、もう見た事も聞いた事もない奇態な料理が一ぱいに這入つて居た。

又其の側に手紙が一本入れてあつたから早速開いて見ると、次の樣な說明が書いてあつた、此の瓶詰は落花生の芽とギンカー（東印度或は西印度に産するものでその根を採つて料理に用ゐる）の汁とで拵へた砂糖漬であるが、この料理は中々面倒なものでたゝ即ち落花生の核の底に同錐形をした極細の一物があつて、それが殆んど肉眼で見えない程の二枚の葉で包まれて居るが、落花生を火で燒いて其の小さな圓錐形のものを取り出して之を作つたもので、小さいコップに一杯之を取るのは一通の骨折では無い、左程美味しいと云ふものでは無いが、兎に角變つた料理である云々。

彼は珍らしい贈物を一人でむさぼるのも興の無い話と件の大臣は自分の友達を五六人招いて其れをふるまつたが、驚くべし、その料理の一皿の價が一百何十圓とは隨分高い料理である。

世界未曾有の大饗應

一夜の散財十五億萬圓

曾て英吉利のプレフエヤー卿と云ふ人が人體に就いて面白ひ研究をした事がある。その報告に依ると何でも肉が三斤、脂肪が一斤パンが二斤それに鹽が八匁程と牛乳が三合、これ丈あれば人間一人一週間の生命を大丈夫受合ふことが出來ると云ふのである。結局價につもつて一圓八十錢、萬物の靈長たる人間の命繋ぎとしては先づ安い方である。處がもの〻贅澤には際限の無い物で次の樣な話がある。英國のガーヴラースと云ふ會社が印度の元老や國務大臣を招待して晩餐を供した處が如何であらう、その費用が一人に付實に二千萬圓と云ふのである、その時招待した客が總勢七十五人有つたので總入費を計算して見ると無慮十五億萬圓、即ち英吉利の政府を十七ヶ月間支へ得る程の額である。世界開けて未だこれ程の大饗應は無いであらう、然らばどうして斯る途方もない宴會を催したかといふのに、これに就いて一條の物語ある。今から二百六十八年前、當時のガーヴラース會社の社長にロパート、ペルフと云ふ人があつた。この人が又少し變物で印度の東印度會社と云ふのへ註文して頗的贅澤な敷物を取り寄せた、その代價が千五百圓、今でこそ左程驚くにも足りないが何しろ三百年近くも前のことである。其の頃の人の目には恐らく未曾有の珍物であつたに相違ない、處が如何した理由か此代價がまだ印度政府へ支拂濟になつて居らなかつた。それを近頃になつて今の社長のメーヤーと云ふ人が偶然にも古ひ書架の中から見つけ出したのでメーヤー氏は御苦勞にも其の利子の計算を始めた。何しろ二百六十年餘積り積つた利子である中々少し計のことでは無い、よく〱計算して見ると流石の社長も膽を潰した。即ち總額十六億七千萬圓と云ふのである。知らぬ前ならば兎も角、一旦これ程の大負債があると知つて素知らぬ顏で居るのも氣が濟まず、されはと云つて今更事新しくそれ丈の金を印度政府に支拂ふのも氣がきかず大勢頭を集めた結果遂に一つの妙案が生れた。これが抑々この大饗應の由つて來つた原因である、そこで早速この事を印度政府に通知に及ぶと先方の驚愕は又格別、中々夢にぼた餅位の騷では無い、背のヒヨロ長い大臣連が倒れる身體を辛じて支へたのも無理も無い事、斯くして一同はこの古今未曾有の御馳走にありついたのである。

紙幣の活動寫眞

一圓紙幣の經歷談

私は日本銀行總裁の認可によつて發行された一圓紙幣である。私が呱々の聲を擧げて始めて活社會に活動しはじめたのは、電話交換手の給料袋の中からであつた。それからついで折目もつかぬ眞新しい私の身體は四つに折つて蟇口に入れられ、交換手孃の牛込の寓居につれて行かれた。室は六疊で床の間でも、緣側でも此の二三日雜巾一つ當らない樣である。處々の釘には脫ぎ捨が古着屋の店頭見た樣にかゝつてゐる怪しげな机の上には『〇〇世界』が無雜作に置かれて主待顏である。其無精ッたら形容にならない。此れが女子判任官の寓居とは、どうしても思はれなかつた。這麽婦人に將來どんな家庭が作らるゝか。と實は氣の毒に思つた。

孃は自炊生活の簡單な夕餐を終つてから私の這入つて居る蟇口を懷にして外出した。そして表の小清洒した菓子屋へ這入つた。私は上役か同僚でも訪問するので進物用の菓子折でも買ふのだらうと思つたが、それは間違つて居た。此の交換手孃は大の間食好で、餅菓子や西洋菓子を無聊の折や休暇の日にパクつかせた其の今月分の借を支拂ふのであつた。

私は交換手孃より菓子屋に渡された。此の菓子屋は却々內儀が權力があつて、一家は妻君專制政治である。店は見掛によらず賣れるので、生活難の歎聲も發せず有福らしいが、內儀は又ひどく虛榮心に富んで居るので、亭主は大分手古摺つて居るらしい。さて內儀は翌朝私を鷲摑にしてつい近所の下駄屋へ駈付て、千代田草履を購ひ私を下駄屋へ渡して了つた。

此下駄屋は店こそ小さいけれど、夫婦ともお世辭がよくて、商賣上手で、此界隈での評判の勉强店である家庭も圓滿である。晩には主人が晩酌の微醉機嫌を涼風に吹かせつゝ、愛兒の手を曳いて納涼に出掛るのが一日の慰安で、夕顏棚の下涼みが偲ばれる。私は這麽家庭が羨ましい。かう世辭と商賣上手と家庭の圓滿の

三拍子揃つて居たら、將來は必ず有福に老後の樂みが得られようと思つた。

正午過ぎに日の丸を兩頬に染出したお鍋どんが下駄屋へ遣つて來て、五圓札を小さいのに兩替して呉れと頼んだ。此れは此家のお得意の横町の某會社重役の家からの使なので、主人は早速私と同僚四人を數へて使に渡した。お鍋どんは歸宅早々私どもを奥樣の前に出した。此奥樣は以前烏森で嬌名を博したと云ふが、現今は會社重役の奥樣、と崇められ、三越白木の賣出しに浮身を窶し、觀劇や物見遊山に尻も居据らず、虚榮の權化、流行の先驅者として、生活向きも贅を盡し、まことに成金黨の本領を發揮して居られる。――如何程收入があるにもせよ、此生活向では主人も嘸や氣骨が折れることだらうと竊かに自分は同情した。

翌日毎時出入の襟屋の番頭が行商に來た。奥樣は茶の間中に商品を一杯に陳列させ、あれよ、これよと品定めをして居られたが、漸くお目に止まつたのは瀟洒た山水模樣の絽の襟で、それを一圓五十錢でお買上になつて、私は襟屋に渡された。奥樣は閑人だからよからうが、多忙なる番頭が脊負つて居る限りの商品を所狹き迄に擴げさせ、二時間餘もくだらぬ品定めに費して、僅つた一圓五十錢の賣物とは、商賈も却々骨が折れる。

番頭は半日を汗水流して得意廻りをして漸く七圓餘の賣上で歸店した。不景氣で大抵の家では門前拂を喰はされ、歸店すれば主人は餘り好い顔も呉れず、得意廻りの辛苦もホト〳〵思ひ遣られた。店は大分閑らしい番頭も小僧も退屈さうに欠伸をして居る。主人が若い顔して算盤片手に帳簿と首つ引をして歎息するのも無理はない。したゝか骨を折つて、澤山の番頭小僧を使つて、それで此不景氣に遭遇しては、勢ひ長大息を吐かずには居られまい。其の苦痛は察しやられる。さらばといつて品物の仕入を怠る譯にも行かない。嶄新とか奇拔とかいつて目新しい物でなければ賣れない世の中だもの。如何に遣繰算段しても仕入地へ行かねばならぬ、仕入地より卸賣に來たとしても嶄新な賣口の良

い物は大資本の老舗に奪はれるので、明くる朝未明私は主人のお伴をして上州の桐生へ赴いた、私は未だ靜かな電車の中で、今我身は雜閙極まる停車場の出札係の事務員の手に渡るか、但しは近來鐵道事故の多い時節柄、不幸にして主人と共に軌道を枕に横死し、屍を野晒にするか、と内心危惧の念に堪へない、處が主人も產地へ行つて見たところ思はしき仕入がなくて僅の買物で私は幸にも歸京するの榮を得た。つまり二日の近縣旅行にいつて來た譯で一寸見られぬ田舍見物と洒落れた。不景氣だと生產地の商人まで製作を手控へするものと見える。

汽車旅行で疲れた足をやすめ今夜は早寢をせうと思ふて居た處、八字髭厳めしく頭は角刈に金縁眼鏡を懸け小粋氣な中形を着たハイカラ男が遣つて來て、妻君へのお土產か但しは妻君より强請られた結果だらう豈夫妹のゝではなからう、絽の絞りの模樣の襟を買つて五圓札を出されたので私はお剩餘金の中に加はつて此ハイカラ先生の懷に這入つたが、香水やチックの匂で臭くて堪らぬ、つい先の某洋食店へ威勢能く這入つて飢狼の勢で、麥酒一本に好みの皿六枚を瞬くひま、に平げた。斯うも人間は食に焦りつゝあるものかと驚いた。ハイカラ先生が食道樂で家の妻君が着道樂で、お父さんがあつて酒道樂と來たら三道樂揃つて居ると思ふた。

私は洋食店へ渡つたが、あぶらやバタで臭くて〳〵一夜碌々寢なかつた。一時も早く此家を逃出したくて仕方がない。曉の頃から起きて居れど此家では皆寢坊イヤ夜の營業で夜を更かすから朝寢も尤だが八時頃に漸く表の戶が明いて、朝餐の濟んだのは十時であつた私は逃出したくて氣が氣でない。午後になるとお内儀不平だら〳〵私と同僚を財布の中に入れて表へ出た。何處へ行くのかしらと思つて居ると、二丁許り先の横丁の質店の暖簾を潜つて私等と引換に自分のゝであらう帶と單衣物を受取つて行つた。彼の位の店を張つて居ながらこんな質屋へ出入するとは私には合點がゆかない。イヤ〳〵小商人は總て融通勝のものだと聞いた

こともあるから、あの店も此類に洩れないのであらう。

私は質店の金函中に在つて社會を観察すると、來るは來るは千客萬來でつく〴〵現代の生活難の程度が知れる。かゝる質屋社會にあつては、世が不景氣ならば預け人が多くて繁昌するから勢ひ不景氣を歡迎するかといへば却つて好景氣を一般商人と共に渇望しつゝある何故なれば不景氣の節には預け人許り多くて出し手がないから擔保品ばかり庫に堆積り自然資金の缺乏を告ぐるからである。さても此家の倉庫に堆積しつゝある品物は、所有主が涙を含んで持込むのであるから、或は深夜奇異なる聲を發して所有主に應援しはせぬかと疑はる。中には贓物抔もあらう。かゝる品に至つては最も所有主の脳裡に深く印象されたる品である。質屋稼業もあまり褒めた商賣でないと思つた。

黄昏れの鳥は塒に急ぐ頃、附近の裏露地の長家に住つて居る勞働者の妻であらう、みすぼらしい身裝で、小風呂敷脇に挾み悄然として暖簾を潜つた。定めし明日の糧の料を得んが爲めに止むを得ず此家へ來たのであらう。如何なる物を典じて我等を得んとしつゝあるのかと熟視すれば、子供の餘所行の單衣物二枚で番頭に無理々々强請の結果、漸く私一人を拉し去つた。いでや此れより米店に立寄り糧を購ふのであらうと思つて居ると、案に相違して漸く雨露を凌ぐに足る破家へ歸つて、亭主に何だか囁きつゝ私を其儘程遠からぬ家主へつれて行つて家賃の支拂をしたのである。此樣子ぢや少くも三四ヶ月分も滯つて居よう。世には金光燦爛目も眩むばかりの扮裝で馴馬に鞭打たさせ、意氣揚揚と物見遊山に贅を盡して居られる貴婦人もあるに、一方貧民生活の困難なるを見ると、一日の糧を得ずして飢に泣き、病に惱めるも藥餌を得ざる不幸の淵に沈める輩も多からう。して見ると勢ひ平等論が唱へたくなる。

程なく同じ長家で孝行娘の評判高きお露さんといふのが、五圓札を持て此家へ來て、家賃貳圓を拂つてお剩錢に私をつれて行つた。妙齢の娘が身裝も構はず洗ひ晒しの中形を着て居るのに、柄に不似合の五圓札

を持つて家賃を支拂ひに來たのに不審に堪へず、探つて見ると、此の娘は母子二人暮しで母は裁縫の賃仕事をし、娘は神田の或活版所へ女工に通つて細々と母子の口を糊して居るので、今日給料を受取て來たのだといふ。で五圓札の出所が分つた。斯る無敎育なる女子の細腕で一家生活を支持するを得るは社會事業發展の結果と眞に嬉しかつた。

が一體私は何故斯う足早に人手に渡らなければならぬのかと私の身の上を考へて見ると、成る程世人は私等を指しておあしと唱へて居るし、現に今家主の帳簿の表紙を見ても金銀如車と書いてある。して見ると私等は車と同樣に働かねばならぬのか。然らば私等も社會の勞働者であるが、何んだか侮蔑せられた樣な心地がしてならぬ。否々勞働は神聖なりといふから神妙に働かう。

今夜は狹いながらも母子二人の家で足腰延ばして好い心持で寢た。朝になると果して娘は洗晒の中形で工場へ行つた。後に婆さん一人せつせと木綿着物に針の糸を運ばして居る。晝飯には獨り悄然と食事を終へて、又もや些少の間も休まず稼出して居る。誰一人來るでもなく、家は寂として寧ろ淋しい。五時半に娘が歸つて來て、母に犒はれつゝ行水し、母子樂しさうに晩餐の膳を圍み、食後四方山の世間話やら新聞を讀み聞かせ、其れから背後に廻つて肩腰を揉んで居る。成る程孝行娘と評判される譯だ。

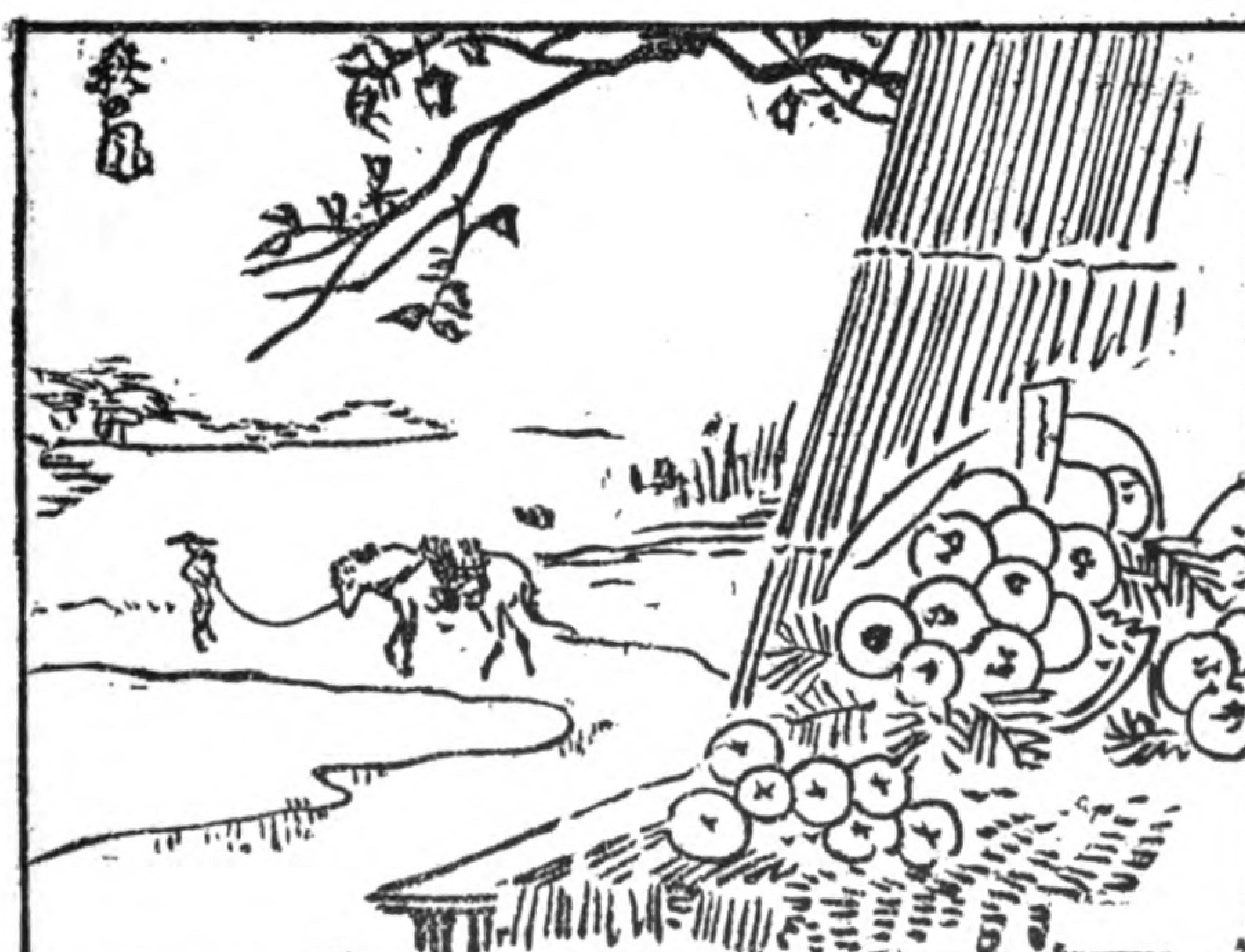
翌朝婆さん表の八百屋に茄子や胡瓜を買物して、私を八百屋へ渡した。處が八百屋の爺さん莞爾々々と私を再三押戴き神棚に入れ、神酒を供へ拍手叩頭した私は未曾有の待遇を受けたので不審で堪らない。段々訊いて見ると、今朝寢所へ天井から蜘蛛が下つて緣起が善くて今日は乾度善い事がある、開運の日であると思つて居る折、朝商ひに現金で昨日の賣れ殘りを賣たものだから嬉しくて〳〵私を神棚に崇め込だものだと分つた。

迷信には違ひないが蜘蛛が良いの、帶が結ばると良い事があるのといふ當になるかならないかは私には

判斷がつかない。だが這麼狭苦しい神棚に幽閉せられ古色蒼然たる神體と隣り合つて居ては窮屈で遣り切れない。矢張活社會に雄飛した方が面白い。乃で八百屋の爺さんどう感じたか多分金森通倫さんの貯金法遵守者と見えて私を貯蓄銀行へ入れた。此所では私の同僚は澤山居るが同級生には二人しか逢はない。私も大分人手に渡つて來たから全身垢汚まみれて居るが私共社會では汚ない程が古參者として尊敬せらるゝから、私も何だか肩身が廣い心地がする。

其れより二三の銀行を經て、十五銀行の金庫の人となつた。流石は華族銀行といはれる程あつて同級生も大分居る。久々で同級の面々に逢つたのだから各自が夫々經歷談や何かをもつて居るから、此期を以て第一回同窓會を開催しては如何だとの說が四方から湧出して衆議一決同窓會を開催したが、各自の功名話や失敗談で氣焰萬丈あたるべからざるの盛況で夜を徹したが、現世は黄金崇拜時代であるとは、各自が異口同音に唱へた聲であつた。

あか／＼日は
（なくつものれ蕉風秋芭）



佛蘭西の滑稽話

ラ、フォンテインは、エソップの様な面白い事を書くので、佛蘭西では有名な人で、其の著書は、彼國では殆んど凡ての家庭に備へ付けられてあると言つてもいゝ程に廣く讀まれてゐるのですが、丁度私の書棚の上に置かれてある其の書物が、今度皆さんが滑稽諧謔にいろ〳〵珍らしい工夫を凝らされるといふのを聞いて、さも羨ましさうにして居ましたからこゝに少々お仲間入をさせて頂きます。(かほる)

◎女の牛乳賣

一人の女が、牛乳を町へ賣りに行く爲に、頭の上へ敷枕を置いて、其の上に牛乳の入つた壺を載せて、いそ〳〵と家を出た。渠は短かい着物を着、平たい靴を穿き、いかにも身輕な扮裝で、何時になく大股で町を指して歩いて行つた。

これで無事に町迄行けば、其の牛乳は無論金になる譯だから女は行く〳〵其の價を計算して見た。そして更に其の金を何に使つたら可いかと云ふ事も考へた。

で心の中で先づ鷄卵を百個買ひ入れた。それから其れを孵へらせたところが、殼が皆破れて、大變美しい見事な雛兒が生れた。そこで色々手を盡して世話をすると、段々それが生長して



間もなく一人前の鷄になつた。

「アゝ、これは萬事都合がいゝ、……尤も狐には油斷はならぬが、それも家の周圍に飼つて置く段には些とも心配な事はあるまい」と獨り心の中で喜んだ。

と、又思つた、「若しさうなると金廻りも好くなるから、別に豚を一二匹飼はうかしらん、之れは餘り世話がやけなくて可いだらう、それに私が世話をしたら屹度肥ろに違ひない、そして大きくなつたところで賣るとすれば、又お金になる譯だ、オゝそれが可い〳〵、そしたら其のお金で又牝牛と牡牛を買つて家の厩に飼ふ事にしたとて誰れも小言は言はれまい」。

「……して見ると私も大分金儲ができる事になつた譯だ、アア是れからはいよ〳〵何時も牛や鷄の中に居て樂しく日が暮せるのかナ」。

恁う考へて女は嬉しさの餘りに歩き乍ら小躍をした。

と、こはそも如何に、頭の上の大事のものは地面へ落ちてアッチャンー。

壺は粉微塵、牛乳は川をなして流れた。と同時に、牛も左樣なら、豚も左樣なら、雛兒も左樣ならで、皆空になつて了つた。

折角大資産家になつた女は、我が身代の斯くも儚なく轉覆つたのを流石に恨めしさうに眺めて居たが、併し只それ丈では濟まなかつた。これから家へ歸つて夫に詫をしなければなら

ぬし、又或は甚く打擲されるだらうと云ふ危險もあつた。そして、家へ歸つたところが、果してえらく打擲された。

自分に確かな目的もなくて、心が彼方此方さまよふと云ふ事は、よくある例で、さういふ者に限つて兎角空中樓閣を描くものだ。此の牛乳實なども亦其の一人であらう。

◎孔雀と女神

昔希臘のオリンプ山に、色々の神樣が澤山住つて居られた。其の神々の一番上に位せられる方をジユピテルと言ひ、其の方の御妃をジユノンと言つた。

或日、一羽の孔雀があつて、其の女神のジユノンに申すには、

「ジユノン樣、私はどうも不服で御座います、或はお叱めになるかも知れませんが、想う申上げるのは決して無理ではなからうと思ひます、あなたは私に鳴聲を與へて下さいましたが、どうも之れは何人からも嫌がられて困ります、これに引きかへて、彼の鶯は、見れば誠につまらない鳥ですが、實に美しい聲を有つて居るので、春になると人はもう皆つてたかつて譽めはやします、私の身になるとこれは隨分つらう御座います」。

孔雀の泣言が終ると、何時も柔和な女神のジユノンも、大變に怒られた。



「オヤ、何うして其んな事が言へるのだへ、よく自分の身を顧みて、默つて難有く思つて居なさい、鶯の啼聲を羨むとは何事です、却つて他の者はお前の首の周りに虹の樣に色彩してあるのを羨んでゐる程です、それにお前は又キラ〳〵として實に美しい尾を竝べたてゝゐるではないか、私が見るとお前の身體は宛然寶石屋の店頭の樣に輝いてゐるが、凡そ世界にお前の樣な綺麗で人好のする鳥が又とありますか、能くお聞きなさい、私はお前達に長所を色々分けて與へたのだから、何んな鳥でも、その總てのものを自分獨りで備へてゐると云ふ事はありません、それゆゑ、鳥に依て身體が大きくてよいものもあれば、鷹の樣に輕くて高く飛ぶものもあり、又鷲の樣に力の強いものもあれば鳥の樣に未來の不幸を告げたりして卜占の用をなすものもあるのだが、それで何の鳥でも皆其の自分に與へられたところに滿足して居て、お前の樣に聲が惡いの何のと不平がましい事を未だ一度も言つた事がない、さうすればお前も泣言などを言はずに默つて居るべき筈ではないか、さもなければ私は罰として其の美しい羽も尾もすつかり取り上げて仕舞ひますよ」。

孔雀は大にへこんでしまつた。

◎若き未亡人

良人に亡くなられると、誰れでも大概大騷ぎをやる、泣かず

には居らない、がそれは別れた當座の話で、其の間に月日が經つと、段々自ら諦めて、遂には新しく慰安が出てくる。即ち時なる翼は、次第に悲みを載せて飛び去り、又樂みを齎して來る。故に良人に別れてまた間もない女と、既に一年位も經つた女とは、其の間に著しい相違がある。

或る處にまだ年の若い美しい夫婦があつた。誠に仲が善くつて、實に樂しさうにして暮して居たが、或時良人がふと病に罹り、色々と手を盡したけれども効がなくて、遂に彼の世へ旅立をした。

と、妻は悲しくて居ても立つても居られず、其のむくろに取りすがつて、「どうぞお待ち下さい！、妾もお後を慕ふて參ります、どうか妾の魂も貴郎の魂と一緒に他界へ飛ばせて下さい！」と言つて大聲上げて泣き叫んだ。けれども良人は獨り彼の世へ往つた。

此の婦人には、まだ父親をあつて、能く物の分つた人であつた。で父は娘が良人に別れて泣きくづれて居るのを見乍らも初めは其の儘にして置いたが、やゝ日が經つてから、慰める積りで娘に向つて言ふには、

「アヽ、泣くのは最うい丶加減にしたら何うぢやナ、死んで仕舞つたものなら、あたら姿を、さう窶して居たつて仕方があるまい、……斯う活きてゐる者の中に居るからには、何も死んだ



者の事ばかりを考へてゐるにも及ぶまいぢやないか、……」と言ふても今好い婿があるから直ぐ結婚させると言ふのではないが、併し又其の間にお前に夫を世話してやらうと云ふ人がないとも限るまい、そして其の男が美男子で、確かりして、年が若くて、前に死んだ良人よりもずつと良かつたとしたら何うぢやナ」。

之を聞くと、未亡人の娘は驚愕して叫んだ、

「何ですつて？、途方もない事を……、妾は最う尼になるより外に希望は有ちません！」。

父は、娘は彼んな事を言ふけれとも、此の悲しい境涯を今に消化して了ふだらうと思つて、其の儘構はずに打棄てゝ置いた。そして一ヶ月ばかり無事に過ぎた。

然るに、其の翌月になると、毎日娘の着物の上に多少の變化か見え出した。髪飾りなども何うやら樣子が變つて行く。終ひには喪服が祝日の服に更へられて、非常に喜ばしさうな姿になつた。さう斯うする中に、戀愛の神は群をなして娘の室を訪づれるし、遊びの神やら、樂みの神やら、舞踏の神やらも代り番こに舞ひ込んだ。

娘は更に朝に晩に沐浴して身を飾る事を怠らなかつた。

それを見た父親は、『アヽ娘も亡くなつた良人を最う慕はなくなつた樣だ、これなら先づ安心だ」、と斯う思つて、其の後は

何にも言はずに默つて居た。
すると姫は、父が餘り默つてゐるものだから、もう堪へられなくて。
「お父さん、何時かあなたがお話なすつた、若い夫と云ふのは一體何處に居るの？」。

◎破裂した蝦蟇

鷄卵の大さ位しかない蝦蟇が、或時大變美しい身體をしてゐる大きな牛を見た。
ところが何うも羨ましくて仕方がない。で自分の身體を牛の大きいのに較べては、延び上つて見たり、プーッと膨れて見たり、色々の作爲をして居たが、やがて自分の妹の蝦蟇を顧みて言ふには、
「ナイ、ちいちやん、一寸見て異んナ、もう大分大きくなつた筈だ、これならよもや牛にや負けはしまいナ、……それともまだまだ及ばんかナ？」。
妹蝦蟇は可笑しくつてたまらない、
「フ〻〻、駄目ですよ」。
「ぢや、これでもかへ？」。
「アゝまだよ」。
そこで蝦蟇先生いまいましいなと思ひ乍ら、今度はウンと膨



れよつた。
ところが餘り膨れたものだから、終に破裂して死んで仕舞つた。
實に滑稽な奴があつたものだ。いや人間にもこんなのがあるかも知れぬ。

△千代女の才藻

加賀の千代は俳句を以て世に知られたる才媛なり、其始めて良人を迎へし時の句に

澁からか知られど柿の初ちぎり

後ち男子を擧げ、掌中の玉と愛でけるが、六歳の時病みて死ぬ、千代女愁傷限りなく、終日窓に寄り遙かに田甫の方を眺めやりつ

蜻蛉つり今日はどこまでいんだやら

又或時某侯の邸に招かれ、○△□との難題を出されけるに

蚊屋一ッと手はづして見けり寢屋の月

と即座に咏みければ聞き居しもの皆感ぜざるはなかりしとぞ尚若くして夫に死別れしが獨寝のさびしくや思ひけむ、句を詠みて筆を遣りしとなん

起て見つ寢て見つ蚊帳の廣さかな

季節もやう



社會觀察

裏よりみたる 琴曲指南所

花　散　里

内の人
　師匠夫婦に内弟子の代稽古其外雇人
通ひ弟子の重なる人々
　松岡さん（小式部令孃）
　村井さん（中學校長の奥さん）
　金丸さん（株式仲買の令閨）
　林　さん（蠻カラ令孃）
　深井さん（高等官の奥さん）
　櫻谷さん（ハイカラ令孃）
　〆吉さん（赤坂方面の keyword）
其　他

昨夜はいつもより夜更かししたので今朝は眠くて、たまらない。ならば此の儘三日でも四日でも黒目のとろけて流れる迄も眠つてみたいけれど枕元の目ざましは遠慮なくチリ〳〵鳴り立てるから仕方がない澁々ながら起き上つた。寢室兼稽古室の掃除して琴に柱をかけてるともう朝稽古の先登第一に松岡さんがやつて來る。

「よく毎朝早くゐらつしやれるのね。」つて一寸お愛想を云つたら、

「あしたからもつと早く來るわ、我家ぢや洋燈つけて御飯たべるのよ。」

おゝいやだ、これより早く出掛けられちやアこつちが堪まらないわ。

でも熱心なだけあつてまだ漸く十三だといふのに手は能くまはるお子だ、こんなのを仕込んだらものに成るだらうなど思ひながら春の曲の稽古して上げると五六遍でのみ込んでしまつて歸つて行く。此の間にと髮をなでつけたり顏を洗つたりして御香の物つきりの淋

しい御膳に向つて御飯を濟ますと下女のお末どんが今日は洗濯物が多いから雜巾掛は糸路さんがして下さいと云ふ。其うちに又小學校の小式部連のつめかけだ。ギャア〳〵騷ぎながらお手玉とる者、階段に腰かけて唱歌うたふ者、隨分賑やかな事だけれどこんな細かいのでも數の中で一人多ければ月末には一圓だけ違ふのだから大切にしなければ不可いと常々奥さんがおつしやるから有り難がつて居なければならないのだ。だが何といつても相手は子供が一番好い、氣づまりで無くて遠慮がいらないから。

けれどもまた中には小つぽけな癖に恐ろしいまはり氣なのも有つて、

「あの方と私とは一緒にはじめたんだのに糸路さんは私には少ししか敎へて下さらないのよ。」

なんて覺えの惡いのは棚に上げて人なみらしく嫉んだり何かちつとも子供の樣ぢやありやしない……こんな事が耳に入ると今までは何とも思つて居なかつたのでも急にその子が憎らしくてたまらなくなる、けれどそれを色にあらはしてはまた奥さんから月末に……の御講義だから矢つ張り何とかあしらはなければならない、あゝ琴の師匠なんて人氣稼業もつまらないものとつく〴〵思はれる。



毎日愛宕下の村井さんは八時になれば五分とたがへずにチャーンと御出馬だ。中學の校長さんの奥さんださうだが朝つぱらから呑氣らしく出歩いて服裝も相當にしてゐらつしやるのを見ると御主人を座蒲團代りにする家付娘かさもなくば餘程手まはしの良い敏腕家に相違ないそれにしてはどうも物覺えの惡い事つたら一ツ處を三十遍ぐらゐくり返してそれでも忘れなければ好いけれど翌朝來た時はまた暫くは前日のやり直し、一昨年の夏から通ひはじめてまだ漸つと六段が終つたばかり、その六段にも三月かゝつて實にもう敎へる方が泣きたくなる、それでも御當人一向平氣なもので雨の日も雪の朝も定休日の外は缺かしもせずに御通ひだ。人の話にきくと御宅に居ても暇さへ有れば琴につかまり通しの御近所でも名代の奥さんなんださうで、全く眞からお好きでなくつちやあゝは參りませんからねえ、根氣の好い方もあつたもんですとほめるのだかけなすんだかこんな事を耳にしたのも一再ではない。前世紀の終り頃流行つたねじりたぼの英吉利卷に少し癖のある髮を油で固めて眞四角に大きくしめた繻子の帶はブカ〳〵運動して居るさわぎ。

「今日から何か新規におはじめになる樣に一寸先生に伺つて來ますから。」

と私が立たうとするのを遮つて、

「イーヱ糸路さん大變で御座いますよ今日は三つ四つさらつて頂けばそれで澤山で御座いますから。」

　これだものうんざりしてしまふ、仕樣がないから「雪」と「ほとゝぎす」とをさらつて上げた、でも全く熱心なもので自分の番がすんでも人の分まで聞いて居て歸るのは毎日正午ごろ、私なんぞ覺えの惡い人があると癇しやくが起りさうになるけれどその度毎にいつもこの方の根氣と熱心とを思出して我身を恥おる、私に取つては實に良い敎訓だ。

　昨日吉田樣から御使で明日は是非先生に王子の別莊へ御出でを願ひたい急に御客樣が有るのだからと云ふお頼みだつたので今日は先生はその方へ御出掛けになる、御迎への俥に御不自由な身をたすけて お乘せ申

すと、

「おやア糸路、疲れるだらうが稽古をたのむよ」とおつしやる。

「よろしう御座いますとも、吉田樣にもどうかよろしく。」と云つて門口で御見送りした。

深井さんは水のしたゝる樣なお島田にお召物もまた變つて今日はおぼろ御召のふるひ付きたい程がらの好い御袷、白地しゅら博多へ墨繪で芭蕉を描いた御み帶を好い恰好に小さく締めて葵の上を靜かにお彈きになる細い指には大きなダイヤがキラリと光る、まあ何て好い御きりやうなんだらう、あの涼しい目と長いまつ毛と、それよりも猶、私は伏目がちにおうたひになる口元が好きだ



あゝ私も女と生れた上からは一度はあんな御つくりして、あんなに人に羨まれたい、こんなつまらない琴の助手なんぞ……人はと見れば誰も彼も依然たり魂拔かれて綺麗な横顔や細つそりした後姿に見とれて居る處へやつて來たのは例の棒屋の金丸の奥方、私は芝居道樂着道樂で上流社會に通つ

てますといふ樣なあの顏つきからしてしやくに障る。何でも深井さんを目の敵にして其の上を〳〵とあせる樣がよそめにもそれと判る程だがどうして〳〵足元へも追付くものぢやありやしない、身のまはりなどには成程お金はかゝつてるだらうけれどたかゞ成上り者のことだもの自づと備はる品格といふものが皆無だ、そしてどうもひどいしわん坊で此家の奥さんの云ひぐさぢや無いが月謝だつて晦日にならなけりやよこさないし、盆暮の付け屆なんてした事はない、よくもあれで金紋付の手傳なんぞで來られたものだよ。

額には小さなしわが見える程だからもう少くも三十二三だらう目の縁の黑ずんだ中高面に臆面もなく刷き付けておまけに頰まで色どつてるからチャンチャラをかしい。

七五三縞を横に織つたお召の袷の衿を拔いてこれ見よとばかり金齒の光る口を大きくあけて今日もそろそろ御自慢の始まり……。

「この半襟は一寸變つてませう？　蜘蛛の巣を流行らさうと思つてわざ〳〵刺繡にやつたんですよ、上流社會なんて面倒なもんでね人のやらない事を考へ出さなくつちやならないから……。」

何が上流だい馬の骨めがとせゝら笑つてやり度いのを呑み込んで、

「左樣でせうともねえ、あなたなんぞは上流の中でも亦御指折なんでゐらつしやいますからねえ。」

といふとおだて上げられるとも知らず、

「寶石にまで流行があるんですよ、ダイヤなんぞすたれちやつて當節ではエメラルドで無くつちや駄目ですわだから私達でも眞珠だの紅寶石だのゝ指輪なんかは箱に一ぱいゴロ〳〵してるんですけれどはめ樣とも思はないんですよ。」

もう相手になるのも面倒だから默つてると濱町のお峯さんが、

「皆さん、コルチリアと寶玉つて話御存じ？」と云ひだした、

こゝであの話が出ればほんとに胸のせい〳〵するが

無駄話なんぞしてると奥さんに叱られるから稽古にかかる。

金丸さんと憎らしい二幅對は林さんだ、氣障な大前髪ふり立てゝやつて來て先生はと聞くから、

「急に王子の方へお出掛になりました。」と云ふと、

「ぢやあなたの代稽古？　そんなら又出直して來るわ」つてサッサと歸つて行つちやつた。

ヘンこれでも來年からは一本立の出來る糸路さんだ修業の爲めに斯うして此處の助手はして居るが一通りの稽古位に困りはしない何て失敬な人なんだらう……

午後から少しの途切れ目に琴の上に打伏してると朝が早いから眠氣が出て遂ウト〳〵してしまふ。

「糸路さん、晝寝する暇があるなら此の子の守りでもして下さいな、階下ぢやア私もお末も蒲團に綿を入れかけてるんですよ。」

あゝ奥さんだッと思つて頭をもたげるともう荒々しい足音は階段に亂れて光ちやん一人立つて居る、まあよかつた、餘程忙しいと見えて今日は御說敎も出なかつたなんて勝手なことばかり考へながら仰せの儘に子守りをする。

光ちやんも笑へば可愛い子だけれど盲目のお父さんにあのお母さんの子なのだもの、目がしらの上つた平べつたい面を見ると何だか不びんがさして來る。

「光ちやんいくつ？」

「坊は三ちゆ。」

「何がお好き？」

「お菓子と母ちやん。」

「それから何ァに？」

「ワン〳〵と象。」

「象は何てなくの？」

「ゾーッてなくの……。」

「ほゝゝゝこりやアいゝわねえ、象はゾーつてなくのは……。」

あんまりをかしいから一人で笑ひこけてるとガラガラッと俥の音がして先生の御歸宅、その内にまた學校かへりの御連中がドヤ〳〵。

「あゝ疲れた〳〵、糸路御苦勞だが今日は俺は休まして貰はう。」

と先生の御言葉、仕方がないからまた私一人で稽古にかゝる。

いつ見ても櫻谷さんのハイカラな事つたら漆黒な好いお髮をわざ〳〵前髮だけちゞらして、長い束髮はまるで袷の中に落つこちさう、紫矢絣の袷の袖裏でも長くはいた紺カシミヤの、袴の下から洩れる裾まはしでも皆白づくめの品の好さ、女學館では佛蘭西語で有名なんださうな、なぜあんなハイカラな方が御琴なんぞなさるんでせう。

ヴアキオリンかピアノでも遊ばしたらよさゝうなものをと餘計なことまで頭痛に病んであの方の御親友歌子さんに伺つたら、

「どうして〳〵ヴアキオリンやピアノなら疾つくに御卒業、また其の上にマンドリンでもセロでも何でも御上手になさるのよそれでも足りないつて此頃は長唄とお琴とをやつてらつしやるんですけれど……」と云はれて私はほんとに恥をかいた……。

一體御幾歳なんだらう十八……九かしらどうしてもそれより上には見られないわ、私だつてまだやつと來年二十歳になるんだのにこんな婆くさい不景氣な服裝をして……だから尚老けて見られるんだ……。

夕方の御菜は今日も亦御豆腐の御汁にお香の物、そのくせ先生と奥さんとの御皿には烏賊の甘煮が付いてたんだのに……。年が年中御精進ばかりでまるで御寺にでも居る樣だとお末どんも後片付けしながらブツブツ云つて居る。

此家ぢやア弟人が多いから月謝だけでも四五十圓はあがる、それに中流以上の家庭ばかりだから付屆なんかでも絶えず有るから何もこんなにつましくしないたつて普通にはやつて行けるのに……先生は糸路、糸路つてよく氣を注けて下さるけれど何分奥さんがあの通りな人だから愍觀せずには居られない、お菓子箱なんぞいつも戸棚に一ぱい積み重ねて有つても氣持よくお食りと云つて下すつた事なく稀に振舞はれるのはカビ

の生えた羊羹が振れば音する最中ぐらゐおやマアまあ私もいつのまにかこんな卑しい根生になつた。

たかゞ食物のこと位にヤキモキしてもしこれを草葉の蔭から御両親が御覧になつたら……武士は食はねど高楊子、あゝ止さう〳〵。

山王の森から日は暮れそめて家の中は急に暗くなつた。丁度洋燈を點けてると「糸路、お前の稽古をして上げやう。」と先生が二階でお呼びになる、お疲れでせうからよろしう御座いますと云つてもまあ好い〳〵とおつしやるから勸進帳のいゝふし直しゝて頂く。

それが終るともう八時。今夜はこれで稽古もあるまいと柱をはづしてると例の赤坂の〆吉姐さんといふのが來た、一體私は上品なのが好きだけれど此の妓を見るとあゝ粋な方が良いと思つてしまふ、全く何て好い人だらう太輪の銀杏返しに翡翠の五分玉、あらひ櫛目の入つた鬢尻が少しみだれて業平ねづみの半襟から抜け出した首筋は凄い程白い。



私がはづしかけた柱をまた掛け様とすると綺麗な歯を一寸見せて、

「あ、糸路さんいゝんですよ、今夜はして頂くつもりぢやないの、お願ひが有つてわざと夜分に上つたんですから。」

と止める。

「〆吉は吉原雀とか夕霧伊左衛門なんて意氣なものばかり撰つて習ひたがるから彈く手はあつても奥傳がやられない、どうも組物を知らなくつちやなア。」といつも先生がよくおつしやる事だがその奥傳を枉げて頂き度い、御祝儀の處はいか樣にも立派にするからといふのがお願ひといふの丶筋で有つた。

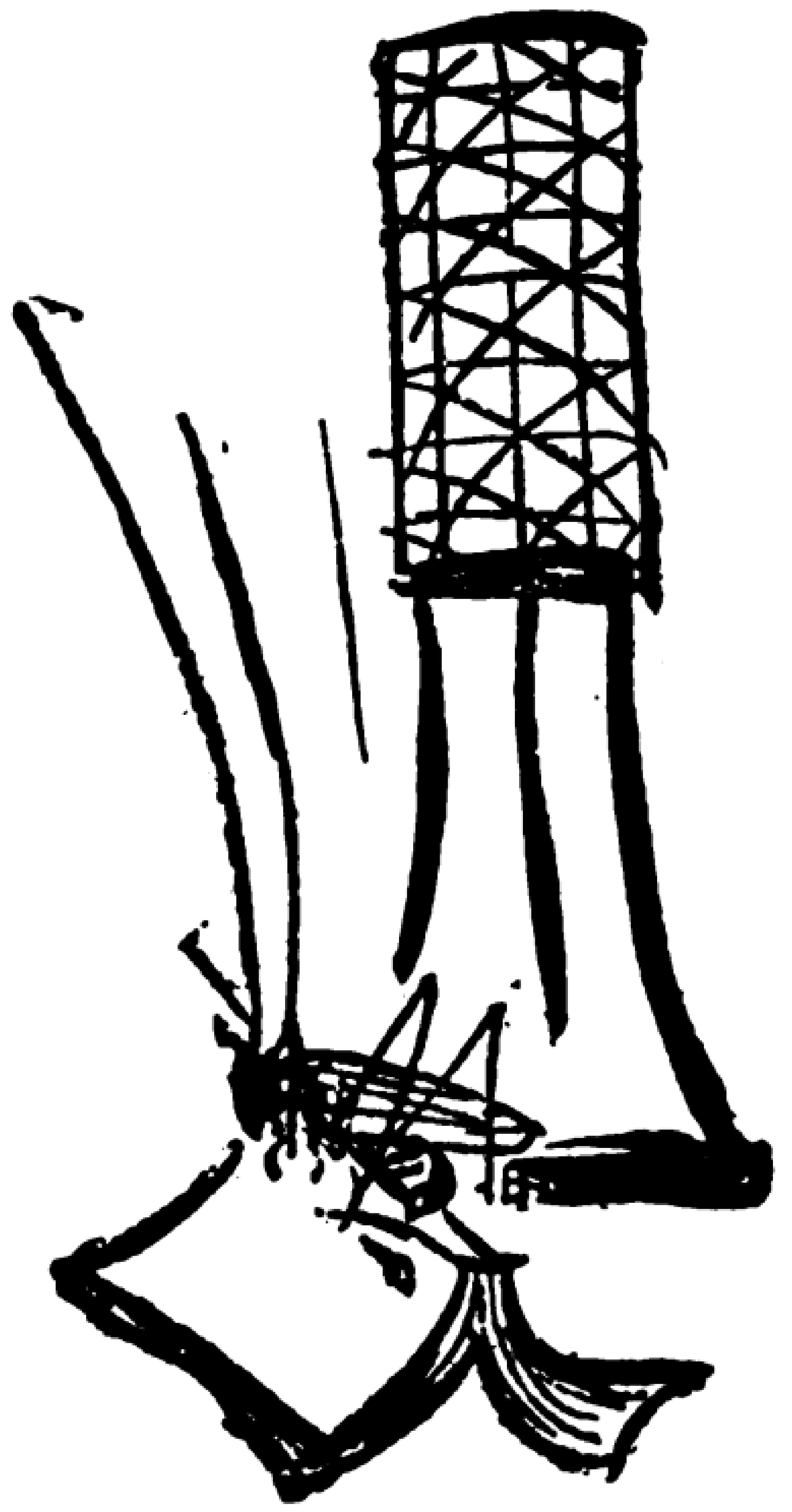
ハチ先生の御返答こそ聞きものだ、まさかに御祝儀の多寡ぐらゐで例外をお許可になるはずもあるまいと見て居ると、

「ちやヤ、組を殘らずでなくとも良いから二つばかりおしなさい、そしたら免狀は直ぐ上げますから。」とおつしやる。

まアよかつた、先生の爲め〆吉姐さんの爲めこ丶に祝福申上げ候。

戸締りを見て床に入るとすぐまた階下の六疊で糸路さん糸路さん、だ、何かと思つたら光ちやんに御小便さして下さいなんて、あんまり人を馬鹿にしてるぢやないか、二階に寢て居る者を何もわざ〳〵起さなくたつてその位の事は自分でするが當然だ、それがいやならお末も居るのに……口惜しさはムラ〳〵こみ上げて來る。そればかりか西本さんが先月分の月謝を未だよこさないから明朝來たらば催促してくれ、それから石油が費つて困るから床の中で雜誌みたり手紙かいたりすることはよしてくれたと……晝間追ひつかはれて暇がないから夜するんですと口まで出か丶つたのをかみしめて退る。

あ丶何て無意味なそして果敢ない生活なんだらう夜着の襟に面押し當て丶心ゆくまで夜すがら泣いた……。



笑＝人情哲學

とし子

△會心の笑

○此の一事はわが一身の進退の決する處、此度の選拔試驗には願はくば我が最も得意とする歐洲各國の首府の景況、殊に伊太利の興亡史？などが黑板に現はれよかしと、人が鉛筆削りに急がはしき間も、われは誇りがに瞑默端坐して、まだ見ぬ各國の地圖眼前に横たへつ。やがて憎きばかりの受驗係りが鶴の一聲「四十五分間より時はない」といふに、呻、心の波動は搖ぎそめたり。決然眼を睜れば、扨も、出たりな、「羅馬全盛時代の云々。」かくて問題と答案の已に手を傳ひ、筆に移りて身心これに合體したる時。

○春雨しめやかなる夜、古傷の痛むが如き憎みを覺えて、友に文書く勇氣もなく、人に物言ふも物うき折、何心なく開き見たる雜誌などの、記事が己れの言はんとする處、常に胸に蟠まれる事の解決などにてあらん時。

○眼のあたり見し友の身の悲劇に、少なからぬ刺戟をうけて、夜一と夜瞼あはず、人事とも思はれぬ思に、敵を怨み、人を憎み、行爲をあざわらひ、果ては社會の秘密素つ破拔いてと迄思ひ詰めて、こゝに形式を小說に假り、曉起きの勇氣滔々、一氣呵成に書き上げたる時。

○かねて噂には秀れたる人ときゝしが、また媒介人もこよなき緣と切に勸めしよりの今宵の見合なれど、僅かに一二時間の睨みつくら、好いた、嫌ひのと云はれるものでもなきに、とはいへ直感に訴へてよいと思たら、きめておしまひなされと、さる經驗のあるお人より耳にせしことも思ひ出されて、とにもかくにもと華奢はきらひの薄化粧、むしろ少しくひねくれ氣味に伯父樣御夫婦に連れられて、定められたる茶寮に赴けば星ケ岡宵闇の青嵐のひまにきこゆるそれかと思はるゝ人の笑聲、あれ位の大聲を出す人ならば、先は……と第一の會心の笑。やがて何くれの席も定まりて運び出

さるゝ路の勝部、今少しは大膽なるわれと思ひしものを、なか〳〵に頬のみ熱う顔も得あげぬ意氣地なさよ何を問はれて、何とこたへしやら、一切夢中のうちに時は過ぎて、やがて歸りがけの玄關に初めて眞正面に御挨拶し参らせし時。

○主人より只半日の暇いたゞいて來て見れば、暮るゝとはしり乍らなほ去りかねし花の下。朧月の興をも散散味はひし果が、酔ひしか迷ひしか、ならはぬ町はづれに袂ひかれつ。これは〳〵とばかり焦ればあせるほど意地のわるや、香もなう襟にかゝる櫻しぐれ。しばしいらはせてと、とある垣ぞひ柳の木蔭に立てば、いづくよりともなう鼻をうつ柴舟の香り。今の世に扨もゆかしき人のあればあるものかなど感ずるほどに、内より人の氣勢して、折のわるいとほりしぐれお茶一とつ召しあがる暇には……とうれしう導かるゝ茶室の床に、利休の器ちらと見し時。

○「さしも甘いもの好きのそなたが此頃の行儀の善さはどうしたもの」と夫の君に詰られて、せんかたなさの照れがくしに、「はいもう甘いものには飽きました、これからお砂糖の毒消しにちと夏蜜柑など戴いて見ませう」とへらず口叩けば、「そんな手療治は眞平々々、それより榊さんか伊庭さんにでも往て診て貰へ、」と見事喝破せられし口惜しさ。さはれこの儘にあらんもとて、いはるゝまゝに行きて見れば、あゝ、お大事になされと、お醫者さまに泣笑顔に送られし時。

○今日は如何なる惡日ぞ、帳面を見れば朝より今迄現つけ一とつ、元結三束、それに香油が一本賣たつきりこれではもう商賣も、何もあつたものでなし、人をもしろくもないと半ば自棄半分に死斯を點せし處ろ、「お内儀さんあの菊水模樣の銀簪を見せて頂だいな、三月掛つてやつと今日お仕着の代りに買て貰ふのよ」と俛氣なく店先に立たれし時。

○來客のあとにて「御苦勞だつたね。」といはれし時。

「夜更けて御歸あそばれし折など、」まち遠だつたらう」とにつこり顧りみられし時。

△苦笑

○日常は見も聞もせぬ他人連れの、一朝わが家の棟に福運むきしと見るや、頼みもせぬに煩厭く出入して、底の見え透く追從ぶりに何もしらぬ子供や、無意識なる婢僕をも抱き込まむとする人の心根の見えし時。

○端なく出でし諸國廻りの談しに、「奈良の大佛は見物やさうな？」と今更めかして尋ぬれば、「ヲット待つたり」といはん斗りの顔して、「そりやもう何にしても今頃は春の霞がお眼のあたりに棚引てゐる位ゐ、途方もない大きなものなり、鎌倉にもあるさうなが、顔ばかり美くしうて、餘り大きうはない相な」と全然自分の倉にでも藏つてあるような口振り、一とつ鼻空かしてやらむと「さうかいなあゝそんならいつ頃お參詣なされたえ？」と重ねて問けば、「そらもう、わしの國どすよつて小兒の時分から、日がな日通し、御飯よばれぬ日はあつても大佛さんを拜まん日は御座りませなんだ」とすました顔に答へられし時。

○英語は立板に水の如く操りたまひ、外國人と見れば、辣腕振つてもはなしたまふマガレットの君、さすがにお目にかゝりて心地あしからず。但し何時迄御愛嬌が一人のお方に續くやらむと見まゐらすれば、忽ち起る彼方一叢よりの歡聲、間々に漏るゝお談しはすべてこれ日本語は三分辛うじて接續詞助詞に用ゐたまふ位なり。ものゝ十分も話したまうかと見ればスラスラリとまた此方へ。かくして花のやうなる君は今日のまとゐの女王なりしが、何の思ひたがえしたまひけん英國の詩人論に思もよらぬ、佛獨の諸詩人を麗々と並べ立てたまひ、しかも恬として恥かしとも思ひたまはぬお口元見し時。

○人の惚氣話きかされしとき。宜き失敗さらけ出さる時。

△陶然の笑

○まだわが家に來て暫時、都なれぬ退屈さにや、ある夜番頭の喜助が口車にのせられて、お國自慢の潮來節鼻加答兒の苦しき息を唸らせてうたひし時。

○見渡す煙波渺茫として眼を遮るものもなき濱邊に、罪もなき蟹の子等の、理由もなき事にいさかひして果

ては掴み合ひ、上になりつ下になりつ、わつと泣きいだせしそこなたよりながめて興ある時。

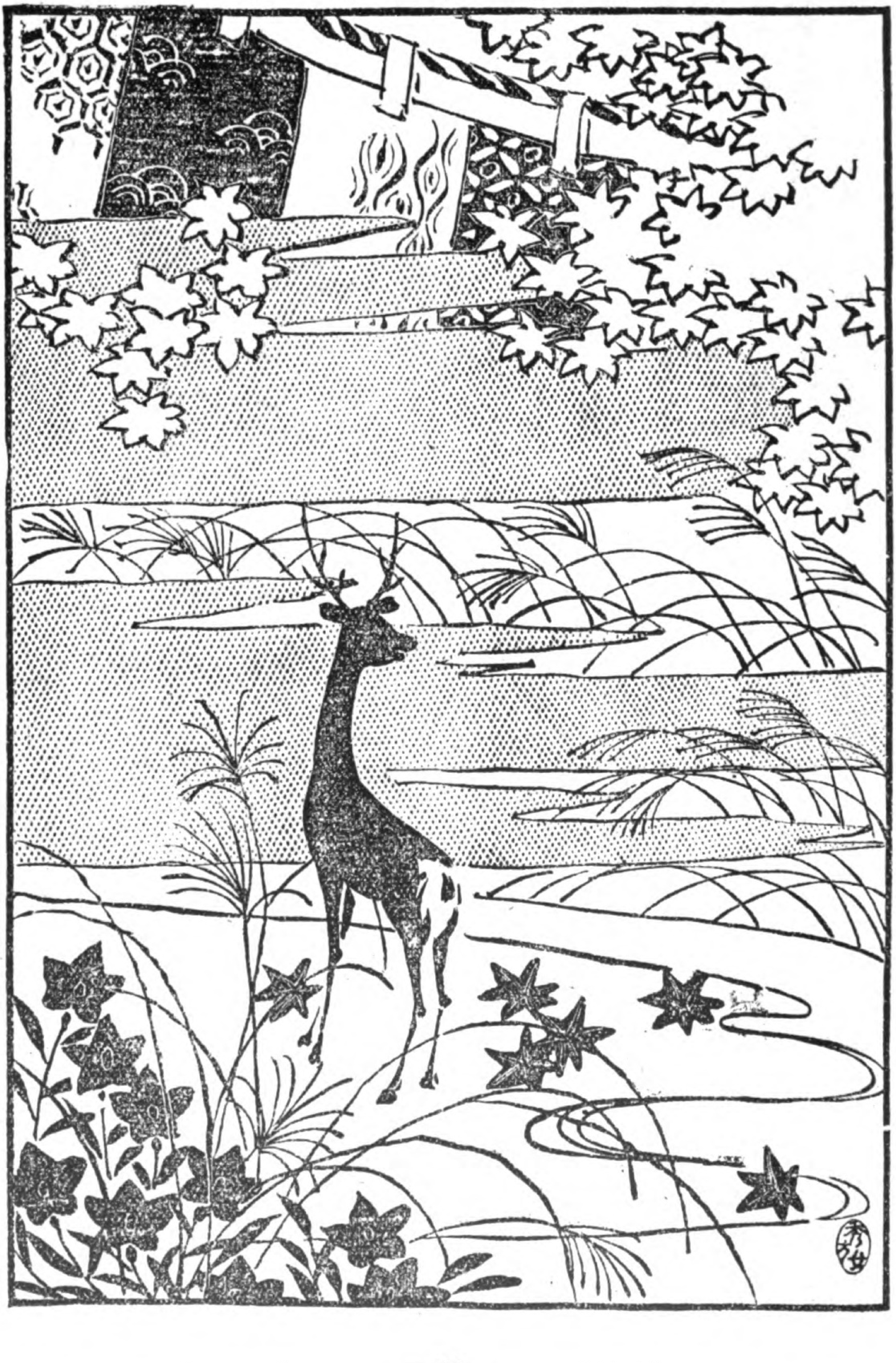
○幾年ぶりにかへる故郷、野越え山越え十里が程は馬も通はぬ嶮岨なれど、家をおもうなつかしさには何物を以てもとゞめんようなし、かゝる折、例として立ちよる麓の乳母が宿に、釜の湯たぎらせ乍ら語り明かす夜一と夜は、われに無上の詩を與ふ。しかも「婆やも年を老つたねえ」とつく〴〵白髪あたま撫でゝやれば「あんだ孃さまのお年知らず、今にごげんにおなりなされるだに、わしだとて昔しや鶯鳴かせた春も御座んしたわよ」と老いても忘れぬ暢氣な物語りには、催るじとすれど陶然の笑。

その他、泣き笑、追從笑、あざけり笑等數々あれど、涙ほどには泌々と身にせまる濕ひの味もなければ。

戀に溺れた獅子

或時獅子が牧場を通ると、恰ど一人の羊飼が仕事をしてゐた。見ると大そう可愛らしい娘だ。で非常に氣に入つて、どうも欲しくてならなくなつたものだから、其の娘の父に向つて、どうか娘を自分の嫁に呉れいと云ふ話を持ち出した。すると、その父は考へた、成程娘も最早年頃になつたから、結婚はさせてもよいが、併しもう少し柔和な婿が欲しいものだ。彼ンな獅子にやるとは些と可愛さうな様な氣がする、とは言ふものゝこれを斷る事も出來にくいし、さてどうしたらよからう、と色々頭を悩ましたが、遂に獅子に向つてかう言つた、「それは何うも難有いお話です、併し私の娘は、御覽の通り極く閑雅な嬪々しい方ですから、貴下が可愛がつてお撫でになると、只今のお爪では、何うも傷が附きさうで心配ですから、どうか其れをお剪り下さい、それから又あなたのお齒も鋸で磨り卸して頂きたいものです、そしたら一寸貴下が接吻なすつても、娘に大變やわらかにあたりませうからさうしたら私も安心して差上げる事ができませうし又娘も心配せずに貴下を大事にしませう實は貴下の御幸福にもなるのです」と之を聞いた獅子は、ウムよしよしと承諾して、早速爪も齒も除つて了つたのである、そこで獅子は婿入するつもりでやつて來る。と、此方には疾て準備をして置いた五六匹の犬をさし向ける、流石の獅子も甘く謀られたなとはおもつたが今は犬にさへも抵抗ができなくなつてゐるからもう散々にいぢめられて、とう〳〵捕虜になつて了つた。（[illegible]偶意譯）

季節もやう





趣味ある食卓

美登利

△姉　妹

二六新報のポンチ畫では無いが、眞實に雨と日和と片寄つて昨今の照りつけ様と云つたら無い。庭へいくら打水をしても、直き干いて仕舞ふ、留守中に枯らしてはならぬとお守を仰せつかつた盆栽に水を遣つて縁へ腰を下ろすそよ〳〵と風が白高麗の竹の葉末の露を散らしていかにも涼しさうだから花臺へ乘せて机の傍へ置き、さて有馬温泉の良人の許へ文を書きはじめる。オヤ郵便が來た熊本の天野の姉樣からお手紙だマア早速お返事を下さつて嬉しい事、いつも乍らの細々と御様子が見える樣

△何か夏の料理の珍らしきをと仰せ越され候へども、此頃の暑さにては夕刻の行水後餘り手の掛つた品調理にては、又々汗に成り候まゝ可成手輕なもの斗り致し居り候へども、御參考までに私宅の食卓日記を御覽に入れ候

此頃の暑氣では誰も食が進ますそれに良人も近頃は御酒の量が少なく大抵猪口に二三杯故御酒のお肴も澤山入らず餘程簡單に成りました先づ今日の献立は

△水　曜　日

(一)鯛のさしみ　(二)にがどうりの味噌煮

(三)マーヤーサイ　(四)鯛のうしほうどの短冊

(一)鯛を百二十目斗りの內良い處をさしみに作り、殘りを薄鹽あてゝ置く、

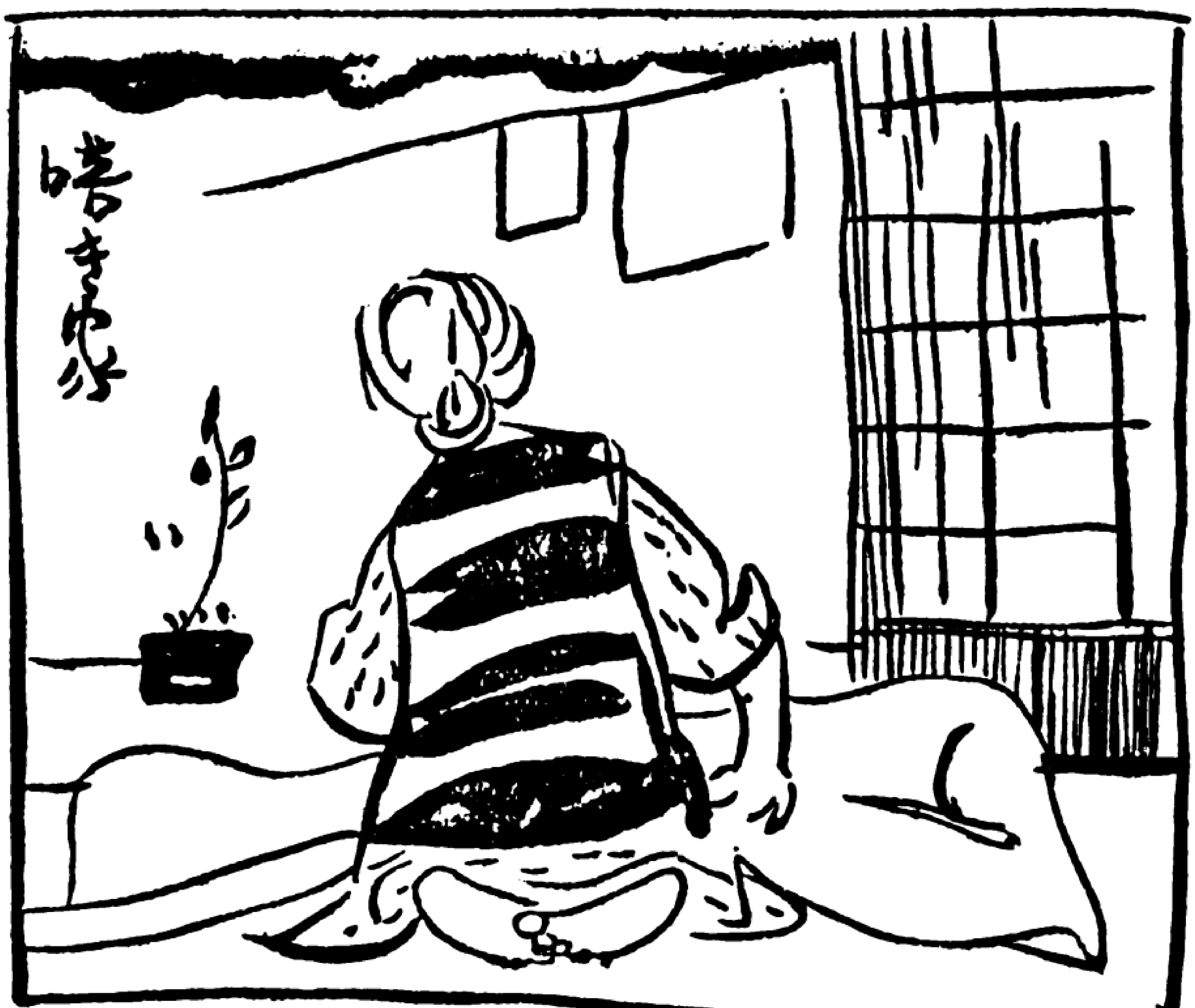
(二)にがどうりは東京邊では「れいし」と云つて熟し

て柔く口の開いたのを子供の時食べた事が有ましたが　味の加減をして茗荷の子を入れる。

此地では青いのを八百屋が持て来ます、中々苦いものですが御酒の肴には鳥渡妙だといふので、庭の隅へ二三本植ゑましたら澤山生りました、一つ取つて細かくきざみ、胡麻の油で能くいため砂糖と酒と味噌を入れて煮ます。

(三)糸寒天を水につけて絞り五分位に切り干海老の皮を去り熱湯につけ引き揚げ細かく剝み鯛のさしみ半分と胡瓜と胡椒末と砂糖を入れ酢醤油で混せ合せます

(四)煮だしを作り煮立つた處へ塩したる切身を入れ



土曜日には良人が検閲の爲め郡山附近へお出掛で辨當が入るぞとの仰せゆゑ、暑中御飯もいけまいからサンドウィッチに仕様と思つて今日から牛の舌をつけて置く

牛の舌は一本求め、其儘水八合、塩四合、赤砂糖二合、硝石二サジ、を煮立てゝさまし、其中へ浮かぬ様に漬て置く、夏は三四日、冬は十日間で、取出し水からゆでる事四時間許り、夫を皮を剝いて薄く切り、バタ又はねり辛子をつけて食パンの間へ挾むか、又は薄く切つて西洋皿へ並べて酒の肴によろしい。而して

能く煮てあるから夏でも二三日位は持つ

△金曜日

今日は亡兒鐵男の命日、朝涼の内に墓參に行うと衣服を揃へる。あゝ去年の今頃この着物の仕立を急いで鐵男を連れ、三角港へ海水浴に行つて樂しい夏を過したのに、嗚呼僅か一年で替れば替るものとあじき無く涙がこぼれる。とう／＼返らぬ繰事止めにしませう。恁な事妹が聞たら姉さんは愚痴ぽいのねえと笑ふで有う。花畑へ廻つて秋に先だつ、色よき桔梗撫子を購ながら手折り暑くならぬ間にと道をいそぐ。

歸つたら今日は不漁で魚屋が參りませんと云ふ。無據。（一）鮎の煮びたし　（二）きうりもみ　（三）牛肉のたゝき揚げ　（四）蜆汁　（五）燒團子

（一）干鮎を能く洗ひ鍋にだし昆布を一枚敷き、其上に鮎を並べ水を澤山にして二三時間文火で度々湯を差し湯煮し、柔かく成た處で、酒と砂糖と醬油を入れ氣長く煮ると頭から骨まで柔かく、齒の無いお姑さんでも殘らず上り升、昆布も柔でおいしく成升。

（二）胡瓜は例の通り剝で鹽もみし別に白胡麻をいり能くすり油揚を剝がして中の豆腐を出して一緒にすり砂糖に酢を加へゆるめ置き、油揚を細かに刻みごまめ（東京の白すぼし）を洗つて油揚と共に酒醬油で一寸味付けさめてから胡瓜と皆一緒にあへる、靑紫蘇を剝で入れば尙よろしい。

（三）牛肉を細かに叩き玉葱と生姜のみじん切を浮粉少しと鹽胡椒を入れ平たきものを作りバタにて揚る。

（四）蜆汁は赤味噌を例の通りたてゝ煮立てから蜆を入れる。

（五）亡兒生前好な團子を作つて供へる。まづ米の粉一袋湯にてはら／＼位に混せせいろにて蒸す。能く蒸せてから出して臼の代りに摺鉢の中で摺子木でとんとんと搗く。夫を團子に丸めて竹串に五つづゝさして燒き少しこげた處で醬油を付る。

東京では良く燒團子を賣つて居るが當地では頓と見當らないのでお姑さんも珍らしいと喜んで上つた、宅

では今は子供が無いからお八つと云つて別にこしらへず時々佛様の命日に何か拵らへます

△土曜日

今日は檢閲で例より御出勤が早いから朝四時に起る。まだ薄暗い様だが雨戸を一枚明けると冷やかな曉方の風が寝衣の肌に心地よいみ空には星影まばらに淡い在明の月が木木の露を玉とてらし蟲の音微に聞えいひしらぬ詠めである手水を遣ひ衣服を改め、牛の舌の湯煮を初め丁度六時半頃に柔かに成つた。

△サンドウイッチ



パラダイスロスト

牛の舌の柔かに成つたのを薄く切つてパンを切り兩面へバタとチリ辛子を付て中へ肉を挾みて作る。

今日は九十度以上の暑さ家に居てさへ汗が流れるに炎天に馬上で指揮なさる〻事、嘸お暑い事ならん何か冷いものでも拵へ度と考へても、鳥渡思ひ付も無い。午後三時お歸り汗が帽子の下からたら〱流れ額も襟も眞黒でピリ〱して痛いと仰る早速湯ざましを井戸で冷したのへ蜜柑液を入れて上げたら旨い〱と二杯息もつかず召し上つた。

○蜜柑液

之は今年の一月手製して置たのです。

アルコール三十錢位口廣のガラス瓶に入れ、蜜柑の極く新らしいのを皮を剝いて二つ分皮だけ入れる、二十日計經つと皮が堅くカチ〱に成るを度とし取り出すと跡のアルコールが透明な液となつて其匂ひの良い事胸がすく樣です、其皮を出して後栓を堅く密封して置て夏に成つて氷水や沸し水へ砂糖を入れ其中へ四五滴落すとレモンの樣で中々おいしう御座い升、此冬は是非試して御覽なさい。夕飯は井戸で冷したビールを出し獻立は

（一）鯒の洗ひ刺身　（二）ずいきと枝豆の胡麻和へ
（三）鯵の鹽燒にたで酢　（四）鯒と豆腐の味噌汁

（一）生きた鯒を刺身より少し大きく薄く切り冷たい水に鹽少し入れて二三度さつと洗ひ皿へ付てから氷を添へ付合をばとさか海苔とよまき胡瓜の小口切り。

（二）ずいきは一寸位に切りゆでゝ絞り、枝豆はゆではぢき出し、別に白胡麻をいり能く摺り砂糖と酢醬油を加へ加減してずいきと豆と和へる。

（三）鯵を鹽燒にし蓼の葉を摺鉢にてすり、其中へ柔かき御飯を少し入れ、摺り潰し酢を少しづゝ入れ伸して青酢を作り小皿に添へてからかけてもよろし。

（四）洗ひの殘りを味噌汁の煮立ちたる中へ入れ後から豆腐を入れる。

△日曜日

よべの雨に洗はれた庭の樹木は、光澤を持つていきいきと、綠碧の空はところ〱白雲を浮べて午後の暑さが偲ばれる。

來客が有るかも知れ無いからと橋田へ午前に魚を持つて來る樣云つけて置たら車鰕の大きいのと鯛を持つて來た、十時頃杉江少佐が來られたから早速仕度にかかる、杉江樣の奧樣は却々の料理通で被在るからめつたなものは、上られ無い。先づビールに味付海苔と昨日の牛の舌にねり辛子を添へきやら蕗を小皿に付け取

敢ずお酢を出して置く。

(一)鯛のさしみ

(二)鰕のフライ

(三)鰕と茗荷子の酢の物

生姜を添へる

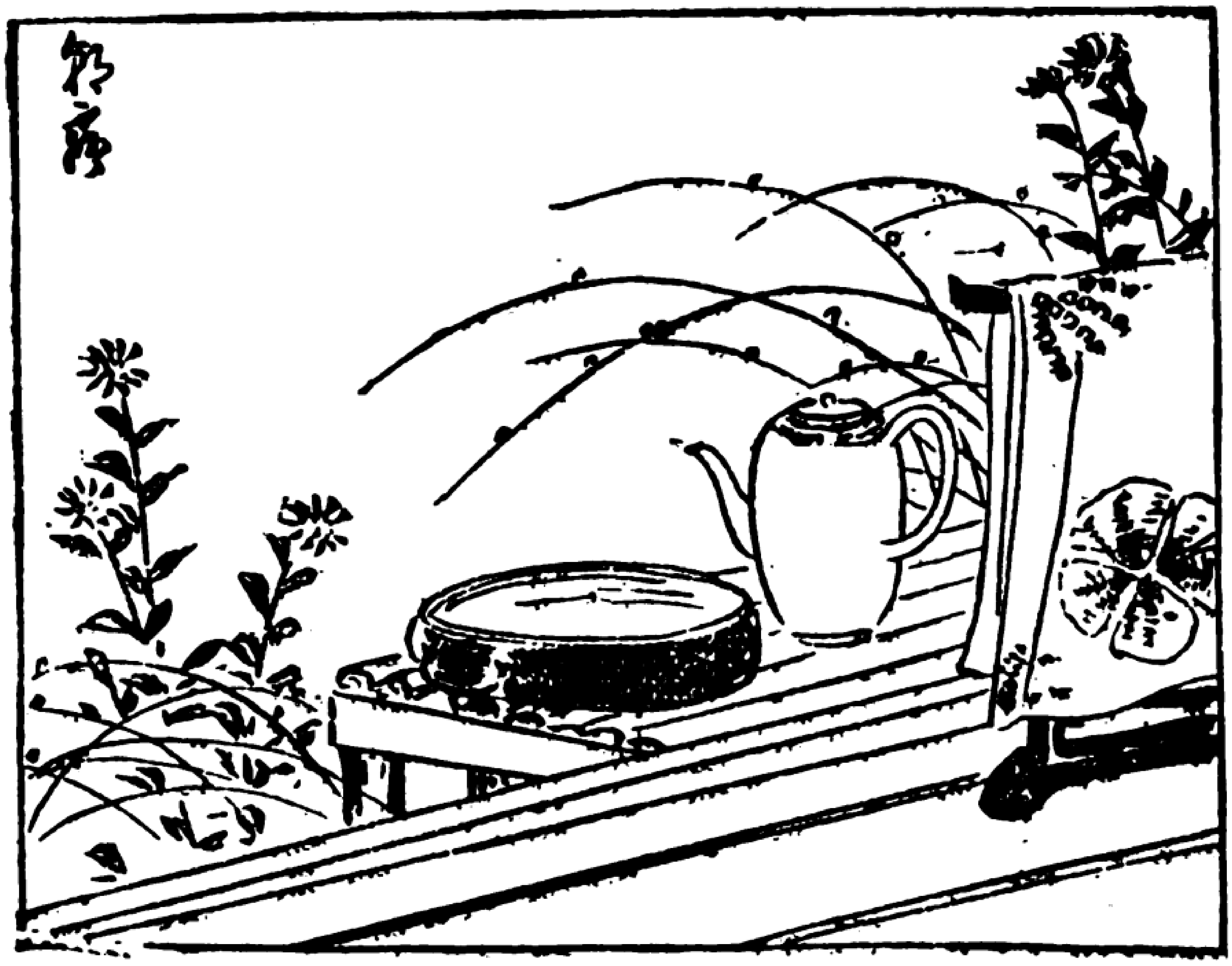
(四)鯛の葛たゝき清汁

(五)焼茄子

(一)鯛の刺身は例の通り

(二)鰕の皮をむき尾を付て置く、先づメリケン粉を能く付け玉子にくるみパン粉を付けラードで揚げる。

(三)鰕を塩うでにし、皮を剥き細かにさき。青海苔は水に三十分計りつけて引上げ短冊に切り、茗荷子は薄く刻み鉢皿へ三つに分けて盛り合せ上へ生姜の細く切たのを砂糖



酢頭の三杯酢をかける

(四)鯛の肉を平たく刺身の様に切り鳥渡鹽をふり葛粉に塗して延擂木にて軽く叩くと薄く紙の様に成升、之を水につけ直に引上げ青味と共に吸物にす。

(五)茄子の大きいのをヘタの付た儘で焜爐の火の中へ入れて焼く、ヘタを持つて上下返しちうちう水が出て手で押すと柔く成つたを度とし、一寸水で洗つて、手で皮を剥く、夫を引きさき黒胡麻をいり砂糖醤油で和へる、茄子はゆでるより焼く方が甘味があり之はしぎ焼より手軽で急ぐ時にはよろしい。

彼是思つた程の御馳走も出来ませんでしたがお客も皆箸を付

て下さつたので良人も御機嫌が良いのでほんとに嬉しう御座いました。

今日は土用の丑の日東京ではいつも鰻を食たとお姑さんが仰つたから夕食は鰻に致しませう、然し熊本の蒲燒は味が東京の樣で無いから、宅で燒きませうと思つて素燒の鰻を取寄せる。

（一）鰻の蒲燒き付山椒の實　（二）あら清汁

（一）素燒の鰻を一度蒸して燒き別にタレを拵へ付ながら度々燒く

鰻のタレの分量は味醂一合、醬油八勺、砂糖少々、あめ二匁で、別に山椒の實の煮たのを付る。

之は山椒の實の若き房を取り洗つて湯煮し一日日光に乾かし又洗つて醬油味醂砂糖を入れ弱火で長く煮つめ置く、今年にて二年に成れどつや〳〵と少しも變味らず付合せに少しく紫蘇の實の鹽漬を入れ叩き混するとよい香りがして炊たての御飯にかけるとおいしい。

（二）お晝の鯛のあらを鹽にしたのへ夏菜の青味を入れ清汁にする。

姉樣は御料理好きで被在るからいろ〳〵の珍らしい御馳走が有る、御歸りに成つたら試して見ませう。

△月曜日

主は留守で來客も無し、勝手元は至つて閑だが天王寺から阿耶女、篠枝、三枝の三姬が海水浴のお客に來て、家の子供と八人で隨分賑かだ、恁ういふ子供客には手の込んだ御馳走では廻りきらないから何でも簡易で味しい物をと考へる。

（一）變則シチウ　（二）小海老くづし清汁

（三）小鯵の貝塚煮　（四）茄子でんがく

（一）玉葱ジャガ芋、西洋人參を、程よく切りザツとゆで、牛肉百五十目（子供の故ジプの樣に薄く切る）と、ともに深き鍋に入れ、かぶる程の水にて野菜の柔かく成るまで煮る、夫を引き上げ、其汁へ鹽一匙入れ、別にメリケン粉を篩ひながら、鉢へ入れ水にてどろどろにとき鍋に入れ掻廻しながら煮立る、引揚げた野菜肉へ罐詰の青豌豆と鹽二匙ソース少々入れバタにて

いため、皿へ盛り前のどろどろをかける。

(二)小海老の頭を去り水にて洗ひ皮を剝き、俎にてよく叩き擂鉢に入れ玉子一つ鹽一匙落しよく擂り混ぜ例の鰹節のだしを加減し、煮立ちし處へ金杓子にて入れる。青味は夏菜のせん。

(三)今朝の網でとれた一寸位の小鯵(鰯にても小鯛にても宜し)を水にて良く洗ひ(二寸位の時は腹を出す)ザルに入れ置き、梅干と赤紫蘇を水にて暫らく鹽出し丶、鍋に竹の皮を敷き鯵を入れ



かぶる位に醤油二合、酒一合の割にて入れ其上へ梅干と紫蘇をしぼつて並べ初め煮立迄強き火、夫より弱火にて二時間煮て下ろす、少し前三盆白を振りかける。頭も骨も柔らかく夏にても四五日は保ちお辨當のお菜によろしい。

(四)茄子の皮を剝き、三分位に切り暫らく水に放し布巾にて水を切り、フライ鍋にラードを入れ兩面少しこげる位に燒き胡麻味噌を付る、味噌の作り方は黒胡麻をいり擂鉢にて能くすり、砂糖味

醂にて甘口に加減する。

お八つには水羊羹を拵へる。

小豆一升にて餡を作り能く晒し（晒方は桶に水を澤山入れ餡を袋どし入れ幾度も水を替へてよく掻き廻す）一夜水に浸け置く。

二升の水を大鍋にて煮立て、寒天五本をちぎり乍ら入れ塊の無くなりし時ザラメ糖四百目と前の晒餡を入れ、こげつかぬ樣手早く掻き廻し、煮詰りし時ブリキの箱か切溜の蓋へ流し三時間の後出來上る、之は其加減難しく初めは強く、中頃より弱火にて成可は一人焚方に付きゝる方仕損じ少なからむ最焚火がよろし。

△火曜日

早朝子供を連れ濱邊を散歩する浪打際で貝や小石を拾つて遊ぶ、例眞向ひに墨繪の樣に浮ぶ淡路島、霞の内に見えず、はてもなき碧の海と淡紅色の空の色との調和がいかにもいゝ。遠くから舵の響がして穏やかな朝の海上を夜釣の舟が此處をさして歸つてきた濱べに待つて居る漁夫の妻は皆自分の舟へ馳け寄つて得物を籠に入れる、今日は太刀魚斗り。三尺の秋水朝日にきらきらと朝の濱邊は勇ましく心地良い。太刀魚は小骨が多くて子供にはいけまいけふの献立は

（一）ハモの湯引　（二）薩摩芋の葛掛

（三）あなごの八幡卷　（四）お八つ南瓜のあべ川

（一）ハモを骨切りにし（骨切りの仕方は前號玉簾の君の食卓日記に委しければはぶく）五分位に切り鍋に薄き鹽湯に煮立て入れて一泡ふかして直く揚げ冷めて後皿へ盛りわさびを添へる。

（二）新薩摩芋の皮を剝き水に放し、味醂と白砂糖と鹽少しにて甘く味をはつ鰹節のだしにて煮立たる葛をかける。

（三）あなごを開き味醂砂糖醤油にて煮つめたるタレを付け乍ら強き遠火にて燒き玉子二個へ砂糖と鹽少し入れ玉子燒にて燒き、あなごを入れ乍ら卷く。付合せは新紅生姜。

（四）能くひねたる上等南瓜を六つ程に切りわたを出

しせいろにて蒸し程よく切りて蜜を付け砂糖を混たる豆の粉でまぶす。

メリヤスの海水服、手拭でしぼつて手ん手に持ち經木の帽子をかぶつた子供連が海水浴から歸つて來た。「伯母さんお腹が空いてよ。」「お母さん早く御飯にして頂戴」マア〳〵千松の澤山出來た事。政岡は白前掛で忙がしい竹が世話をして御風呂に入れ八人食卓に付いた。

（一）鶏飯　（二）ジヤガ芋キントン
（三）豆腐と椎茸の清汁

（一）鶏肉二百目を細かく叩き飯に醬油味醂を入れ鶏肉を焚き込む。別に牛蒡をさゝして茹で、椎茸を細かく刻み、味醂砂糖醬油で薄味を付け、其跡で牛蒡を煮飯をうつす時に其を混せる。

（二）ジヤガ芋を一升叮嚀に皮を剝き煮立ては水を替へ、二三度して箸の通る位を度とし三分の一を別に取り置き、味醂三合砂糖一斤半弱火にて煮る。取り置たる芋を裏ごしにかけ砂糖半斤にて煮つめ其中に前の芋を入れて和へる。

（三）鰹節と干海老の煮出しに椎茸と豆腐を入れ薄葛にする。夜に入り天王寺から姉様御出兄様工廠の會議で御歸りが遲く一汽車おくれたと仰る。姪等は母様のお出を大喜び。お茶を煎れ何ぞお菓子と思つても晝間皆平げて仕舞つて何も無いから笹餅を拵へる。

葛に砂糖を和しどろ〳〵に解きむらの出來ぬ樣に搔廻し乍ら煮つめ堅く成つた時下しガラスの小コツプを濡し葛を八分目入れ餡の丸めたのを眞中へ入れ、平にならし（餡は袋入の晒餡にて作る）水につけ、冷た時取出し熊笹を鹽水にて殺菌したるを清水にて洗ひして包み、鉢へ入れ冷水を滿して出す。

姉様は此度の日曜迄お宿りの筈。相替らず東京のお話で持ち切り、床に入たのは十二時過ぎであつた、夜網が上つたらしいブウ〳〵と法螺貝の音が聞えかしまし、人聲が浪の響に和して深夜の寂寞を破る。

洋食一品料理

煮料理いろ〳〵

△キャベツスチウ

甘藍を細かく切り、バタとサラダ油とにてよくいため、別に豚肉、牛肉、又は鶏肉をバタにていため、兩方を交ぜ合せ、スープにて煮て其中へ、胡椒粉及び食鹽を混和し、一時間ほど煮るべし其の分量は大きな甘藍一個にて十人前位のもの出來べし。

△タンスチウ

これは牛の舌を用ゐたるものなり、先づ舌を一週間ほど前より薄き鹽水に浸し置き、指先にて上皮を剝き三分の厚みにへぎ、更に三分四方位の大さに切り、サラダ油にてよくいため、メリケン粉の篩ひたると食鹽及び胡椒粉を加へ、更にいためてこれにスープを加へよく煮込みて普通のスチウの如くに製するなり適當の野菜又は香料を和す、牛の舌一枚にて凡そ十人前位の料理は出來べし。

△フレンチスチウ

まづバタ三百匁ほどに二匙の酢及び四匙の砂糖蜜を加へ、玉葱、胡蘿蔔、蕪菁、を一個づゝとセルリー、及びパセリーの嫩芽及び赤茄子二個を適宜に切りて入れ、食鹽と胡椒粉とを加味し、肉の柔らかになるまで蒸し其煮えたる時小麥粉を加へて其汁を濃くするなり。

△ビーフスチウ

牛肉のヒレ又はイチボと稱する肉を厚さ三分位、大さ一寸位に切りバタを十分鍋に入れ、其の溶ける頃右の肉を入れ、少量の鹽を加へ、兩面とも黄色に變じたるを度としてメリケン粉をふるひ込み、少許のスープを和ぜ、よく煮て漸々にスープを入れ、これをスチウ鍋又は深くして蓋の十分な土鍋に入れ、二時間ほど遠火にて煮込み、食鹽及び白葡萄酒又はセリー酒を加へ玉葱の皮を剝いて四つほどに切りたるを馬鈴薯の皮を剝きて四つ割位にしたるものと一緒に投じ、一時間ほど煮込みて更に人參の皮をむき厚さ四五分ほどに切りたるを入れ、又一時間ほど煮込み、其煮上りたる



時胡椒を十分にふりかけ皿に盛るなり。

△アイリッシユ、スチウ

二斤の牛肉を方二寸ほどづゝに切り鹽と胡椒粉とをまぶし、玉葱二個を刻込み、共に鍋に入れ、多量の水を加へて一時間半ほど蒸し、又ジヤガいも三合の皮をむきて右の肉と混ぜ合せ、三十分間ほど煮るべし。

△蛤のスチウ

殻の蛤二升五合ほどをよく洗ひ、一杯の水を入れてこれを蒸焼にし、其殻をはがし汁を漉て再び火上にかけ、六合の牛乳と少許のバタにクラツカーの細かに砕きたるものを混じ、食鹽と胡椒粉とにて加味すべし。

△チキンスチウ

まづ雛鷄の足及び翼を切取り次に臓腑を去り、胸骨より庖丁を入て兩翼の附根まで切りそれより背を断ちて體を二つになし、次に麵棒にて其肉を打ち平め胸骨を取去りてよく洗ひ、又臓腑の中より胃嚢を取出して二つに裂き、砂嚢の方の皮を剝き取り、三つに切り、肉と共にスチウ鍋に入れ、肉の隱るゝまで水を注ぎ、大匙一杯の鹽、及び茶匙一杯の胡椒粉を加へて蓋をなし、凡一時間文火にて蒸煮にしたる後泡を掬ひ取り、猶大匙一杯のバタ、と茶匙一杯の饂飩粉とをよく混ぜてこれを少しの洋芹の刻みたると共に鍋に入れ再び煮ること十五分にして皿に盛るべし。

卵料理八種

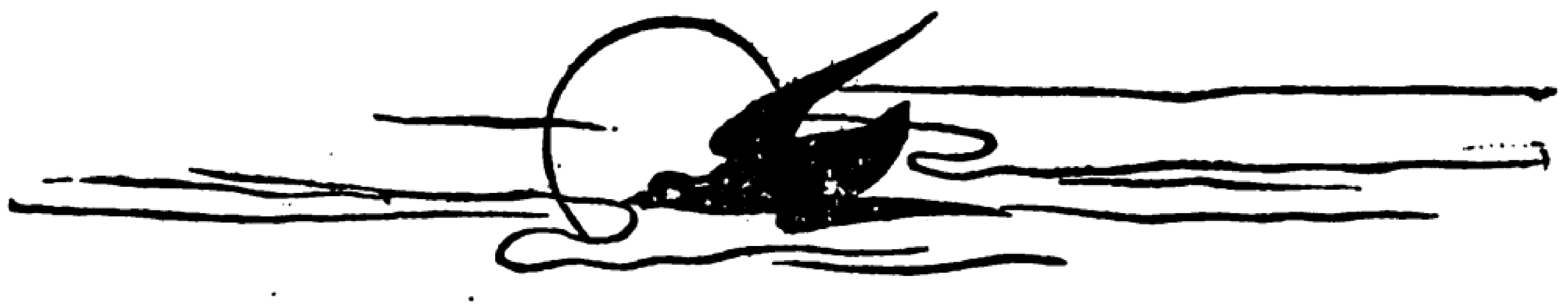
△ハムエッグ

多量のバタをフライ鍋に溶かし、ハムを細かく刻み込みて、五六個の鷄卵を割り入れ、よくかきまはして少量の食鹽と胡椒粉とをふりかけ後ち固まりたる時之を破らざるやうに裏返しにして兩面を鳶色に揚げるなり。

△ポーチドエッグス

平たき底の鍋に湯を入れ少量の食鹽を加へて、その煮立ちたるを待ち、鷄卵を落し、白身の白く固まりたるを度としてこれを取出し、食鹽と胡椒粉とをふりかけ、これを炙りたるパンの上に載せて皿に盛りて出す。





△パーヴチスト

これは固く煠でたる玉子の殻をむき、よく刻みて胡椒と鹽とにて味をつけ、牛肉或は鷄肉の片にて取圍み、其の褐色に變ずるまで油煎或は蒸し燒にし、後取り出して二つに切りて、直ちに皿に盛り、トマトスープ又はホワイトソースをかけたるものにて其形恰も鳥の巣に似たるより斯くいふ。

△エスカロットエッグス

まづ牛乳或は肉汁にて麪麭粉を濕ほし、次に充分バタを塗りたる深き皿に入れ、バタ一杯に、小麥粉大匙に一杯をよく混ぜ合せ、少量の鹽と茶呑茶碗一杯の熱湯を加へ、早くかきまはし、それへよくかきまはしたる鷄卵を加へたる混合汁をつくりその内に固く煮たる玉子の薄切を浸し、これを麪麭粉の上にまじへ、ハム、鷄肉などを薄く切りたるを加へ、次に麪麭粉を撒布して十分熱するまで蒸燒にするなり。

△ベークトエッグス

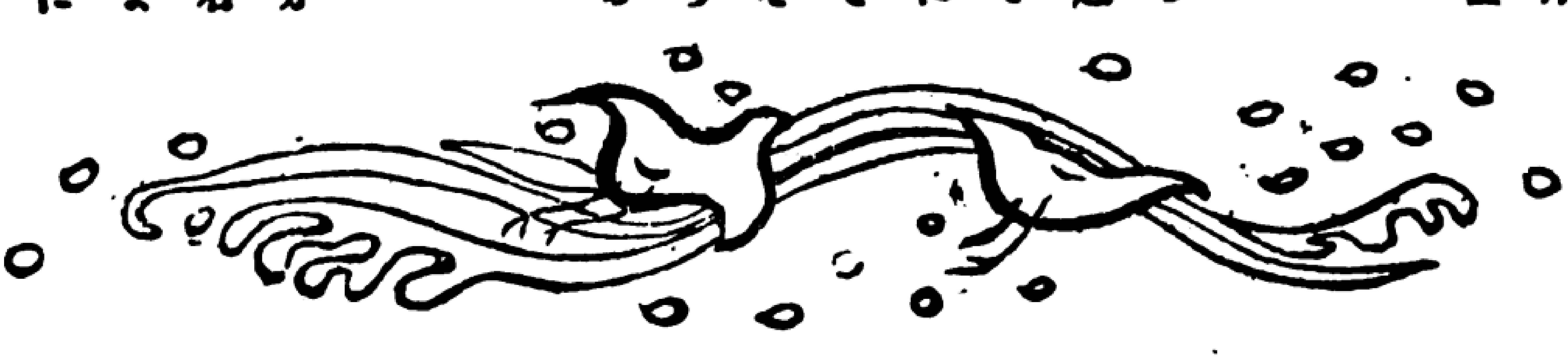
鍋に油を引き、その中に八個の鷄卵の黄身のみを崩さぬ様に落し、少量の鹽と胡椒粉とを撒りかけ、小片のバタをふりこみ更に大匙三杯のクリームを注ぎ直ぐに竈に入れて三十分間ほど蒸燒にするなり。

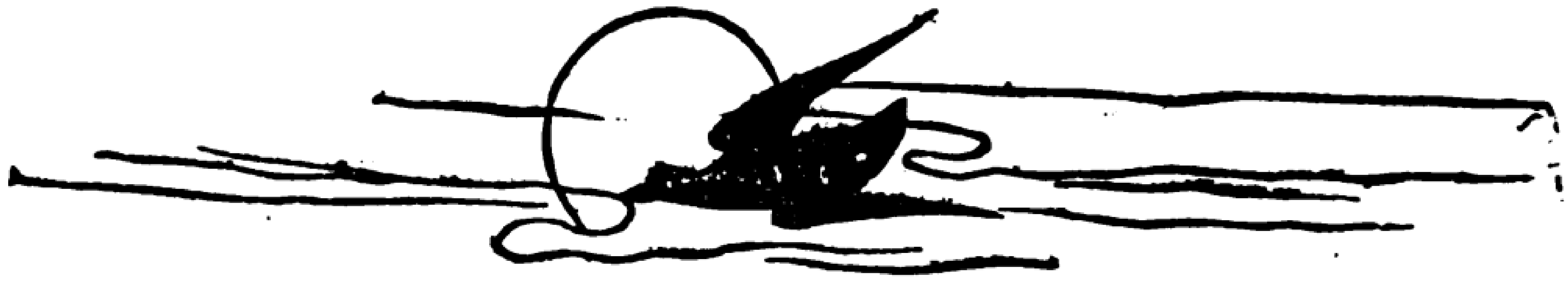
△波形のベークド

パン粉を牛乳又はスープにて濕ほし、直ちに多量のバタを塗りたる深皿に移し、別に一杯のバタと、大匙一杯のメリケン粉とをよく捏れ合せて少量の食鹽と熱湯とを混和し、更に鷄卵を入れて其攪拌したる液に固く煮たる鷄卵の殻を去り輪切にしてこれを浸し、これを前のパン粉の上に移して、ハム或は鷄肉の薄切を加へて次にパン粉をふりかけ、かくする事數回の後ちよく上面にパン粉を置き竈に入れて十分蒸燒にするなり。

△オムレツスプレー

鷄卵の黄身六個ほどに白砂糖十五匁を混じ十五分間ほどかき混したる後ち六個分の白身を泡にして右の中に混じバタを引きて熱したる鍋の中に入れ其ままストーブに入れて燒きたる後皿にうつし、其上面に砂糖或はジャムを置き或は折重れて出す。





△スウイートオムレツ

鷄卵六個分の黄身と白身とを分け置き白身をよく攪き立て〻泡の立ちたる時黄身を混じフライ鍋に大匙一杯のバタを投じ、其素溶けたる頃これを流し込み恰もオムレツ形に燒きて皿に取り庖丁にて竪に二つに切り、其割りたる部分へ苺或は林檎のゼレーを置き又其周圍には上等のブランデーを注ぎ火を點じて炎の立つのを出す。

△ダライ、ハッシ

牛肉百目を細かく切り、これをラード或はヘットにていためゝよく叩きて食鹽及び胡椒粉をふりかけ、又玉葱を細かく刻みてラード又はヘットにて揚け右の牛肉と混和しこれに大匙一杯のメリケン粉を加へ、暫時火にかけ、沸騰せしめ、別にワナガイモ二百目の皮をむき、よく煠でゝ其水氣を去り棒にて碎き、鷄卵一個分の白身を加へ、適當の鹽と胡椒粉とを加味し、更に大匙一杯のバタを投じてよく混和したるを皿の中に厚さ一分ほどに延ばし其周圍にワナガイモにて高さ一寸ほどの堤をつくり、其中に右の肉を入れ再び、其上にワナガイモを加へ、堤の高さと同等にし、平面にならして其上に溶したる鷄卵の黄身を刷毛にて塗り、これにパン粉を篩ひかけ、テンピの中に納れて三十分間ほど燒き、白ソースをかけて出す。

炙肉料理

△鴫ロース

鴫の羽及び臟を去りて、脚を殘して臀部のところに聚めよせ、糸にてくゝり、其の腹内に、バタ、胡椒、パセリ、食鹽、及びパン等を細かに刻みこれを牛乳の中に浸して直ちに搾りたるものを詰めこみ、バタを塗りて弱火にて燒き、其の半熟となりたる頃、胡椒を撒りかけ、又別にパンを一分ほどの厚さに切り、フライ鍋にバタを溶かし其中に投じて揚げ、直ちに皿に移し、其上に右の鴫をのせ、クレヒ、及び柚子など添へて出す。

△稚鷄ロース

稚鷄の羽を抜き水洗ひして羽がひの節より切取り、頭部を切落し、更に足の二の節より切落し、指を肛門



に差入れて腸を拔去り、さて肛門のところへ兩脚をしめよせ、糸にてくゝり、食鹽と胡椒とを加へてバタを塗りつけ、四十分間ほどテンパンにて燒くなり。

サラダいろ／＼

△蝦サラダ

や、大きなる伊勢海老に鹽を加へ直ぐ熱湯に投じ、二十分間ほど煮て其爪丼に頭を去り、體を竪に二分して内部の肉を出し、皿にチサの芽葉をちぎり置きて其上に盛り、別に三個の鷄卵の黄身をよく攪き廻し、大匙四杯のオレーフ油を徐々にさしつゝ攪拌し、少許の鹽と一本蕃椒とを加へ更に半匙の芥子粉及び大匙四杯の酢を加へこれをソースに作りて右の海老肉に注ぐべし。

△チサ、サラダ

新らしき萵苣の外部の古き葉を除きよく水にて洗ひ、水氣を布巾にて拭ひ、これを肉皿にうつし、別に鷄卵の黄身三個分を取り大匙一杯の食鹽と半匙の芥子粉とを加へ、よく混和し大匙三杯のオレーフ油又は半杯の溶かしたるバタを徐々に點しつゝ、絶えず攪拌し、其終りの頃茶匙一杯の酢と、パセリ又は淨芹の芽葉を、玉葱と共に刻みこみ、これを匙にて右の萵苣にそゝぎ又其上に煮たる鷄卵を薄く輪切にしたるもの二三片添て出す。

△キャベツ、サラダ

一升二合ほどの細長く刻みたる甘藍を取り別に大匙二杯の食鹽と同量の砂糖と、大匙一杯の胡椒粉及び同量の芥子粉を、四個の鷄卵の黄身とを混和し更に半杯のバタを溶かし込み、其中にて右の甘藍を加へまぜ再び茶匙一杯の酢を注ぎ、煠玉子の薄く輪切りにしたるを二三片添へ、又牛乳及び酢を別口の鍋にて溫め、酢の沸騰したる時、バタ及び砂糖鹽、胡椒粉を加へ、刻みたる甘藍を投じ能くかき廻し、二三分間蓋をして熱し、少量の牛乳を加へ、暫時冷ゆるを待ち、鷄卵の黄身を攪拌して漉したるものを其中に混和し、再び沸騰せしめて右の甘藍に注ぐなり。

△チキンサラダ

一羽の鷄肉をよく煮て柔かになりたる時分に取あげ、適宜に細かく切りたる一個分の甘藍胡椒粉丼に芥子粉とを加へ、共によく攪拌したる後溫めたる三合の酢を混和し、冷卻したる後ち皿に盛りて出す。

拇指智慧判斷

小島生

爰に揭ぐる「拇指智慧判斷」は、拇指の形態を見て其の人の智慧の有無善惡を判斷するので、至つて趣味あることでございますから、秋の夜長、お友達とのお話も盡きて了つた時、これを試みてお遊びになつたなら、座興になつて、どんなに面白いでありませう。

拇指判斷は、手相學の一種でございます。手相學は日本にも古くから行なはれて居りますが、西洋でもなかなか盛んなのでございます。手相學を原語で申すとPalmistry パアルミストリー又は Chirosophy チャイロソフイーと云ひますが、パアルミストリーの方は、主に手の筋で判斷する術でして、チャイロソフイーの方が即ち手の形狀で判斷する術なのですから、拇指判斷はチャイロソフヒーの方に屬するのでございます。

其のチャイロソフヒーと申す言葉は、元を糺しますと、ギリシャ語のチャイル即ち手と云ふ言葉と、ソフイア即ち智慧と云ふ言葉と、此の二つの言葉から成立つて居りますので、Chirosophist チャイロソフイスト、これを辭書で引いて見ますと、單に卜者と譯してありますが、此の卜者が即ち手の形狀を見て、いろ〳〵なことを卜ひ判斷するのでございます。

手の形狀と簡單に申しましても、それには澤山の箇條がございます。手全體の形狀、掌の形狀、五本の指のそれ〳〵の形狀、指端の形狀、爪の形狀と云つたやうに、其の見方はいくらもありますが、それ等を一々述べ立てゝ居りましては、頁ばかり多くなつて仕樣がございませんから、爰には只だ拇指の形狀を見て判斷する法のみを御傳授いたさうと存じます。

拇指は、流石に拇指と云はれるだけありまして、昔からなか〳〵重きを置かれて居りました。皆さまも御存知でありませうが、彼の拇印と云ふこと、自分の書いたものゝ上に、自分の拇指に墨をつけて押付けまして、之を確かな證據物と致しますることは、日本ばか

りでございません、西洋でも此の仕方が大層流行つたことがあると伺ひました。

これは、いくら同じやうに見えましても、自分の拇指の形狀は、此の廣い世間にも自分のだけで、決して他には無いと云ふ考へから起つたことに違ひありませんが、東西とも、其の見方を一つにしたことは、益々拇指の價値が增す譯ではありませんか。

世界の大豪傑ナポレオンの幕僚に、去るものありと知られたるダルパンチニュー將軍は斯様なことを云つて居ります。

「手を一寸見れば、高等動物であるか下等動物であるかは直ぐ分る、と同じやうに、人間の拇指を見ればこれは誰だと云ふことが直ぐと分る！」

なんと拇指と云ふものは、油斷が出來ない奴ぢやありませんか！。

いざ、拇指判斷の秘密傳授、これから始めるといたしませう。

▲大きな拇指▼

拇指が、全體に目立つて大きい方は、智慧のあることは決して他人には劣りません。自尊心が深くつて、負けず嫌ひの氣性ですから、隨分我儘なこともなされます。これで若し教育が無かつたならば、御主人はみじめなものでせう！

▲指端が四角▼

大きい拇指で、其の端の四角になつて居る方、又は箆のやうになつて居て、そして關節の高い方は、規則立つたことがお好きで、裁縫には殊に丹念であるとしてありますから、斯様いふお嫁さんを貰つた御主人は一生の幸福です。

▲小さい拇指▼

拇指の小さい方は、輕々しく人の言葉を信ずる僻があつて、とても多くの人の上には立てないとしてあります。けれども又た好い處もございます。情愛が深くつて、一寸可哀さうなことを聞きましても、直ぐと涙を零して其の人を憐れむと云ふ美點がございます。

▲尖つた指端▼

すべ〳〵と滑かな小さい拇指で、其の端の尖つて居る方、でなければ圓くなつて居る方、斯樣いふお方は文學若くは美術の上に、非常な天才を持つておいでになります。ですから、斯樣いふ拇指を持つて居るお方で、斯樣いふ方面のことに身をお委ねになりますれば縦令其の名を萬世に傳へるまで、左樣に豪くなれないとした處が、一世に誇るだけ位には乾度なれると云ふことであります。

▲自由に反る▼

一體に軟くつて、自由に後ろへ反る拇指の方は、何事にもおほまかで、些細なことなどにはくよ〳〵心配せず、至つて應揚な性質だとしてあります。けれども其の缺點の方から申しますと、物事にぞんざいで、投げ遣りで、金錢なども、後前の考へも無く遣ふ傾向があるとしてありますから、斯樣いふ妻君を家の留守番に置く主人は、いゝ馬鹿を見るでございませう。

▲反らぬ拇指▼

別に節くれだつて居ると云ふ程でもありませんが、如何しても後ろへ反らぬ拇指の方がございます。斯樣いふ方には剛情な人が多いやうであります。そして注意深くつて、何事も秘密にしたがる僻があるやうでございます。其の證據には、左樣いふ方のお友達を御覧になると能く分ります。自分の親類系屬でなければ、何かしら自分の利益になるもの、左樣いふ友達ばかり選んで交際して居るやうであります。

斯樣述べ立てゝ參りますと、大層手前勝手な、惡い方のやうに聞えますが、御安心遊ばせ、決して左樣惡い方ではありません、惡い方どころか、誠に當世人で至つて常識に富んだ方だとしてあります。

これまでは拇指、全體に就て判斷したのでございます。次には猶ほ細かく分けて判斷する方法を御傳授いたしませう。

拇指全體を中央の關節から二つに分けて、指の端から關節までの間を第一節とし、關節から指の着根までの間を第二節として、お話いたします。

▲第一節の形狀▼

拇指の第一節が完全に發達して居られる方は、意思が強くつて、多くの人の上に立つことが出來、誠に立派な御婦人だとしてあります。けれども馬鹿に發達し過ぎて、度を越えて長くなつた方は、其の勢力も少々延び過ぎて、兎もすると我儘になる傾向があるのは惜しむべしです。

と云つて又た、あんまり之が短かいのにも困ります。勢力が弱くつて、意思など丶云ふものは少しも無く、何を行るにも投げ遣りだとしてあります。

▲第二節の形狀▼

第二節が完全に發達して居る拇指の方は、物事を理解する力が申分無く備つて居るとしてありますから、先づ悧巧な方と云つて差支へ無いのでございます。

第一節と比べて、此の第二節の方が長い御婦人は、何時も正しい考へを持つて居らる丶さうです。また何事を遊すにも、ちやんと先々を考へてから爲されますので、左樣に遣り損なひはありませんけれども、此の第二節の方が、第一節より短かい御婦人は、お話にも何にもなりません、爲さることが向ふ見ずで、身分と云ふことなどは少しも考へずに物事を企てるので、何時も失敗に終ると云ふ哀しい運命を持たれるお方です忙しい時は滅茶苦茶に働いて、後はポカンと遊んで居ると云ふ性分の御婦人も、多くは此樣な拇指を持つて居られる方です。

判斷は此の位の處で止めて置きませう。試みて御覽遊ばせ、お友達のを見るのは第二として、先づ御自分のを調べて御覽遊ばせ、そして此の法で判斷して御覽遊ばせ、思ひ當たることが屹度あるでございませうから……

序に一寸書き添えて置きますが、手相術は馬鹿にならんもので、誠によく當ります、近い話が、ハイカラ令孃の手と、田舍娘の手とは、誰が見ても判斷がつくぢやありませんか。と、マア云ふ理窟で、少し研究すれば其の人の性質や、性質から生み出す運命などは直ぐと分つて參ります。恐ろしいやうなもの丶面白いものでございます。

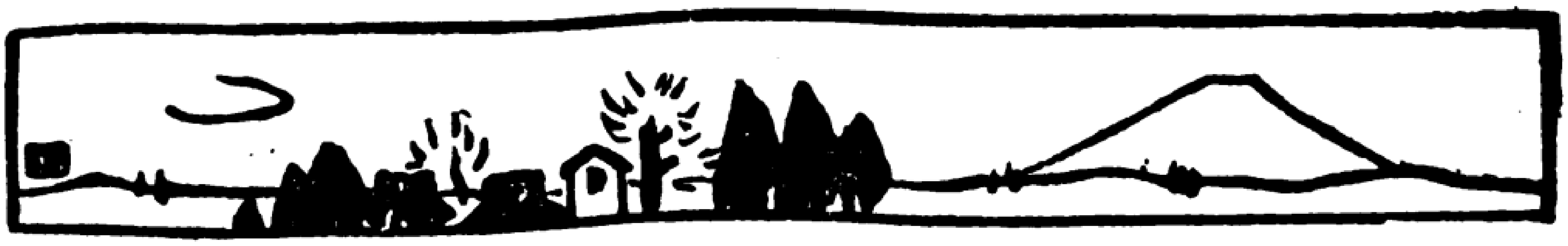
家庭衛生顧問

△胃カタルの療法

胃のカタルに急性と慢性とある、急性は暴飲、暴食又は不消化物の爲めに起るのは勿論、精神過勞の爲めに發るのも随分多いこの病氣は最初食慾が進んだり、或は退いたり、不同であるか次第に不進になつて欠伸を爲し嘔吐を催ふし、時々咽喉が渴き、大便はいつも秘結して體がだるく、氣分が鬱して時々頭痛の起る事もある、鳩尾のところを押すと少しく疼みを覺る、療法はいろいろあるがまづ普通は重炭酸ナトリーム二グラム、苦味チンキ三グラムを水百グラムに解かしてこれを一日分として三回に分服すればよい、又慢性もほゞ急性と同じ様なものであるが、急性のごとく胃に痛みは感ぜず、又渴きも覺える事なく、晝は兎角睡眠を催すのに夜間安眠が出來ないのである、療法は重炭酸ナトリーム二グラム、ペプシ子一グラム半、を混ぜてこれを三包に分け一日三回に分服すればよい。

△慢性胃カタルの療法

專ら原因療法を施さねば全治はむづかしい、即ち酒客には酒を禁じ、甘黨には菓子類を嚴禁しなるべく温浴して皮膚の機能を亢盛せしめ常に消化し易い食物を採り而も極冷極熱の飲料や強酸味多量の脂肪物、海藻類の如きは食してならぬ食物が胃中に滯在して消化しない時には醱酵を起して腐敗するものであるこの腐敗を除くには下劑を用ふるがよい、下劑は人工カルヽス泉鹽一茶匙を温湯に溶かして用ふる、又消化をなさしむる胃中の鹽酸の缺乏を補ふ爲めに稀鹽酸十滴位を半盃の水に滴して食後一時間に用ふる次に胃液の分泌を催ふす爲には苦味丁幾、龍膽チンキ、ホミカチンキの如き苦味藥を半盃の中に十滴を加へて服用する又胃痛には重炭酸曹達と次硝酸蒼鉛及び乳糖の合劑が殊に適切である



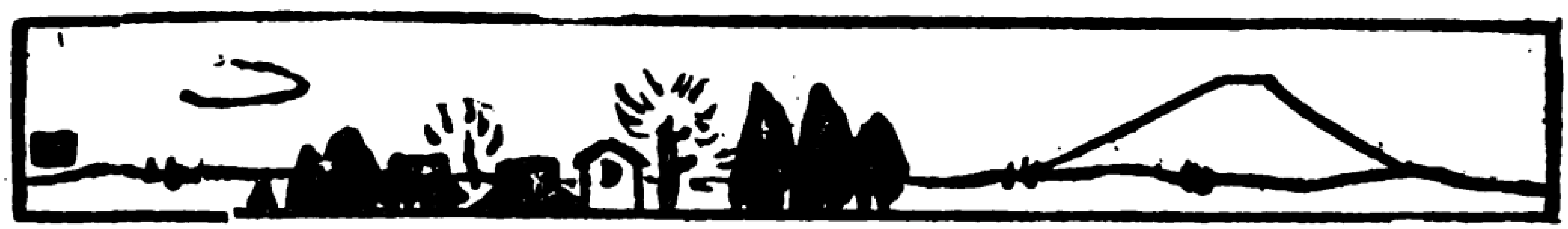
△腸カタルの療法

腸カタルにも急性と慢性の兩方がある、急性は急に起るので、最初は痛い便通があつて、それが度重なるに從つて今度は水のやうなものが下り、腹がごろ〳〵鳴つて非常に痛むのである原因はいろ〳〵あるが大抵は腐敗に傾いた物を食つたり、暴飲暴食の結果腸内に滯つたものが腐敗してそれから禍を起のである。療法はなるべく暫時飲食物を禁じ腹を乾し、下劑をかけて腸内を掃除するのがよろしい、即ちヒマシ油一グラム半、薄荷精四分の一グラムを水二グラムに溶かして飲めば腹の内は清潔に掃除が出來る、汚物の下つた後更に重炭酸ナトリーム二グラム、ペプシ子二グラ

ム、苦味丁幾三グラムを水百グラムに溶かし一日三回に分服するがよい。腸カタルを起して暴瀉をすると一時身體が非常に衰へるがこの際滋養物を食したら好からうなどゝまだ腸の整はない中に物を食するものがある、それは怪しからぬ事である、カタルを起したらば流動物の外は一切口に入れぬやうにし快復期に向つてから徐徐に固形體を取るやうにせねばならぬ、暴瀉の際は一時絶食するのが一番である。又慢性のものは急性の時に養生を怠るから起つたもので根を切る事が中々困難である、平生大便が秘結したり又下痢したりするのは腸に故障があるからで、滋養分を取つても効能が少いからなるべく病勢を進めないやうに食物は流動物を用ゐ、平素便通に注意し、下痢があつた時はこれを止めるやうにせればならぬ。

△胃の痙攣療法

これは俗にさしこみといふのである、胃の悪い上に食べ過ぎるとか、不消化なものを食べると時々に起るものである、其の前徴は嘔氣を催ふしたり頭痛がしたり、それから腹の中が急にさし込んで來て堪られなくなる、この際には姑息の手當をするよりも醫師に藥を注射して貰ふのが一番効能がある、一度注射すると劇しい疼みも忽ちに治り、すや／＼眠れた後大抵癒るものであるが、若し止むを得ざる時は胃のところを布巾か蒟蒻でも温め、指の先



で鳩尾のところを強く押し、芥子泥を紙に厚く伸ばして貼ると其効能は著るしいものである、それから治つたからとて直ぐに大食などしてはいけない、まづなるべく脂肪、澱粉質のものを禁じ茶珈琲、酒等の如き興奮劑は避けねばならぬ。

△下痢を止むる法

下痢といつても其の病状によつてはそれを止めてよくない事があるからよろしく注意して行かねばならぬが、こゝに示すのは腸カタルの如き病に就ての法である。

腹部に温濕布をあてゝ其上からフランネルの様な布で掩ひ、そして其の熱冷むる時は再び元の如くするのである温濕布は晒布に熱き湯を浸しこれを油紙で包んだもの又腹部に前の如くするも効がある、それから鹽を焼いてこれを布に包みこれを其の腹部に充つるも効を奏する尤も輕症のものならば蕎麥粥に餅を入れて食すれば止まる。

△便秘を治する法

二日間位便通のないものには小豆一合ばかりを煮て砂糖を加へこれを一度に食すればよい、これは小豆の皮が腸の粘膜を刺戟するからである、殊に子供など服藥を忌むものは誠に簡便の法である。

尤も強く便秘した時などは到底小豆位では効がない其時には上等のシャボンを水に溶かし其色の濁色となるを度としこれを肛門よりスポイドで注入すれば忽ち通ずるものである、又シャボンの代りにリスリンを用ふるも効あり其分量は適宜でよろしい

△鼻血を止むる法

鼻血は何の原因にせよ、逆上性のものに多い、月經の異常、白血病、心臟病、チブス等は尤も大關係がある、急性に出血するものは患者の頸部を烈しく拳をもつて打てば忽ちにして止まるものである又眼鼻の間を水で以て冷やすのも効能がある、又仰臥にさせて兩手を頭上に揚げさせるのもよい、それから酢を鼻の中に吹き込むこともある、明礬水を新らしい綿に浸して鼻の孔に入れてもよい、婦人なれば乳房を冷へた布で包むと特効がある

△黃疸の治療法

黃疸は肝臟の疾病から起る症狀である、一體この肝臟といふものは消化作用を營むところの大切なる部分で、消化器から運入つて來た物質は肝臟の中で種々なる化學的作用が營まれて、人體の營養に資し、又血液の種類の調節にも關係する機能であるから極めて重要なる機管であるが、黃疸の原因は不攝生をして胃腸を害ひ、それから發するのが多いのであるから、まづ消化し易い食物



肉羹汁、冷炙牛、牛乳、果物、野菜等を採り、酒類は勿論、油濃き魚獸の肉、鰻、鯖、豚肉などすべて脂肪質の食物を禁ずるのが肝要である。

△腹膜炎の療法

腹膜炎の原因は感冒、外傷等から發し、又屢々腸胃、腎臟、子宮等の病から起るものであるが、多くの場合は腸チブスが其の原因となるやうである、即ち腸チブスから起る腹膜や又は食傷等から腸壁に孔が出來て、腹中の不潔物が腹膜内に入り來るために起るもので、この病の症狀は始め寒氣がして戰ひつき、腹部に痛みを覺え、熱が高まり、舌が乾き、屢々渴を訴へ、そして嘔氣を催ふし、體が甚だしく疲勞衰弱する、又腹部は始めから著るしく膨れ、遂には張りきつて板のやうになり、輕く押しても堪へ難い疼みを覺ゆるに至る。

この病の療法は何よりも安靜が第一である、そして腹部に氷の罨法を施し、或は水蛭を貼りつけ、食物はなるべく消化し易い流動物、即ち牛乳、ソップ、赤葡萄酒、鷄卵、氷片等を與へ、熱の高いものにはアンチヒリンを用ゐ、又屢々嘔氣のあるものには氷片を與へるか、牛乳を氷で冷して與ふるがよい、そして灌腸は猥りにしてはならぬ。

△肋膜炎の療法

肋膜炎の原因は多く感冒である。この病には大抵感冒が先驅となつて來るものと斷言してよい位であるから風を惹く人は大に注意しなければならぬ、次は肺炎である、これも多くの場合感冒が原因となつて罹るゝものである尙レウマチス、外傷等から來る事もあるが、飲食の不攝生から來ることも極めて多いものである。

同じ肋膜炎の中にも、乾性、滲出性、化膿性の三種がある、乾性といふのは呼吸する度每に胸がひどく痛んで呼吸がひつつく樣な音がする、滲出性のものは寒氣が初まつて熱が高まる、呼吸が苦しくなる、脈搏が頻繁になる、食慾が減ずるといふ樣な工合で、隨分劇しい苦痛を感ずるもので其の滲出液の爲めに心臟又は肝臟の位置さへも轉ずることすらあり、第三種の化膿性に至つては質が甚だよろしくない方で、病狀は滲出性よりも更に惡性のである。

されば性質が旣に三種に分れてある以上は療法に至つても又おのおの異なる事は勿論であるが、まづいづれにしても臥床に就いて身體を安靜にし、胸部に氷罨法をするのである、そして乾性のものはフランネル又は通常の手拭で胸部を固く纒ひ、滲出性のものは水のない乾性とは異つて肋膜腔に水の溜るものであるから



藥で以てそれを散らしてしまはねばならぬ、即ち發汗させる性質のものであるからサルチルサン曹達五分を水に溶かして用ゐ發汗させると共に吸收催進藥を用ゐて時々衣類を替へさせるのである更に化膿性となると症狀が一層重く、膿を持つのであるから滲出性のやうに藥で散らしてしまふ譯には行かない、故にこれは是非共外科手術を待たなければならない、即ち局部を切開して悉く其の膿を押し出すのである、只注意すべきは外科手術と聞くと誰しもあまり進まない樣であるがこの際姑息の考を起しては取返しのつかぬことになるから醫師が局所に針を刺して水を檢査し若し不幸にして化膿性であるといふ事が確定したならば一刻も早く名醫の手術を乞はねばならぬのである。

病後の攝生として注意すべき事はこの病は頗る頑固な病氣であるから容易に全治し難いもので一寸素人眼には全快したやうに見えてもまた再發する事がある、故に病後は勉めて攝生を守り暴飲暴食は勿論、過激な勞働や無理な仕事をする事を避け、滋養物を絶えず攝取し、感冒にかゝらぬ樣注意し、運動も適宜にして只管身體の健康を圖らねばならぬ、そして成可くは氣候の溫暖な空氣の淸潔なる海岸に轉地療養をするがよい、殊に化膿性で手術したものは是非とも海上の空氣を吸はねばならぬ、實驗上これは極めて有効の事である。

△肺病と肋膜の關係

肺病と肋膜炎とは密接の關係があつて、肋膜炎から、肺結核に變じたり、肺の結核菌から肋膜炎となるものが多い、けれども肋膜炎を初期に發見して適當の處置をなし、これを全治した上でよく身體の營養を勉めたならば肺結核を免かれる事が出來る、いづれにしても肋膜から肺病には罹り易いものであるから治療攝生を大切にし場合によつては職業を變へる必要があるかも知れない。

肋膜に罹つた婦人が醫効を奏して全治し、其後二三年も經過し別に異狀もなかつたならば、結婚しても差支はないが、姙娠は聊か危險な方でこれが爲めに舊病再發の恐れがないともいへない、また本人の營養上子供が生れたらば母親から離して別室に置かればならぬ。

△腦充血の療法

原因はいろ〳〵あるが、多くは鬱血といつて腦の血行が妨げられ頭部に血の鬱したもので、肺病、心臟病、胃等より發するものもあり、又積血といつて腦に血液が餘分に流入して起るものである、例へば長途の歩行、登山等によつて心悸亢進する時或は腦膜炎、營養障害、暴酒、胃病、便秘等より發し、或は月經の閉止より起る事もある、その徴候は顔が赤くなり、目が充血して時は精神錯亂することもある俗に逆上といふのである、療法はまづその原因に遡つてそれを除かねばならぬが急性に起るものはなるべく閑靜な室に枕を高くして臥させ、なるべく室内を暗くして頭部と心臟のところに氷嚢を宛て、手足を温かに包み、或は芥子泥又は芥子湯を用ゐ下劑を與へるか又は食鹽水の灌腸をなし、或は多血性のものには一時血を瀉る法もあるが、それ等は容易に行ふべきものではない。



△腦貧血の療法

原因は極端なる精神の感動、營養の不良、慢性の下痢、大なる出血、產後の疲勞授乳の期の長きもの等は腦貧血を誘ひ易いものである、これ等すべて腦の血液が乏しくなるによつて起る病で、顔面蒼白となり、冷汗を流し、卒倒して人事不省に陷り、甚だしきは其儘死に至るものもあるが、手當よくすれば、數分乃至二三十分間で恢復するものである。

療法は第一に原因を除き血量の恢復を謀るに勉むるのが肝要であるが、急性貧血を起して卒倒したものは頭部を低く足部を高くして平臥せしめ、衣帶を解き、胸を寛くして新鮮なる空氣に觸れしめる時自然に覺醒するものである、若し醒め難い時は頭部、胸

部に冷水を注ぎ、アンモニア水を嗅がせ、羽毛を鼻の孔に入れて刺戟し葡萄酒、ブランデー等を服ませるがよい、其他興奮剤を以て皮下注射を施し、横隔膜神經に電氣を通じ人工呼吸法を行ひ、場合によりては輸血法、食鹽水注射法を試むるもよい、殊に手術、或は負傷等で大出血をした時又は産婦の出血等で腦貧血を起したものなどにはこの法によつて一時の危急を救ふことがある、又慢性貧血には原因を除いて後營養物を多量に食し鐵剤、健胃剤等を與ふるがよろし。

△頭痛の療法

頭痛の原因は血液の循環が不調子になつて、腦中に鬱血するか、又は不足するかに依るものである、多くは平素胃腸に故障ある人、又子宮内に障害を起した時に著るしく神經に感じ、逆上して頭痛を起すことが多い、又急性のものは恰も腦充血のごとく、眩暈して卒倒することがある、療法はいろ〳〵あるが、急に來たものは氷嚢又は冷水を手拭に浸して頭部、頸部を冷やし、安靜に臥さしめ、アンモニア水を適宜綿に浸してこれをこめかみのところに貼り、或は薄荷を塗るがよい、又時候の爲めに發作するか、空氣の變動によつて起る頭痛は速かに頭を冷やし安靜に臥て居れば癒るものである。



△心臟病の療法

これは過激の勞働をしたり、又は非常の心配、乃至諸種の熱病等が原因となるもので、通常は呼吸の困難を感じ、喀痰を出し、胃に痛みを覺え、心悸亢進し、皮膚青白となり、容易に全治せぬものである、其上酒を飲み過ぎるか又は劇しい勞作をすると往々心臟痲痺を來して落命する事がある、つまり平素攝生を守らず、暴飲暴食して身を傷ふの結果である、故に一旦この病氣に罹はれたときは精神を安泰にし極めて新鮮な大氣の中に呼吸して刺戟性の食物及び飲酒を禁じ運動を中止して便通をよくし專ら靜養せねばならぬ、療法の概略をいへば、患者はなるべく徐かに臥して、雜念を去らればならぬ若し心悸亢進せば左の乳の下に氷嚢を載せ、脉搏が急であるか、緩であるかに注意する、此際若し冷汗を流したり呼吸微弱になつたりする徴候でもあると早速醫師を呼んで見せねばならぬ、心臟病には左程藥剤の効能はないもので、なるべく規則正しい生活をなし、動悸を高むる樣の動作を避け新鮮な空氣を吸ひ飲食を適宜になし、酒と煙草は全く禁じ、温泉場等で靜かに療養するのがよろしい、食物は刺戟性のものは一切禁じ、茶、コーヒー、煙草、酒等は勿論、脂肪過多の肉類もなるべく避け、常に胃腸を疲勞せしめない樣に輕きものを少食し、交接を禁じ喜怒哀樂の感情に支配されぬ樣專ら放念して呑氣にし

てゐなければならぬ。

△肥滿病の療法

肥滿病は貧血病と同じく病氣といふよりも體質によるものであるが、原因は脂肪過多症といつて身體に多量の脂肪が溜る病である、尤も肥滿には勞働して筋肉が發育して肥えるのと、又酒を飲んだり、甘味を多食したりして肥えるのがある、後者は筋肉の發育でなく、單に脂肪が增加したものであるから肥つたからとて健康の證據にはならない、脂肪が增加すると心臟が弱くなり、往往卒中等に罹り短命に終るものであるからなるべくこの肥り方は避けなくてはならぬ。

肥滿病の療法は第一脂肪を少くして其水を體中に滯らさぬ樣にせねばならぬ、それには蛋白質のものを多量に食して脂肪と澱粉質のものを食はない樣にするのがよい、併しこゝに困難なのは我我の平常の食物が澱粉質本位である事である、即ち日常の食物たる米飯は勿論、野菜類の重なるものは皆澱粉質から成立つてゐるので、この澱粉が脂肪を作る基になるのであるから肥滿症を治さうとおもへば絶食しなければならぬ事になるそこでなるべく、肉類などすべて動物性のものを食べて、植物性のものを少くするのである、殊に一番禁物は芋類である。西洋でも脂肪の多い人には馬鈴薯を厳禁してゐるが、甘藷芋などは馬鈴薯より一層含水炭素



が多いから脂肪性の人によろしくない、それから菓子類である、これもなか〳〵脂肪の溜るもので、婦人の肥滿は男子の酒肥りと同じく菓子の過食である、次に厳禁すべきはアルコール性飲料である、アルコールは澱粉や砂糖と同じく脂肪の沈着を助ける有力なるものである。

△膀胱カタルの療法

膀胱カタルに急性と慢性とがある、急性は寒中足腰を冷やしたり、感冒に罹つたり、熱病、痳病、酒類の過飲等から起るものである、症狀は初めに戰慄を起し、心氣不快を覺え、仕事が厭く、體溫は次第に上昇し、膀胱の邊に強い壓迫を受けるやうな氣がして時々痛みを感ずるけれども初めは左ほどのことはなく、段々日が經つに隨つて劇しく痛みを覺え、尿道に痛みを發し、小便が烈しく通じて其都度痛みを起すばかりでなく、歩行も又頗る困難で、到底我慢の出來ぬやうになるものである。

療法はまづなるべく滋養分の多い流動性、即ち牛乳、鷄卵、肉汁の如きものを取り、食鹽や香辛料のごときものは決して食べてはならぬ、且つ身體は出來る丈け安靜にして運動を避くる事が肝要である、內服藥としては硼酸一グラムに白糖三グラムを混和しこれを十二包として一日六回として二日に分服し、服藥中は勉めて溫浴を取り、專ら腹部を溫める必要がある、安臥しつゝある間

でも温石、湯タンポの類で腹部を温むると大に効験がある。

又慢性の方は急性と大差はないけれども、急性よりずつと軽い方で、中には殆んど痛苦を感じない位のものもあるが、服藥は急性のものを用ゐてよろしく、且つ酒類は勿論、茶、珈琲の如きものは絶對に避けなければならぬ、又治療法として膀胱の洗滌法を行ふ必要もあるがこれは醫師の手を借りなければ出來ない事である。

△レウマチスの療法

男女共十五歳以上三十歳の壯年に多く發する病で春秋の二季に發作する、この病の特効藥ともいふべきはサリチルサン、及びサリチルサンソーダの二藥である、甲は散藥若しくは丸藥として服用し、乙は水藥として用ふる、甲は一日の量五グラム、を度とし、三回に用ゐ、乙は一日の量六グラムを度とし是れ又三回に分服する、この藥は通常藥であるから醫師の處方に依らず藥店によつて調劑を乞ふ事も出來る、レウマチスにはこの藥を用ふれば奏効著るしく四肢の關節疼痛甚だしいものでも半日ほどで痛が止まり、起居が出來るやうになる、故にこの藥を絶えず用ふる時は再發を防ぐのみならず又感冒に罹ることもない、右の外温浴蒸氣浴も又効能がある、關節の痛みには患部に氷嚢を貼し、ヨウユムチンキ又は樟腦精を塗布する時は又痛疼を去る事がある、尤もこれを



塗る時は其上に繃帶を施し、衣服の接せざるやうにする事が肝要である、其他轉地して海濱の地に遊ぶ事も又服藥以上の効がある、そして專ら飲食物に注意し、淡泊な食品を取り、酒を禁じ、室内を温暖にし、戸障子の孔から寒風の入らぬ樣にせねばならぬ。

△痔疾の療法

この病は多く美食家又は安座する人に多い婦人には多く經産婦が罹り易いのである療法はまづ局部に發熱するものには氷嚢法を施す、これは大いに痛みを去るものである、又蜂蜜を煮て其のやや冷却するのを待つて小指大の棒狀となしこれを肛門に挿入するときは大いに効能がある、併しこれ等は根本治療といふ譯にはゆかないから、なるべく飲食物に注意し、牛肉、鷄肉其他脂肪性の食物、刺戟性の食物はこれを禁じ、成可く淡泊にして消化よきものを取り便秘を避け常に緩下劑を用ふるやうにするがよし、其下劑は硫黄花二分、大黄二分、重酒石酸カリ六分、の割合で調合したものを連服し其用量は一回が中茶匙づゝで一日二回位でよろしい、又鑛泉に浴するのも効がある、歩行は尤も禁ずべきものである、是れは多少摩擦して熱を發する恐れがあるから、概して痔疾は寒冷を恐れるものであるから股引などを着て冷氣に觸れないやうにせればならぬ。近頃は藥店で痔帶といふものを賣つてゐる試みてよろしい、



修養になる戸外の趣味

紫苑女

◎昆蟲採集の話（標本の製法）

春から夏へかけて麗かな日に咲き競ふ花の邊りに參りますと、美事な各種の蝶がひら〳〵と舞ひ來つて花に戯れて居ります。又夏から秋へかけて　蜂や虻が皆な爭ふて花の周圍に群集ひ、地上には無數の蟻が縱横に歩き廻つて食を需め、彼方の樹の梢には聲騷がしく蟬が鳴いてをり、空には蜻蛉が夥多翔んで居るし、足元の草間には蝗、蟋蟀抔が跳り、さては樹の枝又は軒先に網を張り巣を構へて獲物や來らんと待構ふる蜘蛛、五月蠅もむれ來る蠅、夜になれば血に渇する蚤蚊、乃至は調節面白く妙なる聲を立つる鈴蟲、松蟲抔、此等は何れも昆蟲であります。此外百足、蚰蜒、蝸牛、蛞蝓、田螺、蛭、又櫟林抔に多く棲息する甲蟲類も皆な昆蟲で、其の種類は實に千差萬別であります。是等の小動物を捕獲するに從て標本となし、各々類を集め、是を整へ、順序を正して動物研究の資料ともなさば學問上にも大なる利益となり、亦珍奇にして美麗なる各種の昆蟲を順序好く配列した時の興味は格別なものです。實に昆蟲標本の製作位、趣味と實益に富みたる事は、餘り多くはあるまいと思はれます。

有名な美濃の名和靖先生は、幼少の時代から動物學特に昆蟲に就て大に興味を以て居られ、今では日本有數の昆蟲學の大家であります。此の方は未だ二三歳の頃から蟲類が大層お好で、何か氣に入らぬ事があつて泣き叫ぶ時でも、お母さんが小さい蟲を捕つて前へ出すと、すぐ泣き止んで熱心にその小蟲の擧動を見て居られたといふ事ですが、今迄先生が蒐められた昆蟲の數は無量七千餘種に上つて居るさうであります。併し昆蟲の數は却々是れで盡きたとは云はれぬさうで、造

化の妙は實に限りもありません。之を研究するのは仇愚かにはゆかぬでせうが、又面白いではありませんか。皆樣の中には定めし之れに趣味をお有ちの方もありませうから、こゝに捕獲たる昆蟲を永久に保存し、趣味と實益とを兼有する方法、即ち昆蟲標本の製作法を、極めて簡易に申述べます。

先づ第一に昆蟲を採集する準備として左の品々が入用であります。

一、捕蟲網　二、薬瓶　三、毒壺

捕蟲網は昆蟲の飛行するもの、又は地上に靜止するものを無傷にて捕獲する道具です。之を作るには鐵又は針金等にて徑一尺二三寸位の環き框を作り、之に深さ二尺六七寸位の蚊帳網の袋をつけて、之に二三尺位の柄を附すれば好いのです、高く飛行するものは之れにて掬ひ取り、靜止するものは之を覆ひかぶせて捕るのです。

捕へた昆蟲は之を殺さねばなりませんから、其の爲にアルコール又はフォルマリンを盛つた薬瓶と、青酸加里數片を入れた廣口の瓶（毒壺）とが要ります。

毒壺中には底部に青酸加里を入れ、その上に夥多の小孔を穿つた厚紙を覆ひ、口と此厚紙との空間を昆蟲の收容所とし、之れに蟲を入れて上から栓を密閉すれば、蟲は青酸加里の毒氣に感じて直ちに死にます、之れに就て十分、注意を要するのは毒藥の取扱方です。もし不慣の爲め取扱上危險の惧があると思はれたら青酸加里の代りにナフタリンを用ゐてもできます。

扨て左の樣にして各種の昆蟲が採集せられたら、次には標本の製作にかゝるのですが、之に要する第一の道具は展翅板です。之れは杉、檜、又は桐杯で造り、その中央に溝を拵へて蟲の體を置く所とし、板面には蟲の翅を展げて觸角、肢杯の位置を正し、刺蟲針を以て適宜の姿勢を取らせます。完全なる展翅板には底部に木栓又は黍稈を敷きますが、之れは刺蟲針を容易に挿入せしむる爲です。

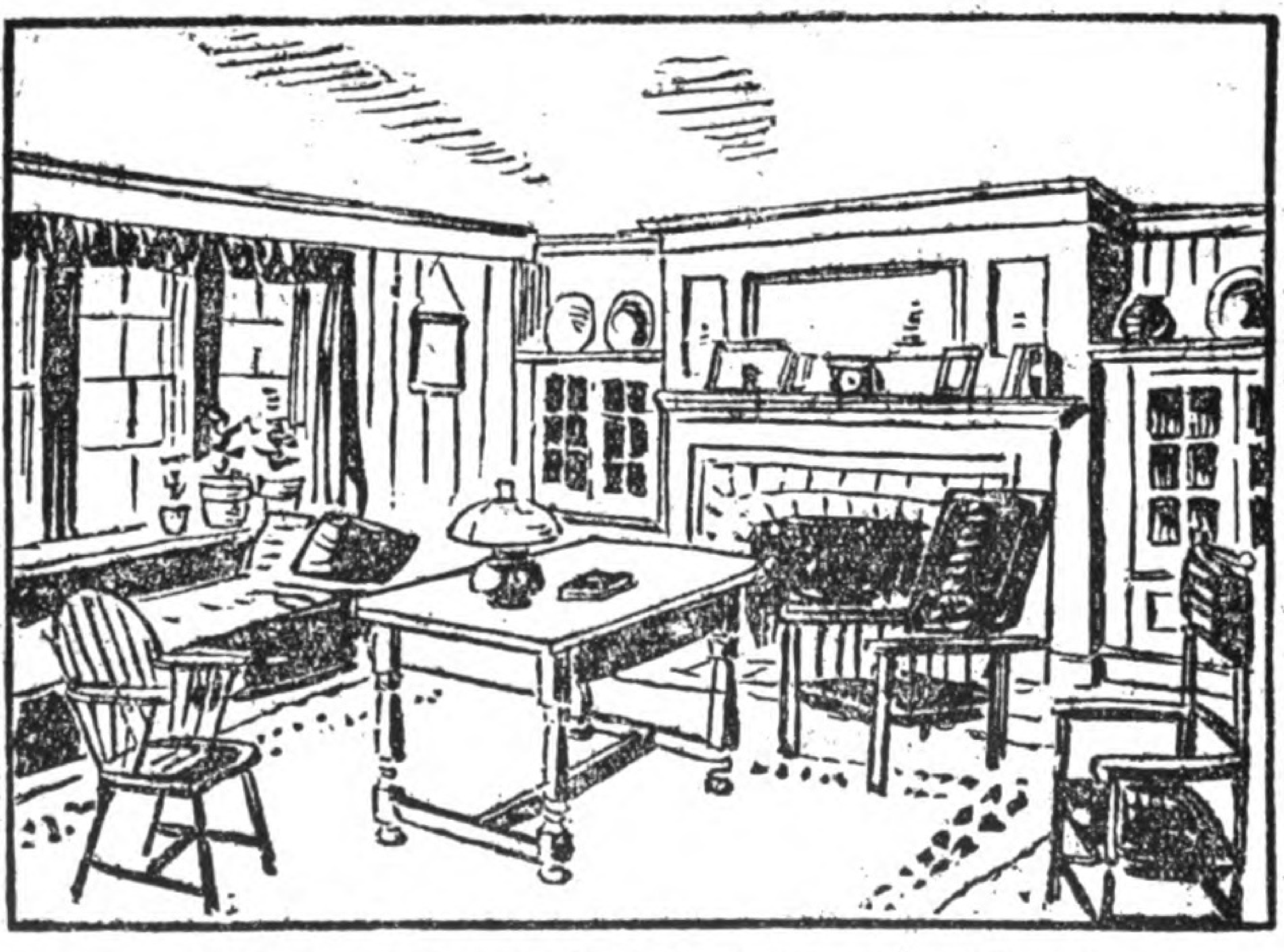
蛾の如き小さき昆蟲や小形の甲蟲は、右の刺蟲針を用ゐ難いものですから、之れは豫め厚紙を用意し、

それにアラビヤゴムで蟲體を附着けます。又蜻蛉の類は頸が細て乾燥の際に兎角頭が脱落し易いから、之を防ぐ爲に細き針金か元結の類を頭より尾に挿入し、而る後に展翅板に載ます。

蝶、蛾、又は蟋蟀の類で腹部の肥大つたものは、之を切開して内臓を除き、ナフタリンを塗り、綿を充し後ち展翅板に擴げて乾かします。

昆蟲の標本も、成蟲のみでなく、卵も、蛹も、幼蟲も、共に採集し、之を標本に製作してその形狀經過を見ることを得れば、趣味效能も益々大なる譯ですから、出來得るならば之を試みたらいゝでせう。

米國風の室內裝置



これは漆喰造りの家庭にて空氣の流通をよくしたる設計なり

右にて採集したる小動物の乾燥が出來上ます、次には之を保存する方法が大切ですが、それは檜又は杉の箱が入用です。此箱は長さ一尺五寸、幅一尺、深二寸許にて、底部に玉蜀黍、黍稈若くは二重の疊表を平等に敷き、其の上に白紙を張り、蓋を硝子板とし、密閉して保存するのですが、其の箱の片隅に樟腦又はナフタリンの如き防蟲劑を容れておく事を忘れてはなりませぬ。勿論箱には一々番號を附し、採集の年月日抔を附記する事も必要です。

但し製作の標本中にて、乾燥

させないものは、アルコール又はフォルマリン瓶に浸し、瓶の口は常に密閉し、些しでも氣を漏してはいけませぬ。若し之を怠るとアルコールは蒸發し動物は腐敗して了ひます。

右は極めて簡易なる昆蟲標本の製作法です。慼じて日々採集した凡ての昆蟲を面倒でも標本として置いて御覽なさい、それは實に樂しみなものです。

◎運動會の樂しみ(家中全體の活動)

學校では小さな運動會は時々行はれますが、大きなのは、春と秋との運動會で、如何なる學校でも盛んに擧行されます。人といふものは生れると直に運動といふ事を覺えます。丁度吾等の住む此地球が太陽の周圍を年中運行し、太陽も亦他の太陽の周圍を運行し、月も、星も、凡ゆる宇宙のものは皆運動をして居るのですが、物によると、それが定かに見えぬと同じで、人が生れると直に步行する事は出來ぬけれども、目口手足はそれ〳〵適宜な運動を遂げてをります。私の家の子供の此の節の運動と申したら、實に驚く許りです。先日も兄さんが運動會へ行くから坊も一緒に行きたいと大騷に騷ぎましたが、此の運動といふ事は人間に取つては誠に大切な事であります。運動をせぬと何だか喰べたものもお腹に滯つて居る樣な氣持がして、不快でなりませぬ。又之から喰べる物も、ドンナ御馳走にしても運動が不足でありますと、もう喰べる氣になりませぬ。之と反對に、運動會の折のお辨當は縱しドノ樣な喰物にしろ、甘味て甘味て頰桁も落る樣な心地が致します。握飯に梅干でも大牢の美味に勝ります事は誠に不思議な位であります。

此の間も學校で先生から「來る九月五日には聯隊敷地に於て、我校の大運動會を擧行致します、皆さんはお辨當を持て、午前八時迄に學校へお集りなさい」と申し渡されたる時は、生徒は只モー天へも昇る樣な心地でした。それからといふものは上級生は競爭番組の豫習やら、樂隊の下稽古やらで、學校は大騷動です。自分の子供はまだやう〳〵尋常一年生で、言はゞ生徒

の卵子ですから何も之といふて致しませぬが、それでも、唱歌のお復習やら、遊戯の下稽古やら相應に當日の豫習があります。そして幼少心にも運動會當日の盛況を思ふて、夜も安々と眠られぬ樣に樂んで居りますと共に私迄が毎日〳〵運動會の支度に責められるなど學校も家庭もそれは〳〵賑やかであります。

さて此の運動會といふものは何時ごろから起源たかと申しますと、之は明治十五六年の頃に東京帝國大學で催ふされたのがはじめてゝ此運動會へは　皇太子殿下にも屢々臨御がありました。今でも春は墨田川の端艇競漕會、秋は大學構内に秋季陸上大運動會が催ふされて、却々盛大であります。此の大學の運動會が行はれてから、各學校の運動會も催ふさるゝ樣になつたのですから、運動會の起源はヽ、僅か二十五六年の事でありますが、今は如何なる片田舍の學校にても最も興味ある事となつて居ります。之は體育衛生の方面から見ましても、國民の元氣を鼓舞振作する點から見ましても、誠に結構な事であります。

で子供等の待ち焦れた九月五日の大運動會は、豫定の聯隊の敷地内で行はれました。子供達は朝夙くから豫て用意のお辨當を携へて出掛けました。常には荒凉たる聯隊の敷地も、今日ばかりは見事に裝飾されて實に驚くばかりの壯觀でした。各國の國旗は旭に輝く日章旗と共々、高く曉風に飜へり、老幼男女の見物人は運動會場の内外に溢れ、生徒の父兄等は我兒の勇ましき遊戯ぶりを見んものと山の如くに集りました。誠に晴れの遊戯、日頃待ち焦れし運動會の當日とて、生徒は勇み進みて第一番、第二番と、順次に各種の競技は催され、紅き、白き、黄、綠と、各種の運動帽を被むつて勇ましき少年等の駈けゆく狀の勇壯活潑なる、又女生徒の手を列ね裳裾を飜へして遊戯を競ふ狀抔、見るから優美で快活で、我が第二の國民は斯くの如くにして作らるゝのかと思ふて、何となく愉快な、心地が致しました。

家の子供は此の日の運動會で一等賞を頂戴しました。之を直にお父樣へ報知致しましたら、左の句を美

しい繪はがきに書添へて送つて來ましたので、子供の秘藏のアルバムには又も光彩を添ふる事になりました。

頼もしや秋の兒童の遊戲ぶり

◎蟻と蜂の世界（人間に似た生活）

蟻は翅がありませぬから、蜂の如に高い處に巣を構ふる事は出來ませぬが、何れも昆蟲に屬し、又其の形狀から見ても大小の差ひこそあれ、誠に克く似た小動物であります。單り形ちが似て居る計りではありません、其の他色々似て居る事のあるのは實に不思議な位であります。先づ其の生活狀態が他の夥多の昆蟲とは全く異なつて、雙方とも人類に餘程似て居る點があります。又兩蟲とも至て甘味を嗜みます。其の住所は穴の中にありまして、夏は何れも食物を漁つて終日勞働刻苦し、些しの怠慢もありませぬ。彼等の勉勵と且つ貯蓄心に富める事は人類でも却々及び難き點があります。そして蜂も蟻も敵の襲來に對しては共同一致して防禦の任に當ります。それには蜂も蟻も共に一種猛烈なる攻擊力を出します。吾等の感ずる處では殆んど雙方も鋭利な針を以て突刺す如うに思はれます。普通誰れでも蟻に螫されたと申しますが、實は蜂は螫すのですが蟻は嚙むのであります。で、それに螫されたり嚙まれたりすると、其の武器の尖端から射出する一種の毒汁の爲に、局部は紅く腫れあがつて、誠に堪へ難き疼痛を覺えます。

彼等の生活狀態は我々人類の如うに一種の社會組織を成し、それに上下君臣の差別とも見らるゝものが嚴然として備はつて居ります。各階級にはそれ〴〵職分があつて、些しも亂雜の體がありませぬ。尤も蟻の社會はやゝ共和政體の如うな所があつて、名義ばかりの女王があつて夥多の職蟻と名くるもの共の協力から成立つて居ますが、蜂の社會になると、威容共に嚴然とした女王があつて、夥多の他の階級のものは、絶對に之に服從し、其の命令を遵奉し、之れに食物を供給する狀は、實に感心なものであります。

其の職蜂といふのは夏季などに地上又は樹皮抔に彼方此方と縦横十文字に歩いて居るものゝ事で、常に食物を集め、内を護り、外に働き、雌雄の蟻を保護し、その産みつけたる卵を保育する抔總ての仕事を擔任して居ります。その勤勉なること共同一致の精神に富める事は却々尋常ではありませぬ。喩へば彼等は人類社會に於ける軍隊の如くに、或る時は歩哨となりて常に巣の入口に張番をなし、敵が來れば直ちに之を内に報じ、他の職蜂を誘致して總掛りで之を防禦します。又食物を集むる場合に、萬一其の容積が巨大で、到底單獨の力で遣りきれぬと見た時には、直ちに去つて他の職蜂を誘ひ、出來得るだけ多數の力によつて之を運んで行きます。或は食物を運び去るについても、縦し自分の力に多少餘る處があつても、七顛八起といふ狀で辛苦を積み努力を重ねて運搬び行く抔、實に人間も及ばぬ勉勵を致します。

米國風の家の建築



田舎住ひの體裁よき住宅

蟻の巣は蟻の種類によつて、形狀も自から異ひますが、大體穴の中に建てるものと、地上に高く塔の樣に築き上げるものとがあります。第二の方法は誠に珍らしい築造法で、餘り屢々は見られませぬ。又中には樹の洞や幹抔に、隧道のやう

に造らるゝのもあります。

蟻の巣を見付けた時に、鍬で之を掘起すと、其の通路は地下に縱横に穿たれて、全く隧道のやうになつてゐるのを能く見受けます。尚それを掘りますと、夥多の蟻が群り集つてゐる中に、飯粒の如うで較小さい無數の卵を見出します、その中に一きわ肥太つて歩行にも堪へぬ女王も認められます。實に蟻の巣の構造法から通路の造り方の巧みなるには、誰も驚かぬものはありませぬ。

蟻は必ず一定の道路を設けて、諸所方々を徘徊するもので、決して無暗には歩きませぬ。そして彼等が互に道で行會ふ時は、雙方其の觸角を合せて、互にお辭儀を交換します。

蜂の社會になると、更に一段の進歩が見えます。彼等の女王蜂は前にも一寸述べました通り、威權赫灼として多くの族蜂と奴隷蜂とを使役し、その命令習慣等に違ふものは直に放逐せられます、女王蜂は部下の捧ぐる多量の滋養物を食して體格が非常に肥太つてゐるから、一見他の蜂と區別ができます。

扨て交尾時期が來ると女王蜂は高く空中に飛び、雄蜂はその周圍に群つて尋尾し、其の交尾後雄蜂は直に死し、女王蜂は再び巢に還つて卵を生み、又職蜂によつて保護せられ、再び其の勢力を保つて權威を弄する狀は、恰度專制君主の如うであります。

職蜂は女王蜂の產んだ中の生殖器の缺乏した蜂で、常に營々として食物を漁つて四方を飛翔つて居ります。そして敵が來れば直に一致協力して之に當り、其の勢ひは却々猛烈であります。之を武家に見立つれば謂ゆる直參の臣下とも云ふものでありませう。

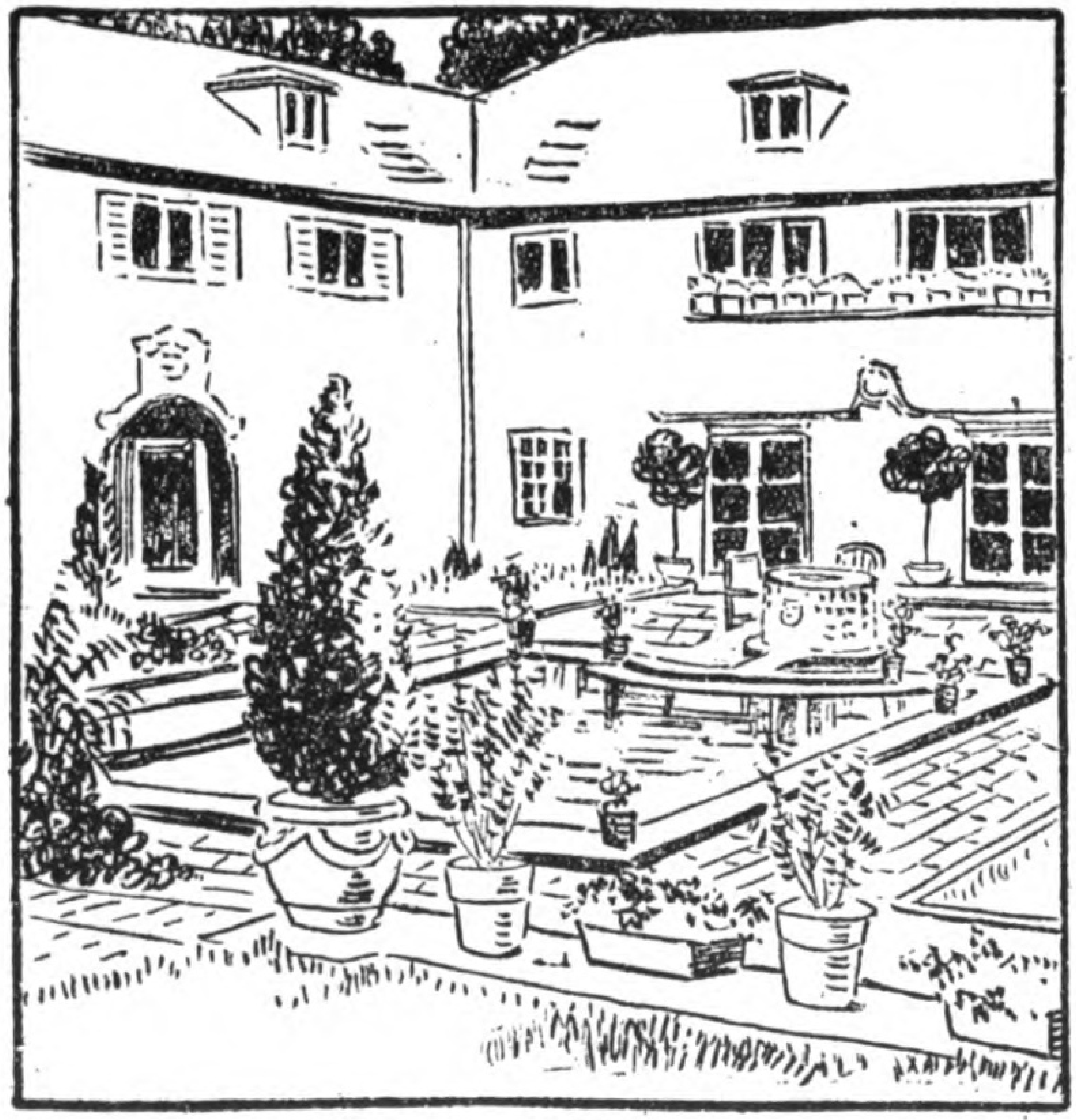
此の外に奴隷蜂といふのがありますが、此の一群は他の蜂群と戰を交へて之に打勝ちたる場合に捕虜となつた職蜂です、常に勞役に服して食物を漁るに日も無き有さまで、此の蜂族の最下に位する誠に賤劣な一種でありますが、不思議にも彼の南北戰爭以前の奴隷の樣なものであるとは、實に面白いではありませんか。

右の如くに蜂も蟻も甚だ微々たる小動物ではあるけ

れども、其の勤勉と精力に富んでゐる事うつかりしてゐては人も却々及びません。特に其の各自の團體の爲に身命を抛つて努力する事杯を見ると、恰度人類社會に於ける奉公心の如うなものが、既に彼等の間にも識得せられて居るやうで、此の小動物の研究は大變趣味があります。

◎寫眞術の手引

近來では寫眞を撮るといふ事が大流行を極めてをりまして、之を營業とする者と、又之を一種の娛樂として、玩ぶ者とあつて、其の流行は餘程弘まつて居ります。成程遠く離れて居つても、又如何程時代を異にしましても、實物其まゝを直に示す事が出來ますから、誠に調法な便利なものには違ひ御座いませぬ、人物、山水の景色、禽獸、蟲魚の狀態に至るまで、何れも見るまゝを寫し撮つて、目新しく之を視、耳新しく之を聞くが如く、直に人の感動を惹起させます、既に此頃中も韓國に在すお父様へ、子供等の寫眞を差上げましたら、父は大層喜びまして、種々面白き歌や亦その折の御所感杯を手紙にて、委しく伺ひました。斯く東西幾百里を隔てゝ居りましても、此の寫眞の巧妙なる技術によつて、子供等が韓國



米國風の趣味ある富豪の内庭（ハヲルド氏設計）

まで參つて、お父樣の御機嫌を伺ふも同樣な便法ですから、誠に調法なもので御座います。

偖此の寫眞を撮る方法は如何なるものかと申せば、勿論上手に撮るには經驗も要りませうが、單に相當に寫すと云ふ事は別段に面倒な事もありませぬから、一寸概略の事をお話し致します。

寫眞を撮りますに就て、先づ第一に入用なのは暗箱と申すものであります。之は寫眞器械中一番大切なもので、黑き布を被せて三本脚のついてある道具です。此の暗箱は內部に光線の這入るのを大層嫌ふものですから、內面は黑く一面に塗つてあり、外部は黑き布で蓋はれてあります。其の前部には鏡玉(レンズ)が嵌てあります後部には艶消しになつてをる焦點硝子がありまして、今寫さんとする人物なり景色なりが鏡玉を透ほして此れに倒さになつて寫ります。彌よ立派に明瞭に之が寫りました所を見計らつて之を外し、更に嵌めますものが寫眞の原板となる乾板と申すものです。勿論此の場合には鏡玉の蓋は確然として置かねばなりませぬ。

乾板と申すものは臭化銀を膠に溶し、之を硝子に塗りつけたもので、之は出來合のが寫眞屋にありますが、少しでも光線に觸れると全く使へなくなりますから、餘程氣をつける必要があります。之が一旦焦點硝子で都合好く位置のとれた暗箱の中に工合好く嵌込まれ、そして鏡玉の蓋が除けられた時には、曩に焦點硝子に寫つた人物や又は景色が直に此の乾板に感じて、茲に原板なるものが出來上りますが、此の鏡玉の蓋を除るのが中々手練を要するものです。光線の强弱によつて乾板に顯象する影像が、濃きに失して眞黑になつたり、淡きに失してぼやけたりして鮮明にいかぬのですから、寫眞師の技術の上手下手は此の蓋の除り加減にあるのです。此の前の寫眞は誠に下手に出來上つたが此度のは先づ可なりの出來だといふのは、光線の利用法即ち此の鏡玉の蓋を除る工合に因るものです。本式の寫眞器械にはシャッターとて、手で鏡玉の蓋を開閉せずに、ゴムの玉を握つて開閉を自由にする器械が附い

てをります。之でやれば手際よく鏡玉の開閉が自由に出來ます。

右にて乾板に人の影、山水の景色が撮れましたが、之を彌よ光線に觸れさしても構はぬ眞の原板にするには、顯像法を行はねばなりませぬ。之を爲すには夜中か又は暗室中にてせねばなりませぬ。寫眞屋さんが暗い室に這入るは、此の爲めです。併し此の暗室中にて仕事を爲すには眞の暗では何事も出來ませぬから、或る一局部に赤い硝子を張つて光線を取る樣にしてあります。夜中ならば普通のランプに赤硝子の火屋を用ゐねばなりませぬ。

そこで彌よ顯像せんとするには次の藥品が必要です

（第一）顯像液

（第二）完止液

第一の顯像液は寫眞器械屋に有ります。第二の完止液は次亞硫酸曹達三十匁を水二百七十匁に溶したものです。此の藥が準備されたら、次には先づ第一に今撮影したる乾板を此の顯像液中にて善く洗ひ、然る後に水中に凡そ五分間ばかり浸け、最後に完止液の中に入れ、全部が鮮明になるを見濟まし、再び清水にて善く洗ひ、日陰で乾し上ぐれば茲に完全なる原板が出來ます。斯くして得られたる寫眞は其のまゝにては俗に硝子寫しの寫眞といふものですが、之のみでは氣がすみませぬ、之を紙に燒付けて始めて滿足なる寫眞が出來上るのです。

此の燒付法は普通ピーオーピーと稱する紙に、硝酸銀十四匁五分を蒸溜水百五十匁に溶いた液を塗り、寫眞を燒付けるやうにするので御座います。其の順序は此の紙の藥の布いてある方の面を原板の畫につけ、其の上に黑羅紗のやうな黑き厚き布を置て、其の上から燒き枠の蓋をして壓へつけ、轉倒して硝子の方を出して、餘り强くない日光に曝し、畫が鮮明になつて見えてくるのを程度として之を枠から取出し、最後に鍍金法を行ふのです。之は鍍金液を水に溶し炭酸曹達をいれ、而して十分乃至二十分間之に浸し、畫が黑く紫色に見えて來るのを待ちて、次に鹽水の中にて叮嚀に洗

ひ、また定着液の中へ十分乃至二十分程浸して置くと畫の色は又變つて來ます、之を程度として、取出し、叮嚀に水にて更に洗ひ清めて、始めて寫眞は出來上るのであります。

◎家庭園の趣味（子供の庭いぢり）

家の子供が拵えた家庭園のお話を一寸致して見ませう。父は大層庭園が好きで、御勤務から歸ると直に庭へ立ち出でゝ植木いぢりに一日を消します。ですから一時の借宅でも、庭には何時も四季相應の眺めがあります。格別春より夏、又は秋にかけては、百花咲き亂れ、青葉若葉の影豊かに、四季折々の眺め得も言はれず、私などはこの自然を愛づるをそれ程までに思はなかつたのに、此の節では常に庭園の事に何くれとなく注意する樣になりました。すると不思議な事には、子供迄が父の樣子を見習ふて、此節では却々庭いぢりに憂身をやつす樣になりました。狹いながらも彼れの花壇には、四季の草花が所狹きまでに植付けられ、見るも却々に美觀を呈して居ります。花の種類は勿論多種多樣で、これと云ふ系統は立つて居りませぬが、而かも自分の通ふ學校の學校園から模範をとつたらしい一種の家庭園で、非常に之を樂しみにして居ります。

子供が格別注意して、朝夕水を灌ぎ枝をため、大事にかけて培養する草花の種類は勿論色々ありますが、次に列擧するものは殊に其の喜ぶ品々であります。

春の草花の中では第一に菫菜でせう？。菫菜の花は春の魁で、風はまだ肌寒く、殘んの雪さへちらほらと其の跡を絶たぬ早春の候に、早くもそが美はしき優しき姿を彼方の堤、此處の路の邊に顯はします。菫菜の種類は三百種にも餘るとの事ですが、春をも待たで、子供が學びの餘暇に捜し廻つて、小さき彼れの家庭園に先づ第一に移植されますのは、花の色濃紫で、花瓣の内面に毛の無い普通のものもあります。しかし最も彼れのめで慈しむものは蝦夷菫菜であります。之は花の色も普通の物と違つて紅白の二種あり、其上に大層芳い香が有ります。次には此節大層流行となつて居る

西洋もの丶三色菫菜と白菫菜とです。中にも三色菫菜は小鉢に移植されて小さき彼れの書斎の飾り物となつて居ります。子供は之を蝶！　蝶！　といふて一入樂んで居りますが、成程遊蝶花ですから其の眼に蝶と映るのは無理も有ませぬ。

春の眞盛りには庭前の櫻、桃、躑躅、山吹など何れも娟艶と咲き誇つて美觀を極めてますが、我が家の庭園では牡丹、芍藥、櫻草抔が花盛りです。そして藤の花は子供の丹精で出來た泉水の棚を飾り、花菖蒲は清らかな姿を汀に現はして居る抔、誠に嬉しいではありませんか。

却々に興はつきませぬ。



これは米國富豪の住宅なりこの家は地を掘り石をたゝみ其上に煉瓦を積み漆喰ぬりにしたるものにて空氣の流通を考へたるものなり

夏はまた一入百花の咲き誇る時節です。子供の家庭園もまた却々の賑ひです。薔薇の花の紅せるは活々として美しく、乳色せるは上品で氣高く、百合の花は立てる美人にも似て清艶に、眞紅の罌粟は驕りに驕つて沒る日をも喚び戻さんの風情があります。蜀葵は勇ましくも鳳仙花や雛菊を保護するが如くにスックと立ち。別けて牽牛花は曉待たで咲出で、子供の起きて出るのを、人待顔にも、そが優しき姿を、涼しき朝風になぶらせて居ります。さては彼方の泉水には紅蓮白蓮の姿影清く、微風に晩涼を呼ぶ抔、殊に黄昏近くとなつて夕顔、

月見草、夜會草抔が時知り貌に咲き揃ふ風情は、實に家庭園中の優なるものです。

秋の草花は何れも淸香幽艶で、萩、桔梗、葛、女郎花、なでしこ、尾花の七草は言はずもがな、蝦夷菊、石竹、紫苑、秋海棠抔とり〴〵に優しく、誠に飽かぬ眺めで有ります。子供がめでる草花の中でも特に大切なのは黄菊白菊であります。此の花は恐れ多くも帝室の御紋章に用ゐられ、誠に目出たき尊い草花で、昔から君子の花と稱へられてゐるのはまこと以へある事と思はれますが、家庭園中でもこれは格別異彩を放つて居ります。

家では天長節を祝ふ準備として、菊花の培養は格別の注意を拂ひます。之は祖父君の時代から今日までも毎年變らぬ家風です。子供も父の御留守中も、これは頭に沁み渡つて居りますかして、菊花の事といへば、精神をこめて培養し、永き眞夏の炎暑を事ともせず、水遣り抔に怠りませぬ。ですから天長節の頃になりますと、花は見事に咲き出でます。實に嬉しき氣高き風姿は、霜を冒して暮れゆく秋の寂しい庭を飾つて、限りもなき御代の萬歳を壽ぐ樣に思はれます。

冬の花壇は誠に冬枯れの淋しき狀を實現しまして、取立てゝ述ぶる事もありませぬが、水仙、寒椿などが僅に、年中の最後の庭園を飾つて操を樂しますのは、又却々に嬉しう御座います。

立ち返へる年の甫めの御祝儀としては、黄金色なせる福壽草が、子供がめづる花の魁であります。

家の子供は未だ十歳にも足らぬ兒童ですけれど、其のめづる凡てが何れも美的です。實に美の爲に全力を注いで居るのかとも思はれます。ですから、する事、爲す事が自然と精神的に行はれて居ります。此の小さき家庭園を見ましても、自然に對する彼れの趣味も、情熱も、自づと横溢されて居ります。是は御先祖以來の餘風も多くありませうが、一には彼れの天稟が美的であるのでありませう。次の子供もどうか此の風に習はせたいと思つて居ります。古への詩人の言の葉には、「傍らの些やかなる壁の裂け目に咲く小さき一本の花

にも、何等か自然の使命は宿るものであるとあります が、異事優しき花の心を知ることを得たならば、やがて は神の御心をも探る事が出來るでせうから、此の自然 の大敎訓を得る事に怠りなく心懸くるのは、誠に大切 な事と存じます。

◎草花標本の製法（色艶を自然の儘に）

春から夏亦秋へかけて、百花爛漫として咲き亂れ、路の邊の菫菜、蒲公英、さては名も知れぬ美しき草花は、採集するに從つて花籠を一杯に充しますが、之を家に携へ還れば、一時は却々に愛で弄ばるゝも、忽ちに引拶られ、折角採集し來りし姿優しき野菊も、笑零るゝ女郎花も、永く樂まれずに打棄てらるゝのは誠に口惜しいわけ、之を標本に作つて珍藏し、之を採集當時の年月日を書きつけ、或は學名、和漢洋名抔をも調べて置いたならば、何んなに樂しみか知れません。花を標本として永く保存せんと思はゞ、先づ之に適宜の恰好を保たせ、次に二枚の可なり厚き板を用意し、一枚の板の上に吸取紙をひきのべ、其の上に右の花を置き、更に他の吸取紙を以て之を壓へ、其の上を更に他の一枚の板で壓し、其の上に倘手ごろの石か何か重量になるものをのせてそつとして置き、最初の三日間位は一日に二度位吸取紙を取替へ、其の折に萬一形狀が惡るければ工合好く之を直し、少くとも十日間位は毎日一回づゝ吸取紙をかへます。恁う致せば花は採集した時の通りに色も艶も失せず自然のまゝの美しい姿で居ります。

右の如くして幸ひ工合好く出來上つた時は、之を手ごろの板目紙か又は畫洋紙に移し、要所〳〵を細かき紙片にて貼りつけ、其の傍に採集の月日等を記し、積み重ねて箱の中に收め置き、時々取出して見れば、採集當時の野遊びのいと面白かりし事、お辨當の美味かりし事、吾を忘れて驅け廻りたる事など、當時の狀態が歷々と眼前に浮んで來て、實に愉快です。


三枚橋の富士 画

家庭談叢

▲主婦の心懸け（腕のある下婢相手）

西洋の婦人が時間を規則正しく上手に用ゐて居る事は實に感心いたします、あれでこそ家も亂さず頻繁に外出が出來るのでせう、家に居て規則なしに仕事に懸つて居れば終日何だかごた／＼と下らなく暮すもので偶に一日出て歸れば留守は亂脈その跡片付に却つて骨が折れるところからつい外出がおつくうになるのは日本從來の習慣ですが、主婦が始終家にこもり切つて唯裁縫にばかり從事して暮すと氣を腐らして愚痴になつたり、妄想に耽つたりいたす弊がありますからどうか工夫して多少外界の空氣に觸れなるべく新智識を得て良人を助け又慰さめ、子供の教育に注意する樣に致したいものです、私は人樣がよく留守中の亂脈をおこぼしなさるのを聞いて、どうぞこの心配のない樣に致して見たいと考へ規則に工夫したところ結句やさしく出來ました、子供の所持品の入場をきちんと極めまして、小さい子にも自分に出し入の始末をさせ、家具の置場所も下婢に分る樣に定めて置くといふ風に注意しますと主婦の繁務が大層省けていつもきちんと片付いて居ります、兎に角始終内にばかり籠つてゐる奥樣が外の務を取る奥樣にくらべて何程家事が捗どるかと申すに割合に左樣は參らぬやうです、又世間の奥樣方の仰せられるのに下婢は無責任で困る／＼との御小言ですが、平素よく家の主義を説き聞かせ食物なども家族と平等にして遣り自重心を養成して置けば萬事責任を以て働くものです、米國あたりの下婢は給料も高い代りに又よく責任を負ふて働きます、そして主婦の外出の多い家では賄までも任せてありますので下婢の切盛りで食膳へつけたお菜を主人が彼是いふことは出來ぬ位なものださうです、それほど技倆のある下婢が十分働らくのですから主婦は安心して外出が出來るわけで日本の主婦とは大違であります。

米國の婦人が交際上に體裁を注意する事は實に周到

なものを、唯だ他人の前ばかりでなく、良人や我子の前にも體裁をつくることを務め、朝起きると直ぐに容儀をとゝのへて我子に接しますから子供は母の素足が見たことのないのが多いさうです、尤も中流以下ではそんなでもありますまいが體裁を亂さぬ事はどんな下等社會にも行はれ、極々の貧民といつでもさうぼろ〳〵な身姿はして居りません、日本人は家屋衣服の異なるからでもありますが、一般に淡泊過ぎ、體裁を構はなさ過ぎるかともおもひます體裁を作ると申して別に金を費つて飾るのでもなく、唯朝の中手早く髪を取りあげ、不斷着をきちんとつけて取り亂してさへ居らなければ不意の來客にも少しも狼狽せず、直ぐに出迎へが出來ませう、お客が見えたから奥樣がお化粧に時を費やし、客に欠伸をさせてから應接室へ出るといふ風では實に困ると存じます。

米國風家の內部



階段の下の間取を考へた設計

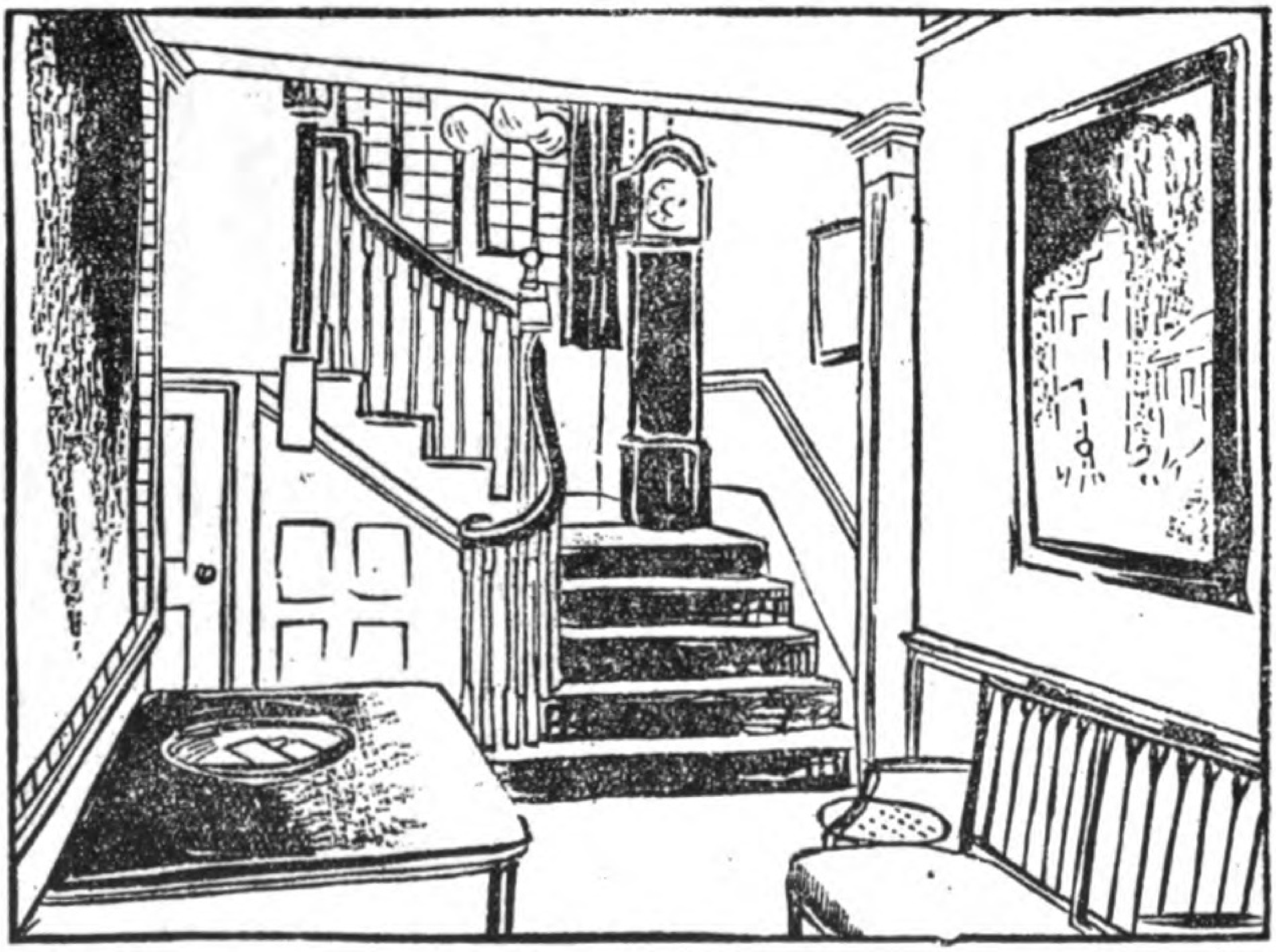
　日本の夫は人の前で細君を大切に遇するのを不面目と心得て餘所〳〵しく取扱ひ、細君が家に居ると却つて夫に我儘を振舞ふといふ風が多いですが、米國ではその反對で、家庭ではなか〳〵よく勤めます、すべて婦人の勢力がえらいところゆゑ、男の子よりも女の子の方に敎育費を澤山つ

ぎ込むといふ風で交際場裡でも婦人に敬意を拂ふのは、驚ろくほどです。(某夫人)

▲慰藉者としての妻

新婚當時は吸付くほどの交情であつたものが、二年三年とたつうちにいつしか熱情が冷めてしまふのはおもしろくありません、申すまでもなく夫婦は始めより終まで極く平坦で變らないのがよいですがそれには互に我儘を禁じる事が肝要です、この我儘が人を横道へ引き入れるのですから我儘の根を退治するのが夫婦交情の樂を全ふする良法かと存します。

米國風の體裁よき田舎家



工夫を凝らした梯子段の一部

段々と良人が成功の地位に達したならば、妻は又一歩若歸つた態度を取るのが必要かと存じます、一體男と申すものは眞面目に見えるものでも心の中は、案外なものであつて、唯容貌の美しい婦人とか、甘たれた婦人とかを愛する特質がある樣でございますから細君たるものはよろしくこの邊の呼吸を呑みこんで、注意する必要がありませう、實際昨日まで外見も飾らず家事の經濟ばかりに熱心した良妻に取つては斯樣な事は隨分馬鹿らしくてチヨツト出來ない藝ではありませう

が、家庭の暖か味を永久に保つ爲めの犠牲と覺悟するより外はありません。

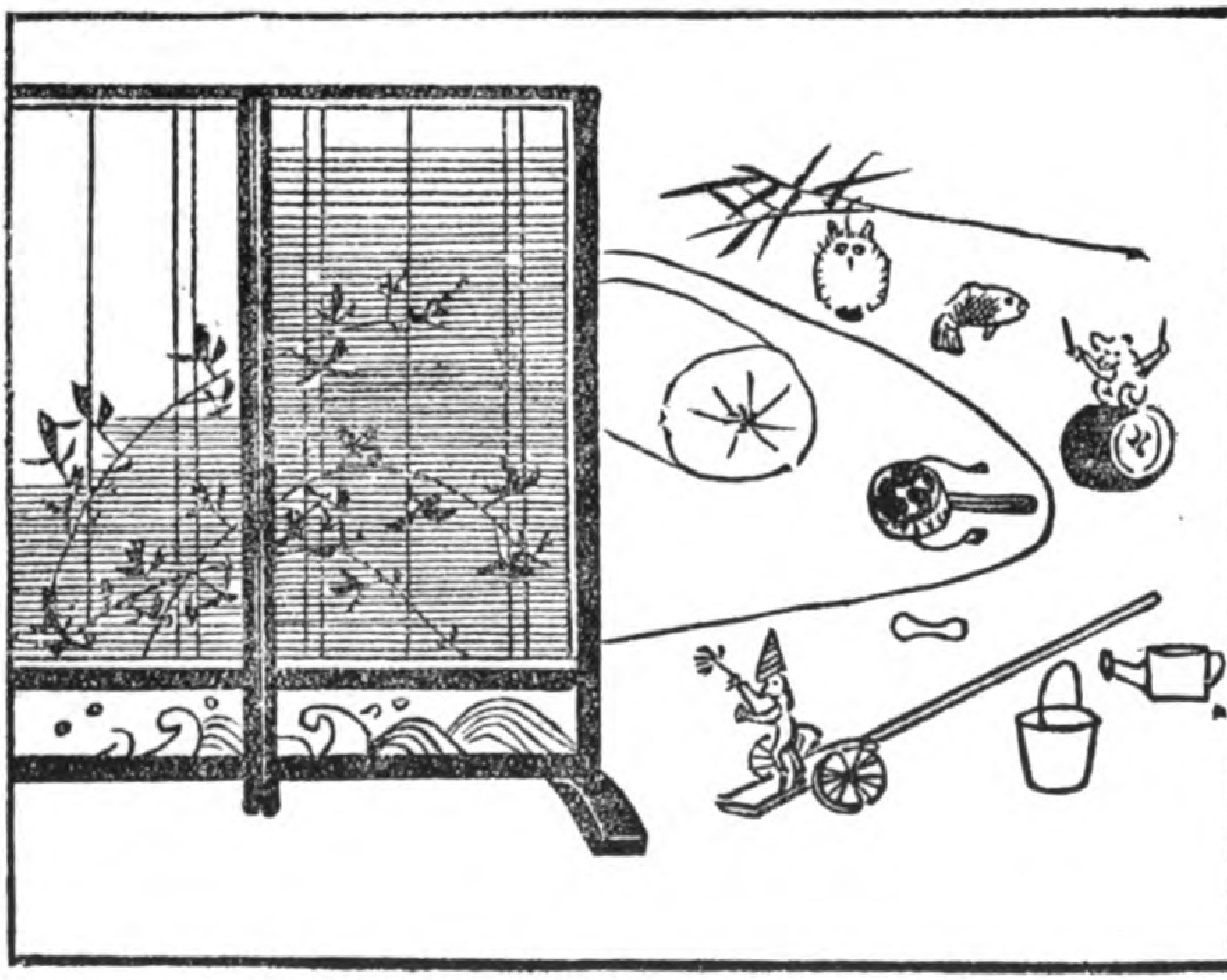
私共はこの點に就て西洋婦人の注意深いのに感心して居ります、私が知り合の某婦人は五十以上の年齢であるにも拘はらず、或時は良人の前で誠に無邪氣なあどけない素振をいたし、恰も花嫁が新郎を慕ふやうな表情をして、傍に人のない折などは結婚當時の感想などを語り出でゝ、熱情を表すと聞きました、斯樣申してはいかゝでございますが西洋婦人は或る場合に於て日本の藝娼妓のやうな手管に熟達してゐると申してもよいほどであらゆる方面から男子の氣嫌を取るに違ひありません、勿論斯樣な態度は良家の妻たる人の傚ふべからざる劣等なものではありますが、彼等の男子を慰藉する技倆を取つて眞實に愛する良人を慰めるのは差支ない事だらうと思ひます。

西洋婦人は二十歳から三十位までは左ほどに化粧は致しませんが、四五十歳以上の老婦人になりますと、實際化粧料に生活費の大部分を費やす位で、年の老けるに隨つて天然の不足を補ふのは當然の事です、そこへ行つては日本の婦人は僅かに嫁入前後を除いて其他はお化粧といふ事には全く注意を拂はないといつてよろしいでせう、よく我國婦人の言い草に、どうせこんなに年を老つたのだもの最うどうでもいゝとか又、もう子供の二三人もあるのに化粧どころの話でもあるまいと自分もいへば世間でもそれをもつともな事として居ますが、年の老けた上に構はなかつたらどれ程汚なくなるか知れません容貌にせよ、精神にせよ、いつまでも若やかに華やかにと努めるのは、何も浮氣や虚榮心でするのでなく、只良人を慰むる方便の一つと悟れば少しも氣恥かしい事はないでせう。（某貴夫人談片）

▲米國の交際社會　（氣骨の折れる事）

私共が米國へ參つて居ました頃は今からざつと二十四五年前グランドさんの大統領時代でしてもう大層古い事でムいます、其頃はまだ日本の風俗があちらでは珍らしかつたものですから、私が島田髷に振袖で、夜

會に出ました處ろグランドさんなど大層珍らしがられ衣物をいぢつたり何かして御覽でしたが、後であまり失禮な事をしたとお詫をなさいました、何に致せ、年が行きませんでしたから出立の際は父がひどく心配を致しましたけれども、まゐつて見れば案じた程の事はなく、却て年若な爲めに知らぬ事を尋ねますのに都合がよく皆様もよく御引立て下すつたので、早く慣れてしまひ、言葉なども、最初は非常に困りましたけれど却て早く覺えられました、學問も是非致さなければ不自由で困るのでございますが、交際が忙がはしくて一寸暇が出來難うございました。



御承知の通り米國の交際季節は九月から始まりまして翌年の三月頃までが盛りでございます、これは議會の開期中に當りますので、各地方から名士が都會へ集つて參るからでございますが、夏分になりますと大抵旅行致しまして首府華盛頓にはあの黒人ばかり多くなりますやうな譯です。で交際季節の幅利は矢張り大臣や議員さん方が重でございますが、地方の豪商などもこの仲間に入るのを望みまして其婦人や令嬢方が立派に着飾つて出て參ります。

此の季節の忙しい事は非常なもので、時として一晩に四五ヶ所位から招かれる事がありますし、又たその返禮

として一々廻らねばならぬのでございますから、殆んど是にかゝり切の姿でございます、私共では是等の事に慣れた婦人を一人抱へまして頂戴した名刺の仕末をさせましたが、その婦人は澤山の名を撰り分けて、何の家と何の家とが今日受け日(應接日)であるとか、どの家へは今日返禮に廻らねばならぬとか毎日調べて居りました、慣れない内はどうして覺え切れるものぢやございません、そして若し誤まつて廻るべき所ろへ顔出を致さないと直に行屆かない人だと評されるのでございます。

　私の歸り立てに我國では丁度舞踏が盛でございまして伊藤さんは私に向つて貴女が踊らなければ仕方がないと仰やつた位でしたけれども、どう致しまして米國では私などちつとも踊らない方でいつも唯皆さんの踊を拜見するはかりでした、地方などへ參りますと歡迎が盛んで多勢で遊船を仕立て招待して吳れましたが、此方では又其返禮を致さなければなりません、先方は多勢組んで催ほすので骨も折れませんが、此方では一一各人に返禮を致すのでございます、公使と申す者は派手な役でございますから皆樣から人望を得やうと致すには隨分骨が折れるのでございます。

　當時日本公使館でも夜會は一と季節に四五回位致しましたが、饗應の重なる品は三鞭酒と龜の料理でムいました三鞭酒はまづ一晩に百本位要りますので、此壜數を少し儉約致すと翌日の新聞で直ぐに悋嗇の樣に書立られますから吝嗇な事は出來ません、龜は身を切ッて酒で煮詰て出しますが餘程好味なもので是を第一に賞味致しますが中々高價なものでございます。

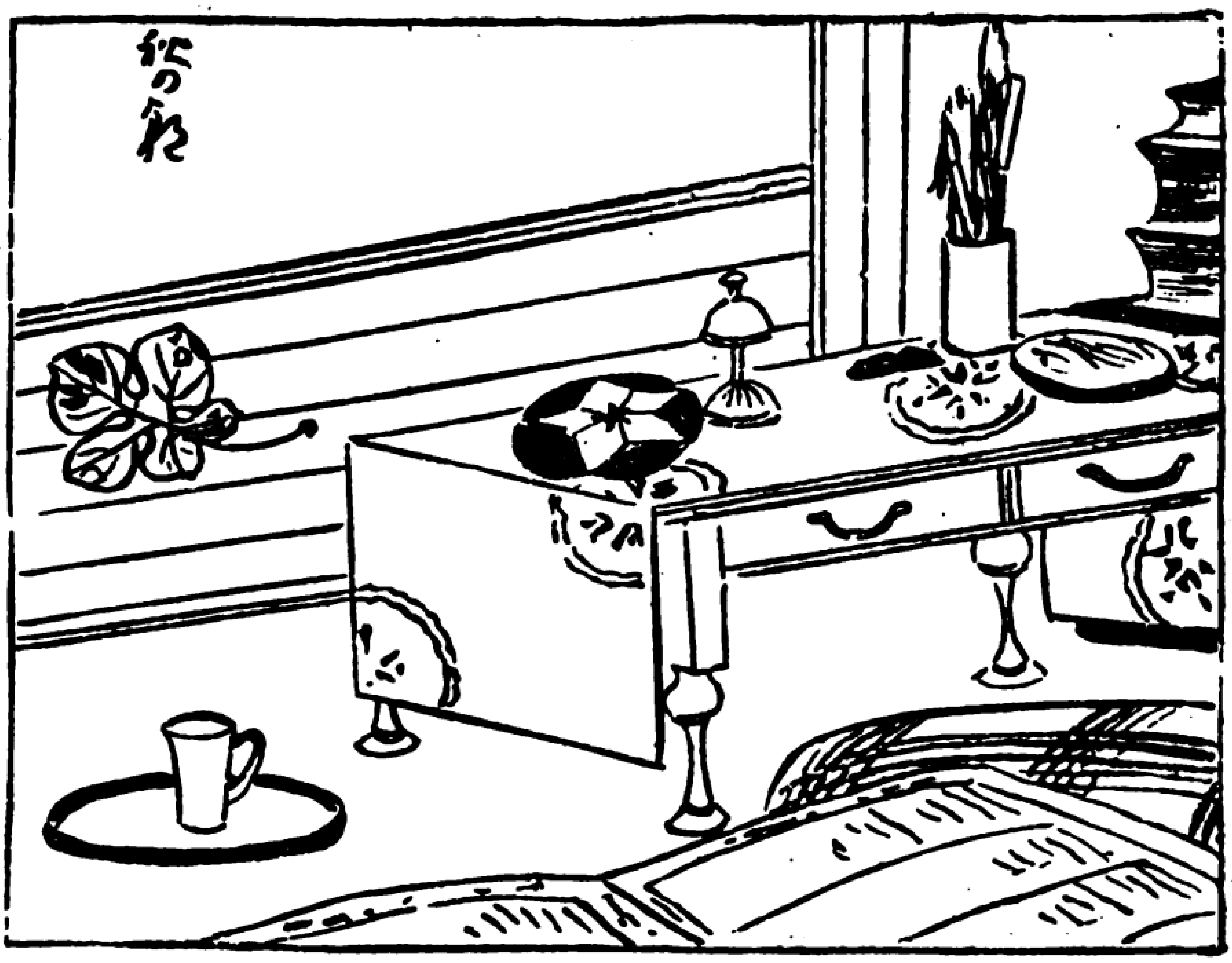
　あちらでは、いつも洋服を着けて居ましたが洋服を着ますと身體が自然まつすぐになつて恰好が大層よくなるものですが、日本へ歸ッて日本服ばかり着る樣になりましたら身體がどうも自だらくになッた樣な心地が致していけません、外國の交際社會へ始終出て居りますと自然あちらの風に化せられて仕舞ふものと見えまして顔の色艶なども彼地へ參ゐつた當座は西洋婦人と変はつて氣恥かしい樣に見えましたが、段々と日が

たつにつれて綺麗になるものです、つまり洗ふ水や食物の所為かと存じます。

（前米國公使某氏夫人）

▲日本化したる西洋婦人

私は今から廿年前十八歳で此處へ嫁に參りましたがその折り言葉には誠に困つてしまひました、尤も良人とは佛蘭語で話しますし、母も五年ほど一緒に日本へ參つて居りましたから家の內丈けは別に不自由もありませんでしたが、日本へ參つた以上は、どうか日本の御方と親しく御交際を結びたいと存じ語の稽古の為に教師を頼みました處ろ、其人はあの吃音で厶いまして、私は何も存せぬ故、正直に此人の言葉を習はうと致しましたが、どうもむづかしくて／＼いくら稽古しても真似が出來ませんでしたから二ヶ月ばかりで止めました、それで私は生涯日本語を習ひますまいと諦めましたが、後に吃音の教師であると判つてむづかしかつたのも道理と可笑うございました、それから子供の守に雇ふた婦人は教育も相應にあるものでしたがこれと話を致すので五六ヶ月の間に大層慣れました、つまり五年ほどの間耳から頭へ蓄へて置いた言葉が、一時に働いたものと見えます。



良人の先輩や同僚方の奥様が大層御懇意にして下さ

いまして殊に西郷さんの奥様は嫁人の時から一と通りならぬお世話を下され、親類も及ばぬほど御親切に願つて居ります。最初の中は士官の奥様方を訪問致しても御病氣だとか、御留守だとか言つて斷りなさるお方が多くありましたが、内實は私を日本の間へ坐らせるのが氣の毒で御斷りなさいましたさうです、その事を聞きまして私も折角日本の御婦人方と御交際致したいと望むのに、それでは殘念でございますから小紋の紋附を拵らへて着ました、髮も丸髷に結んで見やうかと存じ懇意の方に御相談致すと、見つともないでせうと御心配なさいましたがそれでも私は内證で一度試して見樣と存じて、水油を付けて結つて見ました處ろ家の者はよく似合ふと言ひました、あの髢無しでは直ぐに壞れるさうですから少しばかり入れましたが、髮が長うムいますから大きな丸髷が出來ました、其後西郷の奥様が御病氣で病院へ御這入になつてゐる處ろを私が丸髷に結つて頭巾を被つて參りましたら向ふでも御氣がつかなかつたものと見え不思議な顔して居らつしやるのです、私が頭巾を取つてもまだお判りになりませんが、名前を申上げたので始めて御心づかれたので、まお實に見違へましたよとお笑ひでした、それから又或る御方の御招請で宴會に參りましたところ、そこの女中など少しも心づかぬ樣子でムいました、着なれて見ますと日本服に厚板の帶でも少しも心持が惡くございませんし、又髷も決して頭の工合が惡うムいません、履物は三枚合せの草履で、チヤンと坐つて日本料理を頂きました、平常の食物は良人も洋食が好でございますから大抵洋食を重に致して居りますが、時として日本食を望まれ、私も矢張一緒に戴きます、米の御飯も好でムいますし、大抵の御料理は戴きますけれども、お刺身と泥鰌ばかりは今以て如何しても食られません鰻は西洋にもございますが、料理の仕方が日本とは全で異ひまして、大抵切身にして葡萄酒で煮るのでムいます。

（某男爵夫人の談片）

▲日米生活の相違（米國女學生の心懸け）

米國の婦人は我國の婦人に比べると衣服の數は少ふございます、その變り流行の變化が烈しいので同じ様な晴衣を二年とつゞけるわけには參りません、帽子なども其の通りで我慢にも古い形の物を被つて交際社會へ出られないのです、我國でも衣服の流行は勿論ありますが餘り目立ちませんから隨分昔し物で間に合す事が出來ます、祖母の紀念で紋の大きいのを持ちあまして居たのを此頃やつと役に立てられますなど〻言はれる方もあるといふ鹽梅、日本婦人の集會で、互に氣を揉むことは近來大分なくなつたやうです衣服の競爭を防ぐ爲めに一時集會に黒木綿の紋付と一定する事などは結構なやうですが、わざ〱新調するのも面倒な事で平常銘仙や、糸織を召される方がキャラコでも染めやうかなど仰しやつては却つて御迷惑な事でせう、衣服は身分に應じて有合せの物を着るのが一番世話なしでいゝかと存じます。



米國田園生活向の家屋建築費用約三千弗

米國の女學生はチヨツト暇があれば衣服のつくろひをするのが手まめで、袖が切れば袖だけ他の切で拵へるとか、飾りの繕をするとか致します、帽子など帽子屋へやつて直させると十圓位かゝりますから、我國の女學生はどうも裁縫が不精で嫌の傾があるやうに思はれます、是れは必竟學科の數が多過て、腦力がその方へばかり費されて居るからでもありませう、尤もそれのみならず、日本服の裁縫は坐り込で縫はなければならないので自然おつくう

になる道理でせう、日本では洗張やつぎ物で主婦の仕事がありますが西洋でも子供の多い家はなか〳〵裁縫が澤山で始終ミシンを動かして居る位です。(某教育家)

▲宮様の奥向御用

私は山階宮様の御用掛として御上に上り三大節などの式日に御息所が大禮服を御召しになる御世話を申上たり、御馬車に御陪乘して參内致したり、又各國公使との御交際について御世話申し上ぐる位の御用でございます、私は先年薨去になられました御息所の御時から折々上りましたが、東宮妃殿下の御姉君様でいらせられましたので、其頃は妃殿下も度々お出になりました九條家では姫君様方を平民的に御敎育遊ばされまして妃殿下の御通學など大抵の雨天でも御徒歩遊ばされました位、唯今妃殿下御健勝であらせられますのも全く御運動のよろしかつた御爲と存じあげます、妃殿下には只今の御身分に御成遊ばす事は御夢想も遊ばさなかつたので何事にも御手を下し給ひ、御姉君達の御單衣までも御縫ひ遊ばしたり、解き物まで遊ばしたので御座いました、御息所御病氣中にも始終御越しで御心配遊ばし薨御の砌は非常の御力落しで入せられました。

近頃では君様が宮様の御出入の御世話を遊ばしますので中々御用が御有りでございます、それから語學のお稽古をなされたり、ピアノや、ヴイオリンの敎師が參ッたりして御日を御暮しになります、御髮も偶々丸髷に上げて御覽になるとも御座いますが、折角御上げになつても御出ましの御用がお出來遊ばせば、直ぐとおこはし遊ばしておすゝぎ遊ばさなければならぬ事が御ざいますので滅多に御上げにはなりません。

御側附の女官はみんなお洋服でございますが、お側へ出ない方は袖の短かい總模様の着物に幅のせまい平絎の帶をしめてお出でございます、唯今の女官長は六十歳餘りのお年寄ですがお腰などチヨツトもお曲りにならず、お髮は染めて束髪にしてお出ですから實にお若く見えます、昔の官女の姿をよく芝居でいたし、妹脊山などでは下げ髪に緋の袴で出て參りますが以

の御所の女官の風とはまるで異ひます。

（宮家御用掛某刀自）

▲夫妻趣味の一致（良人慰藉の心得）

日本の交際社會に御婦人御同伴の少いのは大層遺憾に存じます、御承知の通り西洋では或る一部の集會を除くの外如何なる會でも夫婦同伴で出席しまして同伴せぬ婦人は非常に卑賤しいものであるかの樣におもはれまして男子の恥辱となつて居る位でございますが、つまり男子ばかりでは暖い團欒が得られぬ爲でせう。日本の奥樣方は洵に御交際がお上手だと私は感心して居るのでムいます、男子方がよく保護して導いておあげなすつたならば立派に社交界の花となられる事と信じます、西洋婦人とても以前は隨分遠慮勝で思ふ事を隠して居る樣でしたが近頃あの樣にサラ〳〵として參つたので日本の御婦人も以前に比べると大層快活におなりになる樣でございます、日本の奥樣方は西洋婦人に比べると、あまり遠慮深いとおつしやる方もございませうが、それが又日本婦人の美しいところかと存じます。

私は日本の御婦人方の御辛抱の強いにはいつも感心致して居るのでございます、私はこれまで日本の家庭に就て種々な事情を觀察して、世間には隨分我儘な良人によく仕へられる御婦人があると存じていつも同情の涙をそゝぐのでございます、無論或る一部の話ではございますが、貞操な奥樣を捨てゝ妾に愛を注ぐ人は全く男子の我儘の結果で婦人を侮辱して居るのでございます、日本の奥樣方は實に良人によく仕へて居られ私情を制して献身的に耐忍して居られるとおもひます私は永く日本に居つていろ〳〵な恐ろしい事を知つてゐる處ろから結婚の申込はいつも斷つて居た位でございました。

併し家庭の亂れるといふ事は良人の我儘は勿論でございますが一ツは又奥樣方の工夫に依て豫防の出來る事と存じます、毎日、外でいろ〳〵の刺戟を受けて家に歸つても奥樣がいつも家の細事にばかり頭を使ふて

居りまして、良人が氣を腐らしてつい慰藉を他に求める樣になりませう、そこへまゐると外國の婦人は一寸違ひます、交際上で金錢の事など持出すのを外國では恥として居る位でございますが、日本の御方は話の區域至つて狹く自然趣味に乏しい爲でせう、尤も一家夫婦の間柄は經濟上の話も勿論必要でございますが、これは時と場合を見て致すべき事で、家に歸つた良人にはまづ何よりも愉快な話をしかけて慰めるやうにしなければなりません、それには妻たる人も成可く戸外の空氣に觸れて新らしい見聞を致し、いろ〳〵の趣味を養つて置くのが必要ですから、どうぞ家の規則を旨く極めて事情の許す限りは戸外に出でいろ〳〵と活きた世間の話の材料を求めるのが必要でございます、さうかと申しても何も殊更に遊び歩くのではございません買物なり、何なりと家事向の用もありませう、又友人の訪問もよろしいでせう。

私は元來一ツ事に疑つて勉強する癖があつてその爲めどうも家政を採るのが誠に拙で困ります、且つ日本の風に慣れませんから良人の知己の方が御出の際も自然失禮になりはせんかと心配で堪りません、良人は風習の違ふのは仕方がないから敬意を失はぬやうにせよと申して居りますが、どうも心配勝でございます。

（某政事家夫人談片）



滑稽文一口評

○玉露さんへ

玉露さんは實に感心すべき天才である、「癇癪の艶書に答ふる文」など近來にない名文であつたが、今度のは文に脩錬をしてない、だからいけない、有觸れた温泉場のお客をつかまへて好個の滑稽を作り出した手ぎわは敬服の至りであるが、始めの書き出しがどうも巧く行かない、新派の劇、みどりさん、蝶ちやん、勵さん、秋月さん、奥さん、細君是等の人の言葉と態度が明かに書き分けてないから讀者に判然と印象を與へない、丁度源氏物語でも讀むやうで、肩が凝つて仕樣がない、稍く成金鈴木さんの態度を寫すところに至つてハツキリした、御自分には十分のつもりだらうが、始めての者にはもう少し判りのいゝ樣に技術が加へてないといけません。もしさうであつたら無論この作は第一等を占めたのであらう。痛快で骨を刺すやうなところがあるのだもの、兎に角「温泉場の滑稽」は上品な諷刺で、女性的滑稽文の模範である。丸屋の婆さんの裸を蜂が刺したところなど、實に何ともいへない妙筆、奇想天外とでもいふべきでせう。

○屋那義さんへ

下町趣味は滑稽文としては少し重くるしい書き方ですが、併し妙味は中々塞さない、フカシ芋を包んで銀行へ届けさせたところなど中々振つてゐます、要するにこれは落想の妙といふよりは叙事に力が入つてゐる方です。

○其他のお方へ

一管の筆を以て讀者を勝手氣儘に支配し、右を向かせ左を向かせ滑かしも殺しもする程の力を以てゐるのは矢張り野菊さんでせう、播磨太夫の浄瑠璃、團十郎の芝居、何でもない事で、それが中々出來ない藝當だ。

○

御氣の毒千萬なのは、くれなゐさんの「芝居見物です」非常なる御勉強とは御察し申上るけれども滑稽としては全然失敗です、世間のアラはよく出されてゐるけれども何分可笑味といふところが缺乏でどうしても不作は免かれない。

○

短文ではあるが中々隅に置けないのは藤花さんの下婢日記、終の方は餘ほど振つてゐます。

○

春子さんの「花嫁の化粧」は中々才筆だ、縦横目の及ぶところ心の及ぶところ筆も又到る、遊刃綽々といふところがある。

茂子さんの「滑稽家庭日記」食客から見た、奥様、旦那様、下女、坊ちやんそれぞれの性格がこれほどよく描かれたのは一寸珍らしい、そして可笑味十分、成功の作です。

○

清子さんの「ラブスープ」は何だか大變おもしろさうであつて、遂に面白味に到着しないうちにおしまいになつて仕舞つた、どうもアツケない作だ。

○

すゞしろさんの「不思議な家庭」始めの工合では何だか大變仕組が大きさうであつて遂につまらなく終つて仕舞つた、人物の態度言語があまりに不自然でそらぞらしく感ぜしめるのは遺憾である。

△ヒステリー物語　（一等參拾圓）　野菊女

△當世女奇人（煩悶の妙藥）　（二等貳拾圓）　骨鵠女

△下町趣味　（三等拾圓）　屋那義

△溫泉場の滑稽　（四等七圓）　玉露女

△滑稽家庭日記　（四等七圓）　茂子

△花嫁の化粧△土用干△デパートメントストア△芝居見物△不思議な家庭△昔の友達△紙幣の活動寫眞

△富にあこがるゝ女△ラブスープ△（以上五等五圓宛）

懸賞募集　嫁に行く人（〆切十月二十日）

百人百種結婚の經歷談を募る

大きい女は大きく望めど大望必らずしも幸福ならず、一般に虛榮心の強き女は成功すれど、向上心に燃ゆるものにして又失敗不過に終る者あり、品性水晶のごとく高潔にして却つて人に嫌はるゝ女あり、人格豚の如く賤しくして却つて人に好かるゝ者世間中々に多し、是れ畢竟混沌として複雜せる人間社會の活作用にして、一片の理窟を以て解釋し難きところなり、されば人事の中にありて最も微妙の關係ある結婚に就ては多く理窟を並べんよりは實際の事實を示すに如かず事實は眞に活ける敎訓なり。

私しはどうして嫁に行つたか、彼の人はどうして嫁に行かうとして居るか、私は如何なる方面を望んで居るか、彼の人は如何に運動しつゝあるか、私は何故に失敗したか、彼の人はどうして成功したか、要するに結婚に就てのあらゆる關係を尋ねてその因緣結果を描寫せよ。

賞金

一等	五拾圓	一名
二等	參拾圓	一名
三等	貳拾圓	二名
四等	拾圓	五名
五等	五圓	十名

規定

△文體は各種隨意
日記文體、小說文體、書簡文體等いろ〳〵なるべし

△紙數は二十枚內外の事

△當選したる文は十一月中旬發行の本誌に揭載

△賞金は發表の當日發送す

讀者文藝　懸賞募集（〆切十月十五日）

▲婦人盛裝の寫眞（結婚前後）

▲大家族の集合寫眞

▲婦人會婦人團體集合寫眞

▲才媛筆蹟（書翰文體の一節）

▲食卓日記

▲各地風俗の變遷

▲笑話▲短文▲和歌▲狂句

▲讀者倶樂部（投稿隨意）

投稿規則◎笑話、和歌、狂句、短文、讀者倶樂部は端書に限る但し一枚の端書に二種以上は採用せず◎筆蹟は書簡文の一節を示す事◎名宛は博文館内「女學世界」とし原稿に其種類を明記する事

▲賞品

△寫眞は甲參圓、乙貳圓、丙壹圓

△筆蹟は甲貳圓、乙壹圓、

△和歌、狂句、短文、笑話、讀者倶樂部……甲壹圓、乙七拾錢、丙五拾錢、秀逸參拾錢

△風俗の記事と食卓日記は特賞拾圓●甲賞五圓●乙賞參圓●

不許複製

明治四十二年九月十五日發行　第九卷第拾貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番／千十八番　本局　二千六百二十番／三千二百廿九番

女（後付の一）

近か全く國書林に盛ん

- 文學士 小西重直君著 ▼**學校教育** 洋裝菊判特製 紙數四七二頁 正價壹圓五拾錢 小包料八錢
- 坪谷善四郎君著 ▼增訂**日本女禮式大全** 洋裝菊判特製 紙數五九二頁 正價五拾錢 小包料拾貳錢
- 少年世界編輯部編 ▼**明治少年節用** 洋裝三六判特製 紙數六〇〇頁 正價七拾五錢 郵稅八錢
- 文學士 大町桂月君著 ▼**關東の山水** 洋裝四六判特製 紙數五五〇頁 正價壹圓 小包料八錢
- 佐々木信綱君著 ▼增補**詠歌自在** 洋裝四六判特製 紙數七八〇頁 正價壹圓 小包料八錢
- 老鼠堂永機君編 ▼**俳諧自在** 洋裝袖珍美本 紙數一二三〇頁 正價壹圓 小包料八錢
- 東京女學館教授 西田敬止君編 ▼**益軒十訓** 洋裝四六判特製 紙數一一〇二頁 正價壹圓 小包料拾貳錢
- 大町文學士 久保文學士 太田淳幹君 共著 ▼**新式いろは引節用辭典** 洋裝三六判美本 紙數二三〇〇頁 總皮製 正價貳圓五拾錢 小包料拾貳錢 總布製 正價貳圓 小包料拾貳錢
- 落合直文君 池邊義象君 共編 ▼**新撰日本外史** 洋裝菊判特製 紙數一一〇二頁 正價壹圓廿錢 小包料拾貳錢
- 文學士 久保天隨君校訂 ▼重訂**日本外史** 洋裝四六判特製 紙數八〇〇頁 正價七拾五錢 小包料拾貳錢
- 文學士 久保天隨君註釋 ▼**日本外史新釋** 自壹至十二 全部十二冊 和裝菊判美本 各三〇〇頁內外 正價一冊三十錢 郵稅一冊六錢

女(後付の二)

販賣用電話 本二六二〇番

發兌元 東京日本橋

見るべき好著書

大和田建樹先生著

謡曲通釋

全部九册

和装美本紙數約二千頁
每卷貳百五拾頁
一册 正價參拾五錢 郵税六錢
全部 金貳圓八拾錢 外要送料

大和田先生の謡曲通解出でゝより茲に十有五年、四方購讀諸君の増加する事、年一年よりも多きは、弊館の特に榮とする處、更に今般先生に請ひて大訂正を加へ總說を増し、曲數を増し註釋を増し評語を加へ、總假名を附し、其他大に體裁面目を一新して、謡曲評釋と名づく、全部を通じて曲名を伊呂波順に並列し、終に語釋の索引を付して讀者諸君に至便ならしむる如きは、其最たるものなるべし、

第一輯 第一卷 第二卷 第二輯 第三卷 第三輯 第四卷 第四輯 第五卷 第五輯 第六卷 第六輯 第七卷 第七輯 第八卷 第八輯 第九卷 第九輯 第拾卷

(總說)○能の起原○流儀の分れ○謡の作者○謡本○内外二百番○明和の改正○謡の文章(上)
○謡の文章(下)○装詞○謡本の符號○題目の異同
○岩船の大寺○淀瀞○一角仙人○生田敦盛○生贄○籠太鼓○龍祗王○鉢木○花車○花筐○班
女○放下僧○放生川○白樂天○羽衣○橋辨慶○半蔀○橋供養○芭蕉○雞龍田
○錦戸○錦木○伽原○辨内侍○融○島追○東方朔○東北○東岩居士○藤榮○木賊○朝長○知
章○巴○竹生島○張良○長兵衛尉○千引○龍虎○呂后○輪藏○鵜○大蛇○姨捨○女郎花○小
瓢○和田酒盛○往生院○和國○蛙○苅萱○通小町○合浦○葛城○葛城天狗○祭平(錐引)鐵輪
○島羽○邯鄲○咸陽宮○景清○高野物狂○笠卒都婆○杜若○柏崎○加茂○鴨長明○加茂物狂
○春日龍神○弱法師○賴政○夜討曾我○芳野○吉野天人○吉野靜○第六天○大瓶猩々○當麻
○大佛供養○泰山府君○大會○谷行○高安小町○高砂○忠度○忠信○龍田○立田物狂○湛海
○田村○丹後物狂○檀風
丹後物狂○唐船○道明寺○道成寺○玉葛○玉井○竹雪○卒都婆小町○園田○土車○土蜘蛛○
鶴岡○鶴龜○鼓瀧○經政○寢覺○難波○雷電○羅生門○室君○六浦○鱗形○善知鳥○鵜飼○
歌占○空蟬○采女○浦島○雲林院○鵜羽○鵜祭○雨月○右近(浮船)梅(梅枝)井筒(野宮)野守
○老松○大原御幸○大社○大江山○落葉○翁○隱岐院○黑塚○車僧○皇帝○花月○吳服○鞍
馬天狗○熊坂○草薙○九世戸○國栖○養老○楊貴妃○山姥○八島○鵺○松風○松浦鏡○松蟲
○松尾○松山鏡○松山天狗○満仲○枕慈童○卷絹○舞車○源太夫○元服曾我
現在七面○源氏供養○絃上○藤○藤戸○二人靜○船橋○船辨慶○富士太鼓○富士山○伏木曾
我○伏見○碁○木幡○譲法○粉川寺○小鍛冶○小督○小袖曾我○項羽○胡蝶○戀重荷○江島
○江口○艦○定家○天王寺物狂○天鼓○調伏曾我○淡路○蟻通○安宅○愛宕空也(熱海)敦盛
嵐山○鸚鵡小町○藍染川○惡源太○綾鼓○海士○葵上○阿漕○朝顔○蘆刈○飛鳥川○西行櫻
○佐保山○逆鉾○實盛○三笑○草子洗小町○櫻川○佐々木○鷺○切兼曾我○碇○祇王○清經
○木曾願書○金札○熊野○雪○遊行柳○弓八幡○和布刈○通盛○三輪○三山
水無月祓○水無瀬○三井寺○身延○御裳濯○代主○七騎落○志賀○鐘馗○自然居士○白髭○
舍利○正尊○上宮太子○正儀世守○猩々○石橋○十番切○俊寛○春榮○俊成忠度○侍從重衡○
○鳥帽子折○繪馬○廣基○雲雀山○檜垣○常陸帶○氷室○飛雲○百萬○求塚○望月○盛久○
紅葉
紅葉狩○西王母○清閑寺○誓願寺○善界○攝待○殺生石○禪師曾我○千手○昭君○關原與市
○赤壁○關寺小町○蟬丸○須磨源氏○住吉詣○隅田河○墨染櫻●索引○附錄曲舞集

女(後付の四)

女(發付の五)

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部十五冊

毎月一回發行

和裝頗美本 ●紙數各三百頁 ●石版彩色口繪一葉 挿畫十數箇

▲定價 一冊 金四拾五錢 ‖ 郵稅八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高きに過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

- 第一編 **新家庭訓** 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 **四季料理** 宮中臣民兩流料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著
- 第三編 **裁縫指南** 女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 **和洋菓子製法** 東京治庖會講師 龜井まき子女史著
- 第五編 **茶道と香道** 水原翠香女史著
- 第六編 **諸流生花指南** 琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著
- 第七編 **育兒の務** 醫學士 田村貞策君 朝夷孤舟君 共著
- 第八編 **簡易治療法** 新潟縣高田高等女學校教諭 藤井靜子女史著
- 第九編 **禮式と作法** 女子高等師範學校教授 佐方鎭子女史著
- 第十編 **惣菜料理** 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著

◀販賣用電話 本局二六二〇▶ 發兌元 東京日本橋區

女(後付の六)

婦女必讀の大全書

第十一編 **編物指南** 女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十三編 **教育お伽噺** 少年世界記者 木村小舟君著

第十八編 **家屋と庭園** 内山正如君著

第十七編 **女子作文法** 遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著

第十二編 **婦人の生理と衛生** 青山學院教授 牧野清子女史著

第十四編 **女徳の養成** 前田長太君著

第十五編 **魚鳥家畜の飼養** 農業世界記者 鹿野化骨君著

第十六編 **子女の教養** 私立高等女學校長 棚橋絢子女史著

第十九編 **家庭の趣味** 文學士 大森兜山君著

第廿編 **家庭遊戲法** 高橋忠次郎君 松浦政泰君 共著

【第一編】室内遊戲の部 ●作字遊び●通信遊び●軍師拳●通辯者●指環捜し●年中行事●百足遊び●文句綴り●旅行談●一分間演舌●毀れ木像●毬撞き競爭●捜し物●文章綴り●十二支廻はし●趣寄せ●折物競爭●暗夜の狩人●面賣り●物盡し●釣り喰ひ●煎餅の喰ひ競べ……外八十項【第二編】室外遊戲の部=▲蓮華遊び▲御馬遊び▲兎遊び▲水車▲手巻き▲熊と猿▲雁打ち▲場所取り鬼▲廻り鬼▲淑道遊び▲池の鯉▲輪拾ひ▲南瓜割り▲隠れ鬼▲蛙飛び競爭▲友捕り鬼▲不倒翁……外廿五項【第三編】季節遊戲の部=◎春季遊戲(十六項)◎夏季遊戲(十四項)◎秋季遊戲(十四項)◎冬季遊戲(廿六項)【第四編】英語遊戲の部=◎考案遊び(十三項)●早口ことば(九項)●英字遊び(七項)●英語遊び(十八項)●英文遊び(十八項)●英文學遊び(五項)

第廿一編 **書道手引** 歌道書道專攻 大和會々長 井田秀生君著

第廿二編 **歌の手引** 大和田建樹君著

第廿三編 **刺繍術指南** 刺繍術專門 磯村大次郎君著

本町三丁目 博文館 ◀▶ 振替貯金口座 東京二四〇番

小說 十二人集

全一冊 菊判洋裝
上製美本紙數約四百頁
正價八拾五錢 郵稅拾錢

執筆せる所のものは皆之れ當代の名士、收むる所總て十二篇各々會心の佳什ならざるなく、紅紫錯綜、金碧相映じて、當に是れ名花十二客の妍を競ひ麗を鬪はすにも似たらんか。爰に盛裝して江湖の淸鑒を俟つ。

目次

東京本町 博文館發行

海賀變哲君編 新式小說辭典

全一冊 洋裝三六判 總布製金字入美本 紙數千〇十六頁

正價壹圓廿錢 郵稅拾貳錢

本書の內容は、遠くは春の家朧氏が書生氣質時代より、近くは二葉亭氏が平凡の時代に至るまでの間、千有餘の著作中より、當時傑作と稱せられたるもの三百餘篇を選み、絢爛の辭句、巧妙の叙事、輕快の會話等を拔萃し、之を容姿、扮裝、動作、會話、叙情、叙景、構造、叙事、怪異、滑稽の十門に分類したるものにして、且つ其の字句も、片言隻語に止まらず、短きも原作の二三行、長きは二三頁に亘りて拔萃し、所々に原作の梗概をも附記したれば、始めて小說をものせんとする者の、座右常に缺く可からざるは勿論、一の美文集として、各作家の作風を窺知するを得べき、近來の好辭典なり……

東京本町 博文館發行

女(後付つ八)

女學世界
（毎月一回一日發行）
（明治四十二年九月十五日發行）第九卷（増刊滑稽智惠競べ）第拾貳號（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

定價金貳拾錢●郵稅貳錢

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑦
明治42年9月（第9巻第11号、第9巻第12号）

2009年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3735-0　C3321